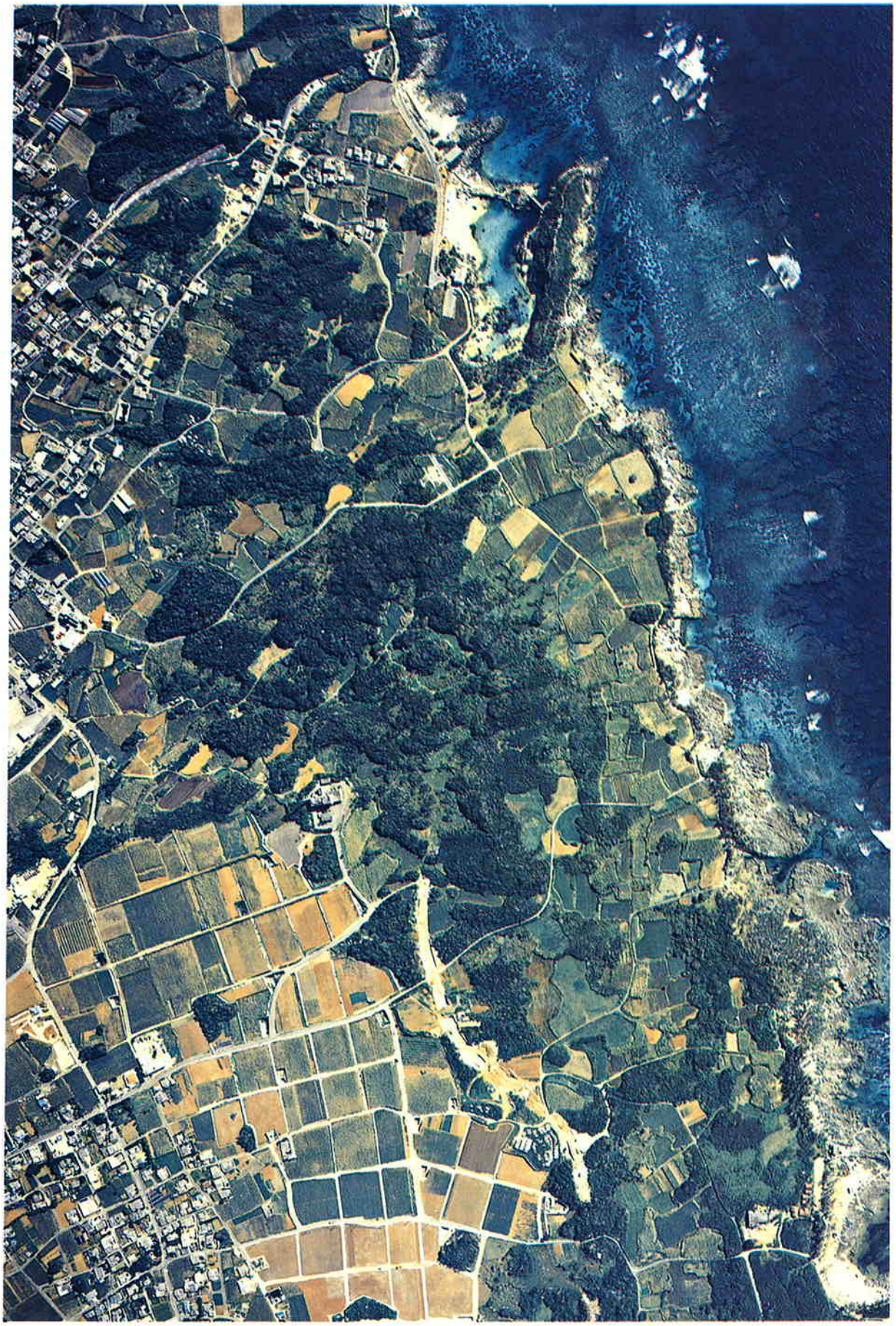
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第７集

新里元島上方台地遺跡
新 里 東 元 島 遺 跡

－県道保良上地線（友利～上地）道路新設改良事業に伴う
緊急発掘調査報告書－

2002 年（平成 14 年）　3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター



巻首図版１　遺跡とその周辺の航空写真

巻首図版２　上：Ａ地区　全景　下：牛骨埋納遺構

巻首図版３　上：堀込石組遺構２　下：Ｂ地区　石敷住居

巻首図版 4　上：古墓 1　下：古墓 3　埋葬人骨検出

序

本報告書は県道保良上地線（友利～上地）道路新設改良事業（通称•宮古一周線）に伴って実施した、新里元島上方台地遺跡•新里東元島遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。平成10年度に試掘調査、平成11年度と12年度に本調査を実施しました。

調査の結果、新里元島上方台地遺跡におきましては、14～16世紀頃を主とした屋敷跡等が確認され、多数の柱穴や炉跡、地面を堀り込んで石を組み並べた遺構、石を並べた道と考えられる遺構等が発見されました。出土した遺物も地元宮古島で生産された宮古式土器をはじめ、中国やタイで生産された移入陶磁器と中国宋代の貨幣、食料残滓としての獣骨や貝類など多岐にわたっております。

主として古墓の調査となりました新里東元島遺跡では、タイプの異なる近世の古墓が４基確認されました。墓内や前庭部からは土製や青銅製のキセルや青いガラス玉、沖縄本島や中国・タイで生産された陶磁器類が多く出土しました。

今回の調査によって、琉球王府時代の宮古島における集落や墓の形式など生活の一端を窺い知ることが出来ました。また、新里元島遺跡で発見された石積みが北西に位置する城辺町の上比屋山遺跡の石積みに連続することが確認されましたことは、注目すべき成果だと考えます。

本報告書が宮古諸島の歴史や文化解明の研究資料として、活用されますとともに、埋蔵文化財の保護についての関心が深まれば幸いです。

最後になりますが、現地では多大なご協力を賜りました上野村教育委員会はじめ各関係機関に感謝致します。資料整理の際にご指導を賜りました早稲田大学の金子浩昌氏、琉球大学医学部の土肥直美氏・譜久嶺忠彦氏に厚く御礼申し上げます。

平成14年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　知　念　　勇

例　　言

1. 本報告書は1999（平成11）年度・2000年度（平成12）に実施した「新里元島上方台地遺跡・新里東元島」緊急発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 発掘調査は「県道保良上地線（友利～上地）道路新設改良事業」に伴うもので、県土木建築部からの分任事業として、1999年度は沖縄県文化課が、2000年度は沖縄県埋蔵文化財センターが実施した。

3. 発掘調査にあたっては、宮古島上野村教育委員会の協力を得た。

4. 本書に掲載した地形図は国土地理院発行の１／2,500を使用し、グリット設定図・周辺地形図は道路新設改良工事図に加筆した。

5. 発掘調査及び資料整理にあたり、下記の方々の指導・助言をいただいた。記して謝意を表します。
土井直美氏・譜久嶺忠彦氏。

6. 発掘調査で出土した各資料の同定並びに分析については下記の方々にお願いした。記して謝意を表します。
獣・魚骨　　金子浩昌氏（東京国立博物館研究員）
人　　骨　　土井直美氏・譜久嶺忠彦氏（琉球大学助教授・学生）

7. 各章の執筆は下記のように分担した。
片桐千亜紀……第Ⅱ章、第Ⅳ章第１節・第２節・第３節ＤＥＦＧＨＭＮＰＱ・第４節
第Ⅴ章第１節・第２節ＤＪＫＬＭ・第４節、第Ⅵ章
藤崎京……第Ⅰ章、第Ⅲ章
西銘章……第Ⅳ章第３節ＫＬＯ、第Ⅴ章第２節Ⅰ
中山晋……第Ⅳ章第３節ＩＪ、第Ⅴ章第２節ＧＨ
知念隆博……第Ⅳ章第３節ＡＢＣ、第Ⅴ章第２節ＡＢＣ
譜久嶺忠彦……第Ⅳ章第３節

8. 本書の編集は又吉純子の協力を得て、片桐千亜紀がおこなった。

9. 本書に掲載された現場の写真は片桐千亜紀・藤崎京、出土遺物の撮影は西銘章による。

10. 発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真などの記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管してある。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しんざともとじまじょうほうだいちいせき・しんざとひがしもとじまいせき
書 名	新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡
副 書 名	県道保良上地線（友利～上地）道路新設改良事業に伴う緊急発掘調査報告書
巻 次	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第７集
シ リ ー ズ 名	ー
編 著 者 名	片桐千亜紀、藤崎京、西銘章、中山晋、知念隆博、譜久嶺忠彦
発 行 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125　沖縄県西原町字上原193番地の７
発 行 年 月 日	2002年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
しんざともとじまじょうほうだいち 新里元島上方台地 遺跡 しんざとひがしもとじま 新里東元島 遺跡	おきなわけん　うえのそん 沖縄県　上野村 あざしんざと 字新里	47373 上野村		24 43 23	125 20	1999. 11. 1 ～ 2001. 2. 2	2,400㎡	県道保良上地線 （友利～上地）道 路新設改良事業

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新里元島上方台地 遺跡	集落跡	グスク 近 世	堀込石組遺構 石敷遺構 牛骨埋納遺構 土坑 炉跡 ピット群 石敷住居	青磁、白磁、染付、本土産陶器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、類須恵器、本土産磁器、土器、土製品、玉、古銭、石器、石製品、骨製品、貝類遺存体、脊椎動物遺存体	
新里東元島 遺跡	古 墓	近 世	岩陰墓	青磁、白磁、染付、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、本土産陶器、本土産磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器、煙管、玉、簪、貝類遺存体、脊椎動物遺存体、人骨	

目　次

巻首図版
　序
例　　言
報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査体制……1

第Ⅱ章　遺跡の位置と地理的環境……4

第Ⅲ章　調査の概要……6
　第１節　調査の概要……6
　第２節　調査区の設定……6
　第３節　調査経過……6

第Ⅳ章　新里元島上方台地遺跡……8
　第１節　層序……8
　第２節　遺構……8
　　Ａ　調査区全景……8
　　Ｂ　堀込石組遺構……9
　　Ｃ　石敷遺構……10
　　Ｄ　牛骨埋納遺構……10
　　Ｅ　土坑……10
　　Ｆ　炉跡……11
　　Ｇ　住居跡……11
　第３節　遺物……35
　　Ａ　青磁……35
　　Ｂ　白磁……46
　　Ｃ　染付……51
　　Ｄ　中国産陶器……52
　　Ｅ　中国産褐釉陶器……53
　　Ｆ　タイ産褐釉陶器……61
　　Ｇ　類須恵器……61
　　Ｈ　本土産磁器……63
　　Ｉ　沖縄産施釉陶器……64
　　Ｊ　沖縄産無釉陶器……65
　　Ｋ　土器……70
　　Ｌ　土製品……82
　　Ｍ　玉……82
　　Ｎ　古銭……82
　　Ｏ　石器・石製品……83

P　骨製品…… 85
Q　貝類遺存体…… 86
R　脊椎動物遺体…… 89
第4節　まとめ…… 96

第Ⅴ章　新里東元島遺跡…… 123
第1節　遺構…… 123
A　古墓1…… 123
B　古墓2…… 123
C　古墓3…… 124
D　古墓4…… 124
第2節　遺物…… 133
A　青磁…… 133
B　白磁…… 133
C　染付…… 134
D　中国産褐釉陶器…… 136
E　本土産磁器…… 136
F　本土産陶器…… 137
G　沖縄産施釉陶器…… 137
H　沖縄産無釉陶器…… 141
I　土器…… 144
J　煙管…… 145
K　簪…… 146
L　玉…… 146
M　貝類遺存体…… 148
N　脊椎動物遺体…… 149
第3節　まとめ…… 150

第Ⅵ章　新里東元島遺跡近世古墓出土人骨の構成…… 161

図　目　次

第１図　宮古諸島の位置図…… 5
第２図　調査区の設定…… 13
第３図　調査区及び周辺の石積…… 15

―新里元島上方台地遺跡―
第４図　Ａ地区　平面図…… 17
第５図　Ａ地区　層序…… 21
第６図　掘込石組遺構１…… 22
第７図　掘込石組遺構２…… 23
第８図　石敷遺構１…… 24
第９図　牛骨埋納遺構（土坑６）…… 25
第10図　土坑１・２・３…… 26
第11図　土坑４・５・７…… 27
第12図　土坑８・９・11…… 28
第13図　炉跡…… 29
第14図　住居跡プラン１・２…… 30
第15図　Ｂ地区　平面図・石敷住居（石敷遺構２）…… 31
第16図　新里元島上方台地遺跡主要遺物…… 33
第17図　青磁１…… 41
第18図　青磁２…… 42
第19図　青磁３…… 43
第20図　青磁４…… 44
第21図　青磁５…… 45
第22図　白磁１…… 49
第23図　白磁２…… 50
第24図　染付…… 51
第25図　中国産陶器…… 52
第26図　中国産褐釉陶器１…… 58
第27図　中国産褐釉陶器２…… 59
第28図　中国産褐釉陶器３・タイ産褐釉陶器…… 60
第29図　類須恵器…… 62
第30図　本土産磁器…… 63
第31図　沖縄産施釉陶器…… 64
第32図　沖縄産無釉陶器１…… 68
第33図　沖縄産無釉陶器２…… 69
第34図　土器１…… 76
第35図　土器２…… 77
第36図　土器３…… 78
第37図　土器４…… 79
第38図　土器５…… 80
第39図　土器６・土製品…… 81
第40図　玉・古銭…… 82
第41図　石器・石製品１…… 83
第42図　石器・石製品２…… 84
第43図　骨製品…… 85
第44図　切痕　ブタ・ウシ…… 95

―新里東元島遺跡―
第45図　古墓１…… 126
第46図　古墓２…… 127
第47図　古墓３　調査前の状況…… 128
第48図　古墓３　埋葬人骨検出…… 129
第49図　古墓４　埋葬人骨検出…… 130
第50図　新里東元島遺跡主要遺物…… 131
第51図　青磁・白磁…… 133
第52図　染付…… 135
第53図　中国産褐釉陶器…… 136
第54図　本土産磁器…… 137
第55図　本土産陶器…… 138
第56図　沖縄産施釉陶器…… 140
第57図　沖縄産無釉陶器…… 143
第58図　土器…… 145
第59図　煙管・簪…… 147
第60図　玉…… 146

―人骨―
第61図　出土人骨の構成…… 162
第62図　頭蓋最大幅／頭蓋最大長（男性）… 166
第63図　眼窩幅／眼窩高（男性）…… 166
第64図　鼻幅／鼻高（男性）…… 167
第65図　鼻骨平坦度示数／前頭骨平坦度示数（男性）…… 167
第66図　関東現代人を基準とした偏差折線（頭蓋・男性）…… 167
第67図　関東現代人を基準とした偏差折線（顔面平坦度・男性）…… 167
第68図　関東現代人を基準とした偏差折線（上肢）…… 169
第69図　関東現代人を基準とした偏差折線（下肢）…… 170

図　版　目　次

巻首図版１　遺跡とその周辺の航空写真
巻首図版２　上：Ａ地区　全景　下：牛骨埋納遺構
巻首図版３　上：堀込石組遺構２　下：Ｂ地区　石敷住居
巻首図版４　上：古墓１　下：古墓３　埋葬人骨検出

―新里元島上方台地遺跡―
図版１　調査区の状況１…… 99
図版２　調査区の状況２…… 100
図版３　調査区の状況３…… 101
図版４　調査区の状況４…… 102
図版５　調査区の状況５…… 103
図版６　上：青磁１　下：青磁２…… 104
図版７　上：青磁３　下：青磁４…… 105
図版８　上：青磁５　下：白磁１…… 106
図版９　上：白磁２　下：染付…… 107
図版10　上：中国産陶器　下：中国産
　褐釉陶器１（１～６）…… 108
図版11　上：中国産褐釉陶器１（７～17）
　下：中国産褐釉陶器２…… 109
図版12　上：中国産褐釉陶器３・タイ産褐釉陶器
　中：類須恵器下：本土産磁器…… 110
図版13　沖縄産施釉陶器……64
図版14　上：沖縄産無釉陶器１
　下：沖縄産無釉陶器２…… 111
図版15　上：土器１　下：土器２…… 112
図版16　上：土器３　下：土器４…… 113
図版17　上：土器５　下：土器６・土製品
　…… 114
図版18　玉・古銭……82
図版19　上：石器・石製品１中：石器
　・石製品２　下：骨製品…… 115
図版20　切痕　ブタ・ウシ…… 116
図版21　上：巻貝　下：巻貝…… 117
図版22　上：巻貝　下：二枚貝…… 118
図版23　骨１　サカナ・ウミガメ・ニワトリ
　・カラス・ネコ・ウマ・ヤギ…… 119
図版24　骨２ウシ（１）…… 120
図版25　骨３ウシ（２）…… 121
図版26　骨４ブタ…… 122

―新里東元島遺跡―
図版27　調査区の状況１…… 153
図版28　調査区の状況２…… 154
図版29　上：青磁・白磁　下：染付…… 155
図版30　上：中国産褐釉陶器　中：本土産磁器
　下：本土産陶器…… 156
図版31　上：沖縄産施釉陶器　下：沖縄産
　無釉陶器…… 157
図版32　上：土器　下：煙管・簪…… 158
図版33　玉…… 146
図版34　巻貝　下右：二枚貝…… 159
図版35　骨　サカナ・カエル類・ヘビ・
　ネズミ・ブタ…… 160

―人骨―
図版36　人骨１…… 177
図版37　人骨２…… 178

表 目 次

―新里元島上方台地遺跡―

第１表　ピット群法量・出土遺物一覧…… 19
第２表　青磁観察一覧…… 36
第３表　青磁出土状況…… 40
第４表　白磁出土状況…… 46
第５表　白磁観察一覧…… 47
第６表　染付出土状況…… 51
第７表　中国産褐釉陶器観察一覧…… 54
第８表　中国産褐釉陶器出土状況…… 57
第９表　類須恵器観察一覧…… 61
第10表　本土産磁器出土状況…… 63
第11表　沖縄産施釉陶器出土状況…… 64
第12表　沖縄産無釉陶器観察一覧…… 66
第13表　沖縄産無釉陶器出土状況…… 67
第14表　土器観察一覧…… 71
第15表　土器出土状況…… 73
第16表　土製品観察一覧…… 82
第17表　石器・石製品出土状況…… 83
第18表　石器・石製品観察一覧…… 83
第19表　骨製品観察一覧…… 85
第20表　貝類出土状況（巻貝）…… 87
第21表　貝類出土状況（二枚貝）…… 86
第22表　魚骨出土一覧…… 89
第23表　ウミガメ出土一覧…… 89
第24表　ニワトリ出土一覧…… 89
第25表　カラス出土一覧…… 89
第26表　ネコ出土一覧…… 90
第27表　ウマ出土一覧…… 90
第28表　ウシ・ウマ出土一覧…… 90
第29表　ヤギ出土一覧…… 90
第30表　ブタ出土一覧…… 90
第31表　ウシ出土量…… 91
第32表　ウシ歯出土一覧…… 93

―新里東元島遺跡―

第33表　中国産褐釉陶器出土状況…… 136
第34表　沖縄産施釉陶器出土状況…… 139
第35表　沖縄産施釉陶器観察一覧…… 139
第36表　沖縄産無釉陶器出土状況…… 141
第37表　沖縄産無釉陶器観察一覧…… 142
第38表　土器出土状況…… 144
第39表　土器観察一覧…… 144
第40表　煙管観察一覧…… 146
第41表　貝類出土状況（巻貝）…… 148
第42表　貝類出土状況（二枚貝）…… 148
第43表　魚骨（ハリセンボン科）出土一覧… 149
第44表　カエル類出土一覧…… 149
第45表　ヘビ出土一覧…… 149
第46表　ネズミ出土一覧…… 149
第47表　ブタ出土一覧…… 149
第48表　ウシ出土一覧…… 149

―人骨―

第49表　新里東元島遺跡出土人骨…… 161
第50表　年齢区分…… 162
第51表　比較集団…… 165
第52表　脳頭蓋計測値の比較（男性）…… 166
第53表　顔面平坦度の比較（男性）…… 166
第54表　上肢骨の比較（男性）…… 168
第55表　上肢骨の比較（女性）…… 168
第56表　下肢骨の比較（男性）…… 170
第57表　下肢骨の比較（女性）…… 170
第58表　頭蓋主要計測値（男性）…… 173
第59表　顔面平坦度計測値（男性）…… 173
第60表　上腕骨計測値（男性）…… 174
第61表　上腕骨計測値（女性）…… 174
第62表　尺骨計測値（男性）…… 174
第63表　尺骨計測値（女性）…… 174
第64表　橈骨計測値（男性）…… 175
第65表　大腿骨計測値（男性）…… 175
第66表　大腿骨計測値（女性）…… 176
第67表　脛骨計測値（男性）…… 176
第68表　腓骨計測値（男性）…… 176

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

平成11年度より平成12年度にかけて実施した新里元島上方台地遺跡及び新里東元島遺跡発掘調査は沖縄県土木建築部により実施されている県道保良上地線道路新設改良事業（友利～上地）に伴うものである。

同事業は、宮古島１周道路建設の一部であり、城辺町～下地町の各集落を結ぶアクセス道路として、また宮古島の外周を１周させることで各市町村を結ぶ島の産業及び交通の核となる道路建設を目的としたものである。

同事業を実施する上野村字新里には、周知の遺跡である「新里元島上方台地遺跡」、「新里東元島遺跡」が所在する。そのため、沖縄県土木建築部道路建設課と沖縄県教育庁文化課の間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を行った。

まず、平成10年度にバックホウによる試掘調査及び確認調査を実施した。平成11年度に沖縄県土木建築部が文化財保護法第57条の３により発掘通知を提出し、これを受けて沖縄県教育委員会より事前の発掘調査が必要な旨回答、県土木建設部長・県教育長との間で協定書を交わし発掘調査を実施することとなった。

調査は平成11年11月から開始し平成13年３月に終了、翌４月に現場引渡しの旨を県土木建築部あて通知した。平成13年度に報告書を刊行し全事業を完了した。

第２節　調査体制

発掘調査、資料整理に係る業務は平成11年度～平成13年度にかけて実施した。調査及び資料整理は11年度は沖縄県教育委員会が、12年度、13年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。調査体制は次のとおりである。

調査主体者
　沖縄県教育委員会　（平成11年度～平成13年度）
　　教育長……翁長良盛（平成11～12年度）
　　〃……津嘉山朝祥（平成13年度）

調査所管
　沖縄県教育庁文化課（平成11年度）
　　文化課長……當眞嗣一
　　文化課課長補佐……千木良芳範
　沖縄県立埋蔵文化財センター（平成12年度～13年度）
　　センター所長……知念勇
　　センター副所長……知念廣義
調査事務
　沖縄県教育庁文化課（平成11年度）
　　管理係主幹兼係長……大浜節
　　〃　主査……當間清美
　　〃　主事……横山さゆり

沖縄県立埋蔵文化財センター（平成12年度～平成13年度）
庶務課長……知念廣義
〃　主事……城間千賀
〃　〃……上原浩

調査総括
沖縄県教育庁文化課
埋蔵文化財係長……島袋洋（平成10年度～平成11年度）
沖縄県立埋蔵文化財センター
調査課長……島袋洋（平成12年度～平成13年度）
調査担当
沖縄県教育庁文化課及び沖縄県立埋蔵文化財センター
史跡整備係長……盛本勲（平成11年度～12年度）
指導主事……嘉手苅徹（平成11年度～12年度）
〃……我那覇念（平成11年度～12年度）
〃……松永久夫（平成11年度）
〃……桃原茂夫（平成11年度）
〃……川元哲哉（平成12年度）
〃……西銘章（平成13年度）
主任……長嶺均（平成11年度）
専門員……仲座久宜（平成11年度）
〃……藤崎京（平成11年度）
〃……片桐千亜紀（平成12年度～13年度）
〃……山本正昭（平成12年度）
〃……中山晋（平成13年度）
〃……森田直哉（平成13年度）
〃……知念隆博（平成13年度）
調査補助員　嘱託員……大島誠（平成11年度～12年度）
〃　〃……矢沢秀雄（平成11年度～12年度）
〃　〃……宮城利香（平成11年度～12年度）
〃　〃……前田一舟（平成11年度）
〃　〃……藤崎京（平成12年度～平成13年度）
〃　〃……古屋聡洋（平成12年度）
〃　〃……田里一寿（平成12年度）
〃　〃……城間肇（平成12年度）
〃　〃……宮平真由美（平成12年度）
〃　〃……上原久（平成12年度）
〃　〃……與那国充子（平成12年度）
〃　〃……又吉純子（平成12年度）
〃　〃……大城安志（平成12年度）
〃　〃……天久朝海（平成12年度）
〃　〃……仲與根ゆかり（平成12年度）

調査指導者

岸本義彦（沖縄県公文書館）
土肥直美（琉球大学助教授）
佐渡山安公（上野村文化財保護委員長）
砂辺和正（平良市教育委員会）
下地和宏（城辺町教育委員会）

発掘調査作業員

砂川英子・砂川モリ・砂川ミツ・砂川みつ子・砂川洋子
砂川陽子・砂川博敏・砂川邦雄・下地ヨシ・下地優臣
伊川澄子・上地秀雄・上地ミツ子・本村チヨ・新里カヅ子
松元千恵子・仲原光雄・嵩里キヨ・佐渡山英子・佐渡山敏子
佐渡山茂・佐渡山公平・佐渡山亮太・伊良皆安雄・清水恵美
菊地智子・和田卓也・小池香世子・富島義弘・友利晃子
樋口昌良

資料整理作業員

金城薫・請盛智秋・中村智子・折田衣代・与那国充子
源河秀子・國吉春美・備瀬枝美子・石橋朝子・嘉数禮子
郭嘉琳・比嘉史子・大城敦・東江裕吉・島袋清香
比嘉みどり・仲地まゆみ・比嘉久美子・増泰隆・天久朝海
池保子・荻堂美香・伊佐綾子・大城愛・吉村綾子
宮崎典子・大城陽子・真栄田章子・比嘉美和子・玉城照美
島袋春美・瑞慶覧尚美・池原直美・玉寄智恵子・玉城恵美利
高良三千代・平良貴子・金城敬子・友利映子・仲宗根三枝子
外間瞳・上原園子・大城勝江・當山実・津波古哲
仲里絹子・徳川和也

聞き取り調査依頼者

佐渡山安公

上野村教育委員会　岩井洋一、高江州恵伝の両氏からは、調査、現地説明会等において多大な尽力を得た。宮古農園からは仮設事務所設置にあたり土地の借用、佐渡山安公氏からは水道及び電気の分線等の協力を得た。記して感謝申し上げます。

第Ⅱ章　遺跡の位置と地理的環境

宮古島は、北東から南西に点々と弓状に連なる琉球弧のほぼ中央に位置する、平面略三角形状を呈する島である(第１図)。北緯24度～25度、東径125度～126度内、沖縄本島の南西約300㎞の距離にある。周辺には池間島・大神島・来間島・伊良部島・下地島といった島々が宮古島を取り囲み、南西のやや離れた所に多良間島があり、これらの島々が宮古諸島を形成している（第１図)。宮古島から沖縄本島までは大きな隔たりがあり、先史時代において沖縄本島までが日本本土の縄文文化に組み込まれるのにたいし、宮古島以南の島々はフィリピン等の南方文化との関係が注目されており、南方文化の北限ともなっている島である。

島はほとんどが隆起サンゴ礁の琉球石灰岩からなり、砂岩と泥板岩が重なり合って地層を形成している。このような地質構造のため国内で初めての地下ダムが造られ、農業用水として活用され、夏場国内によくある断水騒ぎとは無縁である。

地形は平坦で低い台地をなし、起伏に乏しく山らしい山はみられない。高所といっても島のほぼ中央付近にある野原岳が標高約108m、島の東岸にみられる丘陵に標高約114mを測るのみである。

新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡が在する上野村は宮古島の南岸中央部に位置する。空港より県道202号線を上野村向けに南下し、東積間の三叉路から県道190号線（平良・新里線）に向かってさらに南下、新里部落をぬけると再び三叉路に行き着く。そこから左折した先が新里元島上方台地遺跡、崖下が新里東元島遺跡と呼ばれる周知の遺跡がある。

上野村には有名な歴史が残っている。1873年（明治６年)、ドイツの商船ロベルトソン号が上野村宮国沖のリーフに座礁し難破した際、当時の村民が船員達を救助し、言葉がわからないながら手厚く介抱したあと母国に送り返した。これを聞いた、時のドイツ皇帝ヴィルヘルムⅡ世が深く感動し、村民を称えたという（1978　上野村)。現在でもこの村民達のあたたかさが誇りとして、親から子、子から孫へと語り継がれている。先の沖縄サミットにおいて、当時のドイツ首相シュレーダーが上野村を訪れたことを記念し、空港から上野村に向かう県道202号線はシュレーダー通りと名付けられた。

このロベルトソン号事件からさかのぼること約100年前の1771年（明和１年)、宮古島を巨大な津波が襲い（明和の大津波）上野村南岸の集落であった元島遺跡を形成した人々が高所に移動し、現在の部落を形成したと言われている。今回調査した新里元島上方台地遺跡はその遺物から16世紀には形成されていたと考えられ、津波の影響とは直接関係ないものと思われる。

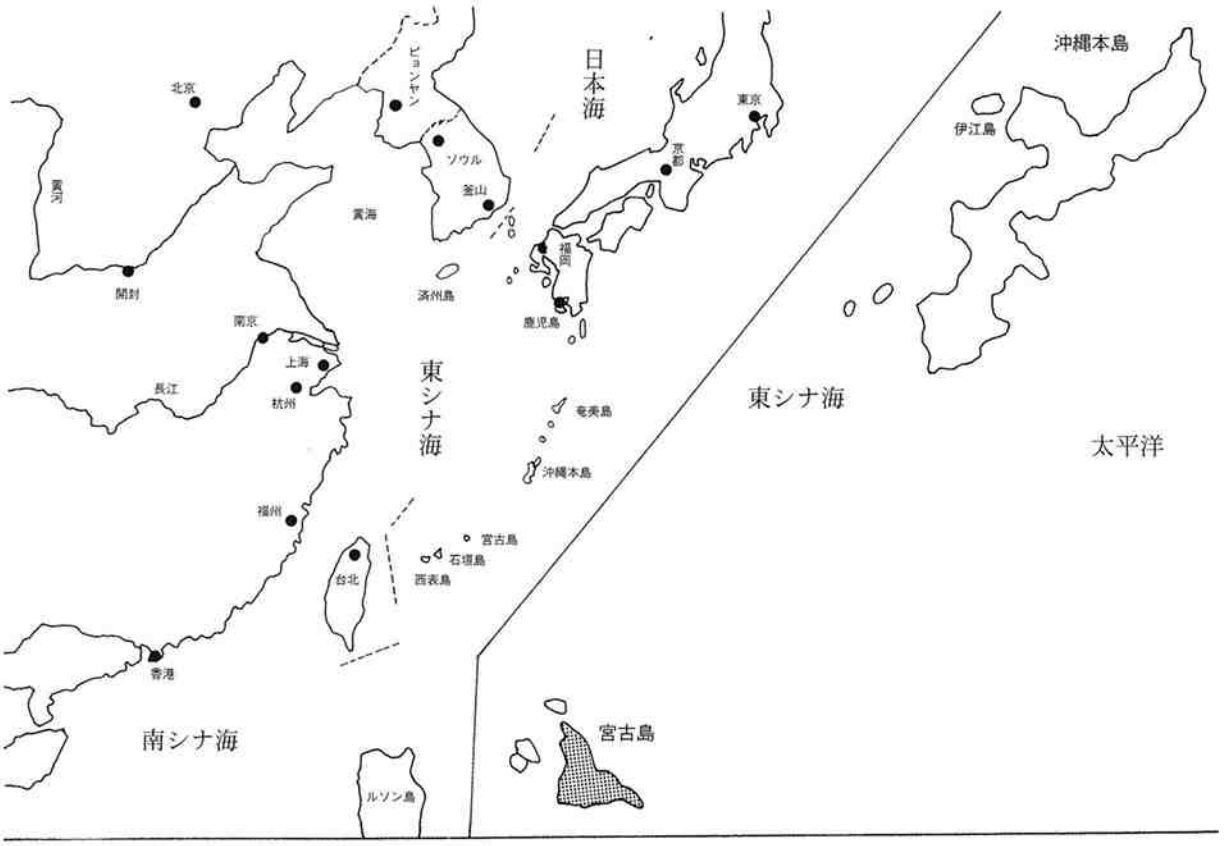
新里元島上方台地遺跡は標高約40m以上の台地上に形成されている。密林のなかに巨大な岩盤が至る所に露呈し、住居が営めそうな平場は極めて少ない。長大な道路予定地上に唯一見つけた、土が堆積する平場がA地区･B地区である。周囲の岩盤添いには10～20㎝の石灰岩礫が積み上げられ、屋敷囲いや通路の壁のような役割をしている。このような石積みが、遺跡の後背に聳える丘陵に形成された城辺町の上比屋山遺跡まで続いている。

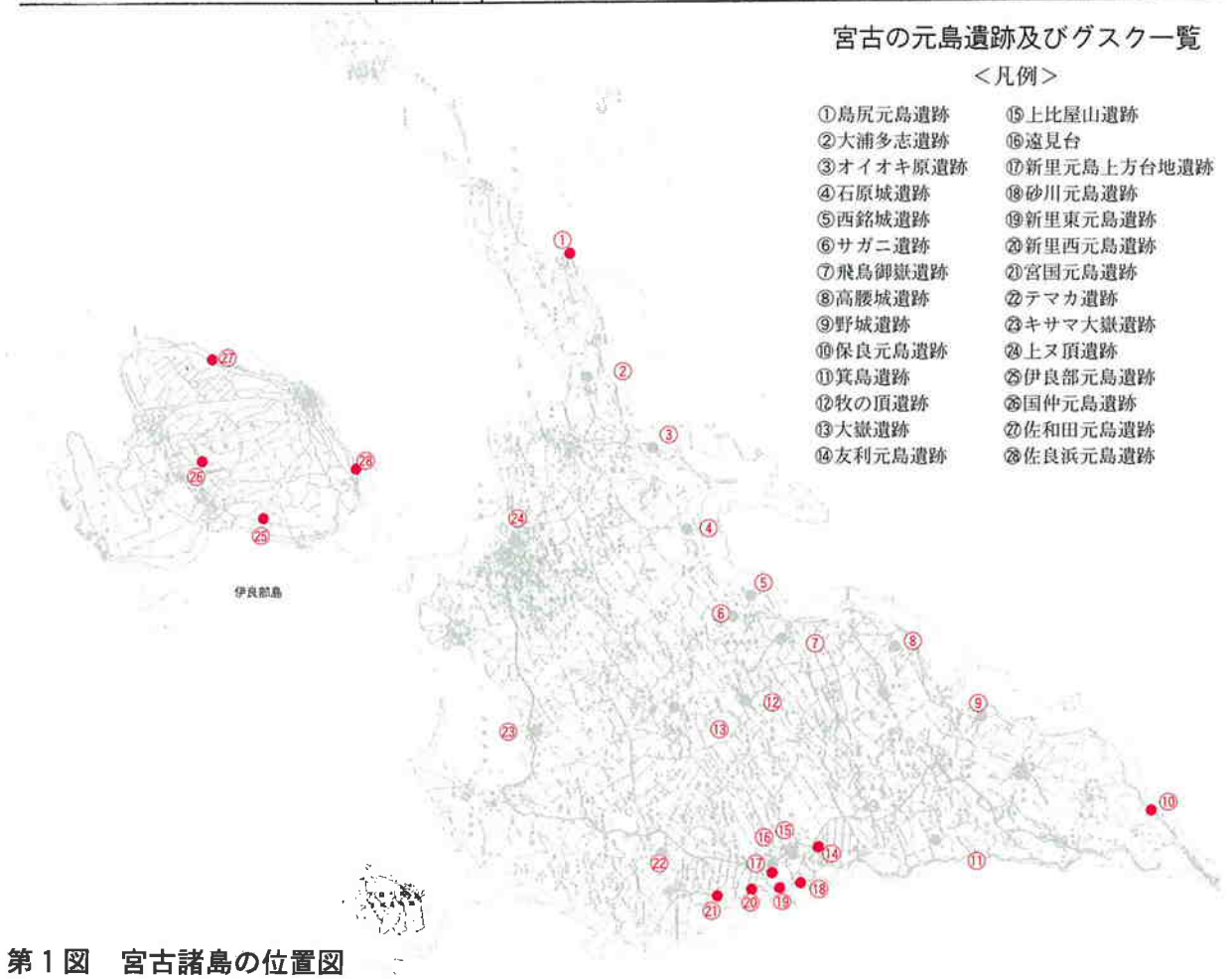
古墓は海に面した岩盤の崖下に築かれている。石灰岩を方形に削り丁寧に構築されたものと、一見すると岩盤添いに積み上げた石積みと思われる作りをしたものがある。時代はやや新しくなるため、上方台地遺跡が廃棄されたあとつくられたものと考えられる。

本遺跡の周辺には城辺町の砂川元島遺跡を始め、新里東・西元島遺跡、宮国元島遺跡といった元島遺跡が密集している。いくつかの遺跡は発掘調査がされており、これらの成果と併せて元島遺跡群の様相をつかむ努力を進めていかなければならない。

＜参考文献＞

・1978年　上野村役所「博愛記念碑」『上野村誌－創立30周年版－』





第１図　宮古諸島の位置図

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の概要

新里元島上方台地遺跡及び新里東元島遺跡は、 宮古島の南辺一帯に広がる元島遺跡の一部である。元島遺跡は、宮古島最大の集落遺跡であり、1771年の明和の大津波や、1873年のドイツ商船ロベルトソン号の救助など宮古島の歴史にたびたび登場する地域である。

新里元島上方台地遺跡は、標高約40mの海岸丘稜上に形成された遺跡である。伝承では、海岸線に住んでいた人々が、明和の大津波以降に移り住んだとされる地域であり、今回の調査の中心となった地区である。

新里の海岸丘陵には戦前までアパナキミャーカとよばれる古墓群が存在しており、調査対象地域の一部に古墓が含まれたため、これを新里東元島遺跡とした。

新里元島上方台地遺跡の遺構は、屋敷囲い、柱穴群、堀込石組遺構、焼土などを確認した。柱穴群はほぼ東西、南北の軸に並んでおり、建物の方向にある一定の法則を見出せるものである。

遺物は、宮国元島遺跡、砂川元島遺跡などと同じ遺物が出土した。ほとんどが先述した明和の大津波よりも古い時代のものであり、伝承とは異なる結果となった。宮古島の歴史を考える上で大変重要な遺跡であると思われる。

新里東元島（古墓）の遺構は、堀り込み墓、岩陰墓、石積墓などを確認した。堀り込み墓に伴って目隠しとなる石積や集骨遺構などを検出した。石積墓の直下より伸展させた埋葬人骨を検出した。

第２節　調査区の設定

道路建設センター杭№172と№174を基準ライン（B）とし、北・南にA・C、東西に１～20の10m×10mグリットを設定した（第２図）。道路建設予定地の面積は約2，400㎡と広大な面積であり、地形も石灰岩の岩盤地帯や土で形成された平場部が存在するなど変化に富むものである。そのため、便宜的に、１～８グリットの石灰岩地帯を岩場部、９～10グリットの平場部をA地区、11～14グリットの平場部をB地区、15～20までの石灰岩台地地帯をC地区に地区分けをした。岩場部とC地区は各２ヶ所ずつの遺構確認トレンチを任意に設定した。

新里東元島遺跡（古墓）はそれぞれの墓を独立させて、墓①～④を設定し、それぞれにトレンチを任意に設定した。

第３節　調査経過

平成11年度

平成11年度は、平成10年11月１日より平成11年３月17日の日程で、主に岩場部とA地区の調査を行った。 岩場部では、周辺に点在する石積の存在や岩盤上に多くの遺物を表採することができたことから、任意に２ヶ所の試掘を行った。しかし、それぞれのトレンチからは、石積等の遺構は確認できなかった。

A地区では、表土を除去したところ、屋敷囲いと思われる石積、礫敷遺構、柱穴群、石組遺構などを検出した。

遺物は、当該地が耕作地であるため、表土からは細小片のものが多く出土した。したがって、岩場部で表採された遺物に大ぶりなものが多い。

平成12年度

平成12年度は、平成12年６月５日から平成13年３月16日の日程で、前年度の調査で検出したＡ地区の遺構の掘り下げと、Ｂ地区、Ｃ地区、古墓の調査を行った。

Ａ地区では、堀込石組遺構、炉跡、土坑、柱穴群などを地山直上で検出した。

Ｂ地区では、礫敷遺構が検出された。

Ｃ地区では、試掘孔を、17～18グリットの谷部と、Ａ・Ｂ－20グリットの丘陵上縁部に任意に設定し、遺構の有無について調査した。しかし、遺構は確認されなかった。

古墓では、それぞれの墓の前庭部の発掘調査をおこなった。

墓－１・２は既に移転を終了させており、墓内部に残される人骨はわずかであった。墓－１の西端に直径約80㎝ほどの集骨遺構を確認した。墓の形態は、堀り込み墓であり、前面に石積を有するタイプである。

墓－３では、岩盤に添うような形で直径約１ｍの石積墓を確認した。その石積墓直下に伸展させた人骨を検出した。

墓－４では、岩盤岩陰を利用した、乳児の埋葬人骨を検出した。周辺にはテーブル珊瑚が散乱しており、墓となんらかの関係がある資料と思われる。

新里元島上方台地遺跡と新里東元島遺跡（古墓）で出土する遺物は、種類、年代とも明らかに相違がみられる。新里元島上方台地遺跡では、細砂が混入する宮古式土器を中心に15～16世紀の中国製青磁碗や中国産の褐釉陶器が多量に出土するのに対し、新里東元島遺跡（古墓）では、沖縄産無釉陶器を中心に、櫛目文を有する土器、本土産陶磁器が主な遺物である。

周辺地形及び掘り出した遺構などを写真撮影、図化を行った。

平成12年８月27日には現地説明会を行ない、地元をはじめ多くの人々に参加いただいた。また、平成12年８月25・26日の両日、上野村教育委員会のご厚意により、上野村教育委員会主催の小学生高学年・中学生を対象とした遺跡見学会を実施した。

平成13年度

平成13年度は、報告書を編集・刊行し、新里元島上方台地遺跡及び新里東元島遺跡発掘調査に係る業務を完了した。

第Ⅳ章　新里元島上方台地遺跡

本遺跡は岩盤が至る所に露呈する台地上にある。岩盤と岩盤の間の堆積土も薄く、表土から包含層まで約20～30㎝ほどしかない。約2,400㎡におよぶ広大な面積の調査をおこなったが、実際に発掘作業をおこなえた面積は少なかった。

グリットはA・B・Cの東西ラインと１～20までの南北ラインに10mづつ区切っている。発掘調査のメインとなったのは、A－８～10、B－９～10・13グリットである。発掘調査をおこなった場所は、南北に石積みが築かれて調査区が区画されていたため、便宜的に西側をA地区、東側をB地区に分けた。

第１節　層序（第５図）

本遺跡は堆積層が薄い。表土の掘り下げ中に楔石を伴うPitや炉跡が検出され、包含層と表土の区別は困難であった。したがって遺物の出土状況は、表採のもの、表土から遺構検出面までのもの、土坑・Pit等の遺構内出土のものに大きくわけられる。最近まで畑を営んでおり、細片となった遺物が多量に出土した。ただ、遺構内出土遺物も同様に細片が多く、畑の影響だけと考えることはできない。調査区周辺の岩盤部から得られる表採資料は、発掘調査によって得られた資料よりも、大きな破片が多く得られている。

包含層は１枚で遺構の切り合い関係は多々みられるものの、層序によって時期差を追うことはできなかった。

第２節　遺構

遺構は地山直上で検出され、土坑内覆土に造られた焼土やPitを除き、すべて地山を掘り込んで形成している。地山直上面は発掘を開始した時点よりもさらに岩盤が多く露呈している。

A　調査区全景（第３図）

調査は道路設計図にしたがって、道路全体をカバーするよう10mごとにグリットを設定した（第２図）。縦をA・B・Cの、横を１～20のラインにわけた。調査初期は密林の中を抜開しつつ、現状を把握する作業をおこなった。その結果、調査区の大半を岩盤が占めており、実際に発掘作業がおこなえる平場は少ないことが判明した。

本遺跡は至る所に岩盤が露呈する台地上の平場に集落が営まれていたと考えられる。遺跡からの景観は良好で宮古島南岸の海が一望に見渡せる。後背の丘陵上には上比屋山遺跡が確認されている。

第３図は、今回おこなったA・B発掘調査区、岩陰墓（古墓１～古墓４）の場所及び調査区周辺で確認された、帯状に構築された石積の状況を示したものである。岩陰墓については第Ⅴ章でその詳細を述べる。A地区とB地区の間に築かれた石積みは弧を描くようにA地区西側の岩盤に向かっており、屋敷囲いの役割を果たしていると思われる。A地区からはPit・土坑・堀込石組遺構・石敷遺構・炉跡等多数の遺構が検出された。B地区はA地区とほぼ同じ面積の平場があるにもかかわらず、石敷住居が１建検出されたのみである。

石積みが調査区周辺の至る所にみられたため、遺跡後背の丘陵にむかって踏査をおこなったところ、上比屋山遺跡に向かって続いていることがわかった。この石積みが集落の範囲を示していると考えれば、上比屋山遺跡と本遺跡の関係は非常に興味深い。

第４図はA地区の遺構の全体図である。検出面はほぼ地山直上である。赤黄褐色の地山に遺構が掘り込まれ、黒色土が堆積していた。遺構のうちわけは、Pit237基（うち楔石をもつもの125基）、土坑10基、牛骨埋納遺構１基、堀込石組遺構２基、石敷遺構１基、炉跡19基である。

遺構の切り合い関係によって時期差が考えられるが、包含層が薄く層位発掘によって各遺構のまとまりを明確におさえることはできなかった。若干の切り合い関係から得られる情報は以下のとおりである。

1. 堀込石組遺構１の覆土からは１基、堀込石組遺構２の覆土からは２基、土坑⑧・⑨の覆土からは各１基づつの楔石をもつPitが検出された。
2. 炉跡３・13・19は土坑１・８及び牛骨埋納遺構の覆土から検出された。
3. 楔石をもたないPitは楔石をもつPitより若干低いレベルで検出された。

上述した理由により、楔石をもつ住居を建てた人々の一部は堀込石組遺構を利用した人々より新しい時代に生活を営んでいた。楔石を利用せずに住居を建てた人々がいて、やがて住居に楔石を利用する技術を会得した。技術の過渡期にあたる時期を経験していると考えられる。土坑と炉跡の切り合い関係による考察については、「Ｄ　土坑」の節で述べる。

Ｂ　堀込石組遺構（第６・７図）

堀込石組遺構と名付けたものはＡ地区で２基確認された。その規模は異なるものの基本的に土坑を堀り込み外縁に石灰岩礫を一列に組み並べ、内面にも石を敷き詰めた遺構である。規模から１・２互いに性格は異なるものと考えられる。

堀込石組遺構１（第６図）

堀込石組遺構１は底辺が弧を描く三角形状を呈している。長軸約３m、短軸約1.8m、深さ約0.2mを測る。ほぼ長軸南北、短軸東西方向に造られている。地山を堀り込み外縁に石を組み並べ、坑内にも石を敷き詰めている。遺構覆土は一括堆積している。

石敷直上では牛骨・土器・玉類・石器が散乱していたが完形となるものはない。石敷直下より青磁片が数点出土した。本遺構の遺物を検出段階で区分すると、①石敷直上、②石敷直下にわけることが可能である。

住居跡１の楔石をもつPitがこの上から掘り込まれており、それ以前に使用された遺構である。また、南側のPit２基はこの遺構に伴うものか切られているのか判然としない。

遺構の用途は不明である。近隣の遺跡にもこのような遺構は検出されていないため、本遺跡が初例の検出となる。このようなプランとほぼ同様の形を呈する土坑が２例（土坑３・11）検出されている。形は用途によって決定されるのも一要因と考えれば、何らかの関連性が想定できる。類例の増加を期待し性格を把握していきたい。

堀込石組遺構２（第７図）

堀込石組遺構２のプランは半円月状を呈する。堀込石組遺構１と基本的に造り方は似ているが、その規模は大きい。最大約0.46mまで掘り込まれ、外縁から壁、一部坑内底に至るまで石を組み、敷き詰めている。長軸約4.7m、短軸約2.7m、を測る。堀込石組遺構１とは逆に長軸東西、短軸南北に造られている。遺構覆土はⅢ層にわかれて段階的に堆積している。遺物は層位的に検出しており、①Ⅰ層、②Ⅱ層、③石組直上、④層位不明埋土に分けることが可能である。

遺物はⅡ層から土器が、Ⅲ層から褐釉陶器が、層位は不明であるが埋土から青磁・白磁・褐釉陶器の壺と鉢・土器・玉類・土製品・骨製品が、石組直上より本遺跡では比較的残りのよい褐釉陶器底部２点・青磁・白磁が何点か出土した。最も興味深いのはパーツの異なる牛骨片が遺構外縁石組みの北・東・南にあたる位置に置かれ、坑内からも出土したことである。

遺構底部からは方形プランの土坑が検出されたが、切り合い関係であるのか、この遺構に伴うものなのか判然としない。類例の増加をまって検証していきたい。また、遺構覆土からは炉跡１基と楔石を伴うPit２基が検出された。

C　石敷遺構

石敷遺構と名付けたものはA地区で１基、B地区で１基（石敷住居）確認されたが、その性格は異なる。遺構の構成は拳大の石灰岩礫を平面に敷き詰めたものである。A地区で確認された石敷遺構１は「道」の役割を、B地区で確認された石敷遺構２は「住居」として使われていたと考えられる。石敷遺構２についてはG住居で述べる。

石敷遺構１はA地区の南東側、A・B地区間石積みのすぐ脇で検出された。やや末広がりの長方形を呈している。長軸5.41m、短軸2.26mを測る。本遺跡の南端である斜面部直前から構築され、A地区からB地区に移動するために通るA・B地区間石積みの道に至るまで続いている。このことからこの遺構は「道」の役割をしていたものと考えられる。周辺の砂川元島遺跡・住屋遺跡等でも同様な遺構が検出されている。

D　牛骨埋納遺構（第９図）

牛骨埋納遺構（土坑６）は円形プランを呈している。直径約1.1m、深さ約0.45mを測る。牛骨を段階的に埋納している。３段階に区分でき、以下の順番で配置している。

①　土坑を掘ったあと、底部に図のように２点の牛骨を（青色）配置する。
②　約15㎝ほどの石灰岩を円形に敷き、牛骨を中心に配置する。
③　②と同様の大きさの石灰岩を②で配置した牛骨をさけるように円形に積み上げていく、そのあと３点の牛骨を図のように（赤色）配置する。

遺物は石灰岩直上より砥石として２次加工された褐釉陶器底部（第28図52）が得られた他、遺構覆土より類須恵器等若干の遺物が検出された。

遺構覆土直上では炉跡が検出されたが、土の硬質化から判断すると長く利用されたものではない。

宮古島の風習では村の東西南北に土坑を掘り豚骨を埋める民俗事例があるため、牛骨の埋納ではあるが祭祀に伴う遺構である可能性が高い。

E　土坑（第10図～第12図）

土坑は全部で11基検出されたが、土坑６は牛骨埋納遺構として前述し、土坑10は堀込石組遺構２とともに記載したので省略する。プランによって①正方形、②長方形、③紡錘、④楕円に分類が可能である。特に③の紡錘形プランは大きさ深さともに掘込石組遺構１と類似する。また、土坑１・２・３・５・８からは牛骨が検出された。

土坑１（第10図１）

正方形プランを呈する土坑である。直径約1.3m、深さ約0.45mを測る。土器を中心として16世紀前半と考えられる染付等の遺物が多量に埋土から出土した。このように多量の遺物が包含した土坑は土坑１だけである。住居跡１の楔石を伴うPitがこの遺構に切られたと考えられる。また、すぐ脇に炉跡13が検出されている。

埋土堆積状況は一括堆積と考えられる。

土坑２（第10図２）

正方形プランを呈する土坑である。直径約1.6m、深さ約0.2mを測る。埋土は一括堆積で、青磁（水注）・白磁・土器等が出土した。住居跡１の楔石を伴うPit226・291がこの遺構を切っている。

土坑３（第10図３）

紡錘プランを呈する土坑である。長軸約2.5m、短軸約1.3m、深さ0.3mを測る。土坑底面より牛骨が出土した。

土坑４（第11図１）

長方形プランを呈する土坑である。長軸約2.3m、短軸約1.3m、深さ約0.18mを測る。遺構埋土より青磁が出土した。

土坑５（第11図２）

正方形プランを呈する土坑である。軸約1.3m、深さ約0.37mを測る。褐釉陶器等比較的多量の遺物が埋土より出土した。

土坑７（第11図３）

長方形プランを呈する土坑である。長軸約1.8m、短軸約１m、深さ約0.2mを測る。

土坑８（第12図１）

楕円形プランを呈する土坑である。長軸約2.3m、短軸約1.2m、深さ約0.37mを測る。遺構検出面からは炉跡が検出された。内底面に文様が施された13世紀後半～14世紀と考えられる白磁・褐釉陶器及び牛骨が出土した。

土坑９（第12図２）

長方形プランを呈する土坑である。長軸2.2m、短軸1.4m、深さ0.27mを測る。土坑８と切りあっているが、どちらが新しいのか分からなかった。遺物は褐釉陶器の擂鉢等が出土した。

土坑11（第12図３）

紡錘プランを呈する土坑である。長軸2.9m、短軸1.4、深さ0.27mを測る。

Ｆ　炉跡（第13図）

炉跡はすべて円形プランを呈しＡ地区で19基、Ｂ地区で１基検出された。比較的大きく、土が赤茶色で硬質化したものと、硬質化せず炭が充填したものとに分類できる。前者は炉跡２・３・４・５・６・８・９・11・14・15・17で炉跡の底部が約１㎝ほど赤茶色に硬質化し、３～５㎝ほど炭が堆積している。後者は炉跡１・７・10・11・12・15・17・18で比較的小さく底も浅い。赤茶色の高質化した土はみられないが、炭が検出面まで堆積していた。

Ｂ地区で検出された炉跡は石敷住居に伴って確認した。

Ｇ　住居跡（第14・15図）

住居跡１（第14図１）

住居跡１はＡ地区で確認された。調査範囲の関係で全形を追うことはできなかった。東西に長い長方形の造りである。東西の柱数は６本で約7.5mを測る、南北は確認できない。柱はすべて基礎として楔石を用いている。Pitの中には楔石が崩れずに柱痕が残っているものもある。柱の大きさは約16㎝前後であろう。

住居跡２（第14図２）

住居跡２もＡ地区で確認された。東西の柱数は４本で約4.6m、南北の柱数３本で約2.9mを測る。住居跡１と比べて小規模である。住居跡１と同様に、柱はすべて基礎として楔石を用いている。Pitの中には楔石が崩れずに柱痕が残っているものもある。柱の太さは約16㎝前後であろう。位置は住居跡１のすぐ南側であり、両者の接近から同時に営まれた住居とは考えられない。

石敷住居（石敷遺構２・第15図）

Ｂ地区で検出された。プランは長方形で、石（石灰岩）が敷き詰められている。長軸約４m、短軸2.7mを測る。石敷き周辺から楔石をもつPitが検出されたため、用途は住居と考えられる。石敷の西側から炉跡が検出されたが、Ａ地区に見られた炉跡ほど土は焼けていなかった。おそらく非常に短期間のみ使われた炉跡と考えられる。遺構は丘陵のエッジ部近くに構築されており、エッジ部には土留めの役割と考えられる石積みが造られている。

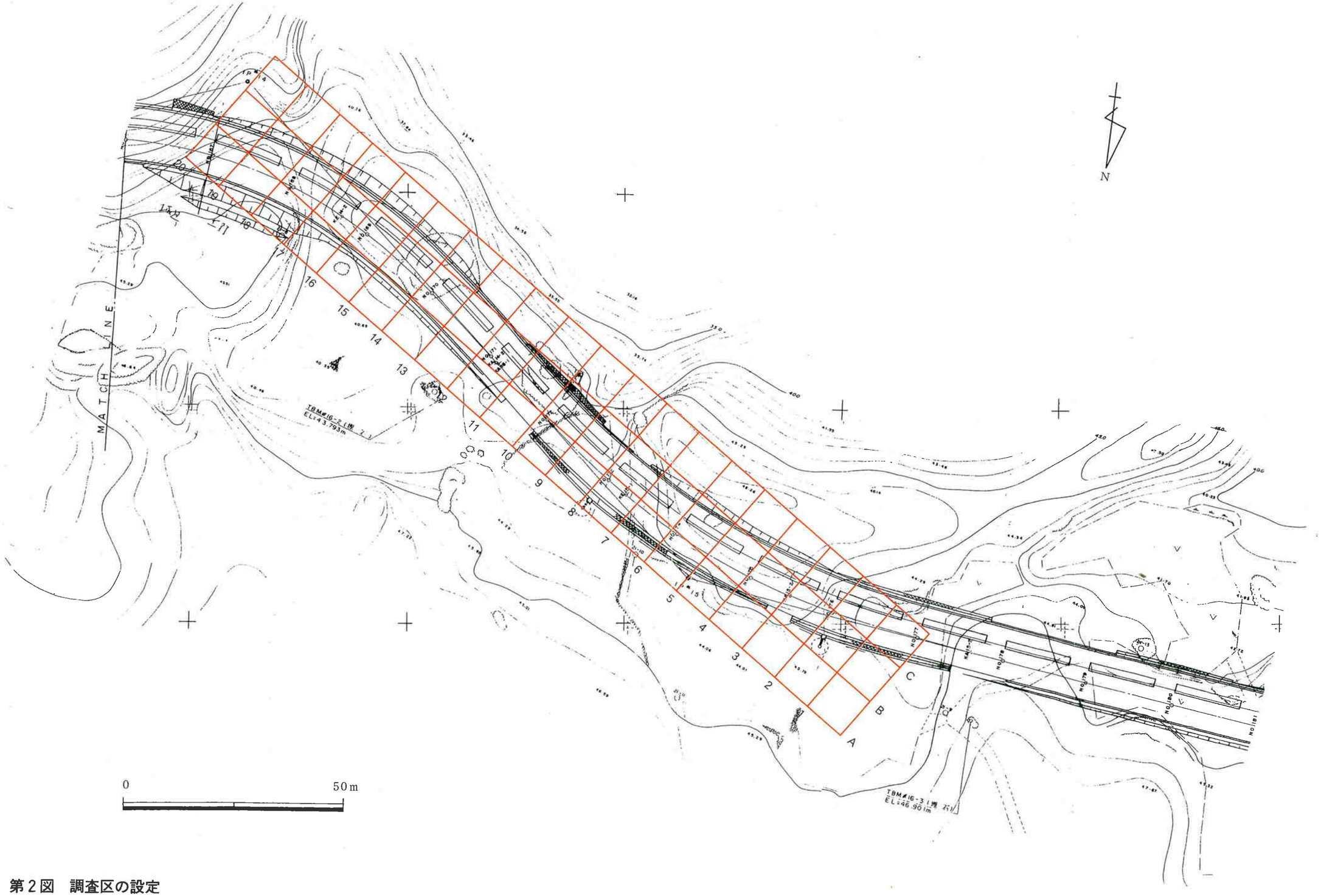
遺構下はゆるい斜面地形で、石敷住居を構築するさい多量の盛土をおこなって平らな地形をつくり、構築している。

石敷遺構の東側では遺物集中部が検出された。

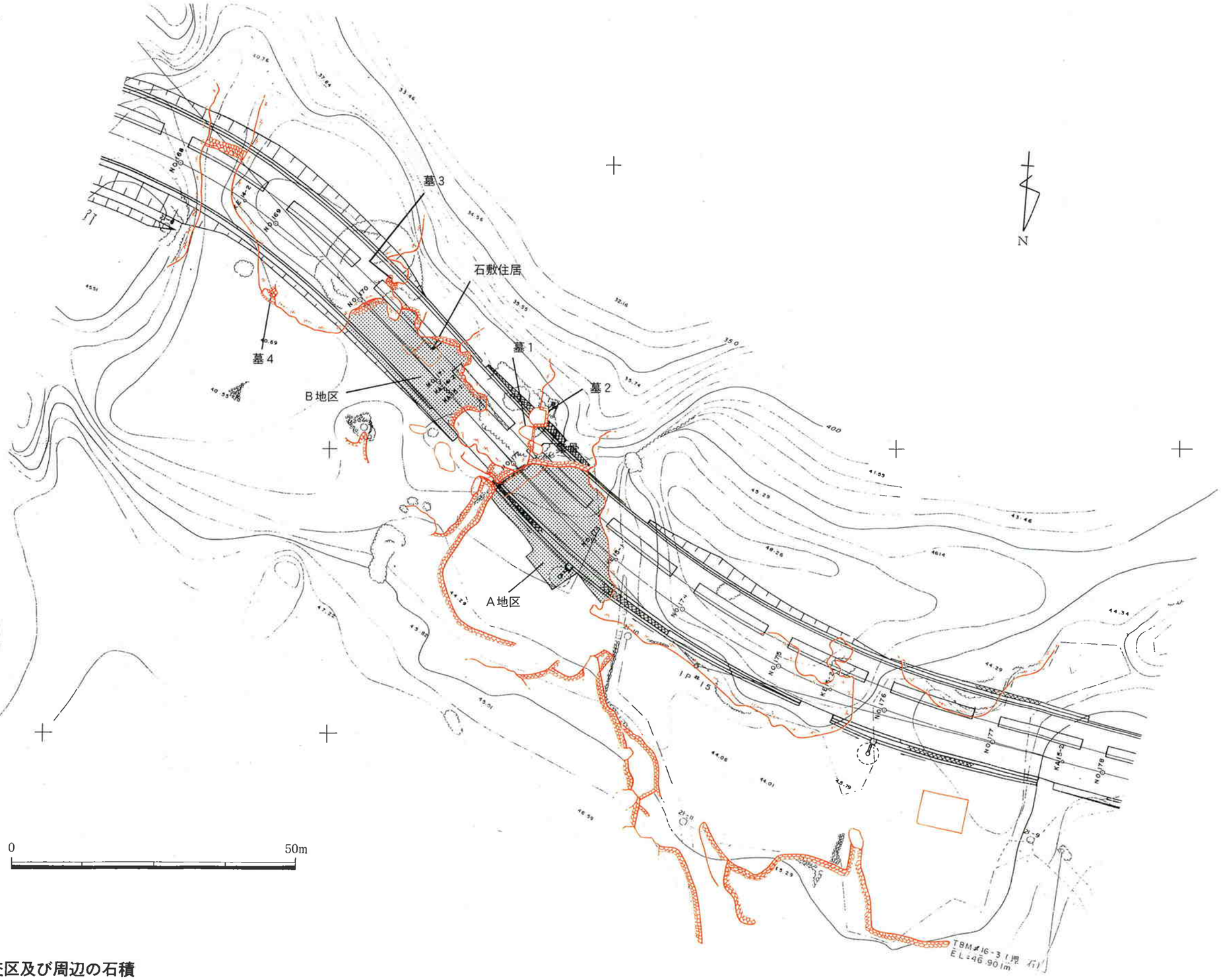
本遺構は、①盛土、②遺構使用、③廃棄後と時期分類区分する事ができる。①盛土（Ⅱ層）からは青磁・白磁・褐釉陶器等非常に多量の遺物が出土した。おそらく、盛土するさい廃棄された遺物も一緒に意識して埋めたものと考えられる。②の遺構使用時（礫直上）の層からは青磁・褐釉陶器・土器等が出土した。③の廃棄後（Ⅰ層）からは褐釉陶器・土器・本土産磁器・古銭・骨製品等が出土した。石敷住居西側の遺物集中部からは青磁・土器・石器等が出土した。

Ｂ地区とＡ地区の遺物を比較すると、Ｂ地区の石敷住居周辺の遺物は、Ａ地区の遺物に比べて破片が大きいとゆう特徴が顕著に現れていた。

構築年代を知る手がかりとして盛土内の遺物があげられる。ここから、15世紀末～16世紀前半と考えられる染付が出土しているため、この時期以降の構築である。

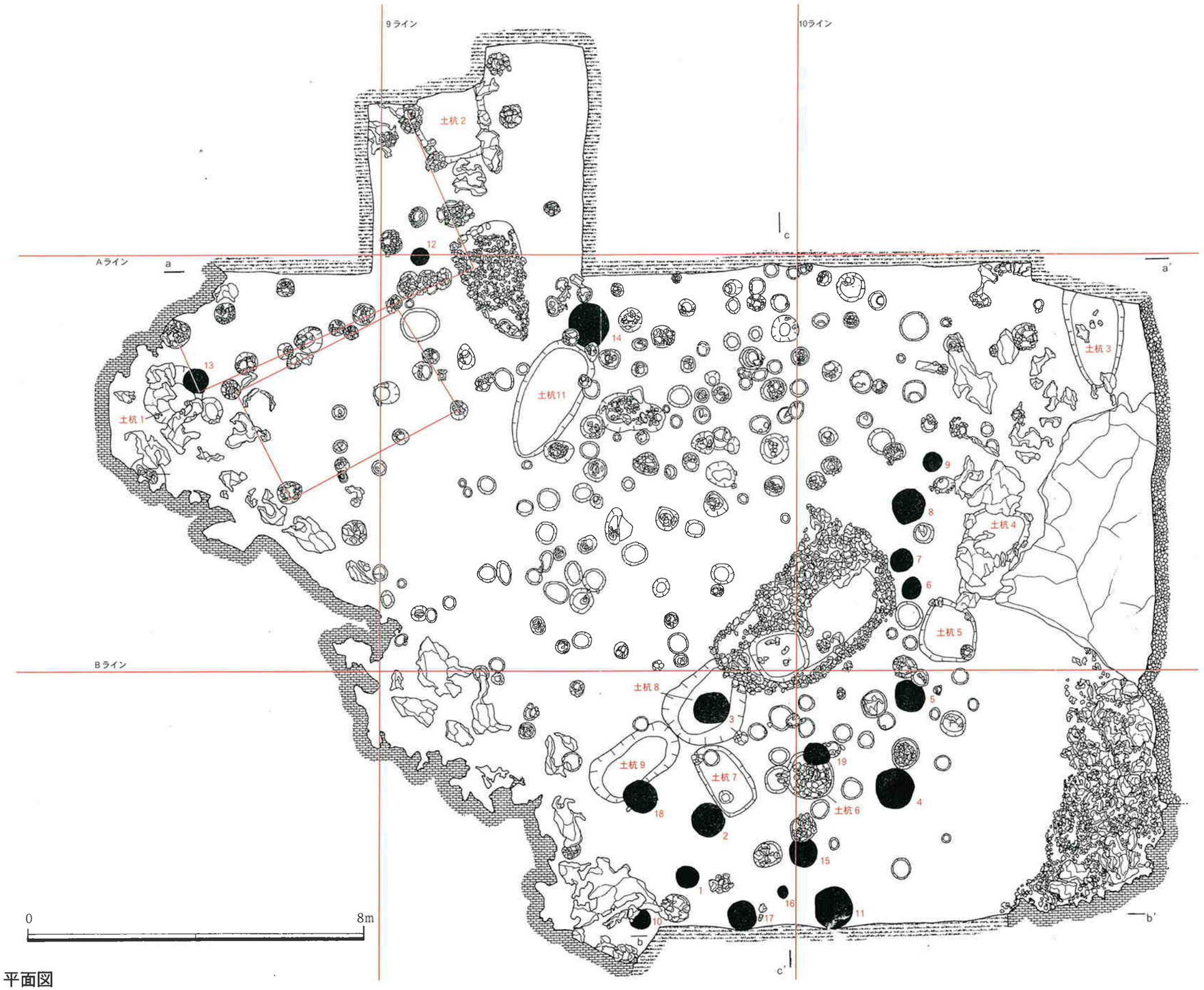


第２図　調査区の設定



第3図　調査区及び周辺の石積

青：pit番号



赤：土坑及び炉跡

第４図　Ａ地区　平面図

第１表ａ　ピット群法量・出土遺物一覧

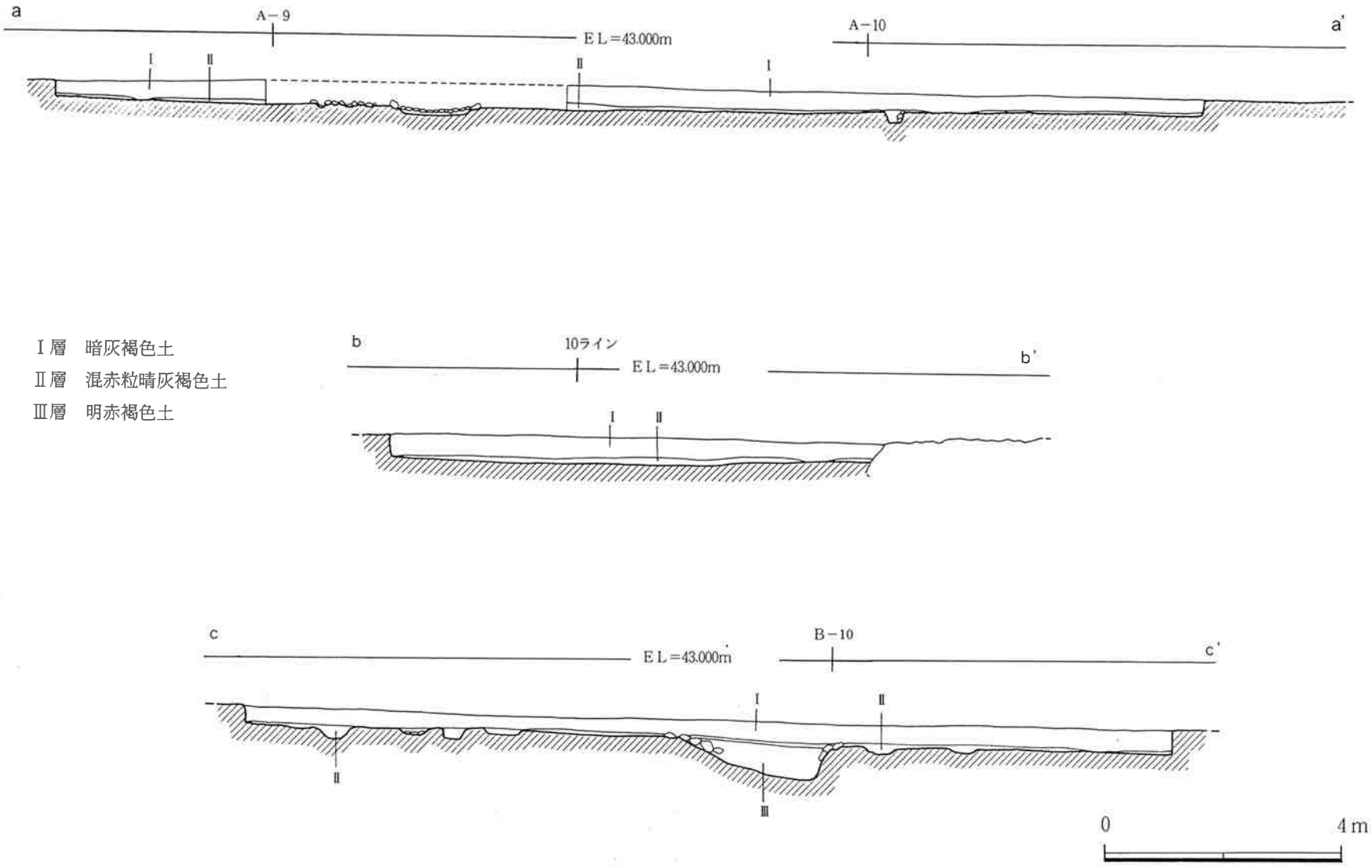
番号	グリット	楔石	法量（cm）		出　土　遺　物
			長さ	深さ	
2	A－9	—	82	10	
4	A－9	—	62	42	
5	A－9	—	56	5	
6	A－9	—	60	14	
7	A－9	—	32	22	
12	B－10	—	44	12	中国産褐釉陶器
17	A－10	—	68	11	
22	A－10	—	62	24	
23	A－10	—	22	14	
24	A－10	○	34	18	
26	A－8	—	90	16	青磁、中国産褐釉陶器、土器、貝、骨
43	A－10	○	29	22	
45	A－9	○	68	14	中国産褐釉陶器、骨
47	A－9	—	40	14	
48	A－9	—	22	12	
49	A－9	—	20	12	
50	A－9	—	34	18	
51	A－9	—	36	16	
52	A－9	—	54	17	
53	A－9	○	32	34	
54	A－8	—	59	12	
56	A－9	—	40	30	
59	A－9	—	44	6	中国産褐釉陶器、土器
61	A－9	—	42	9	
62	A－9	○	54	30	
63	A－9	—	54	18	
64	A－9	—	39	14	
65	A－9	—	36	24	
66	A－9	—	42	24	
67	A－9	○	46	41	
68	A－9	○	53	24	
69	A－10	—	65	55	青磁、土器
70	A－9	—	34	9	
71	A－9	○	54	29	
72	A－10	—	42	14	
73	A－10	○	56	38	
74	A－10	—	40	20	
77	A－10	—	56	26	
78	A－10	—	68	22	土器
79	A－10	—	58	34	
80	A－10	—	60	24	
81	A－10	○	60	14	
82	B－9	—	40	22	
83	B－9	—	62	12	
84	B－10	○	46	25	
85	B－10	○	64	36	
86	B－10	—	44	10	
87	B－10	—	40	12	
88	B－10	—	40	40	
89	B－10	—	38	21	
90	B－10	—	28	9	
91	B－10	—	30	6	
92	B－10	—	50	56	
93	B－10	—	46	34	中国産褐釉陶器
95	B－10	—	49	12	
100	A－9	—	52	16	
101	A－9	—	45	30	
102	A－9	—	52	40	
103	A－9	—	54	18	

番号	グリット	楔石	法量（cm）		出　土　遺　物
			長さ	深さ	
104	A－9	—	57	22	
105	A－9	—	62	16	
106	A－9	—	60	34	
107	A－9	—	42	14	
108	A－9	○	45	28	
109	A－9	○	42	26	
111	B－10	—	22	14	
112	B－10	—	62	20	
113	B－9	—	42	10	
115	A－9	○	30	27	
116	B－9	—	30	24	
117	A－9	—	36	17	
118	A－9	—	38	15	
119	B－10	—	44	10	
122	A－9	○	48	24	
123	A－9	—	36	24	
124	A－9	○	42	30	
125	A－9	○	40	29	
126	A－9	—	35	16	中国産褐釉陶器、土器
128	A－9	○	28	17	
130	A－9	—	44	34	
131	A－9	—	42	8	
132	A－10	○	37	23	
133	A－10	—	28	7	
134	A－9	—	34	10	
135	A－10	—	44	12	中国産褐釉陶器
136	A－9	—	47	20	
137	A－9	—	38	16	
138	A－9	—	42	22	
139	A－9	—	55	26	
140	A－9	○	36	26	
141	A－9	○	38	20	
142	A－9	○	55	17	
143	A－9	○	60	20	
144	A－9	○	45	44	
145	A－9	○	49	16	
146	A－9	○	40	14	
147	A－9	○	33	12	
148	A－9	○	40	26	
149	A－9	○	55	38	
150	A－9	—	32	10	
151	A－9	○	38	28	
152	A－9	○	63	44	中国産褐釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器、骨
153	A－9	○	56	20	
154	A－9	○	50	26	青磁、中国産褐釉陶器、土器
155	A－9	○	42	34	
156	A－9	○	50	32	
157	A－9	○	32	30	
158	A－9	○	84	38	青磁
159	A－9	○	74	18	
160	A－9	○	30	34	土器
161	A－9	○	51	16	
162	B－9	—	40	20	
166	A－9	—	39	8	
168	A－9	—	51	14	
169	A－10	○	43	12	
171	A－10	—	48	12	
172	A－10	—	40	16	
173	A－9	—	46	18	青磁、中国産褐釉陶器

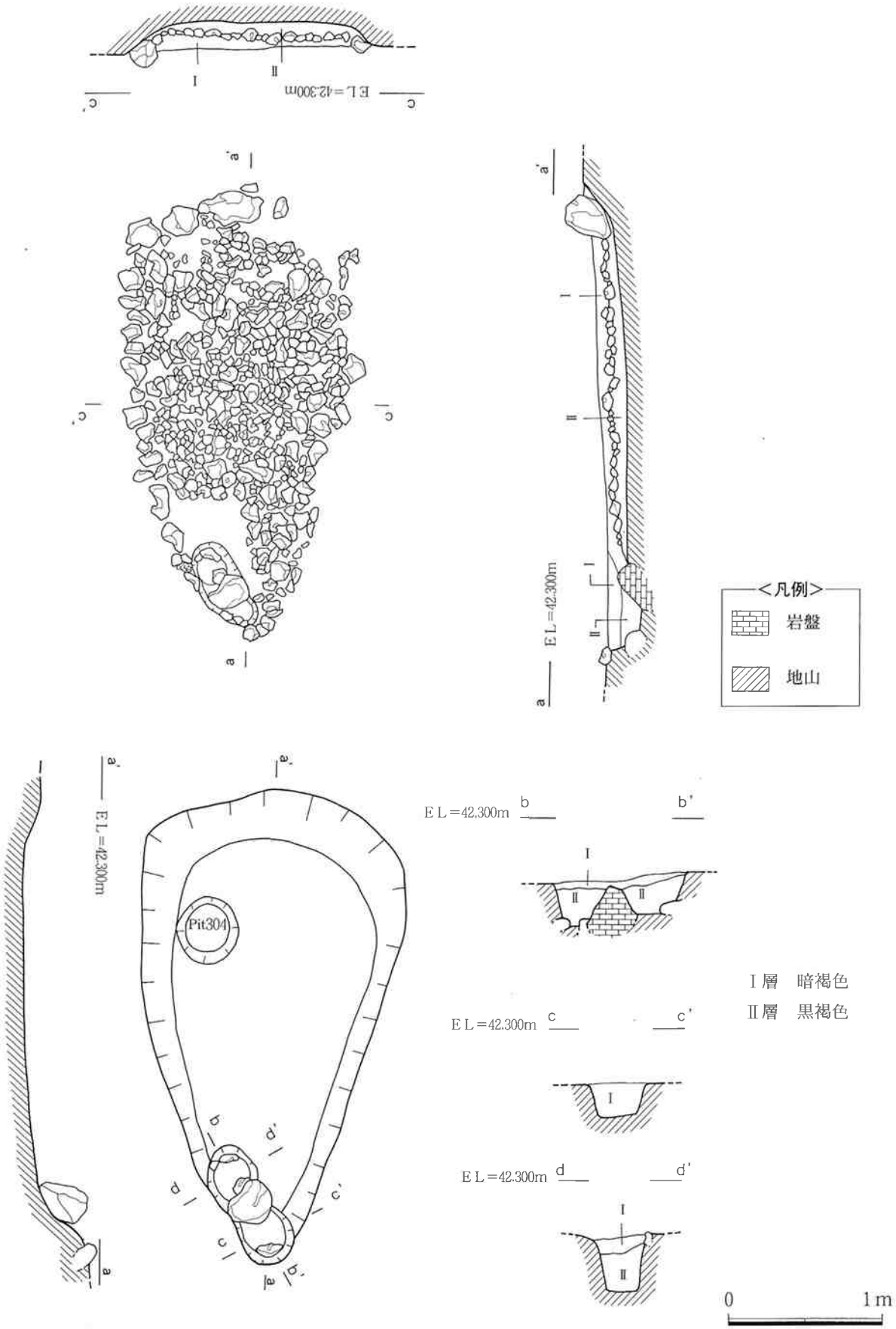
第１表ｂ　ピット群法量・出土遺物一覧

番号	グリット	楔石	法量（cm）		出　土　遺　物
			長さ	深さ	
175	A－10	—	70	46	
176	A－10	○	56	12	中国産褐釉陶器
177	A－10	○	46	29	中国産褐釉陶器
178	A－10	○	42	22	
179	A－10	—	36	26	
180	A－10	—	30	16	中国産褐釉陶器
181	A－10	○	12	17	青磁、中国産褐釉陶器、土器
182	B－9	—	48	20	
183	B－9	○	39	28	
184	A－9	○	36	34	
185	B－9	○	40	16	
186	B－9	—	34	18	
187	A－9	—	28	8	
188	A－8	—	22	28	
189	A－9	—	28	22	中国産褐釉陶器、土器
190	A－9	○	48	50	中国産褐釉陶器
191	A－9	—	16	14	土器
192	A－9	○	38	14	中国産褐釉陶器、土器
193	A－9	—	62	16	土器
194	A－9	○	34	24	骨
195	A－8	○	34	36	中国産褐釉陶器、土器、骨
196	A－9	○	38	19	中国産褐釉陶器
198	A－8	○	30	16	
199	A－8	○	38	26	
200	A－9	○	36	10	
201	A－8	○	60	20	
202	A－8	○	50	36	
203	A－8	○	45	14	
204	A－8	○	57	23	
205	A－8	○	37	24	
206	A－8	○	34	10	
207	A－8	○	61	18	
208	A－8	○	39	20	
210	A－8	○	53	31	
211	A－8	○	36	10	
212	A－9	—	18	22	
213	A－9	○	50	26	
214	A－9	○	48	27	
215	A－9	○	36	23	
216	A－9	○	54	30	
217	A－8	○	44	44	
218	A－8	○	54	35	
219	A－8	○	70	40	
220	A－9	○	38	20	
221	A－9	○	44	36	
222	A－8	—	22	11	
223	A－9	○	40	27	
225	A－9	○	86	34	
226	A－9	○	46	38	
227	A－9	○	45	33	
228	A－9	○	20	12	
229	A－10	○	45	18	青磁、中国産褐釉陶器、土器
230	A－10	○	26	23	
231	A－9	○	46	14	
232	A－10	○	34	14	
233	A－10	○	35	12	
234	A－10	○	52	17	
235	A－10	○	46	27	
236	A－10	○	22	32	
237	A－10	○	38	18	中国産褐釉陶器

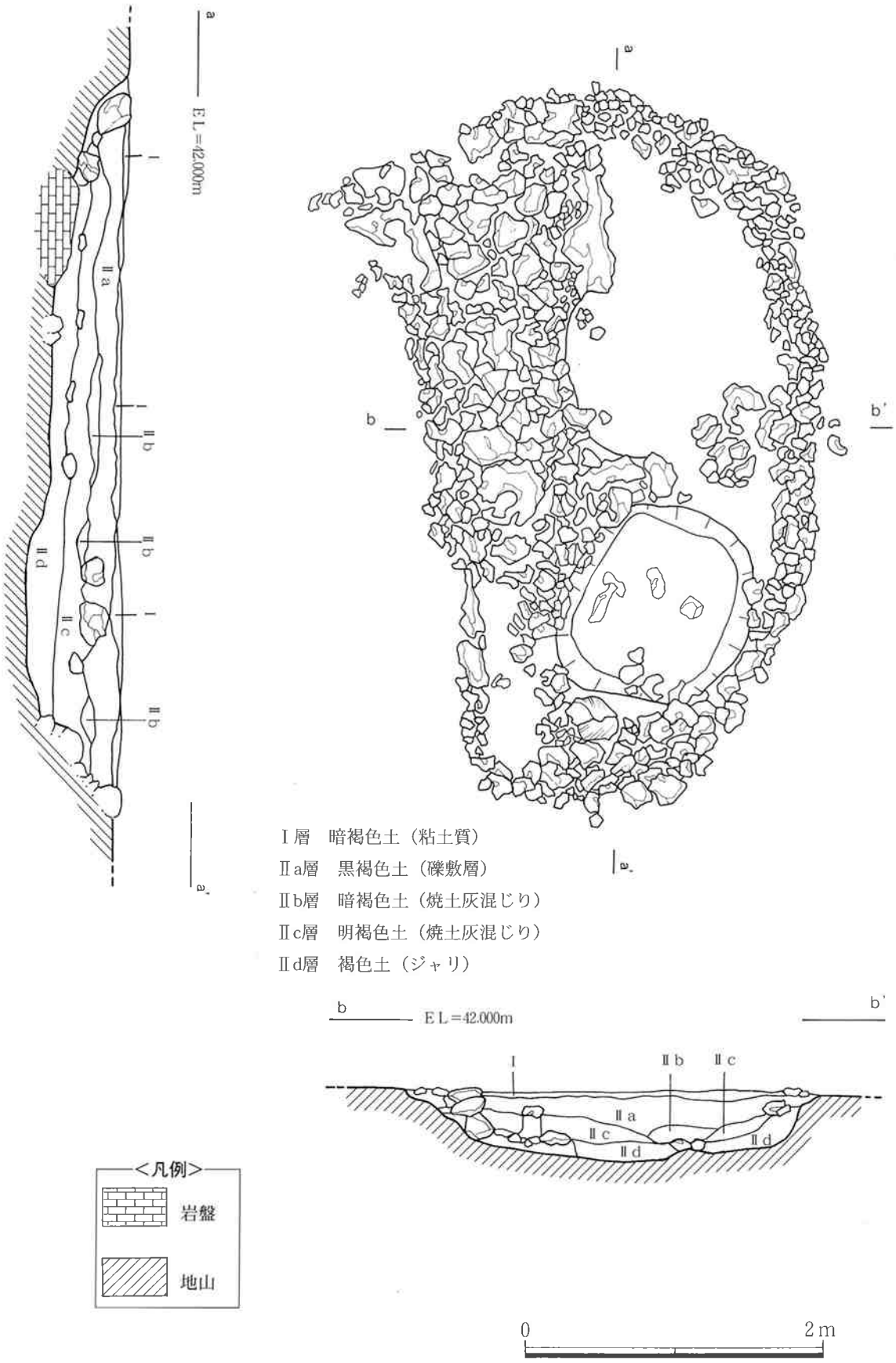
番号	グリット	楔石	法量（cm）		出　土　遺　物
			長さ	深さ	
238	A－10	○	24	22	
239	A－10	○	66	20	土器
240	A－10	○	20	13	
241	A－10	○	22	12	
242	B－10	○	22	32	
243	B－10	○	29	28	
244	B－10	○	38	24	
245	B－9	○	34	22	
246	B－10	○	63	36	
247	B－9	○	68	26	
248	B－9	○	60	24	
249	B－9	○	75	26	
250	B－9	○	44	25	
252	A－9	○	42	15	
253	A－9	—	56	29	
254	A－9	○	33	36	
255	A－9	○	35	39	
256	A－9	○	34	8	
257	A－9	○	28	27	
258	A－9	—	26	12	
259	A－9	—	40	12	
260	A－9	—	37	9	
261	A－9	—	22	17	
262	A－9	○	22	16	
263	A－9	○	33	21	
264	A－9	—	34	24	
265	A－9	—	34	18	
266	A－9	○	34	14	
267	A－9	—	43	14	
268	A－9	—	28	11	
269	A－10	—	40	16	
272	A－10	—	24	9	
273	A－10	○	27	12	
274	A－10	—	27	12	
275	A－10	—	34	24	
276	B－10	○	50	32	
277	B－10	—	30	12	
278	B－10	○	72	24	
279	B－10	○	37	22	
280	B－10	—	28	12	
281	B－9	○	61	22	
282	B－9	—	40	30	
283	B－9	○	30	20	
287	A－9	—	35	16	
289	A－10	—	38	8	
290	A－9	○	29	37	
291	A－9	○	72	28	
292	A－9	○	56	28	
293	A－9	○	51	12	
295	A－9	○	42	31	
297	A－9	—	16	9	
298	A－9	—	30	28	
299	A－9	—	21	11	
300	A－9	—	26	8	
302	B－9	—	32	13	
303	B－9	○	58	29	
304	A－9	○	54	30	
305	A－9	—	54	36	
306	A－9	○	59	24	


a
A－9
EL＝43.000m
A－10
a'
Ⅰ
Ⅱ
Ⅱ
Ⅰ
Ⅰ層　暗灰褐色土
Ⅱ層　混赤粒晴灰褐色土
Ⅲ層　明赤褐色土
b
10ライン
EL＝43.000m
b'
Ⅰ
Ⅱ
c
EL＝43.000m
B－10
c'
Ⅰ
Ⅱ
Ⅱ
Ⅲ
0
4m

第5図　A地区　層序



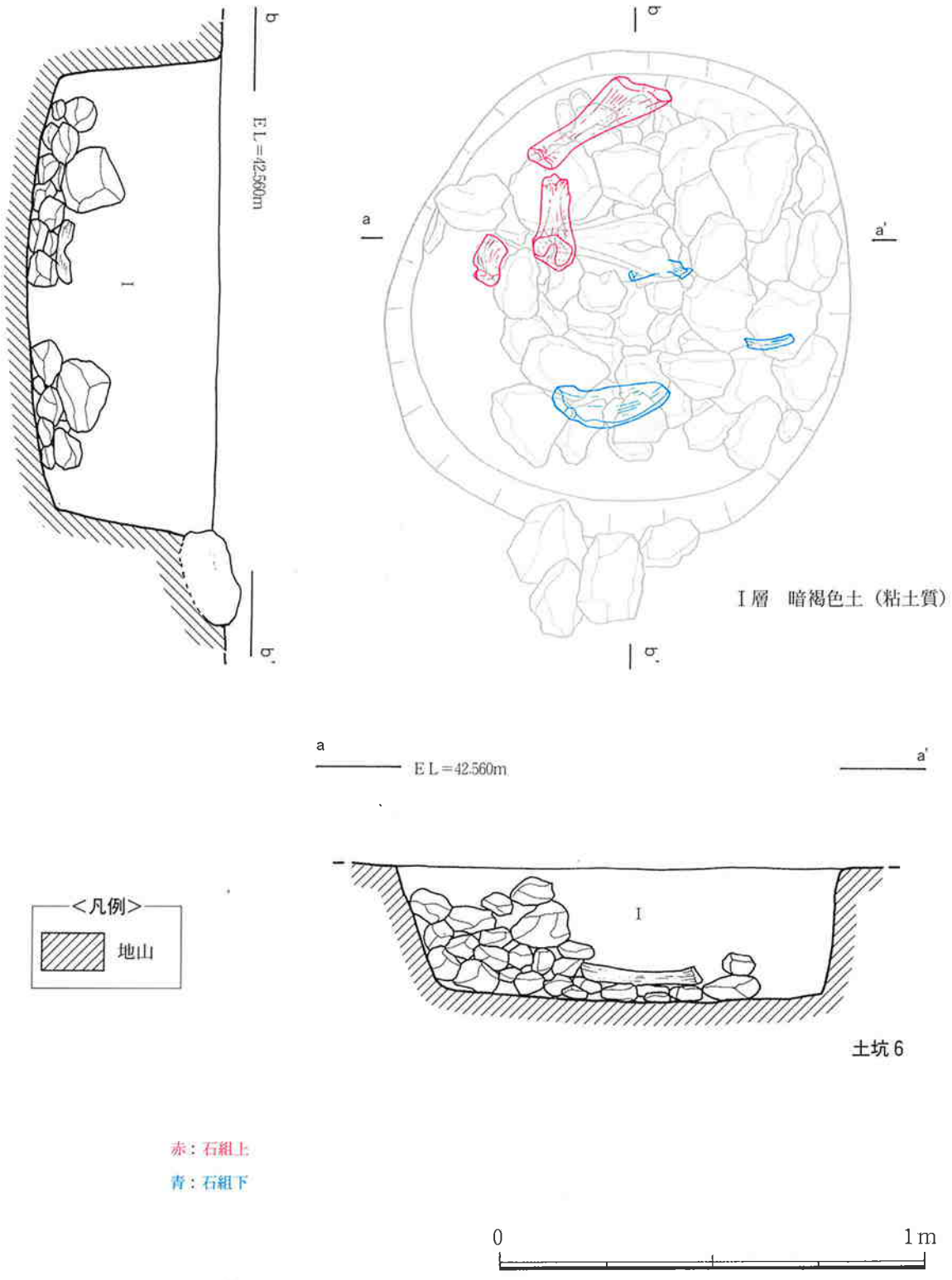
第6図　堀込石組遺構1


a
EL=42.000m
a'
Ⅰ
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱb
Ⅱd
Ⅱc
Ⅰ
Ⅱb
b
b'
a
a'
Ⅰ層　暗褐色土（粘土質）
Ⅱa層　黒褐色土（礫敷層）
Ⅱb層　暗褐色土（焼土灰混じり）
Ⅱc層　明褐色土（焼土灰混じり）
Ⅱd層　褐色土（ジャリ）
b
EL=42.000m
b'
Ⅰ
Ⅱb
Ⅱc
Ⅱa
Ⅱc
Ⅱd
Ⅱd
<凡例>
岩盤
地山
0
2m

第７図　堀込石組遺構２

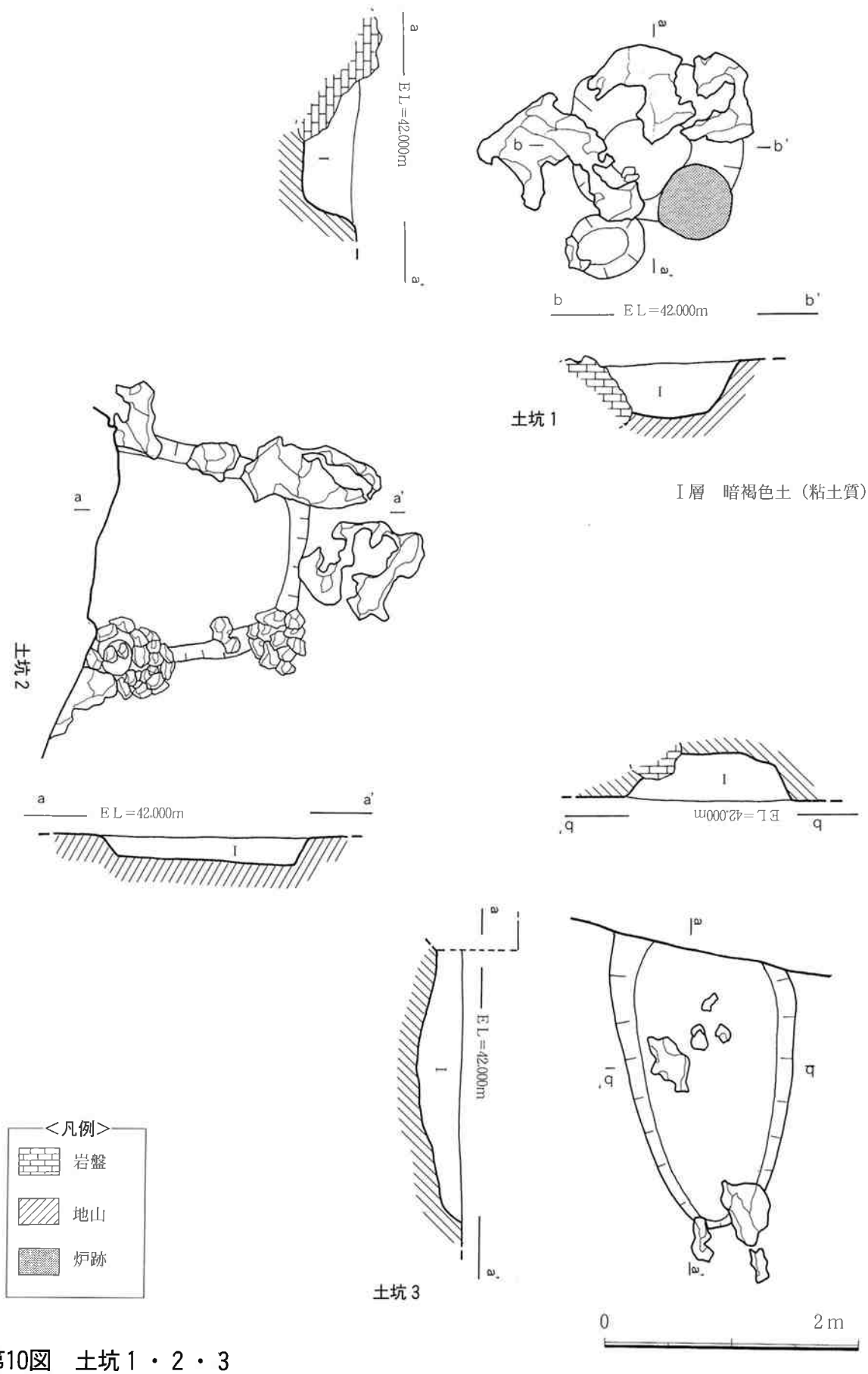
b
E L＝42.300m
b'
a
E L＝42.300m
a'
d
d'
c
c'
＜凡例＞
岩盤
地山
石積
d
E L＝42.300m
d'
c
E L＝42.300m
c'
0
2 m

第８図　石敷遺構１

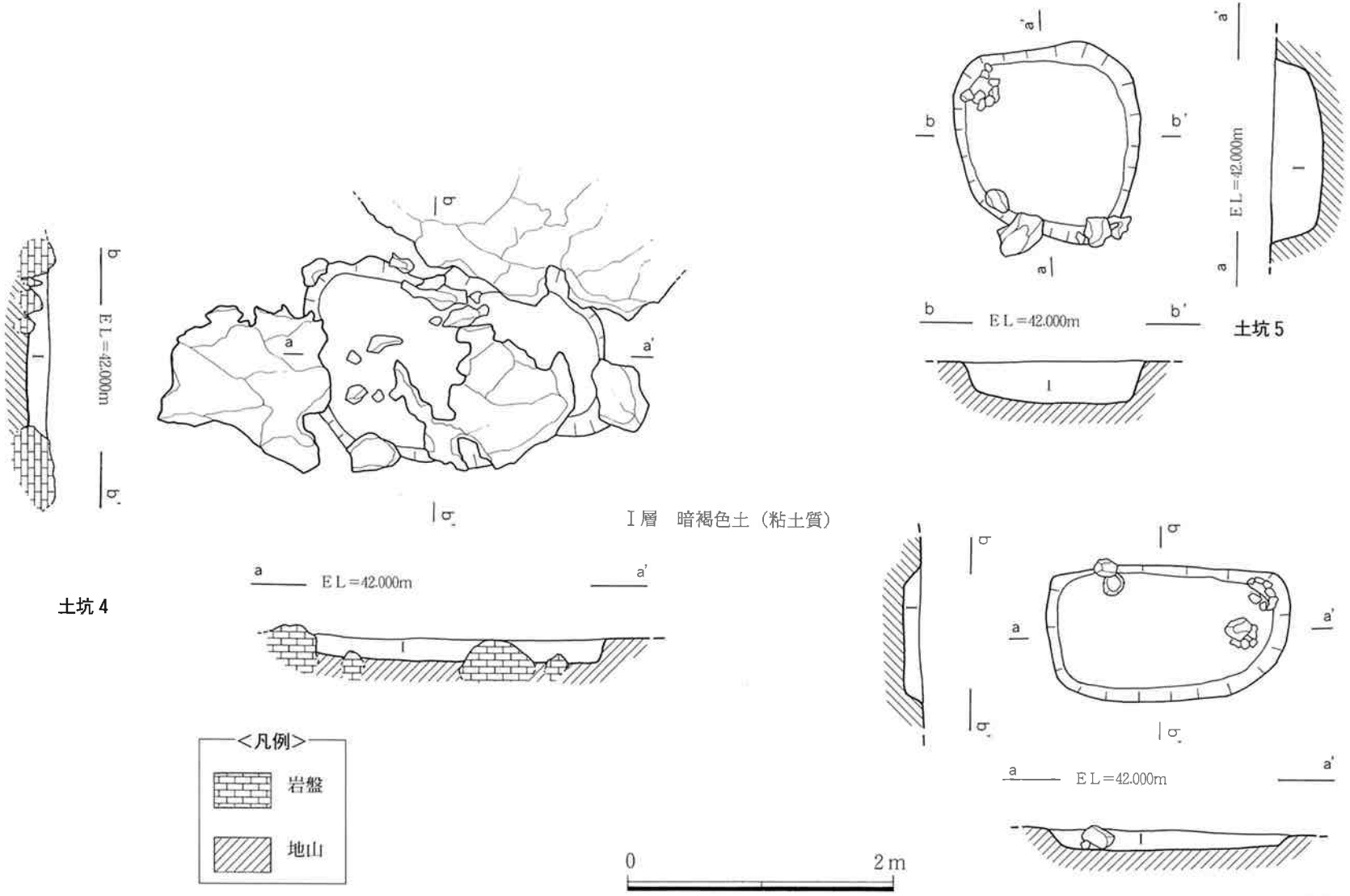


土坑6

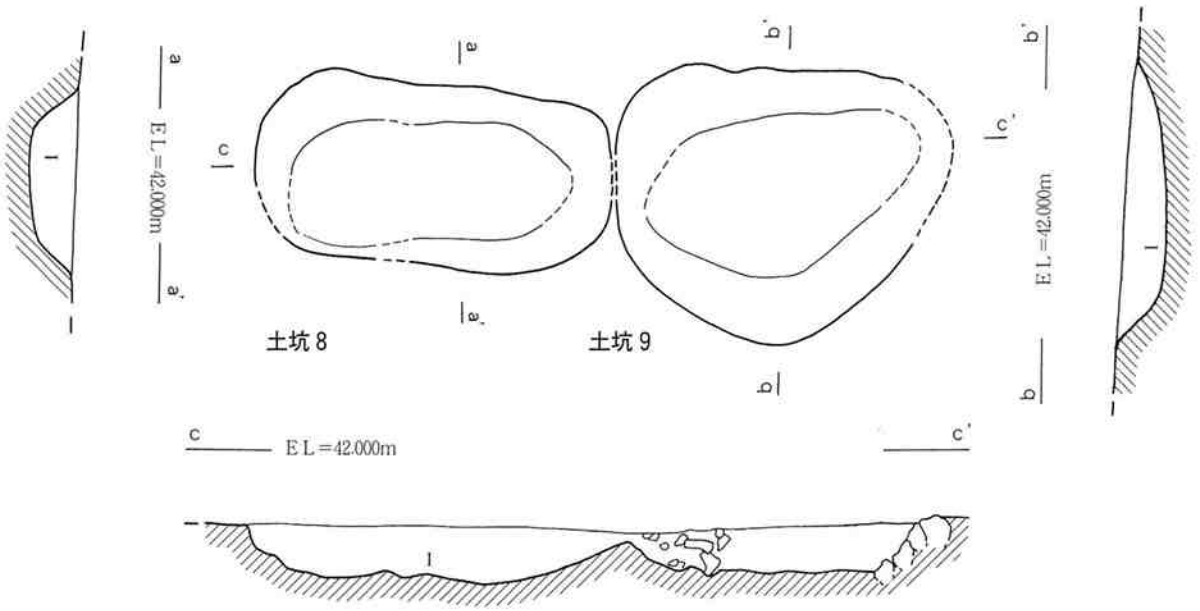
第9図　牛骨埋納遺構（土坑6）



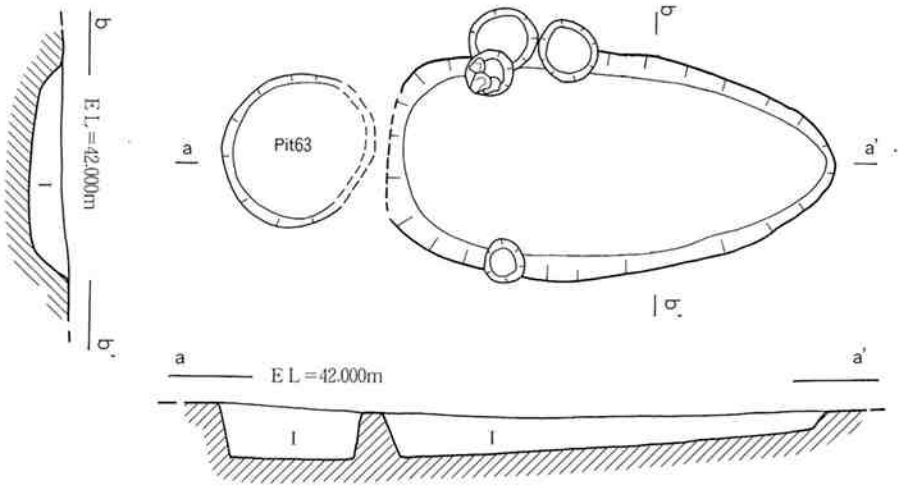
第10図　土坑1・2・3



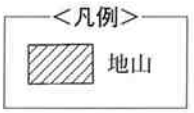
第11図　土坑4・5・7



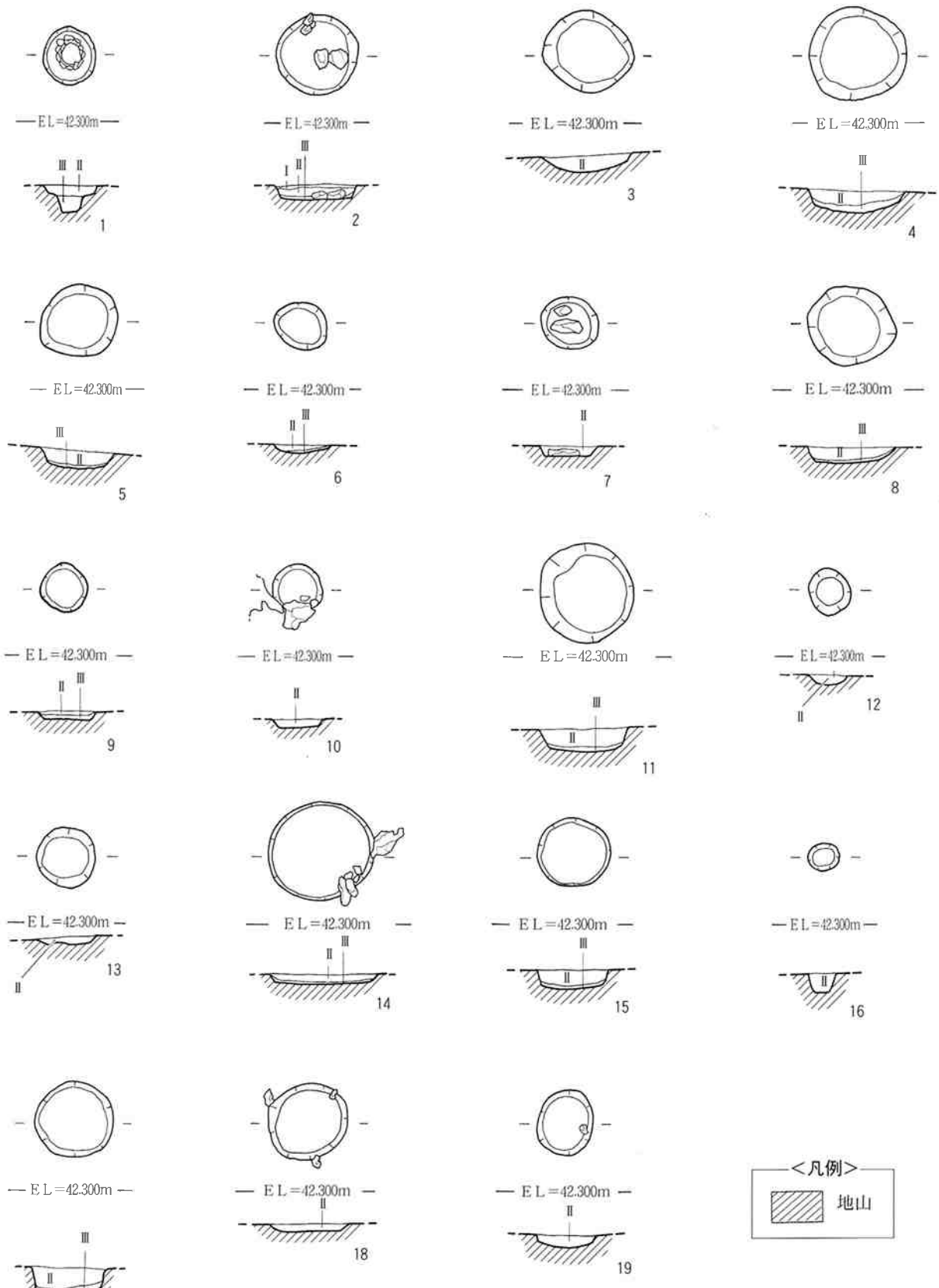
I層　暗褐色土（粘土質）



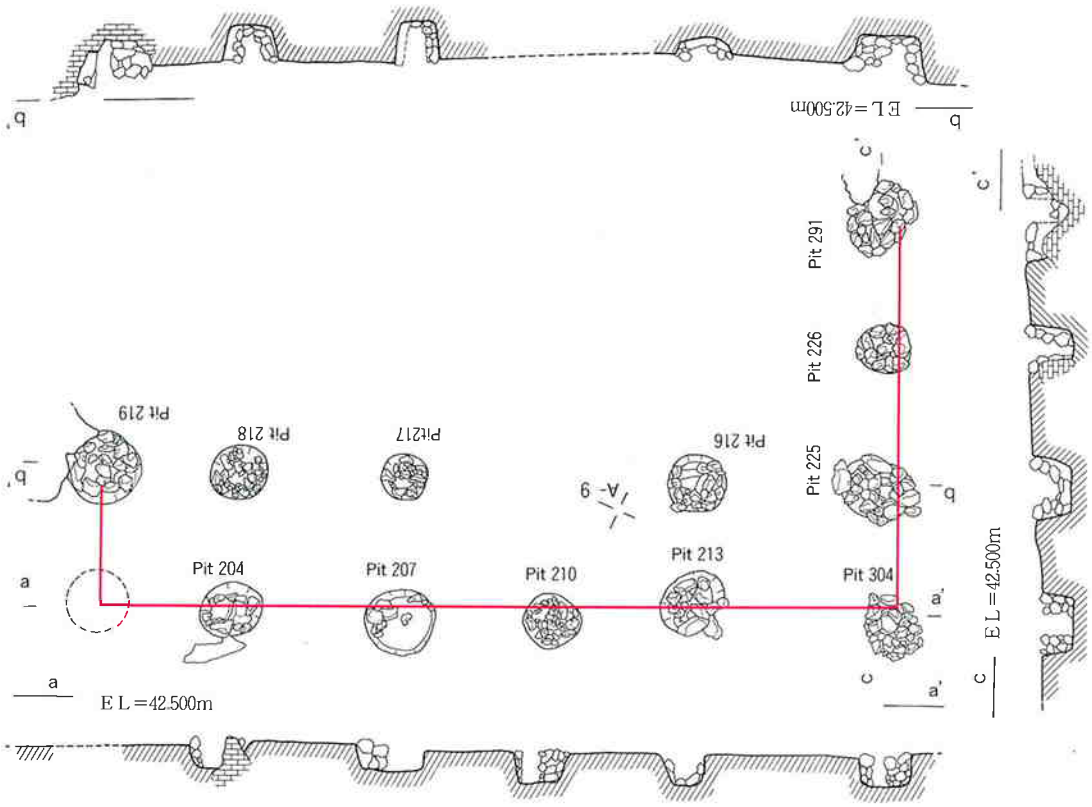
土坑11



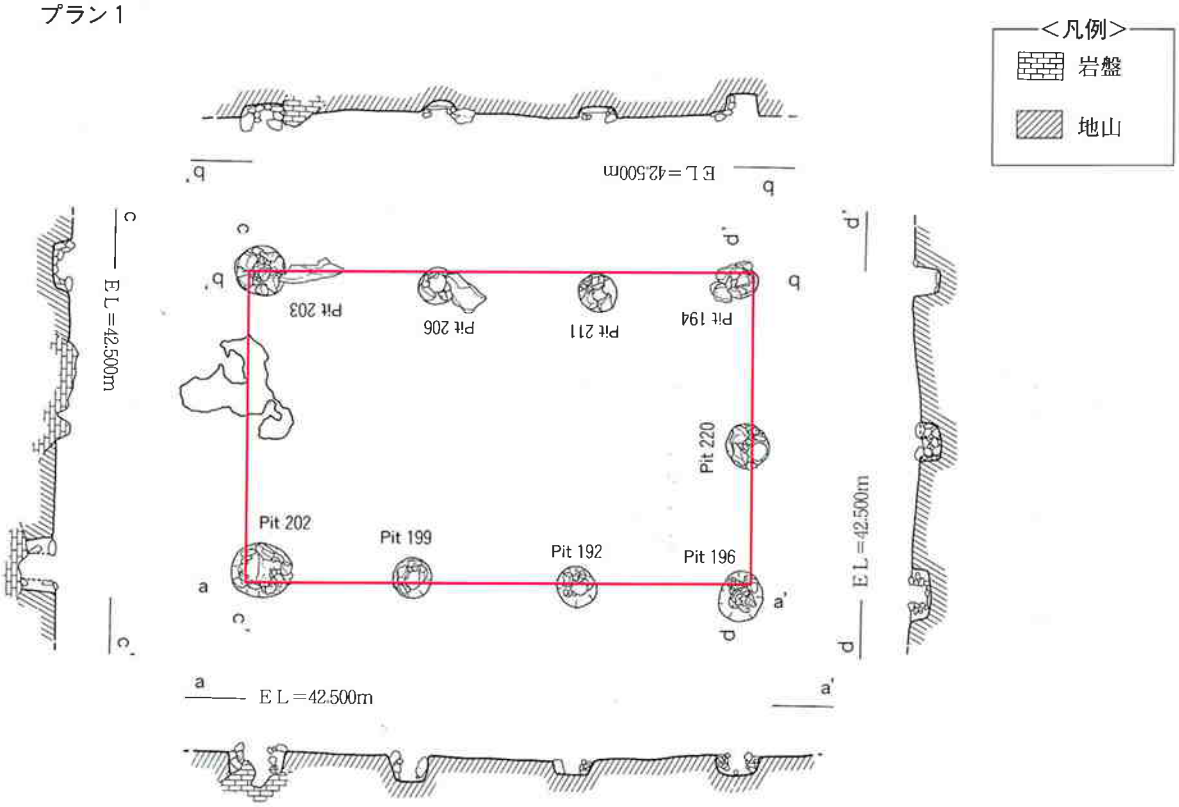
第12図　土坑8・9・11


EL=42.300m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
<凡例>
地山
Ⅰ層　暗褐色土
Ⅱ層　黒褐色土（炭を多量に含む）
Ⅲ層　黒色土（炭）
0
2m

第13図　炉跡



プラン1

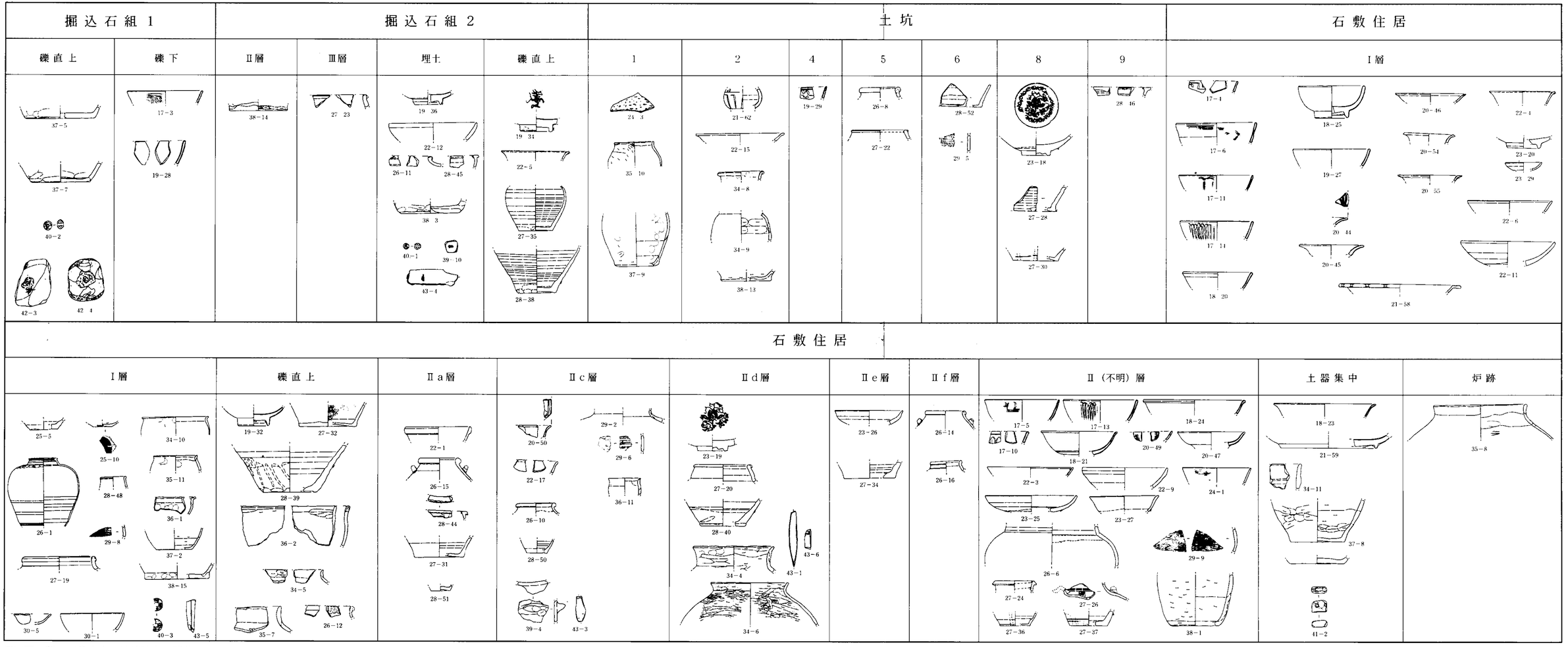


プラン2

0　2m

第14図　住居跡プラン1・2

第15図　B地区　平面図・石敷住居（石敷遺構２）



第16図　新里元島上方台地遺跡主要遺物

第３節　遺物

新里元島上方台地遺跡から出土した遺物は14～16世紀を主体とする。近世の遺物も含まれているが、すべて表土からの出土である。種類は、青磁、白磁、染付、中国産陶器、中国産褐釉陶器、タイ産褐釉陶器、類須恵器、本土産磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器、土製品、玉、古銭、石器、石製品、骨製品、貝類遺存体、脊椎動物遺存体などがある。量的には土器が最も多く出土し、褐釉陶器、青磁がそれに続く。

本遺跡は耕作による攪乱を受けており、遺物は小破片が多く、全形をうかがえるものは少ない。周辺の岩盤等から表採された遺物のほうが、破片が大きい特徴がある。表採遺物であってもその遺跡の様相を知るのに差し障りはないと考えられることから、表採遺物も含め報告する。

A　青磁

青磁は碗・小碗・皿・鉢・盤・杯・小杯・壺・水注・香炉等が出土した。総出土数は1,309点あり、出土数が最も多いものは碗であり、皿・盤・杯と続く。出土地としてはA地区及び石敷住居からが多い。年代は古いもので12世紀～13世紀であり、大部分は14世紀後半～15世紀中葉に位置する。産地では龍泉窯系が多いが、同安窯系の資料も得られている。以下に分類の概要を記述し、個々の詳細は観察表に記す。

1. 碗

碗は主に外面の文様及び口縁形態により、雷文帯碗・蓮弁文碗・外反口縁碗・直口口縁碗に分類した。その中でもさらに分類可能なものは、細分類を行った。

Ⅰ類:外面口縁に雷文帯を廻らすもので、その下にラマ式連弁文を描くものもある（第17図１～９）。

Ⅱ類：外面同部に蓮弁文を描くもので、蓮弁の形態により細分類した。

ａ　蓮弁が大きなもので、稜をもつものもある（第17図10～12、第18図17）。

ｂ　蓮弁が密である細蓮弁を施すもの（第17図13・14、第18図15・16・18）。

Ⅲ類:無文で口縁部が外反するもの。口縁部を玉縁状に肥厚させ、外反させているものもある。（第18図19～25）

Ⅳ類：直口口縁碗で文様の有無により細分類した。

ａ　無文の直口口縁碗。比較的器肉は厚く作られている（第18図26、第19図27・28）。

ｂ　直口口縁碗であるが、文様を施すもの（第19図29・30）

底部：底部は文様等に特徴のあるものを図示した（第19図31～39）。

2. 皿

皿は口縁形態、底部形態及び文様よりⅠ類からⅦ類に分類した。

Ⅰ類：見込に櫛描文を施すもの（第20図40）。

Ⅱ類：口縁端部を外に折る口折皿。外面胴部に蓮弁文を施す（第20図41・42・55）。

Ⅲ類:口縁端部が稜花状を呈する。文様は圏線を施すもの（第20図43）とラマ式連弁文を施すもの（第20図44）がある。

Ⅳ類：口縁部が外反し、無文であるものをここで扱った（第20図45～47、54）。

Ⅴ類：直口口縁皿。内湾する胴部から直口する口縁へと至る。第20図49は内外面に蓮弁文を描く。

Ⅵ類：角皿。口縁部が外反する八角皿と思われるものが１点得られている（第20図50）。杯の可能性もある。

Ⅶ類：碁笥底皿。高台をもたず、底部外面が窪む形態のもので、胴部は直線的に立ちがる（第20図51～53）。

3. 盤

盤は鍔縁盤が得られ、鍔の形態によりⅠ類及びⅡ類に分類した。

Ⅰ類：口縁部を外に一旦折って鍔を作り、それから鍔の端部を摘み上げるもの（第21図56）。

Ⅱ類：口縁部を外に折って、平坦な鍔を作るもの（第21図57・58）。

底部：底部は１点を図示し、観察表に記した（第21図59）。

4. 杯

杯は角杯を１点図示した。胴部～底部の資料であり、腰部は折れ、胴部は外反するように立ちあがる（第21図60）。

5. 壺

壺は小型の壺・酒会壺が得られている。小型の壺は口縁部～胴部の資料であり、頸部の屈曲は弱く、口縁部を露胎とするものである（第21図61）。酒会壺は底部片が１点得られている（第21図63）。

6. 水注

胴部の資料であり、蓮弁文が描かれている（第21図62）。

7. 香炉

香炉は口縁部２点・底部２点の４点得られ、そのうち口縁部１点・底部２点を図示した。口縁部資料は口縁上位を外側に折ったものである（第21図64）。底部は脚の部分で、逆台形状のもの（第21図65）と千鳥足のもの（第21図66）がある。

＜参考文献＞

金城亀信・上原静・城間肇　他『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）―』沖縄県教育委員会　1998

島袋洋・島袋春美・當銘清乃　他『天界寺跡（Ⅰ）―首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立　埋蔵文化財センター　2001

鶴元寿充・當銘清乃・當銘由嗣　他『伊佐前原第一遺跡―宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う緊急発掘調　査報告書（Ⅲ）―』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001

山本信夫『太宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』太宰府市教育委員会　2000

第２表ａ　青磁観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素　地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第17図 図版６	1	碗	Ⅰ	口	3.4 ― ―	雷文帯碗。外面口縁に雷文帯を廻らし、その下にラマ式連弁文を描く。14紀後半～15紀前半。龍泉窯系。	灰白色	黄緑灰色釉を施す。	Pit181 埋土
	2			口	12.4 ― ―	雷文帯碗。外面口縁に雷文帯を描く。15世紀。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	表採
	3			口	14.2 ― ―	雷文帯碗。外面口縁に雷文帯を廻らす。14紀後半～15紀中葉。龍泉窯系。	淡黄色で黒色粒子を含む。	釉色は被熱によりにぶい黄色を呈する。	掘込石組１ 礫下

第２表ｂ　青磁観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素　地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第17図 図版６	4	碗	Ⅰ	口	— — —	雷文帯碗。外面口縁に簡略化された雷文帯を廻らす。14紀後半～15紀前半。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居 Ⅰ層
	5			口	14.0 — —	雷文帯碗。外面口縁に雷文帯を廻らす。14紀後半～15紀。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子及び淡黄色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	6			口	15.2 — —	雷文帯碗。外面口縁に型押の若干不鮮明な雷文帯を廻らす。15世紀。	淡黄色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。細かい貫入が入る。	石敷住居 Ⅰ層
	7			口	16.2 — —	雷文帯碗。外面口縁に型押の雷文帯を廻らす。15世紀。龍泉窯系。	淡黄色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。細かい貫入が入る。	B-４ Ⅰ層
	8			口	— — —	雷文帯碗。口縁部が若干厚くなる。外面口縁に型押の雷文帯を廻らし、その下に圏線を施す。15世紀。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居 Ⅰ層
	9			口	15.8 — —	雷文帯碗。口縁部が若干厚くなる。外面口縁に型押の雷文帯を廻らす。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	表採
	10		Ⅱ－a	口	— — —	蓮弁文碗。口縁に圏線を廻らし、その下に蓮弁文を描く。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	淡黄色で黒色粒子を含む。	緑灰色釉を施す。粗い貫入が入る。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	11			口	13.8 — —	蓮弁文碗。外面に２本１組の沈線により蓮弁文を描く。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	明黄緑灰色釉を施す。細かい貫入が入る。	石敷住居 Ⅰ層
	12			口	— — —	蓮弁文碗。外面に沈線で蓮弁文を描く。15世紀。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰緑釉を施す。	表採
	13		Ⅱ－b	口	14.0 — —	細蓮弁文碗。外面に簡略化され、二蓮弁につき一弁先の蓮弁文を施す。15世紀中葉～16世紀初期。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	14			口	13.8 — —	細蓮弁文碗。外面に簡略化された蓮弁文を描く。15世紀中葉～16世紀初期。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居 Ⅰ層
第18図 図版６	15			口	13.8 — —	細蓮弁文碗。内面口縁上位が僅かに内湾する。外面に簡略化された蓮弁文を描く。15世紀中葉～16世紀前半。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	灰黄緑色釉を施す。	石敷住居 Ⅰ層
	16			口	12.8 — —	細蓮弁文碗。外面に蓮弁文を施す。15世紀～16世紀初期。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。粗い貫入が入る。	表採
	17		Ⅱ－a	底	— — 3.4	蓮弁文碗。畳付外面を面取りしている。胴部下位まで幅の広い蓮弁文を描いている。14世紀後半～15世紀初期。	淡黄色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を畳付以外に施釉する。粗い貫入が入る。	表採
	18		Ⅱ－b	底	— — 4.5	細蓮弁文碗。高台から比較的急に立ちあがる。高台付近まで蓮弁文が描かれる。15世紀。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。外底面は蛇の目釉剥ぎ。高台に粗い貫入が入る。	表採
	19		Ⅲ	口	12.6 — —	外反口縁碗。口縁部が若干肥厚する。内面に花文？を描く。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	20			口	13.4 — —	外反口縁碗。口縁上位で僅かに外反する。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施す。粗い貫入が入る。	石敷住居 Ⅰ層
	21			口	14.6 — —	外反口縁碗。内湾する胴部から緩やかに外反する口縁へ至る。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色で黒色粒子を含む。	灰黄緑色釉を施す。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	22			口	15.2 — —	外反口縁碗。胴部から緩やかに外反する口縁へと至る。14世紀後半～15世紀前半。	灰色で黒色粒子を含む。	明緑灰色を施す。	石敷住居 Ⅰ層
	23			口	19.4 — —	外反口縁碗。口縁部が緩やかに外反する。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色	明黄緑灰色釉を施す。細かい貫入が入る。	石敷住居 土器集中
	24			口	19.4 — —	外反口縁碗。口縁部を玉縁状に肥厚させている。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色	被熱により外面の釉は剥げ、内面の釉は明緑色を呈する。	石敷住居 Ⅱ(不明)層

第２表ｃ　青磁観察一覧

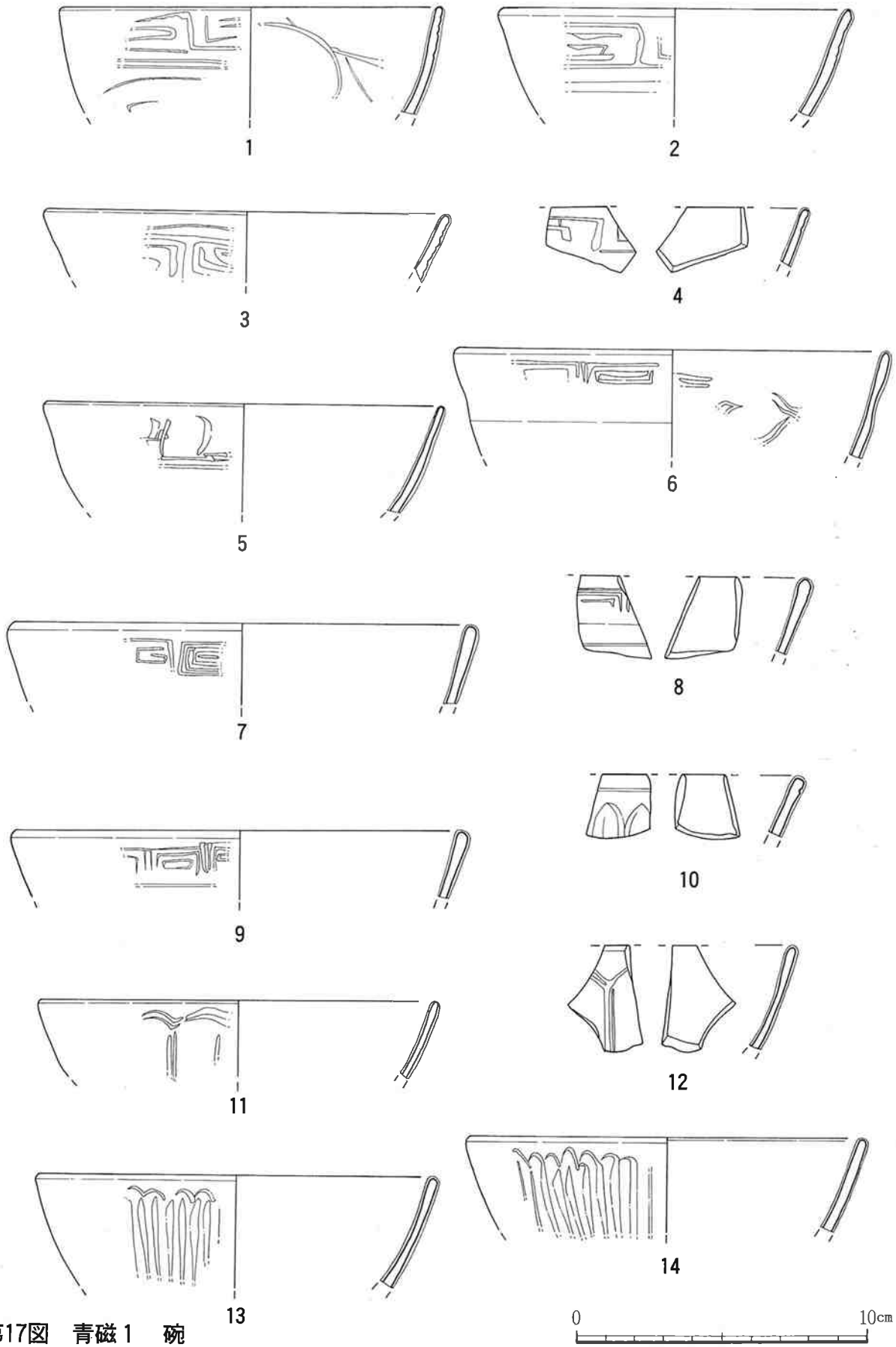
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素　地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第18図 図版６	25	腕	Ⅲ	口	13.8 — —	外反口縁碗。口縁部を玉縁状に肥厚させている。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	明黄緑灰色釉を施す。粗い貫入が入る。	石敷住居Ⅰ層
	26		Ⅳ－a	口～底	12.8 6.0 6.0	直口口縁碗。若干盛り上がる見込をもち、高台から丸味を持って立ちあがる。15世紀～16世紀前半。	灰色	明緑灰色を施す。被熱している。外底は露胎。粗い貫入が入る。	表採
第19図 図版７	27			口	14.4 — —	直口口縁碗。文様は無い。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居Ⅰ層
	28			口	— — —	直口口縁碗。文様は無い。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を厚く施す。	掘込石組１礫下
	29		Ⅳ－b	口	— — —	直口口縁碗。口縁に圏線を廻らし、胴部に花文？を描く。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	土坑４埋土
	30			口	— — —	直口口縁碗。口縁に圏線を廻らす。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。粗い貫入が入る。	石敷住居Ⅰ層
	31	腕	－	底	— — 5.2	見込の釉を剥いで牡丹文を描く。14世紀後半～15世紀中葉。	灰白色で黒色粒子及び淡黄色粒子を含む	黄緑灰色釉を見込及び外底以外に施す。粗い貫入が入る。	B－10 Ⅰ層
	32			底	— — 5.6	内面に花文？を描く。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子及び白色粒子を含む。	灰黄緑色釉を施す。外底は蛇の目釉剥ぎ。細かい貫入が入る。	石敷住居礫直上
	33			底	— — 5.6	高台外面は面取りされている。見込に緑？を描く。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色で黒色粒子及び白色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。外底面は露胎。	表採
	34			底	— — 5.9	高台は面取りされている。見込に蓮？を描く。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子及び白色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。畳付から外底は露胎。粗い貫入が入る。	掘込石組２礫直上
	35			底	— — 4.8	見込に銘を描く。15世紀～16世紀前半。	黄灰色で黒色粒子及び白色粒子を含む。	黄緑灰色釉を高台内面まで施す。細かい貫入あり。	表採
	36			底	— — 5.1	高台外面中位に明確な稜を示す。見込に菊花文を施す？。14世紀後半～15世紀中葉。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を高台外面まで施す。	掘込石組２埋土
	37			底	— — 5.2	高台の１ヶ所に抉りがある。外底に見込に花文を施す。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を全面に施釉する。	Pit229 埋土
	38			底	— — 4.4	見込に福字文及び波状文で円を描く。15世紀～16世紀前半。	黄灰色で黒色粒子及び白色粒子を含む。	黄緑灰色釉を畳付まで施釉し、外底を露胎とする。	表採
	39			底	— — 6.6	器高が浅い碗と思われる。見込を広くとり、立ちあがりを緩やかにする。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色で黒色粒子を含む。	透明感のある黄緑灰色釉を高台外面まで施釉。粗い貫入が入る。	A-21-13 Ⅰ層
第20図 図版７	40	Ⅲ	Ⅰ	底	— — 5.0	外底面は僅かに窪み、胴部中位で屈曲する。見込に櫛により点文を描く。12世紀～13世紀。	灰色で黒色粒子を含む。	透明感のある黄緑灰色釉を施釉する。外底は釉を掻きとる。	A-10 Ⅰ層
	41		Ⅱ	口	12.2 — —	口折皿。直線的な胴部から口縁が折れて鍔をもつ。14世紀後半～15世紀前半。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	A- 9 Ⅰ層
	42			口	— — —	口折皿。口縁が折れて、先が若干下がる鍔をもつ。14世紀後半～15世紀前半。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	A- 9 Ⅰ層
	43		Ⅲ	口	— — —	稜花皿。内面に圏線を廻らす。14世紀後半～15世紀。	淡黄色で黒色粒子を含む。	暗灰黄色釉を施す。細かい貫入あり。	A-20 Ⅱ層
	44			口	— — —	稜花皿。内面にラマ式連弁文を描く。15世紀頃。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居Ⅰ層
	45		Ⅳ	口	12.0 — —	外反口縁皿。厚めに作られている。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	透明感のある明緑灰色釉を施す。釉中に白色粒子を含む。粗い貫入が入る。	石敷住居Ⅰ層

第２表ｄ　青磁観察一覧

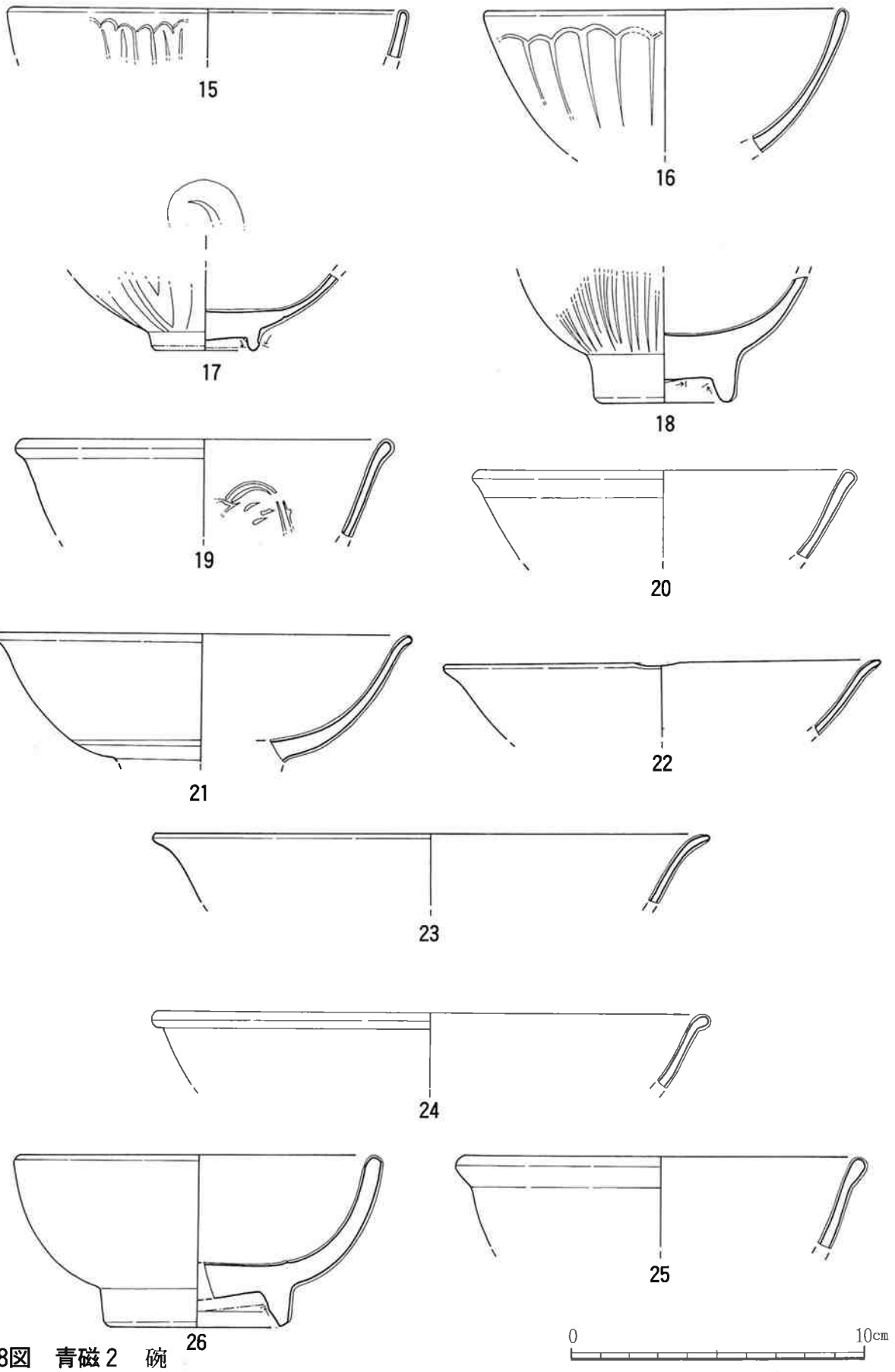
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素　地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第20図 図版７	46	Ⅲ	Ⅳ	口	13.4 — —	外反口縁皿。口縁が緩やかに外反する。14紀世～15世紀前半。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子及び淡黄色粒子を含む。	明黄緑灰色釉を施す。粗い貫入が入る。	石敷住居Ⅰ層
	47			口	12.8 — —	外反口縁皿。口縁が僅かに外反する。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を厚く施す。粗い貫入が入る。	石敷住居Ⅱ（不明）層
	48		Ⅴ	口～底	9.0 2.7 5.2	直口口縁皿。内湾する胴部から直口する口縁へ至る。15世紀～16世紀前半。	灰色で黒色粒子及び淡黄色粒子を含む。	釉のガラス質は被熱により失っている。	A-14 Ⅰ層
	49			口	— — —	直口口縁碗。内外面に蓮弁文を描く。14世紀後半～15世紀前半。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	石敷住居Ⅱ（不明）層
	50		Ⅵ	口	— — —	角皿。胴部から緩やかに外反する。内面口縁に圏線あり。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。杯の可能性もあり。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施す。粗い貫入が入る。	石敷住居Ⅱｃ層
	51		Ⅶ	底	— — 4.0	碁笥底。直線的に立ちあがる。14世紀後半～15世紀。	灰色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を外面胴部下位まで施釉する。細かい貫入が入る。	B-14 Ⅰ層
	52			底	— — 4.0	碁笥底。直線的に立ちあがる。見込は僅かに窪む。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	淡黄色で黒色粒子を含む。	灰黄緑色釉を畳付際まで施釉。細かい貫入が入る。	A-10 Ⅰ層
	53			底	— — 4.0	碁笥底。外底を浅く作り、胴部は直線的に立ちあがる。胴部下位に圏線を廻らす。14世紀後半～15世紀中葉。	淡黄色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を畳付際まで施釉する。粗い貫入が入る。	A-８ Ⅰ層
	54		Ⅳ	口	9.8 — —	外反口縁皿。口縁が強く外反する。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子及び淡黄色粒子を含む。	透明感のある黄緑灰色釉を施す。粗い貫入が入る。	石敷住居Ⅰ層
	55		Ⅱ	口	12.2 — —	口折皿。口縁部が折れ鍔をもつ。鍔の内面は僅かに窪む。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色で淡黄色粒子を含む。	被熱し、釉が明黄緑灰色となっている。粗い貫入がある。	石敷住居Ⅰ層
第21図 図版８	56	盤	Ⅰ	口	23.2 — —	鍔縁盤。鍔端を摘み上げる。14世紀後半～15世紀中葉。龍泉窯系。	灰色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施す。細かい貫入が入る。	表採
	57		Ⅱ	口	27.6 — —	鍔縁盤。鍔は平坦で、鍔縁は稜花状に成形する。内面に蓮弁文を描く。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	暗黄緑色釉を施す。粗い貫入あり。	表採
	58			口	23.2 — —	鍔縁盤。鍔内面は窪み、鍔縁は稜花状に成形する。内面に蓮弁文を描く。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。	灰白色釉で黒色粒子を含む。	灰黄緑色釉を施す。粗い貫入が入る。	石敷住居Ⅰ層
	59		—	底	— — 18.0	盤底部。高台は釉により丸味を帯びる。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。	淡黄色で黒色粒子を含む。	黄褐色釉を外底途中まで厚く施す。細かい貫入が入る。	石敷住居 土器集中
	60	杯	—	底	— — 3.8	角杯。胴部下位で折れ、僅かに外反しながら立ちあがる。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色で茶色粒子を含む。	黄色灰色釉を高台外面まで施す。	A-９ Ⅰ層
	61	壺	—	口	8.8 — —	頸部は短く屈曲は弱い。口唇は面取される。14世紀後半～15世紀中葉。	灰色	被熱し、釉が灰黄緑色となり、気泡もある。	表採
	62	水注	—	胴	— — —	水注胴部。蓮弁文を施す。14世紀後半～15世紀前半。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄色灰色釉を施釉する。	土坑２ 埋土
	63	壺	—	底	— — —	酒会壺の底部。畳付は面取りしている。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。	灰白色で茶褐色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施釉する。畳付は釉を掻き取っている。粗い貫入が入る。	A-10 Ⅰ層
	64	香炉	—	口	13.2 — —	口縁部上位を折り、端部を水平状に作る。14世紀～15世紀前半。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子を含む。	黄緑灰色釉を施す。	表採
	65			底	— — —	香炉の脚。脚の断面は逆台形状を呈する。14世紀後半～15世紀。	灰色で黒色粒子及び淡黄色粒子を含む。	灰黄緑色釉を施釉する。内面見込は露胎。細かい貫入が入る。	A-10 Ⅰ層
	66			底	— — —	千鳥足をもつ香炉である。14世紀後半～15世紀前半。龍泉窯系。	灰白色で黒色粒子及び淡黄色粒子を含む。	灰黄緑色釉を外面に施釉する。	A-９ Ⅰ層

第３表　青磁出土状況

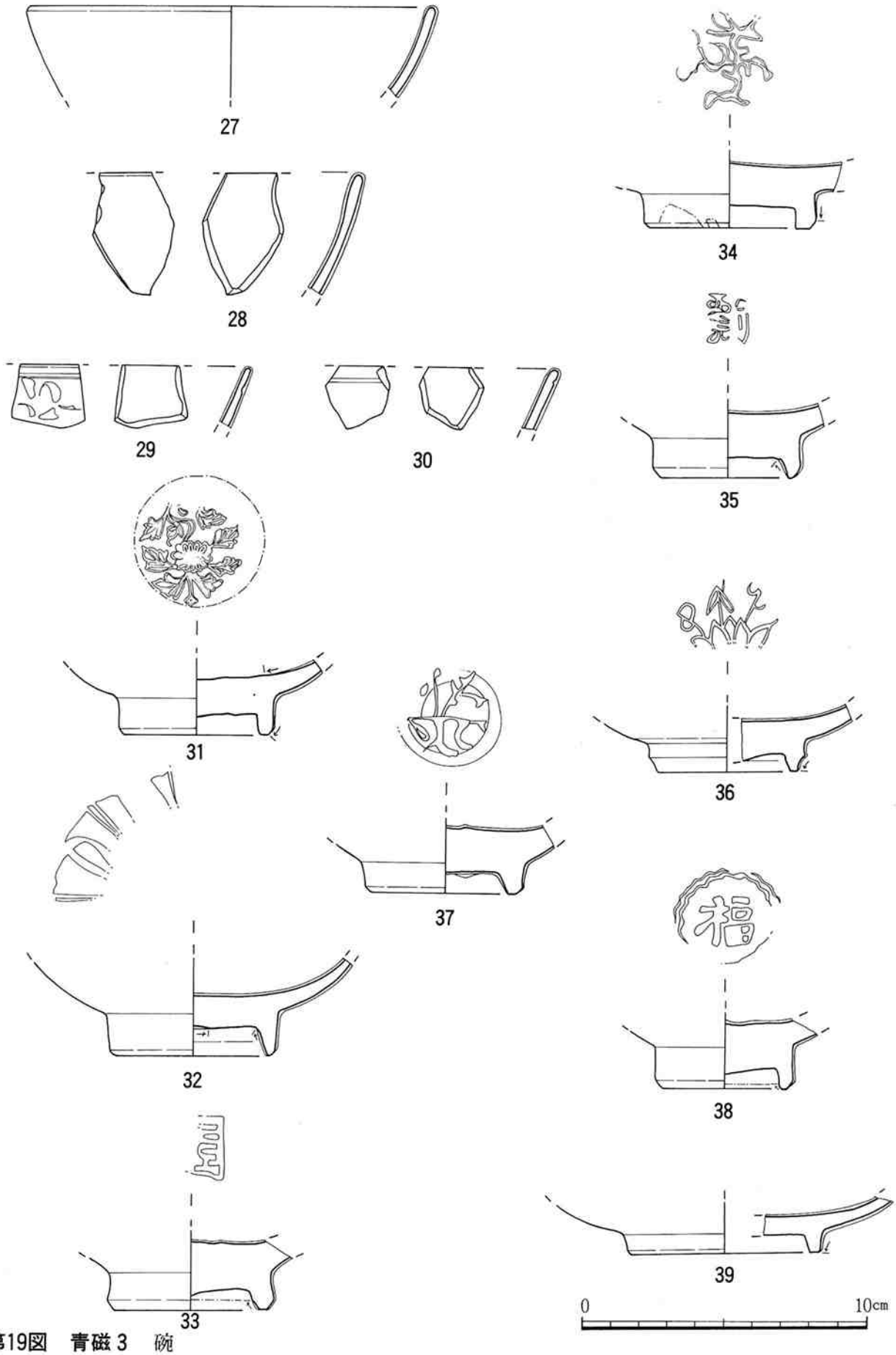
出土地		器種・分類	碗												皿												盤							杯						小杯	袋物	壺		水注	香炉		不明		合計
			I		II			III		IV		不明			I	II		III	IV	V		VI	VII	不明			I		II	III	不明			I		II	不明												
			口	胴	口	胴	底	口	底	口～底	口	口	胴	底	底	口	胴	口	口	口～底	口	口	底	口	胴	底	口	胴	口	口	口	胴	底	胴	底	底	口	胴	底	底	胴	口	底	胴	口	足	胴	底	
A	7	I層												1																																			1
	8	I層			3	4	1	5			2		16	7		1	2	2	1				1		2	1	1		2			1	1			1			2	1							2	4	63
	9	I層	3	1	15	7	1	7			10	2	39	27		2	5	1	3						1	9					1	1	4						2							1	3	9	154
	9・10	I層				2		2			2							1																															7
	10	I層		1	6	2		4			2		18	11	1	1		3	2		1		1		1	3	1		3				1										1			1	4	2	70
	11	I層											3	2					1																													2	8
	12・13	I層									3		1	1					2							1																							8
	13	I層											12																																				12
	14	I層				1					1		2							1						2																							7
	14・15	I層			1								1																																			1	3
	15	I層			2	3		3			4	1	5			1		1	1							1													2									1	25
	20	I層											1																																				1
		II層			1													1																															2
B	9	I層	1		4	2		2			1		11	8				1	1						4	2													1								2		40
	10	I層	2	1	2	3		6				3	15	4				3							1	1						1	1														1	3	47
	14	I層	1		5	1		3			2		9	4				1	1				1			1	1												1								4		35
	20	II層						1																																									1
C	10	I層				1					1		1	4												1													1									1	10
堀込石組1		埋土																																										1					1
		礫直上											2	1																					1														4
		礫下	1		1	1					1		5															1																					10
堀込石組2		II層											1																																				1
		III層											1																																				1
		埋土						1					1	1																																	1		4
		礫直上												2																																			2
土坑	1	埋土	1										2	2																																	1	1	7
	2	埋土				1		1					1	2																																			5
	4	埋土	1								1																																						2
	5	埋土											1																																		1		2
	6	埋土				2																																											2
	7	埋土						1																																									1
	9	埋土				1																																											1
Pit	26	埋土												2																																			2
	69	埋土			1							1																																					2
	154	埋土																	1																														1
	158	埋土	1																																														1
	173	埋土											1																																				1
	181	埋土	1																																														1
	229	埋土												1																																			1
石敷住居		I層	16	1	33	23	2	33			27		43	15		2		7	11		2				2	4	1		2		2	7	2	1			7	1									26	1	271
		礫直上											19	1																																	2		22
		II a層				1		4					1	1																																			7
		II c層			3	1							10	1								1				1	1																				3	2	23
		II d層			1	1		3					4	1												1																					2		13
		II e層						2					1																																			1	4
		II(不明)層	8	2	16	12		6			9	9	19	6					3		2					1	1	1	3				1														7	2	108
		土器集中			1			2					3								1					3							1															3	14
		炉跡											1																																				1
表採			3	4	18	17	10	14	4	1	9	10	50	84				3	3		1			2	3	21	5		1	1		1	12					1	3		1	1			2		7	5	297
不明								1																		1																					1		3
合計			39	10	113	86	14	101	4	1	75	26	300	189	1	7	7	24	30	1	7	1	3	2	14	54	11	2	11	1	3	11	23	1	1	1	7	2	12	1	1	1	1	1	2	2	70	35	1309



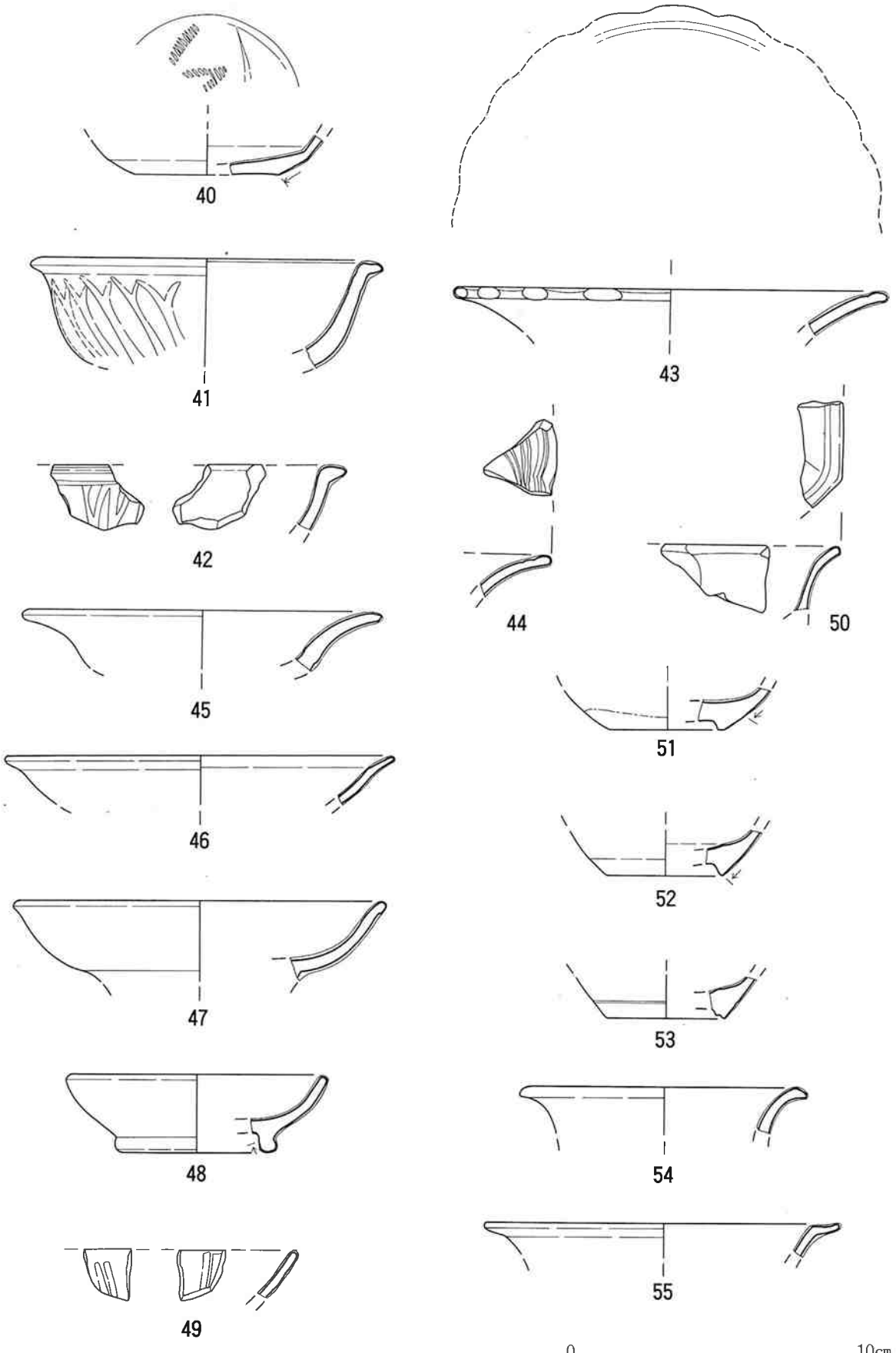
第17図　青磁１　碗



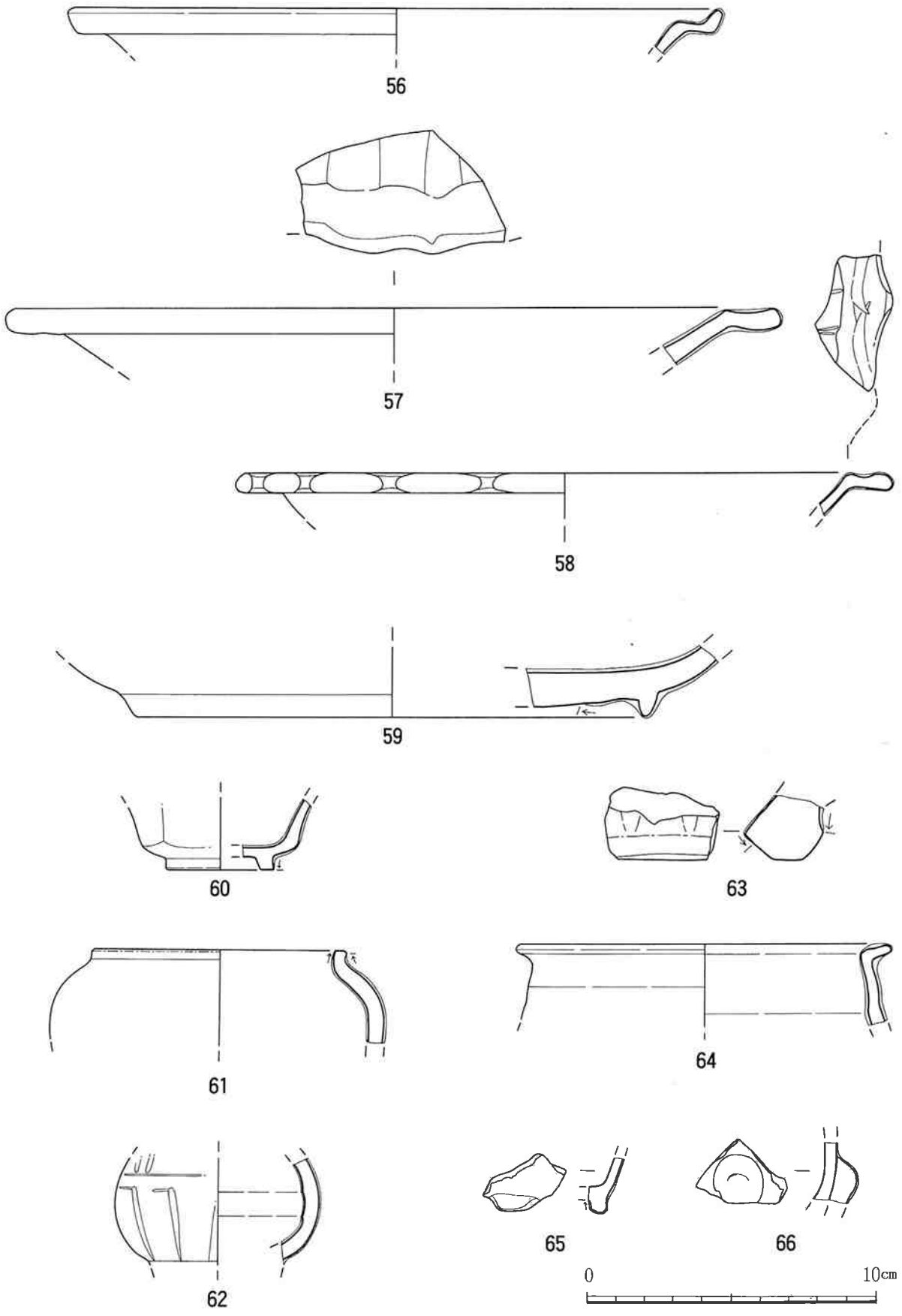
第18図　青磁２　碗



第19図　青磁３　碗



第20図　青磁４　Ⅲ



第21図　青磁５　盤（56～59）、杯（60）、壺（61、63）、水注（62）、香炉（64～66）

B　白磁

白磁は、碗・皿・盤が得られ、量的には碗が最も多く、皿、盤と続く。碗は12世紀～13世紀、13世紀～14世紀のものが主体をなし、皿は13世紀～14世紀、15世紀～16世紀のものが多い。
分類は口縁部形態及び施釉箇所により行い、碗は５類、皿は４類に分類した。以下に各分類を略述し、詳細は観察表に記す。

1. 碗（第22図、第23図18～24）

Ⅰ類：玉縁口縁碗（第22図１・２）

第22図１は口縁部を肥厚させ、玉縁状に成形する。２は口縁部下位に稜を作り、僅かな玉縁を作り出している。

Ⅱ類：直口口縁碗（第22図３・６）

口縁部が直口するもので、口縁部外面を斜めし、口唇を尖らすように作っている。

Ⅲ類：口禿碗（第22図４・５）

口縁部周辺の釉を剥ぎとり、口禿とする。口縁部は外反する。

Ⅳ類：内湾口縁碗（第22図７～13）

口縁部の成形から細分類した。

ａ　胴部は内湾気味で口縁に至る（第22図７）。

ｂ　器肉は厚く胴部は若干内湾し、胴部上位で圏線を廻らす（第22図８）。

ｃ　胴部から口縁にかけて内湾し、口縁外面で丸味をもたせ、口唇を尖らす（第22図９～13）。

第４表　白磁出土状況

出土地＼器種・分類			碗				皿			盤	合計
			口～底	口	胴	底	口	胴	底	口	
A	8	Ⅰ層		1		1	3	1		1	7
	9	Ⅰ層		7	1			1	2		11
	10	Ⅰ層		1		3	1	2	1		8
	11	Ⅰ層					1				1
	14	Ⅰ層					1				1
	14•15	Ⅰ層						1			1
	15	Ⅰ層		1			1		1		3
	20	Ⅰ層		1					1		2
B	9	Ⅰ層			1		1		1		3
	10	Ⅰ層		3		1					4
	14	Ⅰ層						1			1
堀込石組2		Ⅲ層					1				1
		埋土		1	1			1			3
		礫直上		1							1
土坑	2	埋土		1							1
	8	埋土				1					1
	11	埋土					1				1
石敷住居		Ⅰ層		7	5	3	1	1			17
		礫直上		1	1		1	1			4
		Ⅱａ層		1				1			2
		Ⅱｃ層		1							1
		Ⅱｄ層		2		2	1				5
		Ⅱｅ層					1				1
		Ⅱ(不明)層		3	4		2		1		10
		土器集中		2							2
表採			1	7	3	9	5	6	3		34
不明								1			1
合計			1	41	16	20	21	17	10	1	127

Ⅴ類：外反口縁碗（第22図14～17）

ａ　胴部と口縁部の境で一旦窄み、それから外反する（第22図14～16）。

ｂ　胴部から口縁部へ緩やかに外反する（第22図17）。

底部：底部は見込に花文を施すものなど特徴的なものを第23図18～24に図示した。

2. 皿（第23図25～33）

皿は口縁部形態及び法量を基に分類を行った。

Ⅰ類：外反口縁皿（第23図26・27）

口縁部が外反する皿で、第23図26は器肉が厚い胴部から細くなりながら外反する口縁を形成する。第23図27は内面口縁部が若干脹らむ器形を呈する。

Ⅱ類：口禿皿（第23図28）

口縁部周辺の釉を剥ぎ取り、口禿とする。

Ⅲ類：内湾皿（第23図25・29～31）

小型の皿で、胴部から口縁部にかけて内湾する。

Ⅳ類：腰折碗（第23図32）

腰部は折れて、そこから口縁部へかけて直線的に移行する。

底部：高台から腰と経て、やや直線的に立ちあがる。外底に銘がある（第23図33）。

＜参考文献＞

・山本信夫『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』太宰府市教育委員会　2000

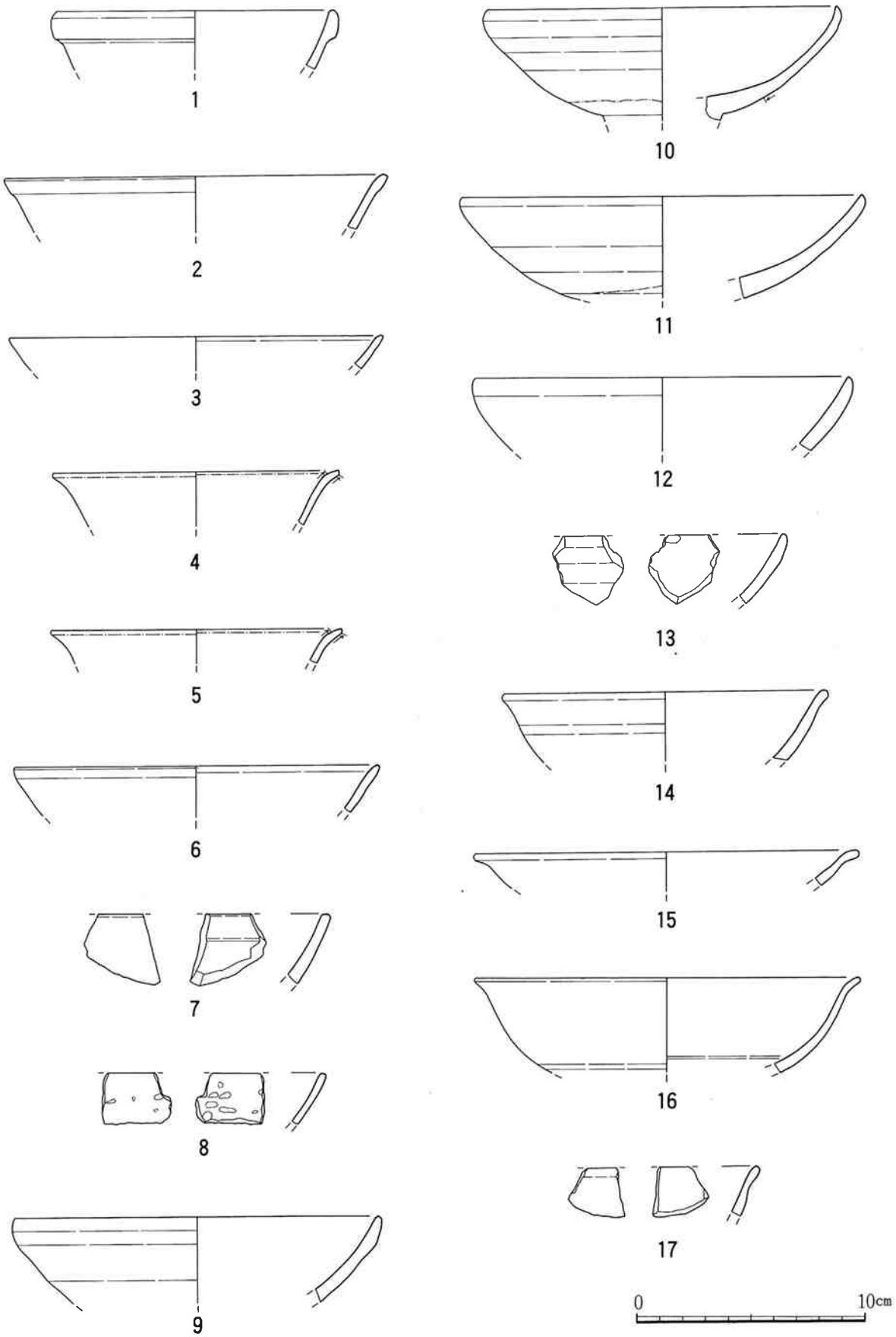
・鶴元寿充・當銘清乃・當銘由嗣　他『伊佐前原第一遺跡―宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う緊急発掘調　査報告書（Ⅲ）―』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001

第５表ａ　白磁観察一覧

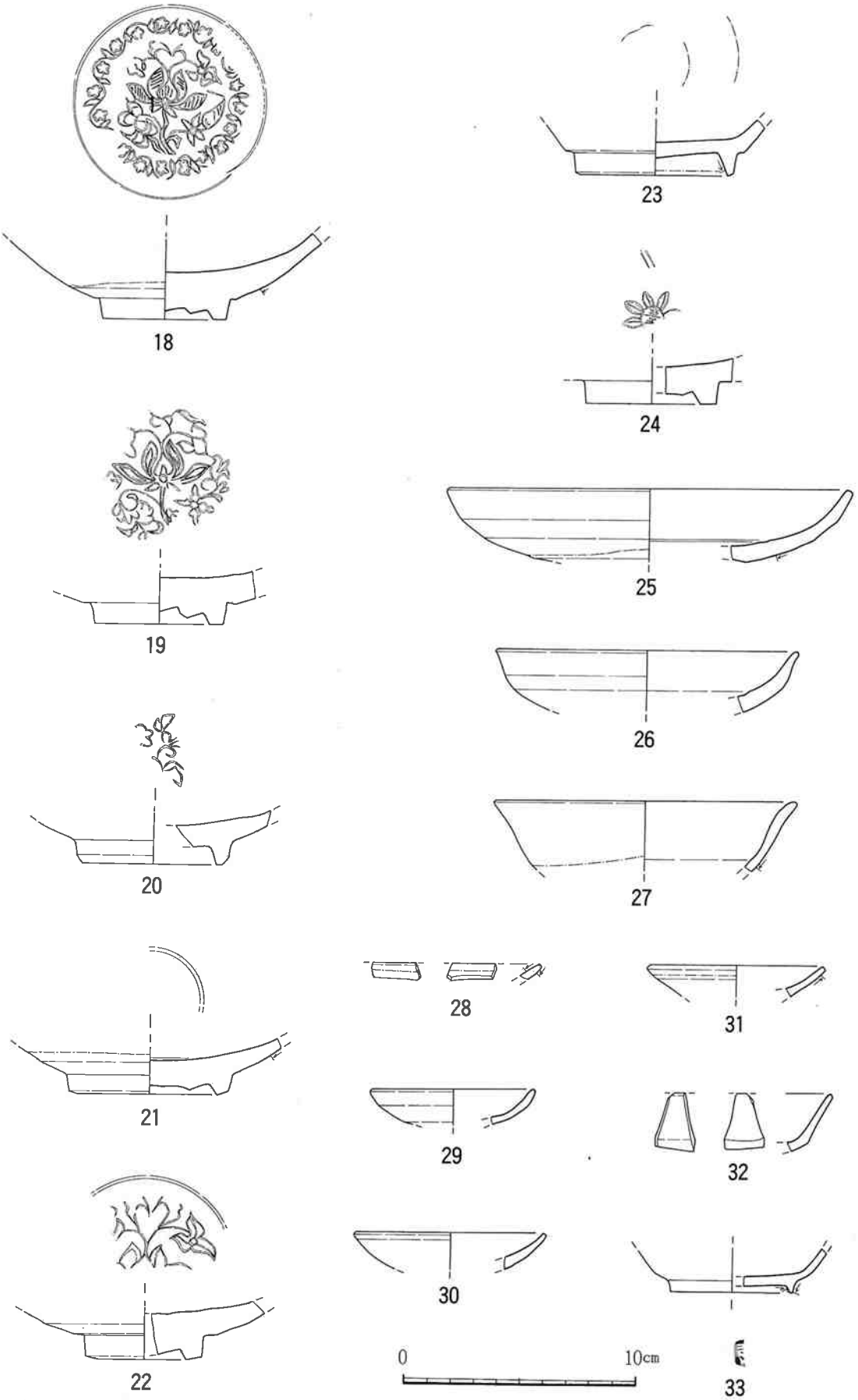
挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素　地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第22図 図版８	1	碗	Ⅰ	口	12.2 ― ―	玉縁碗。口縁部を折り返して玉縁を成形している。12世紀～13世紀。	白色	白色の釉が施釉される。全面に荒い貫入及び気泡がみられる。被熱している。	石敷住居 Ⅱa層
	2			口	16.8 ― ―	口縁部と胴部の境に稜を作り、口縁部を玉縁状に成形する。口唇は平坦である。12世紀～13世紀。	灰白色	灰白色釉を施釉する。内外面に轆轤跡あり。	B-10 Ⅰ層
	3		Ⅱ	口	16.4 ― ―	口縁部外面を直線的にし、一方で内面は丸味を持たせ、尖らすように成形している。12世紀～13世紀。	灰白色	透明釉を施釉する。内外面に轆轤跡あり。	石敷住居 Ⅱ（不明） 層
	4		Ⅲ	口	16.0 ― ―	口縁部内外面を斜めに成形し、若干尖らす。12世紀～13世紀。	灰白色で茶褐色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。内外面に轆轤跡あり。	石敷住居 Ⅰ層
	5			口	12.6 ― ―	口禿碗。口縁部は緩やかに外反する。口唇を平坦に作る。13世紀～14世紀。	淡黄色	口縁部の釉を剥ぎ取って口禿とする。釉は灰白色釉。	掘込石組２ 礫直上
	6		Ⅱ	口	12.8 ― ―	口禿碗。口縁部は緩やかに外反する。口唇部を平坦に作る。13世紀～14世紀。	灰白色	口縁部の釉を剥ぎ取って口禿とする。釉は灰白色釉。	石敷住居 Ⅰ層
	7		Ⅳ-a	口	― ― ―	胴部から直口する口縁で、口唇は丸味を帯びる。胴部に文様？がある。12世紀～14世紀？。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。	石敷住居 Ⅰ層
	8		Ⅳ-b	口	― ― ―	内湾気味の胴部から直行する口縁へと至る。口唇は丸味を帯びる。胴部に圏線を廻らす。13世紀～14世紀。	淡黄色	灰白色釉を施釉する。内面に轆轤跡あり。	A-20 Ⅰ層
	9		Ⅳ-c	口	15.8 ― ―	内湾する胴部から口縁へと至る。口縁部下位は脹らみをもち稜がある。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。轆轤跡あり。	石敷住居 Ⅱ（不明） 層
	10			口	15.4 ― ―	内湾する胴部から口縁へと至る。外面口縁部を内向させて口唇を細くする。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	明緑灰色釉を胴部下位まで施釉する。轆轤跡及び削り跡あり。	表採
	11			口	17.6 ― ―	内湾する胴部から口縁へと至る。外面口縁部上位を丸く作っている。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を多く含む。	灰白色釉を胴部下位まで施釉する。内外面に荒い貫入あり。轆轤跡及び削り跡あり。	石敷住居 Ⅰ層
	12			口	16.4 ― ―	内湾する胴部から口縁へと至る。外面口縁部を内向させて口唇を細くする。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。轆轤跡あり。	掘込石組２ 埋土
	13			口	― ― ―	内湾する胴部から口縁へと至る。外面口縁部を丸味を帯びるように作っている。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。外面の轆轤跡は顕著。	A-９ Ⅰ層
	14		Ⅴ-a	口	14.0 ― ―	胴部上位で一旦窄まり、それから口縁へ向かって外反する。口唇に稜をもつ。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。内外面に轆轤跡あり。	表採
	15			口	16.8 ― ―	胴部上位で一旦窄まり、それから口縁へ向かって外反する。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子 を含む。	灰白色釉を施釉する。内外面に轆轤跡あり。	土坑２ 埋土

第５表ｂ　白磁観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径 (cm)	器形・成形・文様等の特徴	素　地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地
第22図 図版８	16		V-a	口	16.8 — —	口縁部が緩やかに外反する。内面胴部下位に沈線を廻らす。13世紀～14世紀。	灰白色	灰白色釉を施釉。外面胴部下位に削り跡あり。	表採
	17		V-b	口	— — —	胴部上位で一旦窄まり、それから口縁へ向かって外反する。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉。内外面に轆轤跡あり。	石敷住居 Ⅱc層
第23図 図版９	18	碗	—	底	— — 5.4	高台内面を斜めに作る。見込に牡丹文及び唐草文を施す。13世紀後半～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を胴部下位まで施釉する。外面胴部下位に削り跡あり。	土坑８ 埋土
	19			底	— — 5.6	高台内面を斜めに作る。見込に牡丹文及び唐草文を施す。13世紀後半～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を内面に施釉。内面に荒い貫入あり。	石敷住居 Ⅱｄ層
	20			底	— — 6.0	見込に印花を施す。13世紀後半～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰黄緑色釉を内外面に施釉。削り跡あり。内外面に荒い貫入あり。	石敷住居 Ⅰ層
	21			底	— — 6.8	高台内外面を内傾させている。見込に沈線を廻らせている。13世紀後半～14世紀前半。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。外面胴部下位に轆轤跡あり。	A-８ Ⅰ層
	22			底	— — 5.0	高台内面を浅く作る。見込に牡丹文？を施す。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	明青灰色釉を内面に施釉。外面に削り跡あり。内面に細かい貫入あり。	石敷住居 Ⅱd層
	23			底	— — 6.8	外面の高台と胴部の境で一旦平坦を作り、それから立ちあがる。17世紀～18世紀初期。	淡黄色	白色釉を施釉する。見込は蛇の目状に釉を剥いでいる。畳付無釉。細かい貫入あり。	表採
	24			底	— — 5.6	高台内面を斜めに作る。見込に菊花文？とその中心に寿字文を施す。13世紀後半～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を内面に施釉。	表採
	25	皿	Ⅲ	口	17.0 — —	内湾する胴部から直口する口縁へ至る。13世紀～14世紀。			石敷住居 Ⅱ(不明)層
	26		Ⅰ	口	13.0 — —	胴部から細くなる外反口縁へと向かう。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。轆轤跡あり。	石敷住居 Ⅱe層
	27			口	13.0 — —	緩やかに外反し、丸味を帯びる口縁をもつ。13世紀～14世紀。	灰白色で黒色粒子を多数含む。	灰白色釉を施釉する。轆轤跡あり。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	28		Ⅱ	口	— — —	口禿皿。口縁部の釉を剥いでいる。13世紀～14世紀。	灰白色	明緑灰色を施釉する。口縁部無釉。	表採
	29		Ⅲ	口	7.0 — —	胴部は内湾し、口縁は直口する。15世紀～16紀。	淡黄色で黒色粒子を含む。	灰白色釉を施釉する。全面に細かい貫入がある。	石敷住居 Ⅰ層
	30			口	8.2 — —	胴部から口縁部へかけて次第に細くなりながら、直口する口縁へ至る。15世紀～16世紀。	白色で黒色粒子を含む。	透明釉を施釉する。外面に轆轤跡あり。	A-８ Ⅰ層
	31			口	7.6 — —	胴部から口縁へ向けて開く。15世紀～16世紀。	淡黄色	白色釉を施釉。口唇は無釉。	表採
	32		Ⅳ	口	— — —	腰折皿。折れる腰から直線的に口縁部に至る。13世紀～14世紀。	灰白色	透明釉を施釉。	A-14 Ⅰ層
	33		—	底	— — 5.2	断面逆三角形を呈する高台から張りのない腰を経て胴部へ至る。外底に銘あり。16世紀。	白色	失透明釉を施釉。畳付無釉で高台に砂付着。	A-15 Ⅰ層



第22図　白磁１　碗



第23図　白磁２　碗（18～24）、Ⅲ（25～33）

C　染付

上方台地の染付は図化したものは碗の口縁部・胴部・底部を各１点、皿の底部２点である。産地は景徳鎮窯系であり、年代は15世紀末～16世紀である。

第24図１は胴部から直線的に口縁部へ至る碗の口縁部である。文様は外面口縁部に圏線、胴部に唐草文、内面口縁部に圏線を施す。素地は淡黄色で透明釉を施釉する。15世紀末～16世紀中。石敷住居Ⅱ（不明）層より出土。

第24図２は腰の張る碗の底部である。文様は外面胴部にアラベスク文、腰部及び高台に圏線、見込に十字花文を施す。素地は白色で透明釉を外面高台下位を除いて施釉する。呉須の発色は良い。15世紀末～16世紀前。Ｃ－10Ⅰ層より出土。

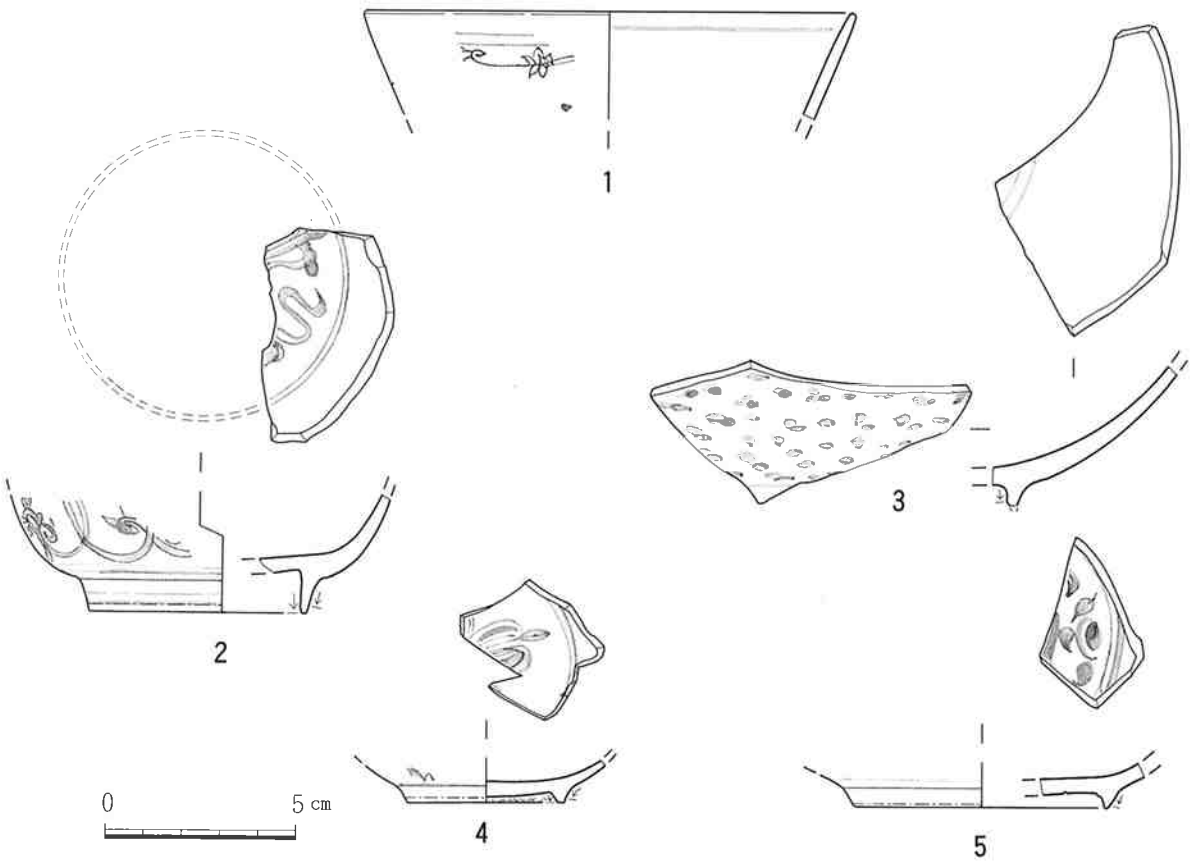
第24図３は見込が窪む蓮子碗と思われる。文様は外面に豹皮状文、見込に圏線を施す。素地は白色で明緑灰釉を内外面に施す。呉須の発色は弱い。16世紀前～中。土坑１－埋土より出土。

第24図４は皿の底部である。高台は断面が逆台形状を呈する。文様は外面胴部に唐草文？及び圏線、見込に十字花文を施す。素地は白色で呉須はやや黒味を帯びる。畳付以外に透明釉を施釉する。高台から外底にかけて砂の付着が見られる。16世紀。表採。

第24図５は皿の底部である。畳付の作りはやや雑である。文様は外面高台に圏線、見込に玉取獅子文？を施す。素地は白色で呉須の発色は良い。外底面以外に透明釉を施す。16世紀。Ａ－９Ⅰ層より出土。

第６表　染付出土状況

出土地		器種	碗			小碗	皿			合計
			口	胴	底	口	口	胴	底	
A	8	Ⅰ層	1							1
	9	Ⅰ層	3	5				1	2	11
	10	Ⅰ層	1	1	2		1	1		6
	11	Ⅰ層		1						1
	12・13	Ⅰ層		3						3
	15	Ⅰ層	1		1					2
B	9	Ⅰ層	1	2						3
	10	Ⅰ層	2				1		1	4
	14	Ⅰ層	1							1
C	10	Ⅰ層			1					1
堀込石組1		Ⅲ層		1						1
土坑	2	埋土		2					1	3
石敷住居		Ⅰ層	2	4				1		7
		Ⅱ(不明)層	1					1		2
表		採	6	3		1		3	3	16
不		明						1		1
合		計	19	22	4	1	2	8	7	63



第24図　染付　碗（１～３）、皿（４、５）

D　中国産陶器（第25図１～10）

中国産陶器は、14点出土しており、その内10点実測した。種類ごとに個別に記述していく。

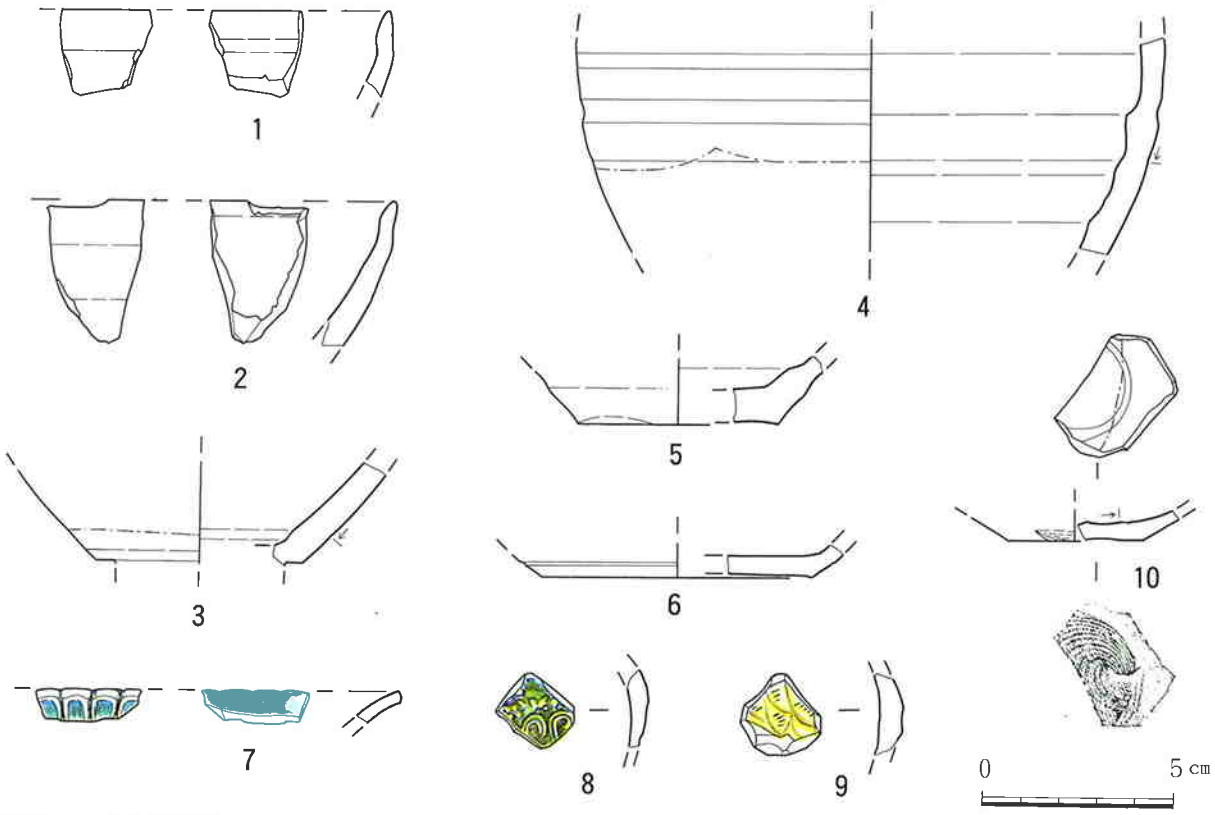
１～３は鉄釉（黒釉）天目茶碗である。１は短く直立する口縁部で、釉はやや褐色、素地はにぶい褐色である。表採。２も１と同様の口縁部であるが、端部がわずかに外反し、また釉は褐色の上に黒色が掛けられており、素地は灰白色である。Ｂ－20Ⅰ層出土。３は胴部下半で、高台脇を水平に切るタイプで、釉は透明感のある暗褐色、素地は灰黄褐色である。Ａ－15Ⅰ層出土。これらは14～15世紀ごろと思われる。他に、天目茶碗の胴部片がＡ－10Ⅰ層・Ｂ－10Ⅰ層・掘込石組２Ⅲ層から各々１点ずつ、表採したものが２点出土している。

４は壷の胴部下半であるが、素地および釉の発色は褐釉ではなく鉄釉（黒釉）に近い。素地は灰黄褐色で白色粒を含み、釉は内面黒色、外面は黒色の上に淡い褐色が掛けられている。表採。

５・６・10は、赤灰色の素地を呈する底部である。５内面が暗褐色を呈するもので、底径5.2cm。石敷住居Ⅰ層出土。６も同様で、底径7.1cm。これらは底径が異なるが、何らかの壷の底部と思われる。表採。10は糸切底で、底径も3.6cmと小型であることから、茶入れと思われる。内面の釉はにぶい褐色である。石敷住居Ⅰ層出土。

７はコバルト色の青釉が掛けられた陶器皿で、外面を花弁状に成形している。素地は白色で、軟質である。Ａ－８Ⅰ層出土。

８・９は緑釉が掛けられた陶器片で、外面には各々文様が浮かし彫りされている。おそらく、人形等の置物と思われる。素地は共に黄橙色で、やや軟質である。８はＡ－９Ⅰ層、９はＡ－８Ⅰ層より各々出土。



第25図　中国産陶器

E　中国産褐釉陶器

第26図から第28図である。本遺跡出土遺物のなかでは土器についで多く出土している。褐釉陶器総数4223点のうち中国産が4143点、タイ産が80点と、他の遺跡と比べても中国産が圧倒的に多い。確認された器種は壺、鉢、擂鉢、水注の３器種で、鉢と擂鉢はあえて分類している。得意な例として褐釉陶器片を２次加工し砥石として使われたものが、２点出土した。本来なら別項目を設けるところであるが、褐釉陶器転用品として、文末に記載する。器種のうち壺が全体の96%と最も多く出土しているが、この比率は他遺跡とほぼ同じであろう。小破片が多く全形が伺える資料が少ないため、壺については口縁部と底部を分類する。他器種は個体数が少ないため、分類は省略する。

1. 壺

口縁部は口縁形態によりⅠ類～Ⅴ類に分類した。底部はⅠ～Ⅲ類に分類した。また、壺の胴部については特徴的なものを第26図５～７に図示したが、詳細は観察表にて述べる。

口縁Ⅰ類（第26図１～３）

口縁形態が方形になるもの。頸部から口縁部にかけて装飾豊かで、本遺跡出土の褐釉陶器のなかで、もっとも丁寧に仕上げられている。肩が強く張る器形を呈する。内外面全体に釉薬がかけられる。出土量は全体の９%程度である。

口縁Ⅱ類（第26図４～６）

口縁形態が丸状である。頸部はシャープで直線的に立ち上がる。頸部から肩部にかけて明瞭な綾をもち強く屈曲する。肩は第26図６は口縁部がないが成形等の形態によりⅡ類とした。出土量は全体の３%と最も少ない。

口縁Ⅲ類（第26図７～17）

口縁部が丸状であるが、口縁部直下に削りを入れる。明確な頸部はなくナデ肩器形を呈する。他の分類と比して小型のものが多く器壁は薄手である。横耳がつくものがある。出土量は全体の60%で最も多い。

口縁Ⅳ類（第27図18～23）

口縁部が微少に肥厚し、するどい削りを入れる。頸部はシャープに立ち上がる。頸部から肩部にかけて明瞭な稜をもち強く屈曲する。縦耳がつくものがある。Ⅱ類と似るが口径に比して肩部が強く張り、胎土に大粒の鉱物が多く含まれ器面がザラつく。出土量は全体の24%である。

口縁Ⅴ類（第27図24）

１点のみの出土である。上記の分類に属さずⅤ類とした。詳細は観察表で述べる。

その他（第27図25～27）

口縁部が無く分類に含まれないが、胴部に特徴をもつため図示した。第27図25・26は肩部にスタンプを押す。横耳がつく。第27図27は小破片だが竜の顔である。

底部Ⅰ類（第27図28）

口縁Ⅰ類の底部になると思われる。上底で一度くびれて立ち上がる。ロクロ成形痕が明瞭に残る。釉薬は外面全面にかける。

底部Ⅱ類（第27図29～36）

口縁Ⅱ～Ⅲ類の底部になると思われる。上底のものと平坦になるものがある。薄手のもが多く丁寧に成形される。

底部Ⅲ類（第28図38～40）

口縁Ⅲ類の底部になると思われる。厚手で大粒の鉱物を多量に含み、器面がザラつく。内外面にロクロ成形痕が残る。第28図38～39は高台状を呈し、最下部外面は削りを入れ一周させる。第28図40は平坦で成形方法が異なるが、胎土・焼成からⅢ類とした。

2. 鉢（第28図41～45）

鉢は24点出土した。全体の８％程度である。口縁部の形態は逆L字状だが、口縁部直下に強く削りを入れ強調したもの（第28図41・42・45）とそうでないもの（第28図43・44）がある。口縁付近で強く屈曲して胴部にいたる。

3. 擂鉢（第28図46）

擂鉢は他の鉢と胎土が大きく異なり大粒の鉱物が含まれ器面がザラつく。口縁部は逆Ｌ字状。

4. 水注（第28図47～49）

５点出土した。口縁部（第28図47・48）と注ぎ口（第28図49）である。すべて異個体。注ぎ口は他の２片と比べ焼成良行で、内面にも釉薬がかけられている。

5. 袋物（第28図50・51）

いわゆる袋物と呼ばれるもの底部である。小片で器形はわからないが、２個体とも胎土・焼成ともによく似る。底部内面に砂目が付着する。

6. 砥石（第28図52・53）

褐釉陶器の転用品である。２点出土した。第28図52は底部を利用し、胴部側三角形状の２片を活用し研がれており、断面は丸みを帯びる。53は胴部を利用し、使用後に欠けた部分以外研がれている。52の資料より断面の丸みが強く、ツルツルである。

第７表ａ　中国産褐釉陶器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	分類	口径 器高 底径 (cm)	観察事項	出土地
第26図 図版 10・11	1	壺	口縁Ⅰ	21.8 － －	肩が強く張る大型壺。釉薬は暗オリーブ色。素地は灰白色で、白色鉱－物を微少に含む。頸部から肩部にかけて丁寧にナデられる。	石敷住居 Ⅰ層
	2			19.4 － －	肩が強く張る大型壺。釉薬は暗オリーブ色。素地は灰白色で、白色鉱物を微少に含む。釉薬・素地ともに１と類似するが、頸部に強く稜をもたせる。	Ａ－９ Ⅰ層
	3			19.4 － －	肩が強く張る大型壺。釉薬は暗茶褐色にコバルトブルーが浮かび上がっている。素地は暗灰色で、白色微粒子が混ざる。１・２と比して口縁部・頸部の作りが簡略化される。	表採
	4		口縁Ⅱ	14.0 － －	口縁丸状で頸部がシャープに立ち上がり、肩部との境目に強く稜をもつ。釉薬は赤茶褐色。素地は暗灰色で、黒色微粒子を含み、ポーラス状である。	表採
	5			10.0 － －	肩の張らない小型壺。口縁丸状で頸部がシャープに立ち上がり、肩部との境目に強く稜をもつ。暗オリーブ色。素地は赤褐色で、混和材は目立たない。	表採
	6			－ － －	肩の張らない大型壺。口縁部は不明であるが、形態と成形により口縁「類とした。頸部がシャープに立ち上がり、肩部との境目に強く稜をもつ。釉薬は黒色で。素地は灰白色で、大粒の白色鉱物を含む。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	7		口縁Ⅲ	11.4 － －	ナデ肩の中型壺。釉薬は暗褐色。素地は灰白色で、黒色・白色の鉱－物、大粒の褐色鉱物を含む。	Pit59 埋土
	8			11.0 － －	ナデ肩の中型壺。釉薬は明オリーブ色だが、ほとんど剥げている。素地は赤橙色で、褐色微粒子、１点だけ含む白色の大型鉱物が目立つ。	土坑５ 埋土
	9			11.8 － －	ナデ肩の中型壺。釉薬は明オリーブ色、外面のみ施釉で、内面は一一部。素地は褐灰色で、大粒の赤褐色鉱物を含む。	炉跡４

第７表ｂ　中国産褐釉陶器観察一覧

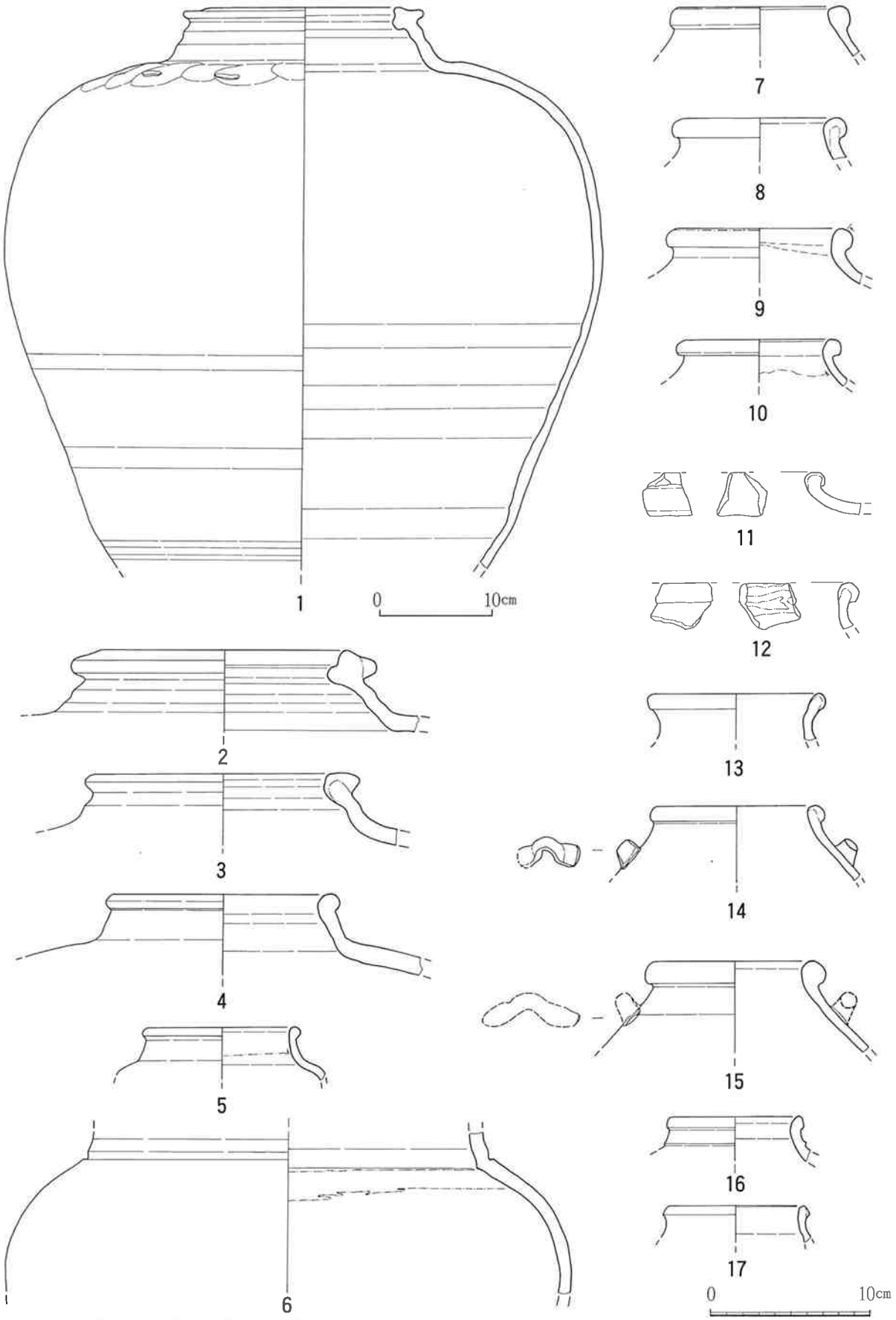
挿図 図版	番号	器種	分類	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出土地
第26図 図　版 10・11	10	壺	口縁Ⅲ	10.4 － －	ナデ肩の中型壺。釉薬は暗オリーブ色で光沢がある、外面及び内面頸部まで施－釉。素地は灰色出、赤褐色・白色の鉱物を含む。	石敷住居 Ⅱｃ層
	11			－ － －	小破片のため詳細な形態は不明だが、丸状口縁直下に強く削りをいれることから口縁」類とした。釉薬は明オリーブ色で、外面及び内面頸部まで施釉するが、ほとんど剥げている。素地は赤橙色で、赤褐色の鉱物を含む。	掘込石組２ 埋土
	12			－ － －	ナデ肩の中型壺。釉薬は暗オリーブ褐色で、外面及び内面の一部施釉。素地は－赤橙色で、暗赤褐色鉱物を含む。器面は丁寧に成形される。	石敷住居 礫直上
	13			11.2 － －	ナデ肩の中型壺。釉薬は黒褐色で、内外面に施釉。素地は灰色で、赤褐色鉱物－を含む。器面が被熱によりアバタ状になる。	石敷住居 Ⅱａ層
	14			11.0 － －	ナデ肩の中型壺。釉薬は暗褐色で、外面及び内面途中まで施釉。素地は赤橙色で、白色・赤褐色鉱物を含む。器面は丁寧に成形され、横耳がつく。	石敷住居 Ⅱｆ層
	15			11.4 － －	ナデ肩の中型壺。釉薬は暗褐色で光沢があり、内外面に施釉。素地は灰色で、大粒の赤褐色鉱物・白色鉱物を含む。器面は丁寧に成形される。焼成も良く他の褐釉陶器と比して硬質である。	石敷住居 Ⅱａ層
	16			8.6 － －	ナデ肩の小型壺。釉薬は暗オリーブ色だが、ほとんど剥げている。素地は青灰色で、大粒の白色鉱物を含む。器面は灰赤色で、白色鉱物が露胎する。頸部を鋭く削り、断面突帯状を呈する。このような成形はこれ１点のみである。	石敷住居 Ⅱｆ層
	17			8.6 － －	ナデ肩の小型壺。釉薬は暗褐色だが、ほとんど剥げている。素地はオリーブ褐色で、混和材は目立たない。焼成が特に悪い。形態等は16類似するが、成形・焼成等悪い。	表採
第27図 図版11	18		口縁Ⅳ	17.4 － －	肩が強く張る大型壺。口縁直下に鋭く削りを入れる。釉薬は暗赤褐色で、内外面に施釉。素地は赤橙色で、大粒の白色鉱物を多量に含み、器面に露胎すため、ザラザラする。肩部内面に指ナデ。縦耳がつく。	表採
	19			20.0 － －	肩が強く張る大型壺。釉薬は黒褐色で、内外面に施釉。素地は青灰色で、白色－鉱物を含む。	石敷住居 Ⅰ層
	20			15.4 － －	肩が強く張る大型壺。口縁直下に鋭い削りを入れる。釉薬は極暗赤褐色で、内外面に施釉。素地は青黒色で、白色鉱物を多量に含み、器面に露胎する。比較的焼成が良く硬質である。	石敷住居 Ⅱｄ層
	21			19.2 － －	肩が強く張る大型壺。口縁直下に削りを入れて屈曲させる。釉薬は明褐色で、内外面に施釉する。素地は赤橙色で、白色・赤褐色鉱物を含む。他の口縁、類と比して器面が良く成形される。肩部内面は指ナデ。	A-10 Ⅰ層
	22			15.4 － －	肩が強く張る中型壺。口縁部は削りを入れたあと丸みをもたせて整える。釉薬は暗赤褐色で、外面のみ施釉。素地はにぶい橙色で、白色・赤褐色の鉱物を含む。	土坑５ 埋土
	23			－ － －	肩が強く張る壺。口縁部は強く削りを入れたあと、丸みをもたせて整える。釉薬は－黒褐色で、内外面に施釉。素地は暗青灰色で、白色・黒色鉱物を含む。	掘込石組２ Ⅲ層
	24		口縁Ⅴ	11.8 － －	褐釉分類のなかでこれ１点のみ。口縁部はキノコの笠状を呈する。成形が良く丁寧に作られる。釉薬は明オリーブ色で、外面及び内面の一部施釉。素地は赤橙色で、赤褐色鉱物を微少に含む。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	25		その他	－ － －	横耳がつく壺。釉薬は明オリーブ色で、外面及び内面頸部まで施釉。素地は赤橙色で、黒色鉱物を含む。頸部に２条の稜が入る。肩部にヘラ削りを縦に入れており、一周させると思われる。「真宝」と銘打ったスタンプが押される。	Ａ－９ Ⅰ層
	26			－ － －	横耳がつく壺。釉薬は暗オリーブ褐色で、外面のみ施釉。素地は灰白色で、大粒の白色・赤褐色鉱物を含む。頸部を蛇腹状に成形する。「大吉」と銘打ったスタンプが押される。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	27			－ － －	壺。胴部に龍を型で起こしている。釉薬はオリーブ色で、外面のみ施釉。素地は白灰色で、白色・黒色鉱物を含む。首里城京の内で三爪龍の壺が出土しており、釉薬・胎土からも同様の形態と思われる。	Ａ－14 Ⅰ層
	28		底部Ⅰ	－ － －	口縁。類の底部と思われる。上底。床接地面に白色鉱物を多量に含む砂粒塊がつく。釉薬は明オリーブ色で、外面のみ施釉。素地は灰赤色で粒子が細かく、白色鉱物を含む。立ち上がり部はロクロ成形痕が明瞭に残る。	土坑８ 埋土
	29		底部Ⅱ	－ － 14.0	上底。釉薬は明オリーブ色だが、胴部までで、底部付近には施釉されない。素地は灰褐色で微粒子、褐色鉱物を微少に含む。成形は丁寧でロクロ成形痕が僅かに残る。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	30			－ － 13.0	上底。釉薬は明オリーブ色だが、胴部までで、底部付近には施釉されない。素地は浅黄色で、赤褐色鉱物を多量に含む。	土坑８ 埋土
	31			－ － 13.0	上底。釉薬はみられない。素地は橙色で、大粒の白色鉱物を含む。器面は良く－成形され横ナデされる。	石敷住居 Ⅱａ層

第７表ｃ　中国産褐釉陶器観察一覧

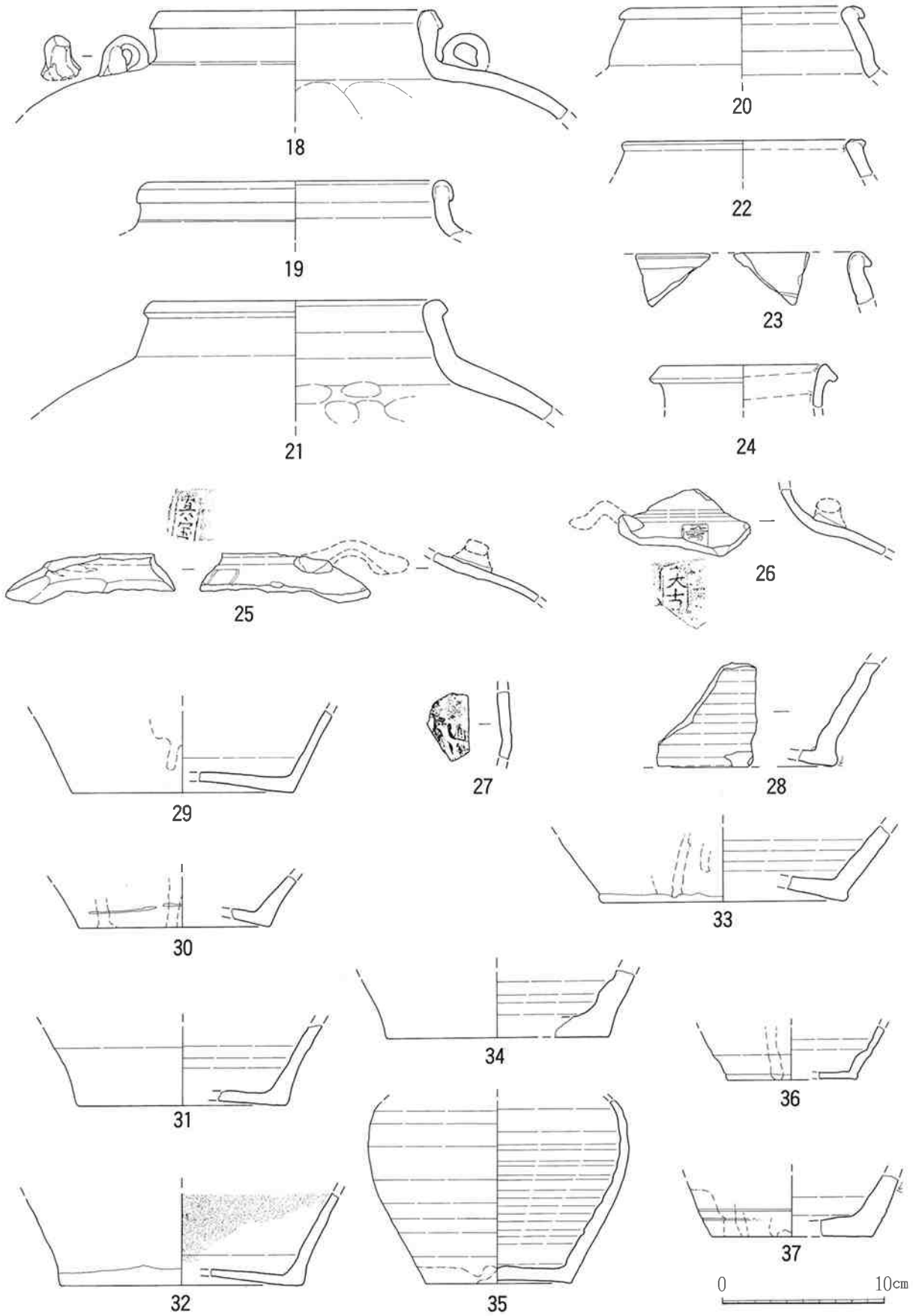
挿図 図版	番号	器種	分類	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出土地
第27図 図版11	32	壺	底部Ⅱ	－ － 15.2	上底。釉薬はみられない。素地は灰褐色で微粒子、白色鉱物を微少に含む。器面は良く成形され丁寧に仕上げる。内面に炭が付着している。	石敷住居 礫直上
	33			－ － 15.6	上底。釉薬は黒褐色で、底部には僅かに垂れる。素地は灰褐色で粗く、白色鉱物を含む。内面にロクロ成形痕が僅かに残る。成形は粗く器面がザラザラする。	表採
	34			－ － 14.0	平底。釉薬はみられない。素地は赤灰色で微粒子、白色鉱物を多量に含む。焼成良好で硬質。器面はザラザラする。	石敷住居 Ⅱｅ層
	35			－ － 9.2	平底小型壺。釉薬は黒褐色で外面のみ施釉、底部付近にはかけない。素地は白灰色で、黒色鉱物を含む。成形良好で丁寧に作られる。外面には僅かに、内面は明瞭にロクロ成形痕が残る。	掘込石組２ 礫直上
	36			－ － 9.0	平底小型壺。釉薬はオリーブ褐色で、外面のみ僅かに垂れる。素地は灰色で、白色・黒色鉱物を含む。成形良好で丁寧に仕上げられる。内外面に強いロクロ成形痕が残る。	石敷住居 Ⅱ（不明） 層
	37			－ － 10.0	平底。釉薬は暗赤褐色で、内外面に施釉される。素地は赤灰色で微粒子、白色鉱物を含む。焼成良好で硬質。内面に僅かにロクロ成形痕が残る。	石敷住居 Ⅱ（不明） 層
第28図 図版12	38		底部Ⅱ	－ － 14.4	高台状の底部をもつ大型壺。釉薬は褐灰色で、内外面ともに全面施釉されるが、アバタ状。素地は明青灰色で、黒色鉱物を多量に、白色鉱物を微少に含む。器面は内外面ともにロクロ成形痕が目立つ。最下部は縦位に削りをいれて整える。	掘込石組２ 礫直上
	39		底部Ⅱ	－ － 14.4	高台状の底部をもつ大型壺。釉薬はオリーブ灰色で、外面胴部下半、内面全面施釉される。素地は赤橙色で、白色鉱物を多量に赤褐色鉱物を微少に含む。器面は内外面ともにロクロ成形痕が目立つ。最下部は縦位に削りをいれて整える。	石敷住居 礫直上
	40			－ － 11.0	平底。38・39とは成形方法が若干異なるが胎土等の特徴から底部」類とした。釉薬はオリーブ黄色で胴部下半まで外面のみ施釉。素地は灰色で黒色鉱物が目立つ。内面にロクロ成形痕が残る。	石敷住居 Ⅱｄ層
	41	鉢	－	16.0 － －	口縁部逆Ｌ字状で、直下に強い削りを入れる。口縁部直下の胴部を強く内傾させる。釉薬はオリーブ黒色で、内面胴部のみ見られる。素地は灰色で、黒色鉱物が目立つ。ロクロ成形痕が残る。	表採
	42			13.9 － －	口縁部直下に削りを入れて、僅かに逆Ｌ字状を呈する。口縁部直下の胴部を強く内傾させる。釉薬はオリーブ黒色で、内面胴部のみ見られる。素地は灰色で、黒色鉱物が目立つ。ロクロ成形痕が僅かに残る。	Ａ－11 Ⅰ層
	43			－ － －	口縁部は明瞭な逆Ｌ字状。釉薬は黒褐色で、内面胴部・口縁部の一部で見られる。素地は灰白色で、黒色鉱物を微少に含む。	Pit59 埋土
	44			－ － －	口縁部は明瞭な逆Ｌ字状。釉薬はオリーブ色で、口唇部以外の内外面に施釉。素地は赤橙色で微粒子、白色・赤褐色鉱物を微少に含む。	石敷住居 Ⅱａ層
	45			－ － －	口縁部は逆Ｌ字状で、直下に強い削りを入れる。釉薬は暗オリーブ色で、内面のみ見られる。素地は橙色で微粒子、混和材はほとんど見られない。	掘込石組２ 埋土
	46	擂鉢	－	－ － －	口縁部は逆Ｌ字状だが、内面も若干張り出す。釉薬は暗褐色で、外面及び口唇部に施釉。素地は青灰色で、白色・黒色鉱物を含む。	土坑９ 埋土
	47	水注	－	8.0 － －	口縁部を微弱に肥厚させる。釉薬は暗オリーブ褐色で、外面及び内面頸部まで施釉。褐灰色で微粒子、赤褐色鉱物を微少に含む。頸部にロクロ成形痕が残る。	Ａ－８ Ⅰ層
	48			7.0 － －	口縁部を微弱に肥厚させる。釉薬は黒褐色で内外面に見られる。素地は灰白色で微粒子、赤褐色鉱物を微少に含む。	石敷住居 Ⅰ層
	49			－ － －	水注の注ぎ口である。釉薬は暗オリーブ褐色で光沢があり、内外面に見られる。素地は灰褐色で、赤褐色鉱物を微少に含む。	Ｂ－14 Ⅰ層
	50	袋物	－	－ － 5.4	いわゆる袋物。釉薬は黒褐色で内外面に施釉される。素地は灰色で微粒子、白色鉱物を微少に含む。底部内面に砂粒がつく。成形良好で丁寧に仕上げられている。	石敷住居 Ⅱｃ層
	51			－ － 5.1	いわゆる袋物。釉薬は暗褐色で外面に施釉される。素地は灰色で微粒子、白色鉱物を微少に含む。底部内面に砂粒がつく。成形良好で丁寧に仕上げられている。	石敷住居 Ⅱａ層
	52	砥石	－	－ － －	底部の転用品である。釉薬はみられない。素地は赤橙色で微粒子、白色鉱物を含む。胴部側三角形部に摩耗痕が残る。	土坑６ 埋土
	53			－ － －	胴部の転用品である。釉薬はオリーブ褐色で、内外面に施釉。素地は赤橙色で微粒子、白色鉱物を含む。三面摩耗痕がのこり、52より摩耗が著しい。	Ａ－10 Ⅰ層

第8表　中国産褐釉陶器出土状況

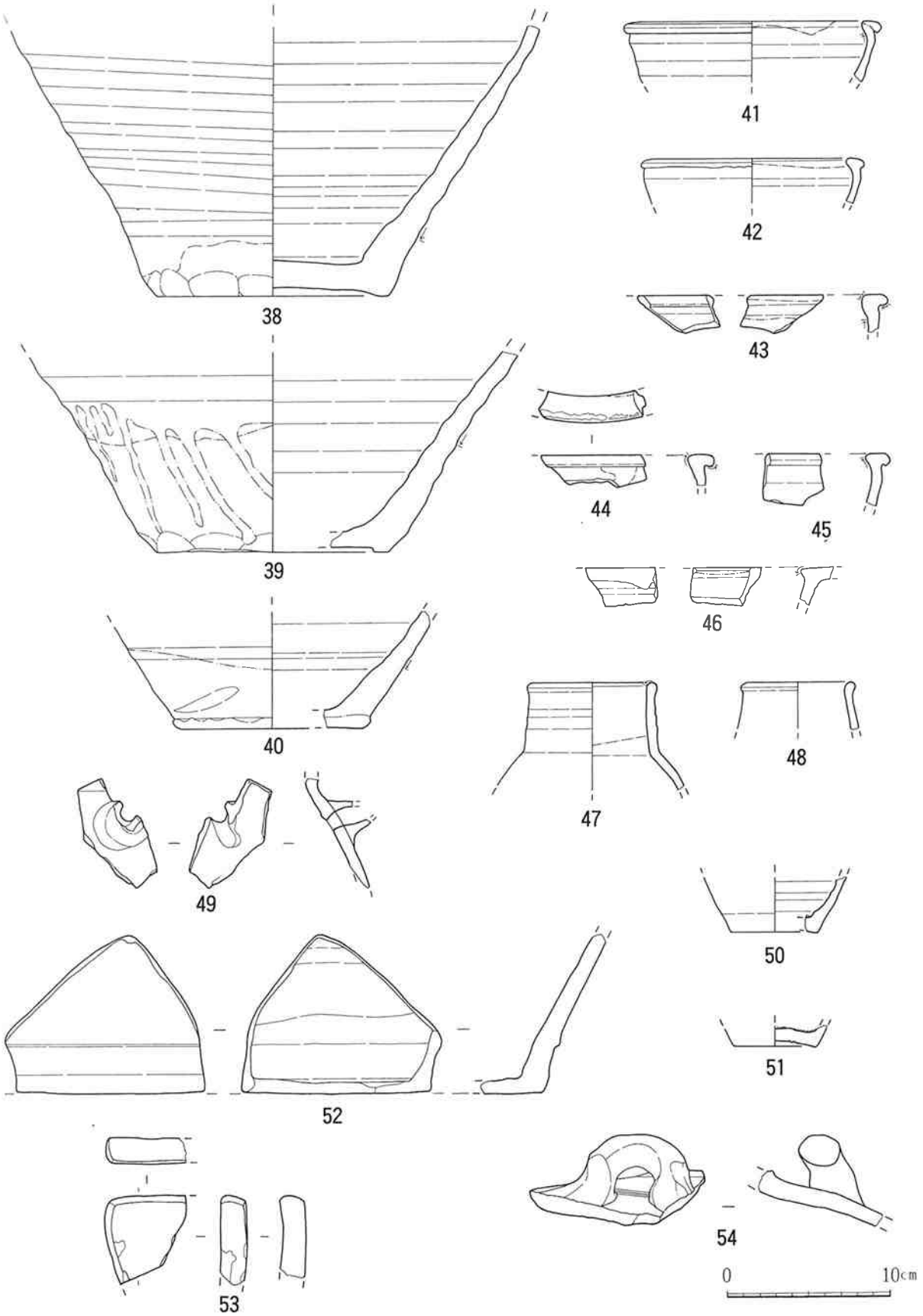
出土地			器種・分類	壷 口 Ⅰ	壷 口 Ⅱ	壷 口 Ⅲ	壷 口 Ⅳ	壷 口 Ⅴ	壷 胴	壷 底 Ⅰ	壷 底 Ⅱ	壷 底 Ⅲ	鉢 口	擂鉢 口	水注 口	水注 注口	袋物 底	砥石	不明 胴	合計
A	7	Ⅰ層				2	1												7	10
	8	Ⅰ層				8				1	8		1		1				119	138
	9	Ⅰ層	2	1	16	9		1	2	16	4	2							257	310
	9・10	Ⅰ層	2		1														6	9
	10	Ⅰ層	5		13	11			1	19					2			1	246	298
	11	Ⅰ層			1							1							17	19
	12・13	Ⅰ層										2							5	7
	14	Ⅰ層				1		1		1	1								14	18
	14・25	Ⅰ層			1														8	9
	15	Ⅰ層			1	1				3									34	39
	20	Ⅰ層								2									11	13
		Ⅱ層								3									9	12
A・B	10	石積			2	2			1		2								21	28
B	9	Ⅰ層		1	9	2			1	1		1							48	63
	10	Ⅰ層		1	9	2				5		1							68	86
	12	Ⅰ層																	1	1
	14	Ⅰ層			1					1						1			44	47
	20	Ⅰ層																	2	2
		Ⅱ層			2	1				3		1							9	16
C	9・10	Ⅰ層																	1	1
	10	Ⅰ層			2					1	2								37	42
堀込石組1		埋土								1									5	6
		礫直上																	6	6
		礫下																	16	16
堀込石組2		Ⅱ層																	9	9
		Ⅲ層				1													13	14
		埋土			1					1	1	1							54	58
		礫直上								1	1									2
		礫下								1										1
土坑	1	埋土																	2	2
	2	埋土																	31	31
	3	埋土																	1	1
	4	埋土																	3	3
	5	埋土			1	1													53	55
	6	埋土																1	15	16
	7	埋土																	2	2
	8	埋土							1	1									5	7
	9	埋土											1						9	10
	11	埋土																	3	3
Pit	12	埋土																	1	1
	26	埋土																	2	2
	45	埋土																	2	2
	59	埋土			2					1		1							36	40
	93	埋土								2	1									3
	126	埋土																	5	5
	135	埋土																	1	1
	152	埋土																	4	4
	154	埋土																	3	3
	173	埋土																	1	1
	176	埋土																	1	1
	177	埋土																	1	1
	180	埋土																	2	2
	181	埋土																	1	1
	189	埋土																	1	1
	190	埋土																	2	2
	192	埋土																	1	1
	195	埋土																	2	2
	196	埋土																	1	1
	229	埋土																	1	1
	237	埋土																	2	2
炉跡	4				1															1
	5																		2	2
	8																		1	1
	14																		3	3
石敷住居		Ⅰ層	2		14	4				4		1			1				393	419
		礫直上			1					5	2								48	56
		Ⅱa層			3	2				6		1					1		98	111
		Ⅱc層			4					4	1						1		125	135
		Ⅱd層		1	3	1				6	1								77	89
		Ⅱe層								1									35	36
		Ⅱf層			2														8	10
		Ⅱ(不明)層		1	7	1	1	1	1	10	2								223	247
		土器集中	1							1	1								16	19
		炉跡																	1	1
表採			12	5	51	30			9	92	49	10							1256	1514
不明			1																11	12
合計			25	10	158	70	1	3	17	200	68	23	1	4	1	2	2		3558	4143



第26図　中国産褐釉陶器 1　壺



第27図　中国産褐釉陶器２　壺



第28図　中国産褐釉陶器 3　壺（38～40）、鉢（41～45）、擂鉢（46）、水注（47～49）、袋物（50、51）、砥石（52、53）、 **タイ産褐釉陶器**　壺（54）

F　タイ産褐釉陶器（第28図54）

本遺跡から得られたタイ産褐釉陶器は極めて少ない。図化できたものは54の横耳の胴部１点だけである。厚手で重量感がある。釉薬は黒色と暗オリーブ褐色で、外面のみに施釉。素地は灰色で黒色鉱物が含まれる。表採。

G　類須恵器（第29図１～16）

類須恵器は20点出土しており、そのうち16点実測した。全て細片であるため、全形が判明できるものはないが、その多くは壷の破片と思われる。各部位ごとに記述するが、胎土・色調についてはその特徴を最後にまとめる。また、個々の詳細および出土地点は第９表に一括した。

口縁部は１点（１）のみである。１は内外に拡張した丸い端部をもち、内面のやや下った位置にゆるやかな凹線が施される。その器形からゆるく外反する短い口縁部をもつ壷と思われる。

頸部は２点（２・３）ある。両者ともやや肩が張る胴部をもつものと思われる。２は丁寧なヨコナデを施す。

胴部は実測したものは11点（４～14）である。これら以外にＡ－９Ⅰ層から３点、石敷住居Ⅱｄ層から１点出土している。

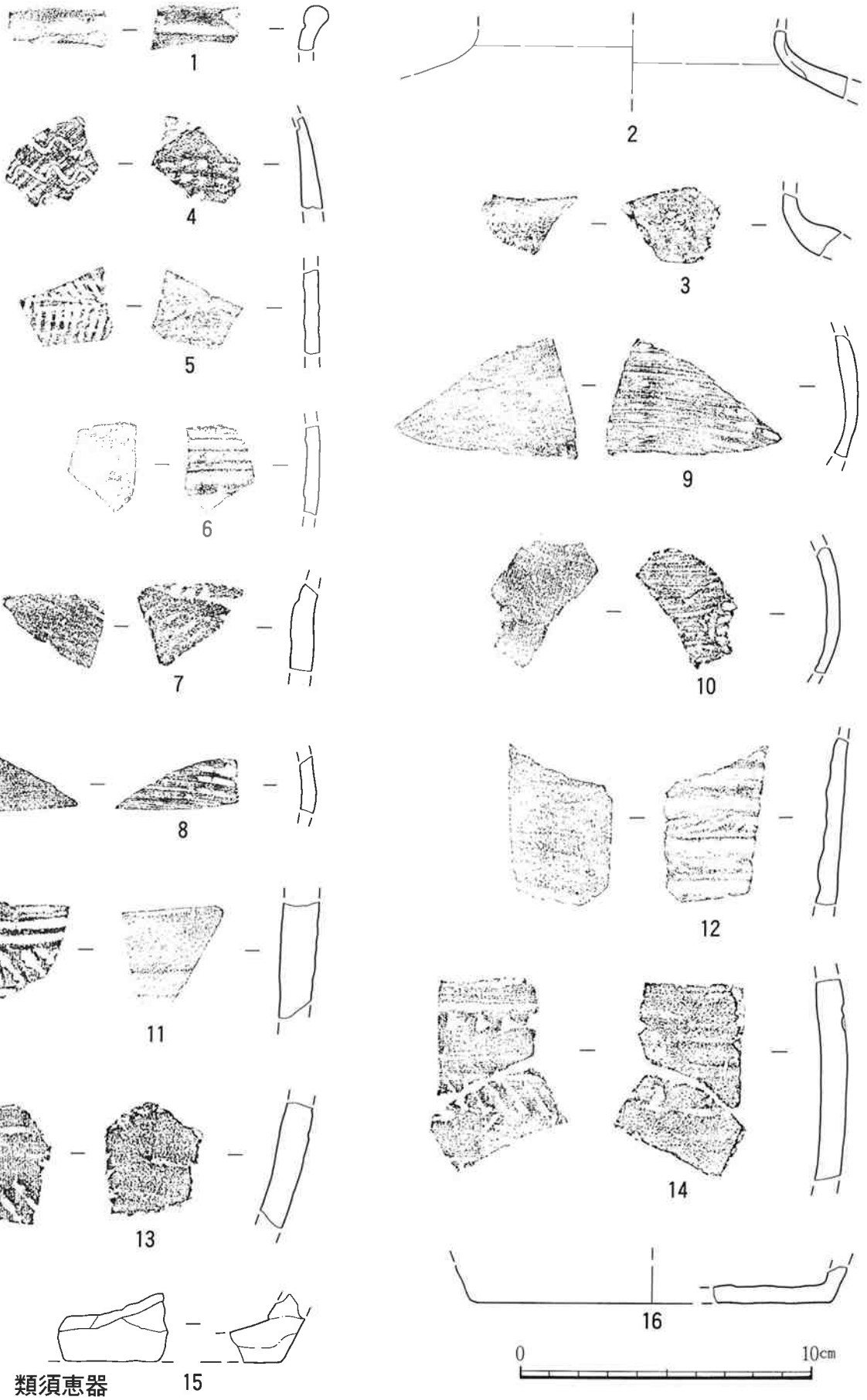
胴部の成形は基本的にはタタキによるもので、その後の調整はナデを施す。外面のタタキメとして、斜行状（４・11・13・14）、矢羽状（５）がある。内面のタタキメとして、格子状（４・８・９）、斜行状（７・12）がある。調整は基本的に内面にはヨコナデ、外面には不定方向のナデもしくは無調整である。ただ、11・13・14は凹線状のラインが見られ、強いヨコナデが施されたものと思われる。９のみは、調整後ヘラ描による波状文が施されている。器壁は、0.5cm前後のものが多いが、12・14・15は１cm前後である。

底部は２点（15・16）ある。器壁では15が0.5cm前後、16が１cm前後と異なる。

胎土・色調および器壁で見ると、いくつか類似したものがある。器壁が0.5cm前後で外面が濃い灰色で白色微粒を多く含む一群は、外面にタタキメがある４・５と、ない１・２・６・８・９と大きく２つに分けられる。器壁は同様だがやや焼きが甘く全体が灰白色の一群には、11・17がある。器壁が１cm前後の13～15は、内外面がにぶい灰白色、内部が赤灰色で、さらに褐色・白色微粒を多く含み、非常に類似している。

第９表　類須恵器観察一覧

挿図図版	番号	部位	胎土	焼成	色調	特　　徴	出　土　地
第29図図版12	1	口縁部	密。白色微粒多い。	良好	濃い灰色	口縁内面やや凹線状。内外面丁寧なヨコナデ。	Ａ－９Ⅰ層
	2	頸部	密。白色微粒多い。	良好	灰色	頸部径10.8m。内外面丁寧なヨコナデ。	石敷住居Ⅱｃ層
	3	頸部	やや粗。	まあ良好	灰白色	内面・外面頸部やや粗いヨコナデ。外面胴部ナデ。	Ｂ－10Ⅰ層
	4	胴部	やや粗。白色微粒多い。	良好	濃い灰色	内面格子状、外面斜行状タタキ。波状文。内面ヨコナデ。	Ａ－８Ⅰ層
	5	胴部	密。白色微粒多い。	良好	濃い灰色	外面矢羽状タタキ。内面丁寧なヨコナデ。	土坑6埋土
	6	胴部	密。白色微粒多い。	良好	灰色	外面不定方向のナデ。内面強いヨコナデ。	石敷住居Ⅱｃ層
	7	胴部	やや粗。	まあ良好	灰色	内面斜行状タタキ。	Ａ－10層
	8	胴部	密。	良好	灰色	内面格子状タタキ、丁寧なヨコナデ。外面不定方向ナデ。	石敷住居Ⅰ層
	9	胴部	密。	良好	灰色	内面格子状タタキ、丁寧なヨコナデ。外面不定方向ナデ。	石敷住居Ⅱ(不明)層
	10	胴部	やや粗。白色中粒含む。	やや甘い	灰色	内面ヨコナデ、指頭圧痕あり。外面不定方向ナデ。	表採
	11	胴部	密。褐色・白色微粒多い。	まあ良好	灰白色	外面斜行状タタキ、強いヨコナデ、凹線状。内面ヨコナデ。	Ａ－９Ⅰ層
	12	胴部	密。	良好	灰色	内面斜行状タタキ、ロクロナデ。鉢の可能性もあり。	Ａ－11Ⅰ層
	13	胴部	密。褐色・白色微粒多い。	まあ良好	灰白色	外面斜行状タタキ、強いヨコナデ、凹線状。内面ヨコナデ。	表採
	14	胴部	密。褐色・白色微粒多い。	まあ良好	灰白色	外面斜行状タタキ、強いヨコナデ、凹線状。内面ヨコナデ。	Ａ－10Ⅰ層
	15	底部	密。混入物少なし。	やや甘い	灰色	粘土紐の痕跡明瞭。	表採
	16	底部	やや粗。白色微粒多い。	やや甘い	灰色	底径12.2cm。	Ａ－９Ⅰ層



第29図　類須恵器

H　本土産磁器（第30図１～５）

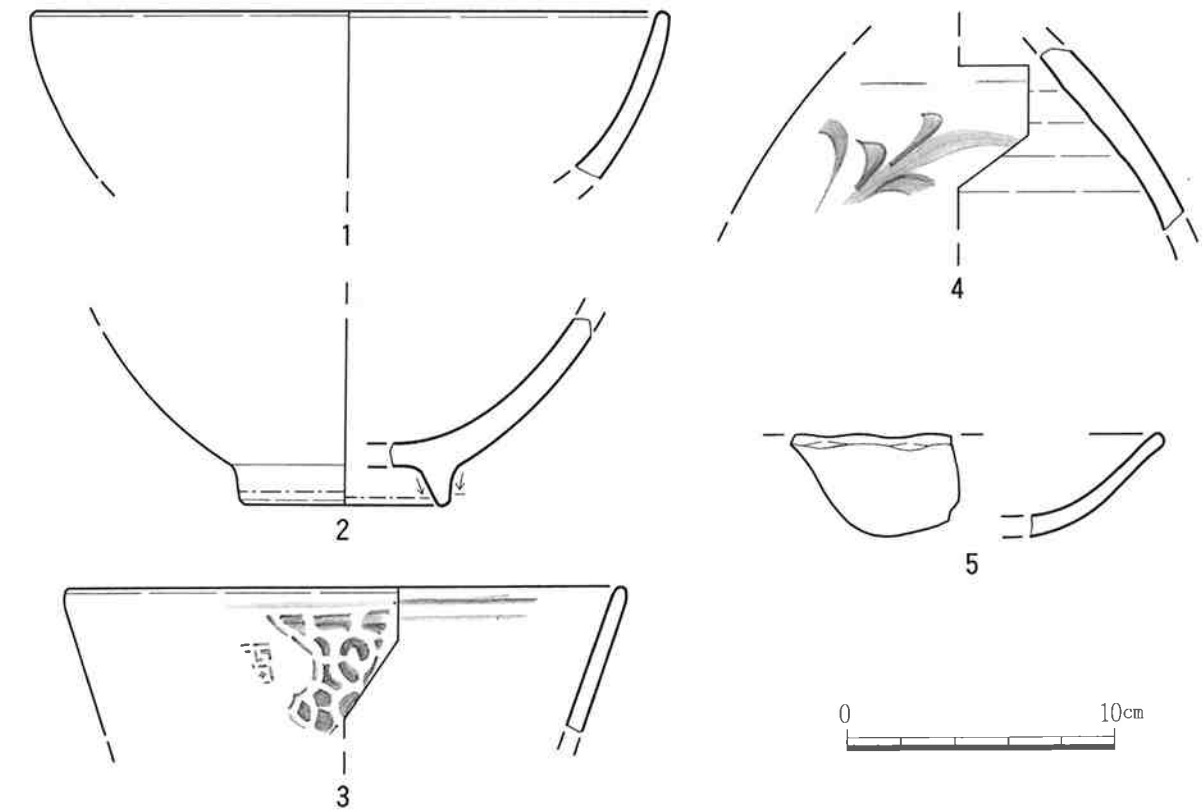
本土産磁器は近世染付が６点、近現代磁器が22点出土しており、そのうち５点実測した。個別に記述する。

近現代磁器は、19世紀末～20世紀初頭に本土で製作されたものとする。１は深緑色の釉が内外面共に掛けられた碗の口縁部である。素地は白色で、硬質である。口径11.9cm。石敷住居Ⅰ層出土。２は、直接接合できないが１と同一個体と思われる碗底部である。割れ面は黒変しており、被熱した可能性がある。高台畳み付けは釉剥ぎがなされている。底径3.8cm。表採。３は印判手碗で、外面に蛸唐草文と寿福文が型紙摺りされており、内面口縁上部には２条の圏線が巡る。素地はややにごった感のある灰白色。口径10.6cm。Ａ－12・13Ⅰ層出土。５は口縁部が花弁状にかたどられた磁器皿である。釉はガラス質の白色で、素地は白色で精良である。石敷住居Ⅰ層出土。

近世染付は、全て肥前系のものである。４は肥前系瓶の胴部である。外面には１条の圏線の下に太い筆致の草花文が描かれる。素地は白色で精良、釉および呉須の発色は良好である。おおよそ18世紀。表採。

第10表　本土産磁器出土状況

器種・分類 / 出土地			近世染付				近・現代磁器										合計
			瓶		不明		碗			小碗			皿		不明		
			口	胴	口	胴	口	胴	底	口	胴	底	口	底	口	胴	
A	9	Ⅰ層			1	1	2	1			1				1	3	10
	10	Ⅰ層		1						1		2				1	5
	11	Ⅰ層														1	1
	12・13	Ⅰ層					1										1
B	9	Ⅰ層	1														1
石敷住居		Ⅰ層					2				1		1				4
表採				1		1		1	1	1				1			6
合計			1	2	1	2	5	2	1	2	2	2	1	1	1	5	28



第30図　本土産磁器　碗（１～３）、瓶（４）、皿（５）

Ⅰ　沖縄産施釉陶器

合計で19点検出された。器種としては碗、小碗、瓶、壺、鉢等が検出されたが、碗が大部分を占める（第11表沖縄産施釉陶器出土状況）。

ほとんどの資料が細片であったため、器形の窺える２点について以下に図示し、観察事項を述べる。

第11表　沖縄産施釉陶器出土状況

出土地＼器種			碗			小碗	瓶	袋物	鉢	不明		合計
			口	胴	底	口	口	胴	口	胴	底	
A	9	Ⅰ層	1	2		1						4
	10	Ⅰ層		2								2
	12・13	Ⅰ層		1								1
B	10	Ⅰ層			1							1
	20	Ⅱ層					1					1
石敷住居		Ⅱd層						1				1
		Ⅱ(不明)層		1							1	2
表採				4	1				1	1		7
合計			1	10	2	1	1	1	1	1	1	19

1. 碗（第31図１）

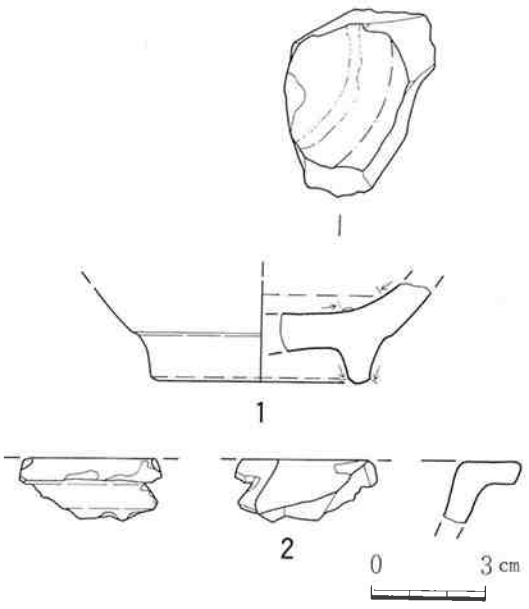
底部資料で、見込み部分は蛇ノ目釉剥ぎを施し、アルミナが付着する。内面、外面ともに白化粧土を施した後、透明釉を掛ける。釉薬全面に細かい貫入が見られる。高台畳付は研磨される。釉色は灰白色を呈す。底径5.8㎝。表採。

2. 鉢（第31図２）

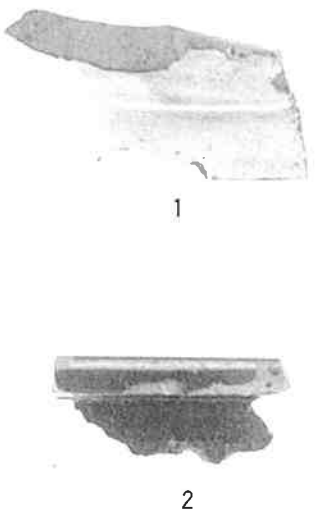
掛け分けであり、外面は黒釉、内面は白化粧土の上に透明釉を施す。内面の釉は口唇部上面まで達し、細かい貫入が見られる。表採。

＜参考文献＞

・『那覇市文化財調査報告書第23集　壺屋古窯群Ⅰ』　那覇市教育委員会　1992年
・『那覇市文化財調査報告書第27集　壺屋古窯群Ⅱ』　那覇市教育委員会　1995年
・『那覇市文化財調査報告書第38集　壺屋古窯群Ⅲ』　那覇市教育委員会　1997年
・『黒石川窯址（沖縄県石垣市黒石川（フーシナー）窯址発掘調査報告書)』　石垣市教育委員会　1993年
・『沖縄県文化財調査報告書第111集　湧田古窯跡（Ⅰ)』　沖縄県教育委員会　1993年
・『沖縄県文化財調査報告書第121集　湧田古窯跡（Ⅱ)』　沖縄県教育委員会　1995年
・『沖縄県文化財調査報告書第136集　湧田古窯跡（Ⅳ)』　沖縄県教育委員会　1999年
・『平成10年度企画展　沖縄のやきもの－南海からの香り－』　佐賀県立九州陶磁文化館　1998年
・照屋善義『沖縄の陶器　技術と科学』　2000年



第31図　沖縄産施釉陶器　碗（１)、鉢（２）



図版13　沖縄産施釉陶器

J　沖縄産無釉陶器

壺、甕、鉢、擂鉢、火入れ等合計で117点検出されたが、器形の窺える資料は約半数であった。

以下に図示したものについての概略を述べ、詳細は第12表の沖縄産無釉陶器観察一覧にまとめる。

1. 壺（第32図１～17）

壺はおおまかに大型のもの（１～７）、中型のもの（８～15）、小型のもの（16～17）に分けられる。そのうち、６～11の資料に関しては底部資料のため口縁部は窺えないが、１～３と12～17については、頸部と胴部の境界が明瞭ではないものと思われる。また、16、17に関しては小振りの資料であり、器種としては瓶になる可能性も高い。

2. 甕（第33図18）

凸帯の上部に描かれる文様は一部分しか観察できないが、波状文である可能性が高く、水甕であると思われる。

3. 鉢（第33図19）

擂り鉢の可能性も考えられるが、細片のため櫛目が観察できず鉢とした。

4. 擂鉢（第33図20～27）

擂鉢はおおまかに口縁部下の肥厚が大きいもの（20）、鋭角に胴部へ移行するもの（21～23）、緩やかに胴部へ移行するもの（24～25）に分けられる。

5. 火入れ（第33図28）

今回の調査では一点のみの出土である。

＜参考文献＞

・『那覇市文化財調査報告書第23集　壺屋古窯群Ⅰ』　那覇市教育委員会　1992年

・『那覇市文化財調査報告書第27集　壺屋古窯群Ⅱ』　那覇市教育委員会　1995年

・『那覇市文化財調査報告書第38集　壺屋古窯群Ⅲ』　那覇市教育委員会　1997年

・『沖縄県文化財調査報告書第111集　湧田古窯跡（Ⅰ）』　沖縄県教育委員会　1993年

・『沖縄県文化財調査報告書第121集　湧田古窯跡（Ⅱ）』　沖縄県教育委員会　1995年

・『沖縄県文化財調査報告書第136集　湧田古窯跡（Ⅳ）』　沖縄県教育委員会　1999年

・『平成10年度企画展　沖縄のやきもの－南海からの香り－』　佐賀県立九州陶磁文化館　1998年

・照屋善義『沖縄の陶器　技術と科学』　2000年

第12表ａ　沖縄産無釉陶器観察一覧

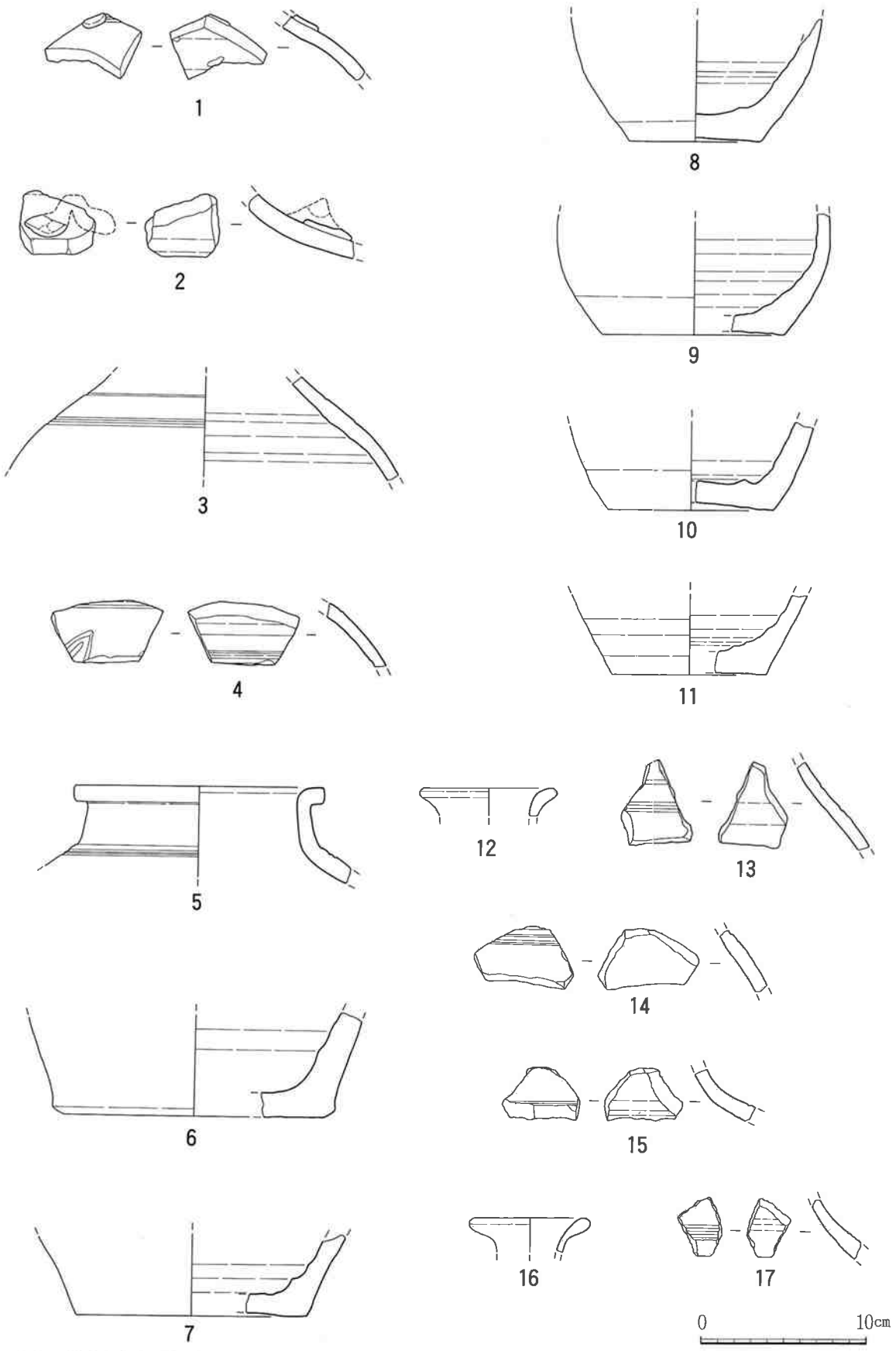
挿図 図版	番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出土地
第32図 図版14	1	壺	－ － －	外面は轆轤目をなで消しているが、内面は轆轤目が残る。２条の凹線を廻らし、その後に耳を貼り付ける。	表採
	2		－ － －	外面、内面ともに丁寧な調整が施し、耳を貼り付ける。	表採
	3		－ － －	外面は丁寧に轆轤目を消し、４条の凹線を廻らす。内面は轆轤目が明瞭に残る。	表採
	4		－ － －	外面は丁寧に轆轤目を消し、内面は轆轤目が明瞭に残る。頚部周辺に１条の凹線を廻らす。また、その下に「判」と思われる凹線が見えるが、全形が窺えない。	表採
	5		15.4 － －	外面は丁寧に轆轤目をなで消す。内面は轆轤目が若干残るが、丁寧な作りである。頚部周辺に2条の凹線を廻らす。	表採
	6		－ － 7.8	外面は削りを入れ、内面は轆轤目が明瞭に残る。底部外面は丁寧に研磨される。	表採
	7		－ － 14.0	外面は、調整がしっかりしていなく、内面も轆轤目が明瞭に残る。	Ａ－10 Ⅰ層
	8		－ － 8.0	外面は削りを入れ、内面は轆轤目が明瞭に残る。	表採
	9		－ － 11.0	外面は削りを入れ、内面は轆轤目が明瞭に残る。残存部分の上部がすぼまる。	表採
	10		－ － 10.0	外面に削りを入れるが雑で、内面も轆轤目も明瞭に残る。	表採
	11		－ － 9.4	外面に削りを入れるが雑で、内面も轆轤目も明瞭に残る。	表採
	12		8.4 － －	外面、内面ともに丁寧な調整を施す。	Ａ－９ Ⅰ層
	13		－ － －	外面は丁寧に轆轤目をなで消す。内面は轆轤目が若干残るが、丁寧な作りである。頚部周辺に３条の凹線を廻らす。	表採
	14		－ － －	外面は丁寧に轆轤目をなで消す。内面は轆轤目が若干残るが、丁寧な作りである。頚部周辺に４条の凹線を廻らす。	Ａ－10 Ⅰ層
	15		－ － －	外面は丁寧に轆轤目を消し、頚部周辺に1条の凹線を廻らす。内面は轆轤目が明瞭に残る。	Ｂ－９ Ⅰ層
	16		7.4 － －	外面、内面ともに丁寧な調整を施す。	表採
	17		－ － －	外面は丁寧に轆轤目をなで消す。内面は轆轤目が若干残るが、丁寧な作りである。頚部周辺に５条の圏線を廻らす。	Ａ－９ Ⅰ層

第12表ｂ　沖縄産無釉陶器観察一覧

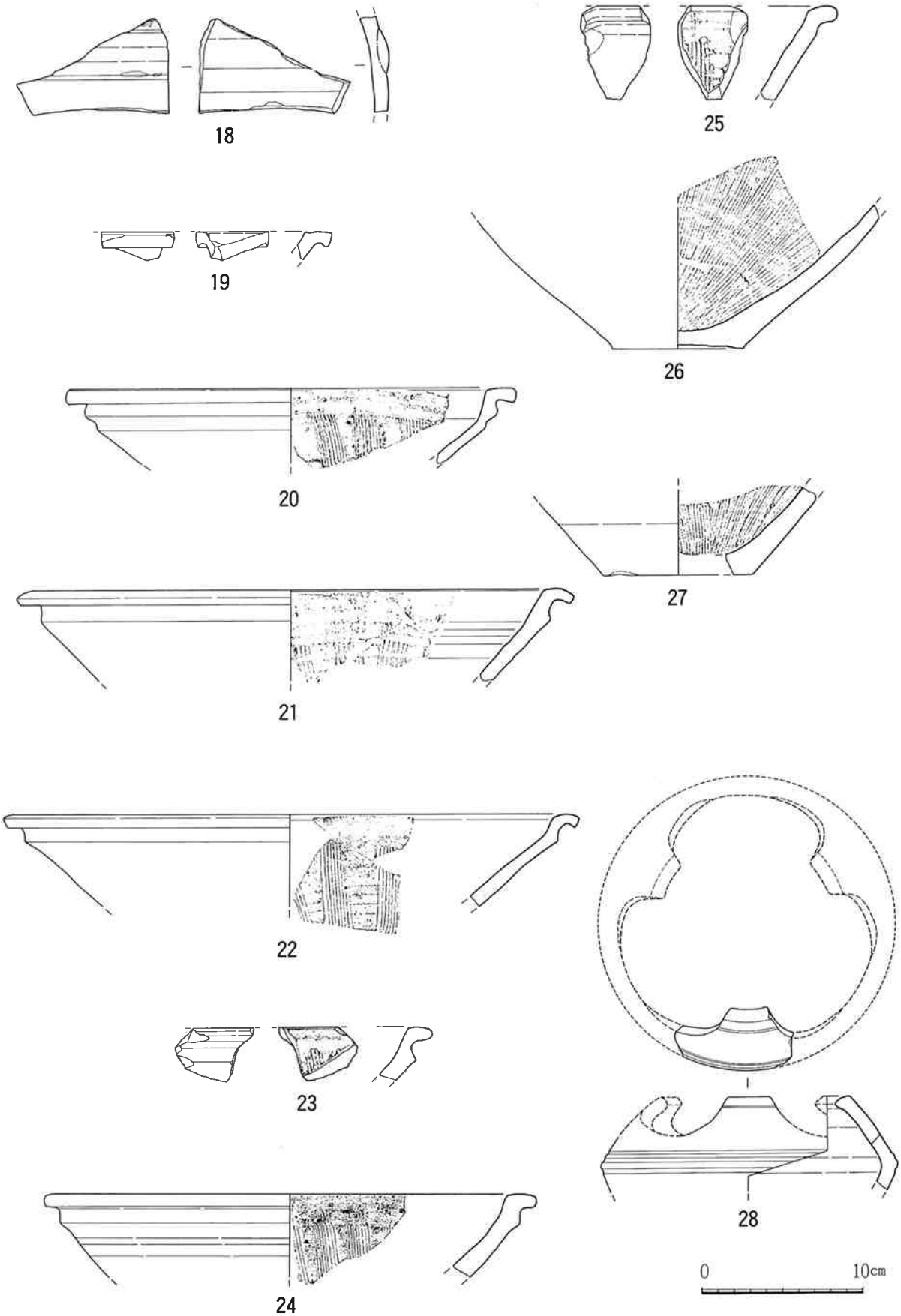
挿図 図版	番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出土地
第33図 図版14	18	甕	－ － －	外面は丁寧に轆轤目をなで消す。内面は轆轤目が若干残るが、丁寧な作りである。幅３ｃｍ程の凸帯を１条廻らし、その上に文様を施す。	表採
	19	鉢	－ － －	外面、内面ともに丁寧な調整を施す。	表採
	20	擂鉢	28.6 － －	外面口縁部下に肥厚が１条確認でき、胴部へ移る稜も明瞭である。内面は１単位10本の櫛目を施し、口縁部周辺に達した櫛目は2.5cmの幅でなで消す。	表採
	21		35.6 － －	外面、内面ともに調整が雑であり、轆轤目が残る。櫛目は１単位６本であるが、やや雑で、口縁部周辺に達した櫛目は4.0cmの幅でなで消される。	Ａ－９ Ⅰ層
	22		36.4 － －	外面は轆轤目をなで消すが、内面は轆轤目が残る。櫛目は１単位８本であり、口縁部周辺まで達しておらず、なで消された形跡がない。	Ａ－10 Ⅰ層
	23		－ － －	外面、内面ともに丁寧な調整を施す。口縁部下に肥厚が１条確認できる。櫛目は確認できる範囲で１単位５本であり、口縁部周辺に達した櫛目は2.5cmの幅でなで消される。	Ａ－８ Ⅰ層
	24		15.5 － －	外面、内面ともに調整を施すも外面はわずかに轆轤目が残る。口縁部下に肥厚が１条確認できる。櫛目は１単位８本であり、口縁部周辺まで達した櫛目を2.0cmの幅でなで消す。また、全面に灰かぶりが見られる。	表採
	25		－ － －	外面は轆轤目をなで消すが、内面は轆轤目が残る。櫛目は確認できる範囲で１単位６本であり、口縁部周辺まで達した櫛目は2.7cm幅でなで消される。注口がつく。	表採
	26		－ － 8.2	外面は底部周辺を削るも外面、内面の調整は徹底せず、轆轤目が残る。櫛目は１単位10本であり、底部中央より口縁部にかけて一気に施す。	表採
	27		－ － 9.4	外面は削りを施し、内面は轆轤目を残す。櫛目は１単位６本である。	表採
	28	火入れ	12.8 － －	外面はなで調整を施し、轆轤目はほとんど確認できないが、内面は轆轤目が残る。肩部際上部に２本、下部に１本の凹線を廻らす。最大径18.8cm。	表採

第13表　沖縄産無釉陶器出土状況

出土地＼器種			壺			甕	鉢		擂鉢			火入れ	不明		合計
			口	胴	底	胴	口	底	口	胴	底	口	胴	底	
A	8	Ⅰ層		2					1	1			5		9
	9	Ⅰ層	1	1			1		1				6		10
	10	Ⅰ層		2	1				1				5		9
A・B	10	石積											5		5
B	9	Ⅰ層		1									1		2
	14	Ⅰ層											1		1
C	10	Ⅰ層											1		1
堀込石組１		礫下											1		1
Pit	152	埋土											1		1
炉跡	14												1		1
石敷住居		Ⅰ層											1	1	2
		Ⅱd層											1		1
表　採			2	14	7	1	1	1	3	2	2	1	35	5	74
合　計			3	20	8	1	2	1	6	3	2	1	64	6	117



第32図　沖縄産無釉陶器１　壺



第33図　沖縄産無釉陶器 2　甕（18）、鉢（19）、擂鉢（20～27）、火入れ（28）

K　土器

土器は総数で7,745点出土した[1]。表採が３分の１程度を占め、石敷住居第Ⅰ層からの出土が多い。

これまで宮古諸島における土器型式は「宮古式土器」などが設定されており、今回出土した土器はこれらの範疇に含まれるものと考えられる。本報告では胎土に着目して以下の分類に依った。

Ⅰ類：砂泥質の胎土。

Ⅱ類：砂質の胎土。

Ⅲ類：その他の種類を一括した。特徴的なタイプでは、泥質の胎土で混和材に貝殻片を含み、器壁は厚いタイプがある。また、器面があばた状を呈しパナリ焼に類するタイプもこれに含めた。

Ⅰ～Ⅲ類のいずれも壺形が主体となるが、器形の変化が把握できる資料は少ない。そのため、各タイプで同一の器形分類を用いることにする。その他の器種として鉢、鍋などがあるが、全体をうかがうことのできる資料が少ないことから、まとめてあつかう。宮古式土器の特徴に肩部に波状文を施す例があるが、有文資料は極めて少なかった。

壺形は口縁部の形態に着目し、下記のとおり分類した。

１種：口縁部が直立する。

２種：口縁部先端が角をもって外反する。

３種：口縁部先端が曲線的に外反する。

４種：その他。

鍋・鉢形も壺形と同様に口縁部の形態に着目し、下記のとおり分類した。

１種：口縁部が直口する。

２種：口縁部が角をもって外反する。

３種：口縁部が曲線的に外反する。

４種：その他。

底部はいずれの器種に含めてよいか不明な資料が多いことから、すべての器種を統一して下記のとおり分類した。

１種：胴部への立ち上がりの角度がきつい。

２種：胴部への立ち上がりの角度が弱い。

３種：くびれ平底を呈する。

４種：外底面が上げ底状を呈する。

わずかであるが外耳を貼付する資料がみられる。これも統一して下記のとおりとした。

１種：角状に伸びる。

２種ａ：凸レンズ状をなす。

２種ｂ：凸レンズ状で、「へ」の字状を呈する。

３種：方形をなす。

以下、各種類について述べる。本文では特徴的な部分を上げ、詳細は観察表で述べる。

Ⅰ類

Ⅰ類は壺形を主体に、鍋・鉢、皿形などが得られた。壺形は第34図１～９である。全形をうかがうことのできる資料はないが、肩部がナデ肩をなすタイプのみで同図３・６は丸みを帯びた器形をなすものと思われる。第34図10～第35図２は鍋もしくは鉢形である。第34図10は深い器形になるものと思われ、鍋形に含めてよいであろう。皿は浅い器形と思われるものとし、第35図３～５である。

底部は第37図１～６・第38図６・７・16である。

外耳は第39図１～３である。

Ⅱ類

同様に壺形が主体になるものと思われ、鍋・鉢形がみられる。第35図６～９は壺形である。全体をうかがうことのできる資料は少ないが、同図８は丸みを帯びた器形をなすものと思われる。鉢もしくは鍋形は第36図１～９である。同図１・２は口縁部、胴部が屈曲するタイプで、同図７～９は口縁部を肥厚させるタイプである。第35図10・11は鍋形に含めたが、甕形に近い器形である。

底部は第37図７～12・第38図11である。

Ⅲ類

本来は細分が必要であるが、Ⅰ・Ⅱ類に含まれないタイプを一括して扱った。量的にみても少ない。確認できる器種は壺、鉢・鍋、皿で第36図10～13に示した。

第38図１などは泥質の胎土で、混和材に細かな貝殻片を含む。器壁は１㎝前後と厚く前二者と異なる。このようなタイプが比較的まとまって得られている。

底部は第38図１～５・８～10・17である。同図５はパナリ焼に類し、器面はポーラスである。

外耳は第39図４～８である。２種が中心で、３種がわずかにみられる。

<注>

1）土器は細片が多いことから集計においては３㎝以下の破片を割愛した。そのため、実数はさらにこれを上回っている。

第14表ａ　土器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	部位	分類		計測値	特　　徴	出土地
第34図 図版15	1	壺	口	Ⅰ	1	－	口縁は直立、口唇部は舌状にする。混和材に粗い白色粒。調整は内外とも方向不明のナデ。	表採
	2		口			口径 9.7㎝	口縁は若干内傾。口唇部は平坦にする。器面調整は方向不明のナデ。混和材に褐色粒、黒色微粒を含む。	石敷住居 Ⅰ層
	3		口～肩		2	口径 16.3㎝	頸部が直立し口縁は弱く外反。口唇部は平坦にする。混和材に褐色粒を多く含み、黒色微粒はわずか。調整は内面に斜位のナデ。	表採
	4		口			口径 19.0㎝	頸部が長く伸び口縁は弱く外反。内外とも横位のナデが明瞭に残る。混和材に白色微粒をわずかに含む。	石敷住居 Ⅱd層
	5		口			－	頸部は短く口縁の外反は弱い。口唇部は三角形。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材に褐色粒をわずかに含む。	石敷住居 礫直上
	6		口～肩		3	口径 19.2㎝	頸部が曲線的に屈曲する。口唇部は平坦。内外とも横位及び斜位のナデが明瞭の残る。薄手で堅緻。混和材に白色粒を含む。	石敷住居 Ⅱd層
	7		口		4	－	頸部を形成しない。口縁が「く」の字に折れ口唇部は舌状をなす。器面調整は方向不明のナデ。混和材に白色微粒を含む。	Ａ－９ Ⅰ層
	8		口			口径 10.9㎝	口縁が玉縁状を呈する。器面調整は方向不明のナデ。混和材に褐色粒を含む。	土坑２ 埋土
	9		肩～胴		不明	－	かなりナデ肩の器形。器面調整は内面は横位のナデ。混和材に白色微粒を多く含み、粗い褐色粒をわずかに含む。	土坑２ 埋土
	10	鍋	口～胴	Ⅰ	－	口径 26.2㎝	全体的に丸みを帯びた器形で、口縁部は曲線的に外反する。口唇部は丸み。器面調整は外面は丁寧な横位のナデで、外面はススが付着している。混和材に白色微粒を多く含む。	石敷住居 Ⅰ層
	11	鍋or鉢	口	Ⅰ	4	－	口縁部を花鉢状に肥厚させる。器面調整は内面は横位のナデ。混和材に粗い褐色粒をわずかに含む。	石敷住居 土器集中
	12		口			－	口縁部が丸みを帯びて肥厚する。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材に白色微粒を含むが目立たない。	Ａ－８ Ⅰ層
	13		口			－	口縁が内傾する器形。内外ともに指ナデの痕が明瞭。二次穿孔を施す。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材に粗い白色粒をわずかに含む。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
第35図 図版15	1		口		1	－	口縁に粘土帯を貼付。口縁が開く器形で、口唇部は舌状。器面調整は内外とも方向不明のナデ。混和材は白色微粒、粗い褐色粒をわずかに含む。	石敷住居 Ⅱd層
	2		口		4	－	口縁が逆台形を呈する。器面調整は不明。混和材に粟粒状の細粒を多く含む。	表採

第14表ｂ　土器観察一覧

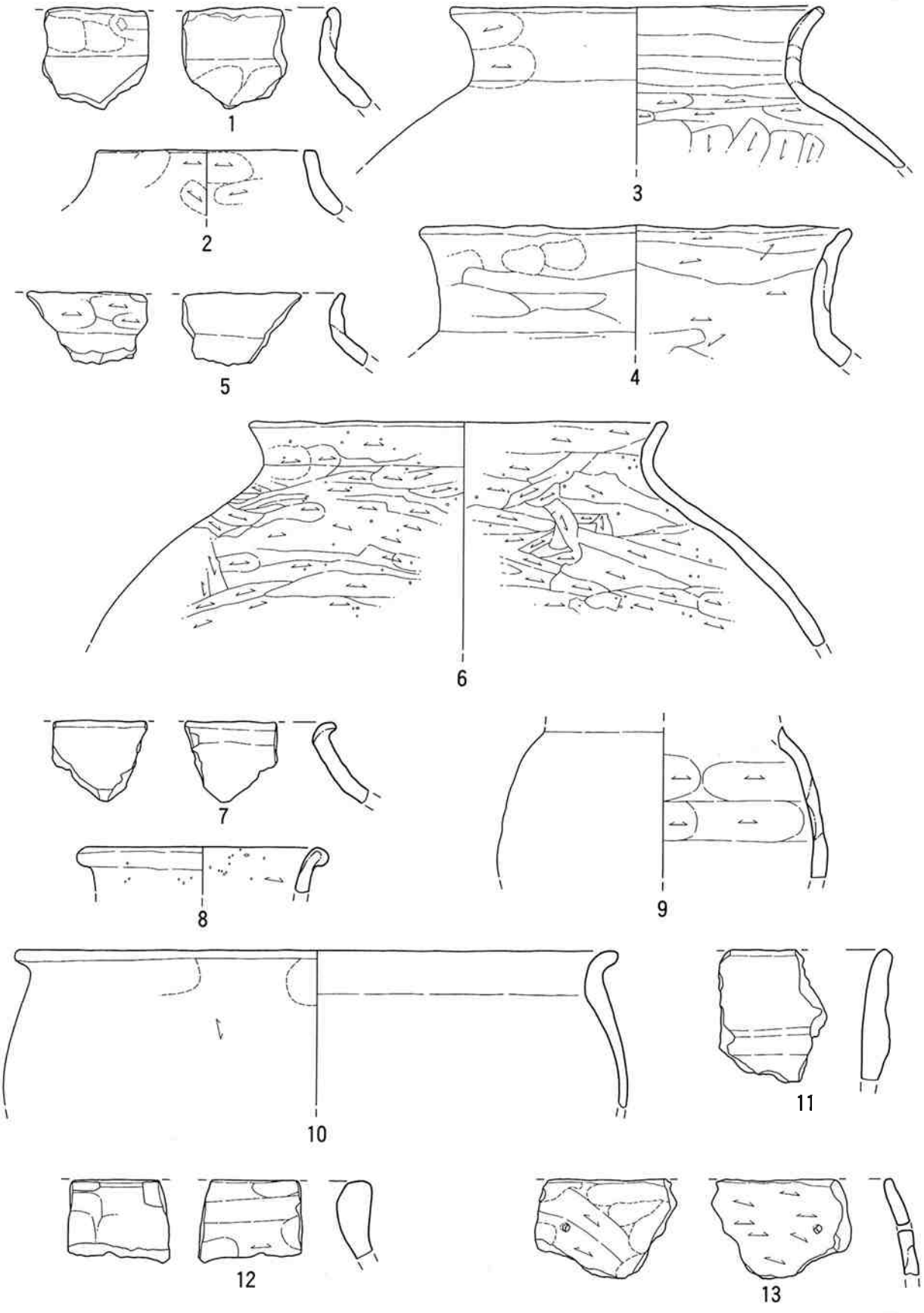
挿図 図版	番号	器種	部位	分類		計測値	特　　徴	出土地
第35図 図版15	3	Ⅲ	口	Ⅰ	－	－	口縁が丸みをもって弱く曲がる。口唇は舌状。器面調整は方向不明のナデ。混和材は目立たない。	表採
	4	Ⅲ	口	Ⅰ	－	－	口縁が逆玉縁状を呈する。口唇は丸み。器面調整は内面は方向不明のナデ。混和材に粗い褐色粒を多く含む。	Ａ－８ Ⅰ層
	5	Ⅲ	口	Ⅰ	－	－	口縁がやや直に立つ。Ⅲよりも深く鉢に含めてよいと思われる。器面調整は内面は方向不明のナデ。混和材に粗い褐色粒をわずかに含む。	表採
	6	壺	口	Ⅱ	1	口径 15.3cm	口縁は若干玉縁状で、口唇は丸み。器面調整は内外とも方向不明のナデ。混和材はわずかに粗い褐色粒を含む。かなり堅緻。	表採
	7	壺	口	Ⅱ	1	－	頸部がやや長く伸び、口唇は舌状。器面調整は内外とも方向不明のナデ。混和材に粗い褐色粒を多く含む。	石敷住居 礫直上
	8	壺	口～肩	Ⅱ	2	口径 21.7cm	頸部がやや丸みを帯びて屈曲する。口唇は丸み。器面調整は内外とも方向不明のナデ。混和材は褐色粒をわずかに含む。	石敷住居 炉跡
	9	壺	口	Ⅱ	3	口径 13.1cm	頸部が曲線的に屈曲し、口縁が玉縁状を呈する。器面調整は内外とも方向不明のナデ。混和材に白色微粒を多く含み、褐色粒はわずか。	石敷住居 Ⅱd層
	10	甕	口～胴	Ⅱ	－	口径 13.1cm	口縁がすぼまる器形である。口唇部は丸み。きわめてナデ肩。器面調整は外面は斜位のナデ。混和材に白色微粒を多く含む。	土坑１ 埋土
	11	甕	口～胴	Ⅱ	－	口径 10.2cm	小型の甕で口縁はわずかに外反する。口唇は舌状。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材に白色微粒を多く含む。	石敷住居 Ⅰ層
	12	不明	口	Ⅱ	－	－	壺であろうか。口縁が突起状に立ち上がり、口唇は舌状。器面調整は外面は方向不明のナデ。混和材に白色微粒を多く含む。	表採
第36図 図版16	1	鍋or鉢	口	Ⅱ	2	－	甕もしくは鉢。口縁が鍔状に強く折れ、Ｌ字に近い。口唇は平坦。若干胴部を「く」の字状に折る。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材は目立たない。	石敷住居 Ⅰ層
	2	鍋or鉢	口	Ⅱ	3	－	胴から口縁にかけて弱く屈曲する。口唇部は丸み。器面調整は内外とも方向不明のナデ。混和材に褐色粒をわずかに含む。	石敷住居 礫直上
	3	鍋or鉢	口	Ⅱ	1	－	口縁形態は不明であるが直立する器形であろうか。内外とも横位のナデを丁寧に施す。混和材に褐色粒をわずかに含む。	表採
	4	鍋or鉢	口	Ⅱ	1	－	口縁がよわく内彎する。口唇部は舌状。器面調整は内面は横位のナデ。混和材に白色微粒を多く含み、わずかに褐色粒。	表採
	5	鍋or鉢	口	Ⅱ	2	－	口縁をＬ字に折って形成。内外ともに横位のナデが明瞭。混和材に褐色粒をわずかに含む。	表採
	6	鍋or鉢	口	Ⅱ	2	－	胴から口縁にかけて弱く弓なりになる。口唇部は丸み。器面調整は不明。混和材に白色微粒を含むが目立たない。	表採
	7	鍋or鉢	口	Ⅱ	4	－	口縁が花鉢状に肥厚する。口唇部は舌状。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材に褐色粒をわずかに含む。	表採
	8	鍋or鉢	口	Ⅱ	4	－	口縁が花鉢状に肥厚するが、やや弱い。口唇部は丸み。器面調整は内外とも方向不明のナデ。混和材に白色微粒を多く含む。	表採
	9	鍋or鉢	口	Ⅱ	4	－	口縁が花鉢状の肥厚をなす。肥厚は方形に近い。口唇部は丸み。器面調整は外面は横位のナデ。混和材は褐色粒をわずかに含む。	表採
	10	壺	口	Ⅲ	2	－	頸部、口縁部が直線的に屈曲する。口唇部は舌状。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材に褐色微粒を含む。	Ａ－11 Ⅰ層
	11	甕	口	Ⅲ	－	口径 7.2cm	かなり小型の甕。口縁が弱く外反する。口唇部は舌状。器面調整は内外とも不明。混和材に白色微粒を多く含む。	石敷住居 Ⅱｃ層
	12	鍋or鉢	口	Ⅲ	1	－	口唇を折り返し外反状を呈する。器面調整は内外とも不明。混和材に白色微粒、褐色粒をわずかに含む。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	13	Ⅲ	口	Ⅲ	－	－	口唇部は舌状。器面調整は外面は横位のナデ。混和材に白色粒を多く含む。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
第37図 図版16	1	底部		Ⅰ	1	底径 14.0cm	底部から直線的に立ち上がる。器面調整は内外ともナデ。混和材に褐色粒、白色微粒をわずかに含む。	石敷住居 Ⅱc層
	2	底部		Ⅰ	1	底径 14.2cm	立ち上がりの部分がやや丸みを帯びる器形。器面調整は不明。混和材は目立たない。	石敷住居 Ⅰ層
	3	底部		Ⅰ	1	底径 11.8cm	底部から直線的に立ち上がる。器面調整は内外とも斜位のナデ。混和材に粗い褐色粒を含む。厚手で硬質。	表採
	4	底部		Ⅰ	1	底径 9.2cm	底部の屈曲が丸みを帯びる。器面調整は内底面にナデ。混和材は目立たない。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	5	底部		Ⅰ	1	底径 15.8cm	器面調整は方向不明のナデ。混和材は目立たない。	堀込石組１ 礫直上
	6	底部		Ⅰ	1	底径 15.2cm	器面調整は外面は斜位のナデ、内面は方向不明のナデ。混和材は白色微粒を含み、外底面に多量に付着する。	表採
	7	底部		Ⅱ	1	底径 13.7cm	底部から直線的に立ち上がる。器面調整は外面は方向不明のナデ。混和材に白色粒を含むが目立たない。	堀込石組１ 礫直上

第15表　土器出土状況

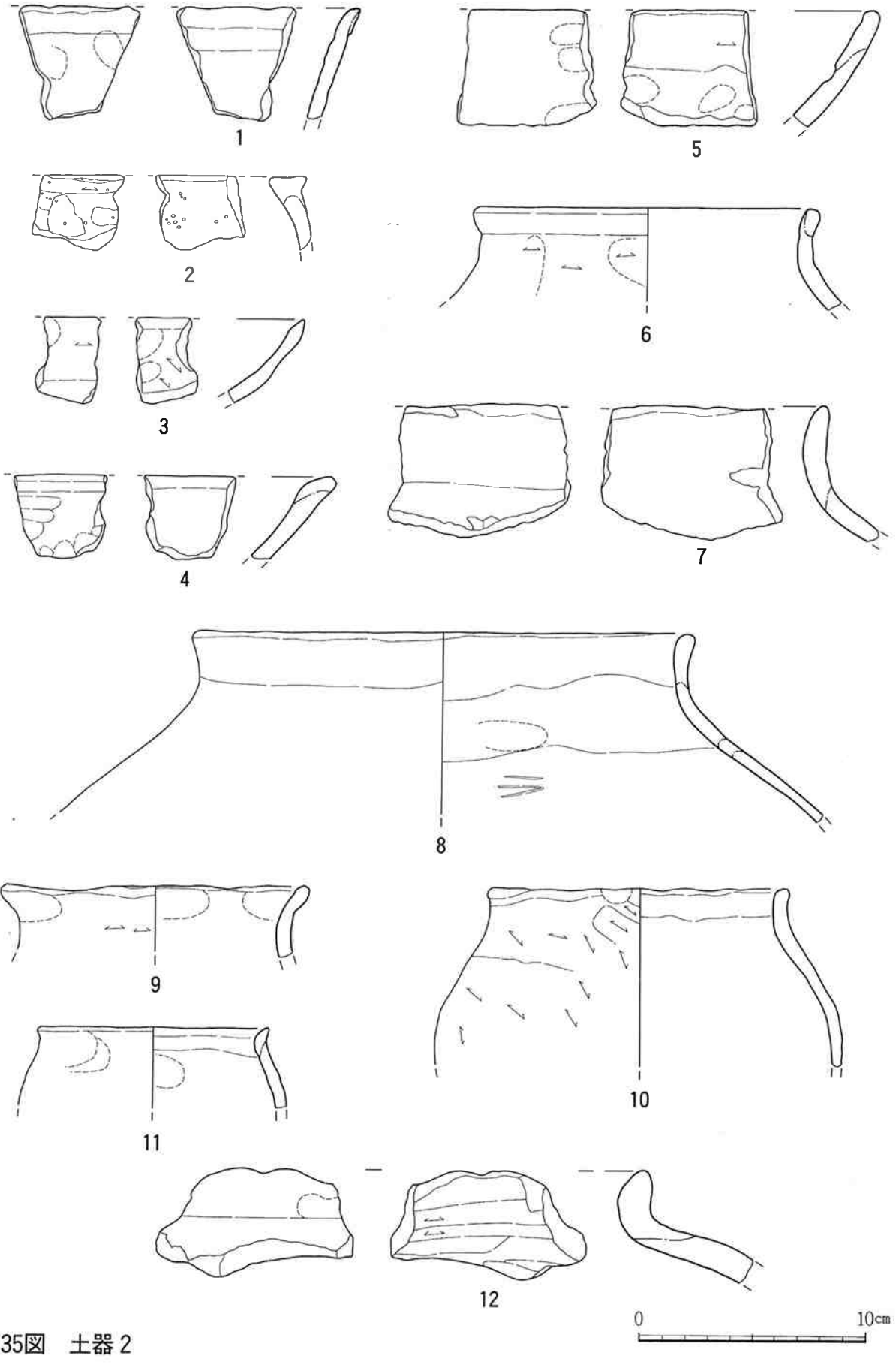
出土地		器種・分類	Ⅰ 壺 1 口	1 頸	2 口	3 口	4 口	不明 口	不明 頸	不明 耳	不明 胴	Ⅰ 鍋or鉢 1 口	1(有孔) 口	2 口	3 口	4 口	不明 口	不明 耳	Ⅲ 口	不明 口	不明 耳	不明 胴	不明 底	Ⅰ 小計	Ⅱ 壺 1 口	2 口	3 口	不明 口	不明 頸	不明 耳	不明 胴	Ⅱ 鍋or鉢 1 口	1(有孔) 口	2 口	3 口	4 口	不明 耳	甕 口	不明 口	不明 耳	不明 胴	不明 底	Ⅱ 小計	Ⅲ 壺 1 口	2 口	3 口	不明 口	不明 頸	不明 耳	Ⅲ 鍋or鉢 1 口	3 口	不明 耳	甕 口	Ⅲ 口	不明 耳	不明 胴	不明 底	Ⅲ 小計	合計
A	7	Ⅰ層															1						1																1	15	1	17														0	18
	8	Ⅰ層						3							1	1			1		90	3	99																33	3	36													1	1	136
	9	Ⅰ層	3				1	3												2	88	8	105								1								57	1	59				1								7	8	172
	9・10	Ⅰ層																			3		3																		0													0	3
	10	Ⅰ層													1			2			85	17	105	3	8						3					1		7	4	557	41	624												9	2	11	740
	11	Ⅰ層																1		1	17	2	21															2		75	2	79		1											1	101
	12・13	Ⅰ層																			3	2	5																		1		1													0	6
	14	Ⅰ層						1			1								1		15	2	20																		1		1													0	21
	15	Ⅰ層							2		4										39	6	51																		40		40												2	2	93
	20	Ⅰ層																			12	2	14																		9	1	10												4	4	28
		Ⅱ層															1				4	1	6																		11	3	14												3	4	10	30
A・B	10	石積	4																	2	1	35	8	50			2		4			5								1	175	14	201												1		1	252
B	9	Ⅰ層																			23	3	26																		5		5													0	31
	10	Ⅰ層						1													40		41																		71	4	80												1	1	122
	12	Ⅰ層																					0																		13	1	14												1	1	15
	14	Ⅰ層																			64		64																		71	2	73													0	137
	14・15	Ⅰ層																			4	1	5																		3		3													0	8
	20	Ⅰ層																			5	2	7								1								1	13		15													0	22
		Ⅱ層																		1			1																			0													0	1
C	9	Ⅰ層																			1	2	3																			0												1	1	4
	10	Ⅰ層		1																1	2	27	3	34			1												1	83	1	86												1		1	121
堀込石組1		埋土						1													22	1	24																			0												1	1	25
		礫直上																			8	2	10																		1	2	3												1	1	14
		礫下																			9	2	11																			0												10	10	21
堀込石組2		Ⅱ層																			8	1	9																		1	1													0	10
		Ⅲ層																			10	3	13																			0													0	14
		埋土																			9	4	13																			0												1	1	14
		礫直上																			1	1	2																			0													0	2
		礫下																			8		8																			0													0	8
土坑	1	埋土	3					1			5										16	5	30								1						3				1		191	9	205													0	235
	2	埋土					1			1											26	4	32																			2	2					1								1	2	36
	4	埋土																			6	1	7																			0													0	7
	5	埋土																			14		14																		2	1	3													0	17
	6	埋土																			11	1	12																			1	1												2	2	15
	7	埋土																			2		2																		1		1													0	3
	8	埋土								6												1	7																			0													0	7
	9	埋土																			4		4																			0													0	4
	11	埋土																			5	2	7																		1		1												1	1	9
Pit	26	埋土																			15		15																		1		1													0	16
	59	埋土																			2		2																		1		1													0	3
	69	埋土																			4		4																			0													0	4
	78	埋土																			1		1																			0													0	1
	126	埋土																			1		1																			0													0	1
	152	埋土	1																		2		3																			0													0	3
	154	埋土																			3		3																			0													0	3
	160	埋土																			3	2	5																			0												1	1	6
	181	埋土																			2		2																			0													0	2
	189	埋土																				1	1																			0													0	1
	191	埋土																			1		1																		3		3													0	4
	192	埋土																			5	1	6																			0												1	1	7
	193	埋土																			1		1																			0													0	1
	195	埋土																			2	1	3																		1		1													0	4
	229	埋土																					0																			0												1	1	1
	239	埋土																			1		1																			0													0	1
炉跡	8		3		1			1			4										16	2	27					2			1										69	7	79												1	1	107
	14		1																				1																			1													0	2
石敷住居		Ⅰ層	14					18			12					1	4				545	77	671	15		2		9			19		1			1	1		269	25	342				1			3				17	3	24	1037
		礫直上	3		1			3													45	2	54	3				2					1						29	7	42												7	1	8	104
		Ⅱa層	1					1												1	240		243															1	2	7	10	2	1		1		4						10	8	26	279
		Ⅱc層	3		2	2		1			6			1	1		1				245	20	282	3							1								75	11	90							1		2	3	1	7	379
		Ⅱd層	2		1	2			3		3						1				115	14	141			1												5	22		28					8		5				6		19	188
		Ⅱe層																					0																		2	2	1			1		3				1	14	20	22
		Ⅱf層																			5		5										1							1		2												4	4	11
		Ⅱ(不明)層				1		2							1						121	19	144																	58	2	60				1		1	1	3		1	2	51	14	74	278
		土器集中	1					3			4				1						11	4	24	6				1			3								158	10	178													0	202
		炉跡															1				5		6	2	1			1												30		34													0	40
表採			20		1			14	1		9	1		1	1		6	2	11		523	54	644	21				51	5		19	2	4		3	5		33	4	1515	147	1809							3			1	43	28	75	2528
不明																					7		7																1		1													0	8
合計			59	1	6	5	2	1	55	3	7	48	1	1	4	4	2	17	3	18	5	2635	287	3164	53	9	6	0	70	5	1	53	2	8	2	3	8	2	49	15	3666	308	4260	1	3	1	1	4	1	13	1	21	1	1	6	203	64	321	7745

第14表ｃ　土器観察一覧

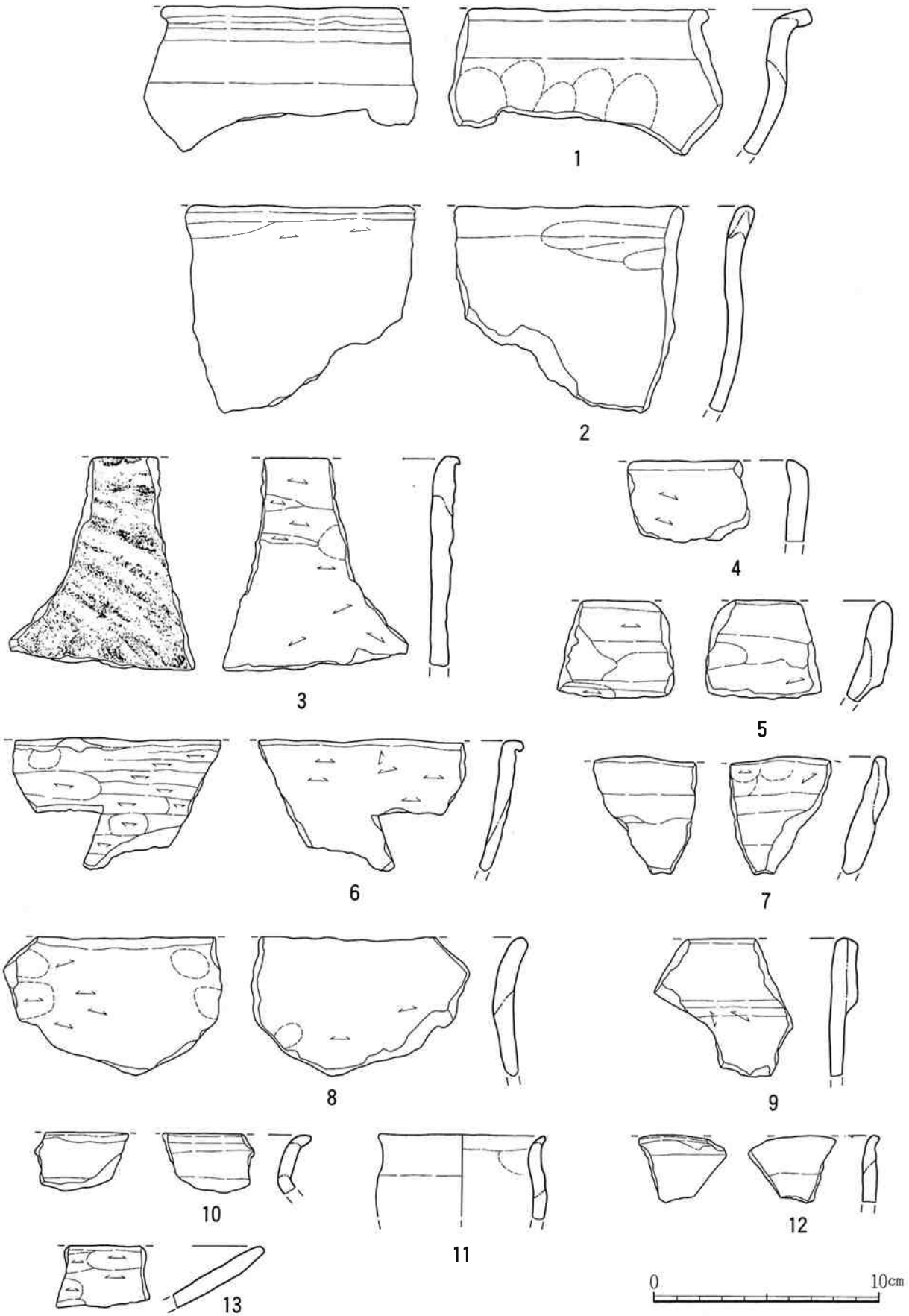
挿図 図版	番号	器種	部位	分類		計測値	特　　徴	出土地
第37図 図版16	8	底部		Ⅱ	1	底径 12.5cm	底部から直線的に立ち上がる。器面調整は内外とも粗いナデ。混和材に白色粒を多く含む。	石敷住居 土器集中
	9					底径 14.4cm	底部から直線的に立ち上がり、胴上部で丸みを帯びる器形。壺の底部と思われる。器面調整は内外ともナデ。混和材に白色微粒を多く含むが目立たない。	Ａ－８ Ⅰ層
	10					底径 11.4cm	立ち上がりの部分が丸みを帯びる。内面は方向不明のナデ。混和材に褐色粒をわずかに含む。	土坑１ 埋土
	11					底径 6.6cm	底部から直角に立ち上がる。小型の器種に属する。器面調整は外底面にナデ。混和材に白色粒を含むが目立たない。	Ａ－10 Ⅰ層
	12					底径 5.5cm	底部から直線的に立ち上がる。小型の器種。器面調整は内底面にナデ。混和材は目立たない。	Ｃ－10 Ⅰ層
第38図 図版17	1			Ⅲ	1	底径 11.5cm	底部から直角に立ち上がる。壺もしくは甕と思われる。器面調整は内外ともに横位のナデ。混和材は貝殻？片を多く含む。比較的堅緻。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	2					－	底部から直角に立ち上がる。厚みのある底部。器面調整は外面は横位のナデ。混和材に貝殻？片を含む。	表採
	3					底径 14.5cm	わずかに外に開く器形。器面調整は内底面にナデ。混和材に白色微粒を含む。	堀込石組２ 埋土
	4					底径 16.0cm	立ち上がりの部分が丸みを帯びる。器面調整は外面は横位のナデ。混和材に褐色粒をわずかに含む。	Ａ－20 Ⅱ層
	5					底径 16.7cm	底部からきつめに立ち上がる。器面調整は内外に条痕が残る。混和材に白色粒を含むが目立たない。器面はポーラスでパナリ焼に含まれると思われる。	表採
	6			Ⅰ	2	底径 14.8cm	緩く直線的に開く器形。器面調整は不明。混和材はわずかに白色微粒を含む。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	7					－	緩く直線的に開く器形。内面はナデ調整が明瞭。混和材は目立たない。堅緻。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	8			Ⅱ	2	底径 12.6cm	緩やかに開く器形で、底面の器厚は厚く堅緻。器面調整は内面にナデ。混和材に白色粒を含むが目立たない。	Ａ－９ Ⅰ層
	9					底径 10.4cm	緩やかに開く器形で、底面の器厚は比較的薄手だが胴部は厚くつくる。器面調整は不明。混和材に褐色粒をわずかに含む。	炉跡８
	10					底径 13.0cm	緩やかに開く器形。器面調整は不明。混和材に白色微粒を多く含むが目立たない。	石敷住居 土器集中
	11					底径 6.4cm	くびれ平底状を呈するもので、底径は小さく厚手。器面調整は内面はナデ。混和材に白色微粒を多く含み、褐色粒をわずかに含む。	表採
	12					底径 10.3cm	くびれ平底状を呈するもので、底径は中程度で薄手。器面調整は不明。混和材に褐色粒を多く含む。	炉跡８
	13					底径 11.6cm	くびれ平底状を呈するもので、底径は大型で薄手。器面調整は内外ともナデ。混和材に白色微粒、褐色粒を含む。	土坑２ 埋土
	14					底径 13.5cm	くびれ平底状を呈するもので、底径は大型で厚手。器面調整は内外ともナデ。混和材に粗い褐色粒を含む。	堀込石組２ Ⅱ層
	15					底径 14.8cm	くびれ平底状を呈するもので、底径は大型で薄手。器面調整は内面はナデ。混和材に粗い褐色粒を含む。	石敷住居 Ⅰ層
	16			Ⅰ	3	底径 8.6cm	脚台上を呈するもので、底面は薄い。接合部分から剥落か。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材に褐色粒、粟粒状の白色粒を含む。	石敷住居 Ⅰ層
	17			Ⅲ	4	底径 8.2cm	脚台上を呈するもので、底面は胴部に比べてきわめて薄い。接合部分から剥落か。器面調整は不明。混和材は目立たない。	Ｃ－９ Ⅰ層
第39図 図版17	1	耳		Ⅱ	1	－	細身で長く突出するタイプ。器面調整は内外ともナデ。混和材に褐色粒を含む。	表採
	2					－	やや太めで長く突出するタイプ。一部は焼成時の破損。器面調整は内外ともナデ。混和材に粗い褐色粒を含む。	表採
	3					－	器面調整は外面はナデ。器面調整は内面は横位のナデ。混和材にわずかに白色微粒を含む。	表採
	4			Ⅲ	2 a	－	横に長くのび凸レンズ状のタイプ。器面調整はナデ。混和材に貝殻？片を含む。	石敷住居 Ⅱc層
	5				2 b	－	横に長くのび、「へ」の字状をなすタイプ。器面調整は不明。混和材は貝殻？片を含む。	石敷住居 Ⅱ(不明)層
	6					－	横に長くのび（前者より短い）、「へ」の字状をなすタイプ。器面調整は不明。混和材に貝殻？片を含む。	石敷住居 Ⅱc層
	7				2 a	－	横に長くのび凸レンズ状のタイプ。器面調整は内外ともナデ。混和材に粗い白色粒を多く含む。	表採
	8				3	－	方形のタイプ。器面調整は内外ともナデ。混和材はわずかに貝殻？片を含む。	石敷住居 Ⅱe層



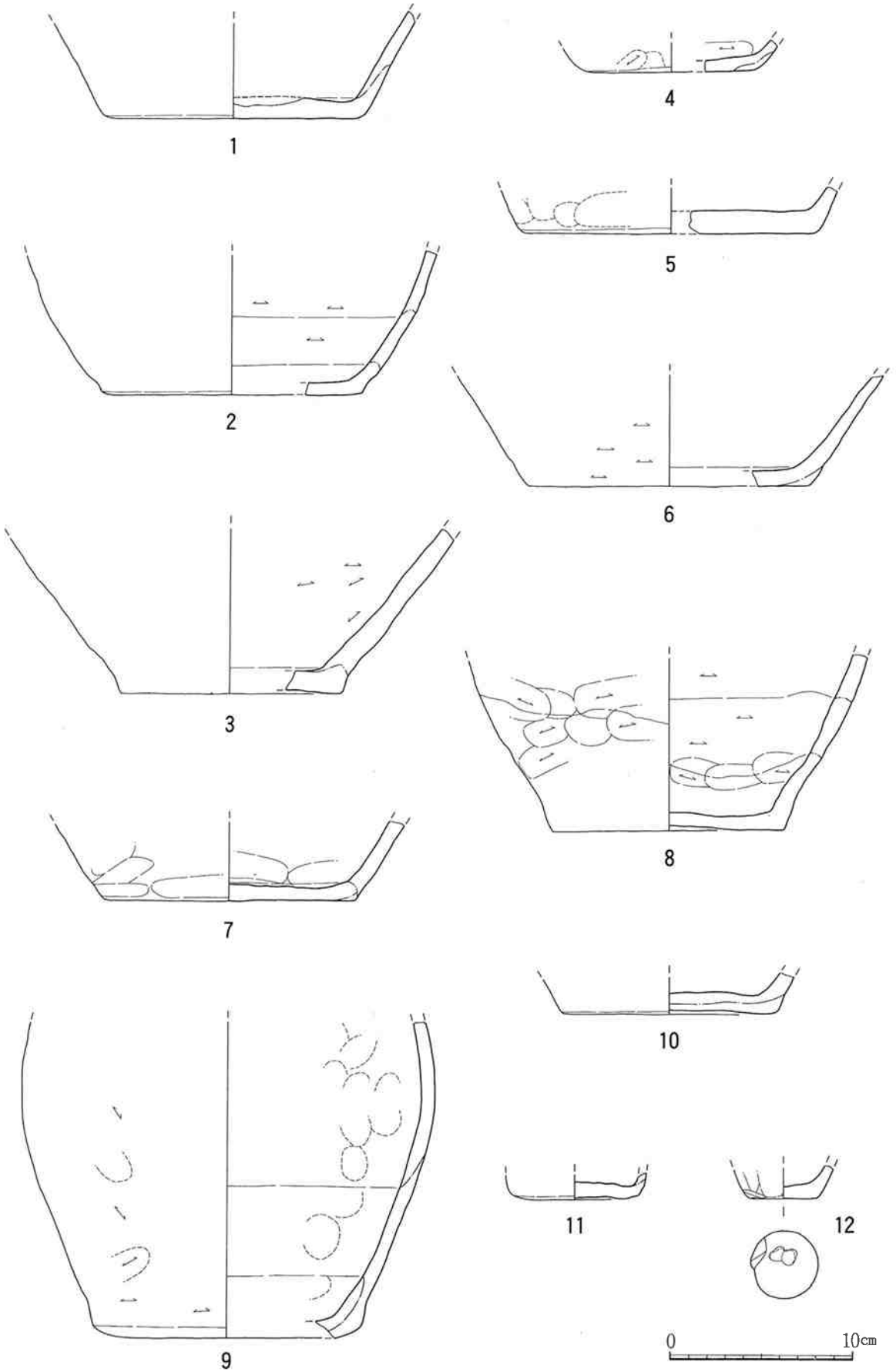
第34図　土器１



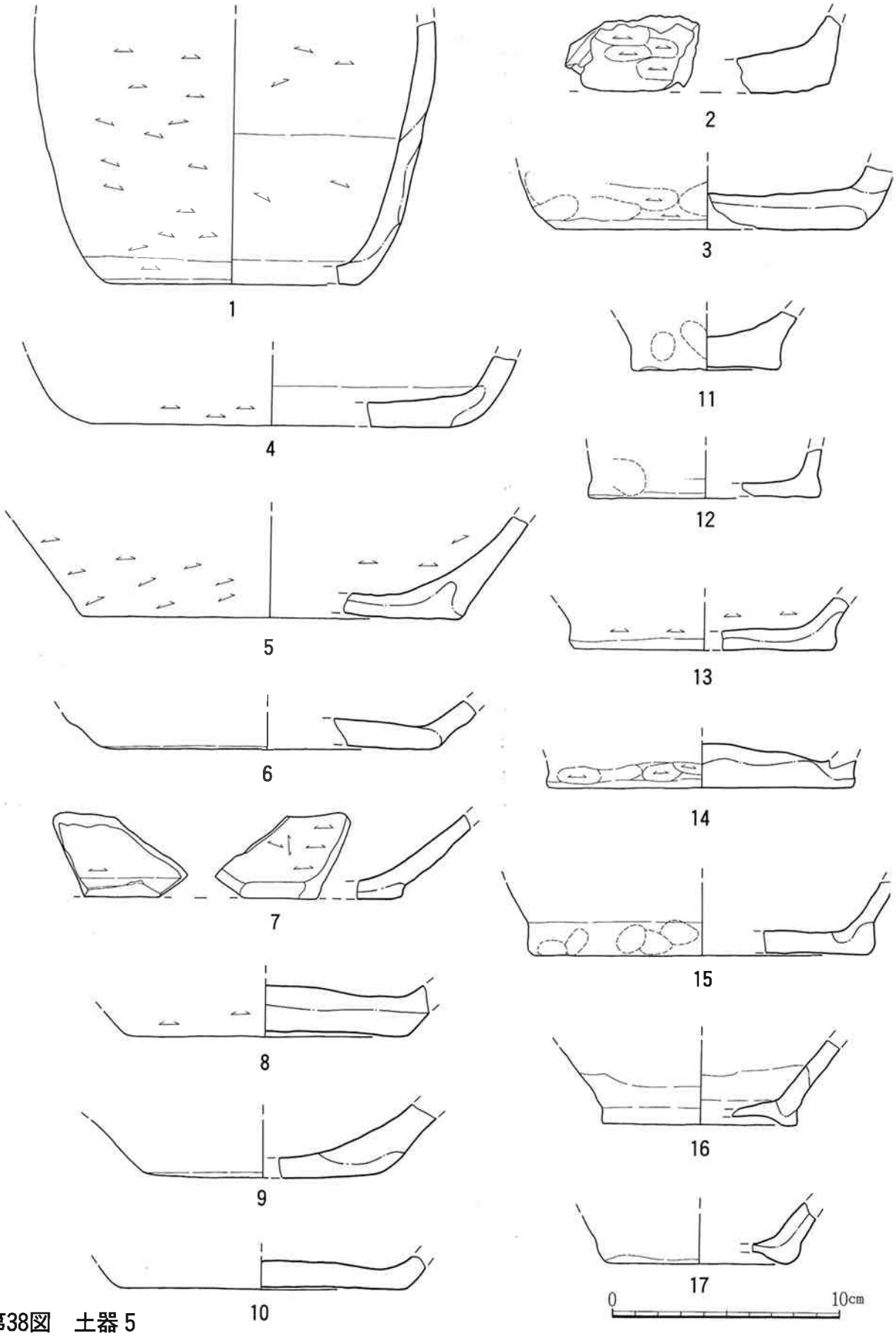
第35図　土器２



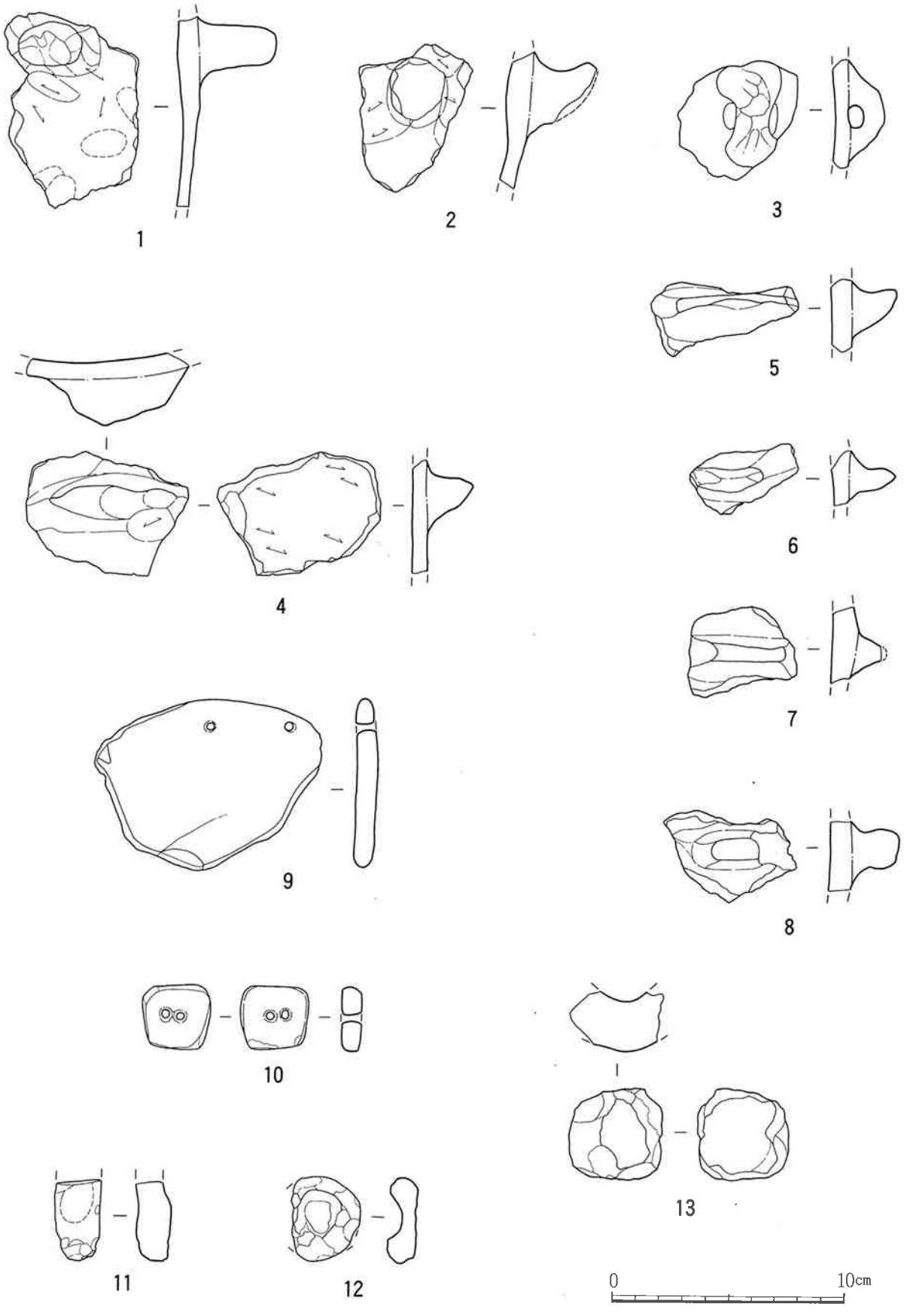
第36図　土器 3



第37図　土器 4



第38図　土器 5



第39図　土器６・土製品

L　土製品

土製品は第39図９～13である。同図９・10は土器片を二次利用した有孔製品で、同図11～13は用途不明の製品である。

第16表　土製品観察一覧

挿図 図版	番号	計　測　値	特　　徴	出土地
第39図 図版17	9	縦：7.5cm　横：9.9cm 厚さ：0.9cm　重さ：67.8g	二次利用の有孔製品。２孔を穿つ。水磨を受けた楕円形の土器片を利用している。	表採
	10	縦：2.8cm横：2.9cm 厚さ0.9cm重さ：9.3g	二次利用の有孔製品。２孔を穿つ。縁辺を研磨する。いびつな方形を呈する。	堀込石組２埋土
	11	長さ：3.0cm　厚さ：1.5cm 重さ：10.4g	棒状製品。本来の形状は不明であるが、土錘状の形であろうか。断面形は楕円形。	不明
	12	縦：3.7cm　厚さ：1.2cm 重さ：13.5g	表面を窪ませた製品。用途は不明。一部は破損しており、本来は円形か。	A－９ Ⅰ層
	13	厚さ：1.2cm　重さ：37.5g	本来の形態は不明。筒状をなすものであろうか。	表採

M　玉（第40図１、２）

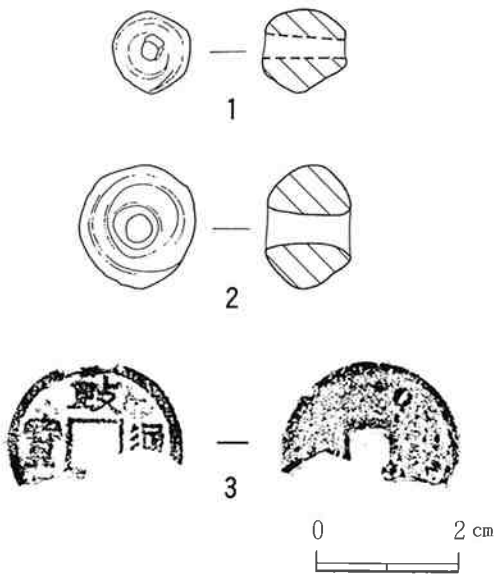
玉は２点出土している。両者とも石組遺構から出土しており、遺構の性格を考える上で注目される。

１は腹部がいびつに膨らんだ縦長の貝製玉である。表面は風化が激しいが、元来は横方向に条線がはしっていたものと思われる。色調は白色である。法量は、上および下面径が0.6cm、腹部径が1.1cm、孔径0.3cm、高さ1.2cm、重量1.2ｇ。堀込石組２埋土出土。

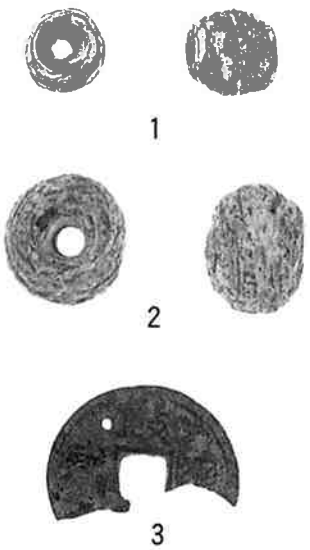
２はやや幅広のソロバン玉形の石製玉である。石材はガラス質で黒色のものと思われる。表面は風化が激しいが、横方向に線状痕が見られる。色調は、表面が残存している部分は黒色である。法量は上および下面径が0.8cm、腹部径が1.7cm、孔径0.4cm、高さ1.2cm、重量5.3ｇである。堀込石組１礫直上出土。

N　古銭（第40図３）

政和通寶（北宋、初鋳1111年）が石敷住居Ⅰ層から１点出土している。この銭貨は下半が欠損しており、字体は真書である。また、「政」の左には１㎜前後の小孔がある。外径24.7㎜、内径22.3㎜、厚さ1.1㎜。



第40図　玉・古銭



図版18　玉・古銭

○　石器・石製品

石器・石製品は16点出土し、うち９点を第41・42図に示した。詳細は一覧表に示した。

第41図１・第42図１は石斧である。第41図１はミニチュアの石斧で、全面に研磨が行き届いている。第42図１は石斧の刃部片で両刃のタイプで、破片である。

第42図２は磨石の破片で、磨面が明瞭である。

同図３～５は敲石である。３は一端に敲打痕がみられる。４は３面に敲打痕がみられる。５は札状の敲石で、上下端に敲打痕がみられる。石斧の転用品と考えられる。同図６は凹石で、深く窪んでおり利用度が高い。

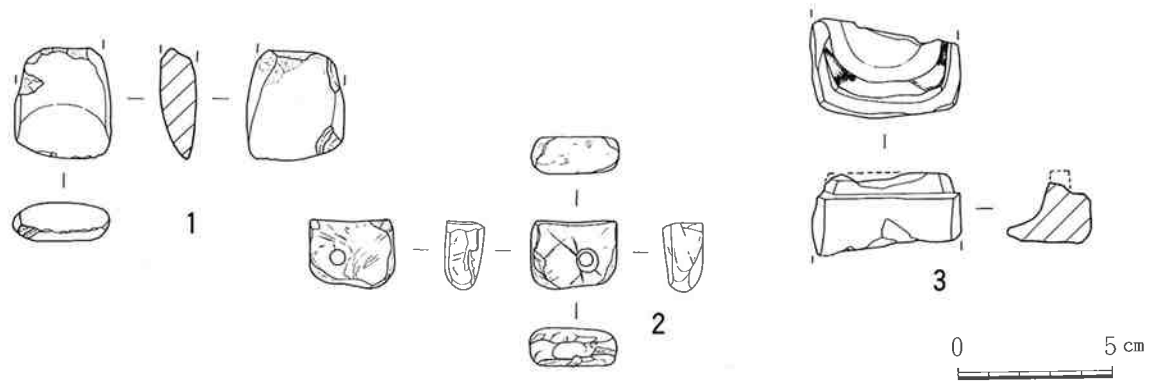
第41図２は有孔の滑石製品である。石鍋片を二次利用したものであろうか。同図３は隅丸方形をなすと思われる容器状製品で、蓋受け状に段を形成し形態的には硯に似る。

第17表　石器・石製品出土状況

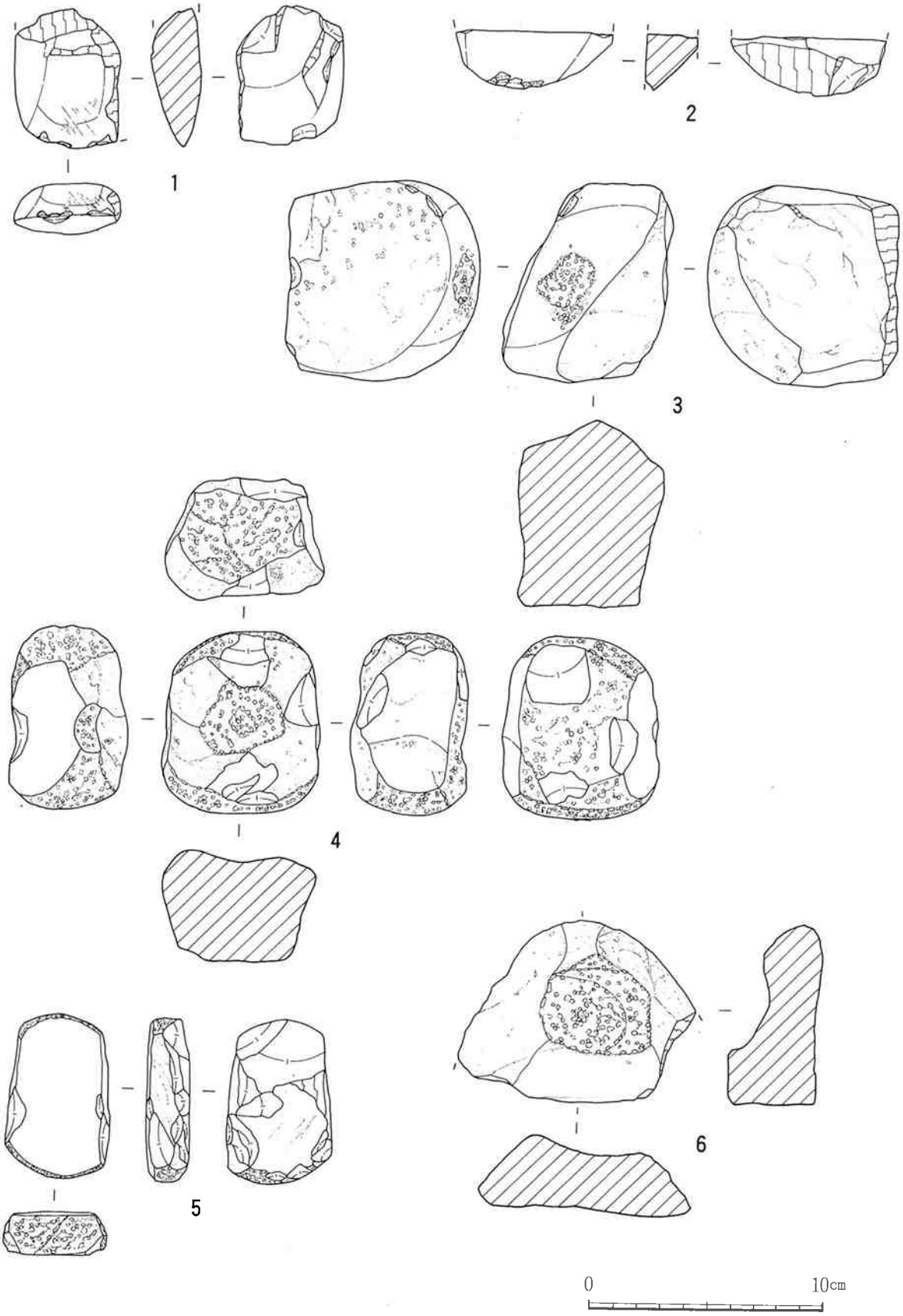
出土地			合計
A	10	Ⅰ層	2
堀込石組1		礫直上	3
石敷住居		Ⅰ層	1
		礫直上	1
		Ⅱ（不明）層	1
		土器集中	1
表		採	7
合		計	16

第18表　石器・石製品観察一覧

挿図 図版	番号	器種	計測値	特　　徴	出土地
第41図 図版19	1	ミニチュア	幅：　3.2cm 長さ：3.6cm 重さ：25.8g	ミニチュアの石斧である。前面に研磨が行き届き、基部に自然面が残る。緑色変岩。	A－10 Ⅰ層
	2	不明	厚さ：1.2cm 重さ：13.8g	滑石製の有孔製品で、前面に研磨を施す。１孔を穿ち、溝状の沈線がみられる。	石敷住居 土器集中
	3		重さ：27.7g	容器状の製品で、形状は硯にも似る。破損品。泥岩か。	表採
第42図 図版19	1	石斧	重さ：86.6g	磨製の両刃石斧片。緑色変岩。	表採
	2	磨石	重さ：48.3	１面に磨面がみられる。破損品。かんらん岩。	表採
	3	敲石	重さ：786.1g	１面に敲き痕がみられる。敲きは弱い。一部破損。変輝緑岩。	堀込石組１ 礫直上
	4		幅：　6.9cm 長さ：7.9cm 重さ：446.5g	３面に敲き痕がみられ、１面は強い。長方形をなす。安山岩。	堀込石組１ 礫直上
	5		幅：　3.5cm 長さ：6.2cm 重さ：112.9g	札状の敲石で上下端に敲き痕がみられる。石斧の転用品とも考えられる。緑色変岩。	表採
	6	凹石	重さ：324.1g	１面に敲きの痕がみられ、深く窪んでいる。半花崗岩。	表採



第41図　石器・石製品１



第42図　石器・石製品２

P　骨製品

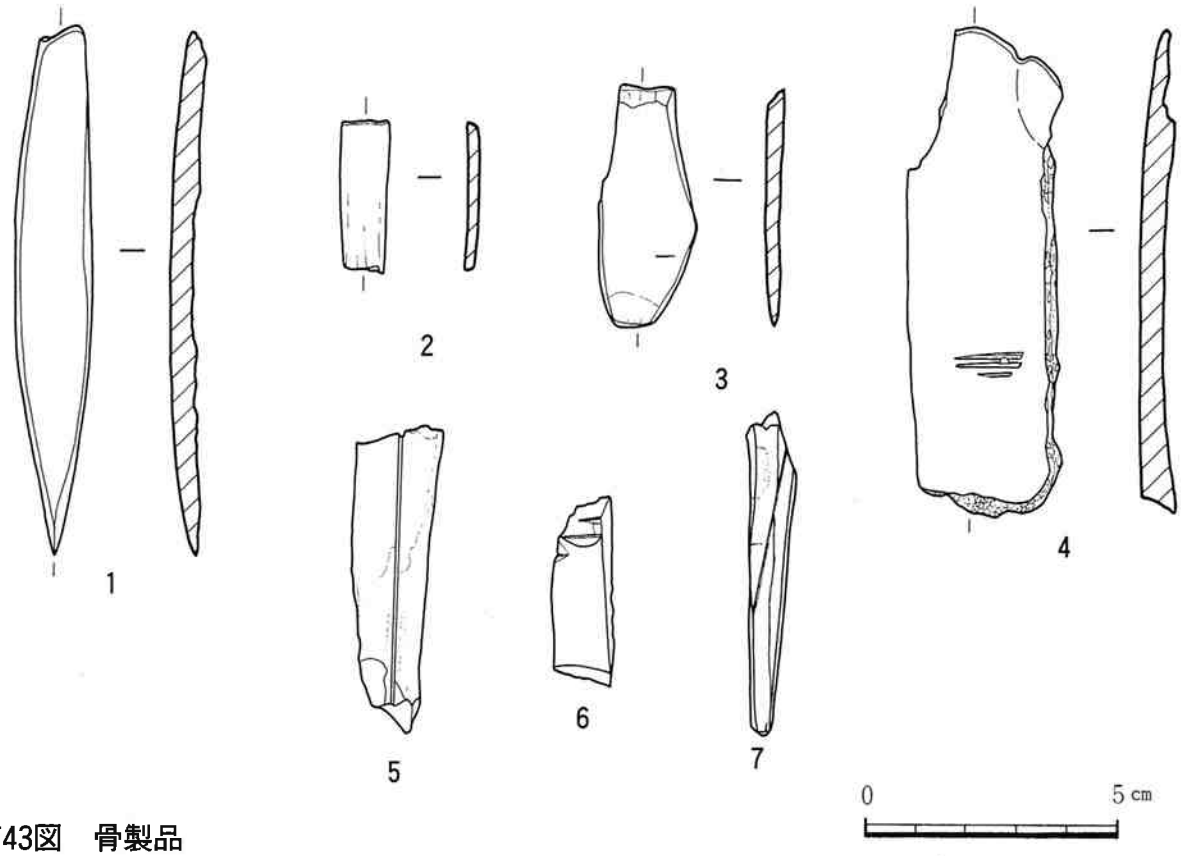
骨製品は４点出土した。また、脊椎動物遺存体の中にも刃物痕や加工痕が残るものがあった。第43図に図示した。詳細は一覧表に示した。

第43図１～４は製品である。１は１端を尖らせた錐状の製品である。同図２・３は札もしくはヘラ状製品で、破損品である。同図４は札状製品で、１端に抉りを入れ、鰭状になる。

同図５～７は擦り切りが認められる骨片で、何らかの製品の加工途中と思われる。

第19表　骨製品観察一覧

挿図図版	番号	計測値				特　　徴	出土地
		長さ	幅	厚さ	重さ		
第43図図版19	1	10.5cm	1.5cm	0.6cm	7.4g	下端を尖らせた錐状の製品。ウマの橈骨の前面部を利用している。	石敷住居Ⅱｄ層
	2	2.9cm	1.0cm	0.2cm	0.8g	札もしくはヘラ状製品。上下端は破損。ウシもしくはウマの肋骨を利用。	A－20Ⅰ層
	3	4.7cm	1.9cm	0.3cm	2.7g	札もしくはヘラ状製品。上端、側片は破損、本来は縦長の六角形であろうか。ウシの肋骨を利用。	石敷住居Ⅱｃ層
	4	9.7cm	3.0cm	0.5cm	11.2g	札状製品。側片、下端は破損。上辺は小型のヤコウガイ製匙状に似て魚の鰭状をなす。	掘込石組２埋土
	5	6.1cm	1.7cm	－	6.2g	加工途中と思われる。縦方向に擦り切りの痕が残る。	石敷住居Ⅰ層
	6	3.8cm	1.2cm	－	2.2g	加工途中と思われる。横方向に擦り切りの痕が残る。	石敷住居Ⅱｄ層
	7	6.4cm	1.0cm	－	3.3g	加工途中と思われる。斜め方向に擦り切りの痕が残る。	A－２Ⅰ層



第43図　骨製品

第21表　貝類出土状況　（二枚貝）

二枚貝＼出土地					A																B								土坑			
					7				9				10				20				9				20				1			
					Ⅰ層				Ⅰ層				Ⅰ層				Ⅱ層				Ⅰ層				Ⅱ層				埋土			
					完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂	
番号	綱名	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片
1		フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a																													
2		ウグイスガイ科	クロチョウガイ	Ⅰ-4-a																													
3		ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c																													
4	二	シャコガイ科	シャゴウガイ	Ⅰ-2-c																													
5			ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																													
6	枚		ヒレシャコガイ	Ⅰ-2-c										1																			
7			シラナミガイ	Ⅰ-2-a									1					1: 1															
8	貝		シャコガイ科不明									1			1												1						
9		ニッコウガイ科	サメザラ	Ⅰ-2-c																				1									
10	網	シオサザナミ科	リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c																													
11		マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Ⅰ-2-c							1								1							1							
12			ヌノメガイ	Ⅱ-1-c				1																				1					
13		二枚貝不明																												1			
14	ウニ綱	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ															1														
合計					0: 0		0: 0		1	0: 0		0: 1		1	0: 1		1: 0		2	1: 1		0: 1		1	0: 0		0: 0		1	1: 0		0: 0		1
個体数					△					1					2					2					△				2				1			

二枚貝＼出土地					石敷住居																								表採				合計				個体数
					Ⅰ層				礫直上				Ⅱa層				Ⅱd層				Ⅱ（不明）層																
					完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		
番号	綱名	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	破片	L	R	L	R	
1		フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a																1:																		
2		ウグイスガイ科	クロチョウガイ	Ⅰ-4-a					1																										0: 0	0: 0	0	0	1
3		ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c																	1														0: 0	0: 0	1	△	
4	二	シャコガイ科	シャゴウガイ	Ⅰ-2-c											1							1: 1						1	2				0: 1	0: 0	0	1	
5			ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																	1			1	1:						0: 0	1: 2	3	2	
6	枚		ヒレシャコガイ	Ⅰ-2-c					1																1:				1		1: 1	0: 0	2	1	
7			シラナミガイ	Ⅰ-2-a		1																			1:	1			4		1: 1	1: 0	6	2	
8	貝		シャコガイ科不明						1					2					2						1:	3	2:	2	15		2: 6	2: 3	15	9	
9		ニッコウガイ科	サメザラ	Ⅰ-2-c																				1			1		14		0: 0	1: 0	23	1	
10	網	シオサザナミ科	リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c					1																						0: 0	0: 0	1	△	
11		マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Ⅰ-2-c						1																					0: 0	0: 0	1	△	
12			ヌノメガイ	Ⅱ-1-c									1								1	2		1				1			3: 1	2: 2	1	5	
13		二枚貝不明																													1: 0	0: 0	4	1	
14	ウニ綱	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ																											0: 0	1: 0	0	1	
合計					0: 1		0: 0		4	1: 0		0: 0		2	1: 0		0: 0		3	1: 0		0: 0		0	0: 3		3: 1		4	4: 4		3: 3		38	9: 10		8: 7		59	24
個体数					1					1					1					1					6				7				18				

※二枚貝の合計と個体数は必ずしも一致しない。（完形と殻頂それぞれ多い方を合計し個体数とした。）

＜貝の生息地の分類＞

外洋～内湾	水深	底質
Ⅰ：外洋・サンゴ礁域	0：潮間帯上部（1ではノッチ、Ⅲではマングローブ）　3：干潮（Ⅰにのみ適用）	a：岩盤
Ⅱ：内湾・転石地域	1：潮間帯中・下部　4：礁斜面およびその下部	b：転石
Ⅲ：河口干潟・マングローブ域	2　亜潮間帯上縁部（1ではイノー）	c：岩礫底、砂泥底、砂底
Ⅳ：淡水域	5：止水　6：流水	
Ⅴ：陸域	7：林内　8：林内・林縁部　9：林縁部	

第20表　貝類出土状況（巻貝）

巻貝				出土地	A 7 I層			A 8 I層			A 9 I層			A 10 I層			A 15 I層			A 20 I層			A 20 II層			A・B 10 石積			B 9 I層			B 10 I層			B 12 I層			B 14 I層			B 20 I層			B 20 II層			C 10 I層		
番号	網名	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
1		ニシキウズガイ科	ニシキウズ	I-2-a																																													
2			ムラサキウズ	I-3-a																																													
3			ギンタカハマ	I-4-a																	1																												
4			サラサバティ	I-4-a											1					1																													
5		サザエ科	ヤコウガイ	I-4-a												1									1															1						1			
6			ヤコウガイの蓋	I-4-a						1																																							
7			チョウセンサザエ	I-3-a	1											1				1			2									2	3	1														1	
8			チョウセンサザエの蓋	I-3-a							1	1		1									2			2						5																	
9			コシタカサザエ	I-2-a							1																																						
10		オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I-2-c																																													
11		ソデボラ科	マガキガイ	I-2-c																										1			1	1	4							1							
12			クモガイ	I-2-c												1	1																																
13			スイジガイ	I-2-c																																													
14		ムカデガイ科	ムカデガイ科不明																																														
15		タカラガイ科	ハチジョウダカラ	I-1-a																																										1			
16			ヤクシマダカラ	I-2-a																	1																												
17			ホシダカラ	I-2-c																																													
18	腹		ハナマルユキ	I-3-a																																												1	
19			タカラガイ科不明										2																					1															
20	足	オキニシ科	オキニシ	I-3-a																																													
21			シロナルトボラ	I-4-a												1																																	
22		フジツガイ科	ミツカドボラ	I-2-a																																													
23	網		ホラガイ	I-4-a																		1																											
24		アッキガイ科	ガンゼキボラ	I-4-a																																													
25			ムラサキイガレイシ	I-3-a																																					1								
26			ツノレイシ	I-3-a																																													
27			シラクモガイ	I-3-a	1									5									1																								1		
28			アッキガイ科不明																																														
29		オニコブシガイ科	オニコブシガイ	I-3-a										1																																	
30			コオニコブシ	I-3-a								1		1						1																											
31		イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a																																													
32			ナガイトマキボラ	I-2-a																																													
33		イモガイ科	アンボンクロザメ	I-2-c																																													
34			オトメイモ	I-2-c																																													
35			ニシキミナシ	I-2-c																																													
36			イモガイ科不明										1																					2															
37		ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8																																													
38		アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	V																														1															
39		オナジマイマイ科	イトマンマイマイ	V-7																																													
40		巻貝不明								1																													1										
合計					2	0	0	0	0	2	2	2	3	8	1	4	1	0	0	3	2	1	5	0	1	2	0	0	0	1	0	7	4	6	4	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	2	1	2	0
個体数					2			△			4			9			1			5			5			2			1			11			4			△			2			△			3		

巻貝				出土地	堀込石組1 礫直上			堀込石組2 埋土			土坑 1 埋土			土坑 2 埋土			土坑 5 埋土			Pit 26 埋土			石敷遺構1 礫下			石敷住居 I層			石敷住居 礫直上			石敷住居 IIa層			石敷住居 IIc層			石敷住居 IId層			石敷住居 IIe層			石敷住居 II(不明)層			表採			合計			個体数
番号	網名	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	
1		ニシキウズガイ科	ニシキウズ	I-2-a																																							1						1	0	0	1
2			ムラサキウズ	I-3-a																								1	1	1									1						1			2		1	5	1	2	6
3			ギンタカハマ	I-4-a																																											1		0	2	0	2
4			サラサバティ	I-4-a																		1					1	1															4	3	1	3	14	5	8	19	8	27
5		サザエ科	ヤコウガイ	I-4-a						1															1			5			2			2			1			4			1		1	11		2	28	0	3	60	3
6			ヤコウガイの蓋	I-4-a																										1								2						3	2	1		3	2	5	6	4	11
7			チョウセンサザエ	I-3-a			1																								1									2				8	1	5	3	32	16	17	37	25	54
8			チョウセンサザエの蓋	I-3-a							1							1								7	1					2												3			15			39	3	2	42
9			コシタカサザエ	I-2-a																																													1	0	0	1
10		オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I-2-c																										1													3						3	1	0	4
11		ソデボラ科	マガキガイ	I-2-c																							8			4			4						1						12	169		6	45		23	233	1	256
12			クモガイ	I-2-c																							1												1							2	1	1	4	10	3	7	12	10
13			スイジガイ	I-2-c																																									1				1	0	1	1	1
14		ムカデガイ科	ムカデガイ科不明																																													1	0	0	1	△
15		タカラガイ科	ハチジョウダカラ	I-1-a																								1																				3	0	0	5	△
16			ヤクシマダカラ	I-2-a																																												2	0	1	2	1
17			ホシダカラ	I-2-c																																		1											2	0	0	3	△
18	腹		ハナマルユキ	I-3-a																							2											1						1			2	3		3	6	1	9
19			タカラガイ科不明																																													2	0	0	5	△
20	足	オキニシ科	オキニシ	I-3-a																																										5		1	5	0	1	5
21			シロナルトボラ	I-4-a																																													0	0	1	△
22		フジツガイ科	ミツカドボラ	I-2-a																																										1			1	0	0	1
23	網		ホラガイ	I-4-a																												1															1		0	1	2	1
24		アッキガイ科	ガンゼキボラ	I-4-a																																										1			1	0	0	1
25			ムラサキイガレイシ	I-3-a																						1																				3			5	0	0	5
26			ツノレイシ	I-3-a																																									1	1			1	0	1	1
27			シラクモガイ	I-3-a										1																																43		4	52	0	4	52
28			アッキガイ科不明																									1																		1			1	0	1	1
29		オニコブシガイ科	オニコブシガイ	I-3-a																																										1	2		2	2	0	4
30			コオニコブシ	I-3-a																						1						1												10		1	21	1		35	2	1	37
31		イトマキボラ科	イトマキボラ	I-2-a																																			1								1		1	1	0	2
32			ナガイトマキボラ	I-2-a																																										4			4	0	0	4
33		イモガイ科	アンボンクロザメ	I-2-c																																											1		0	1	0	1
34			オトメイモ	I-2-c																																											1		0	1	0	1
35			ニシキミナシ	I-2-c																																								1						1	0	0	1
36			イモガイ科不明																							1		2															1			1	2	5	5	3	5	12	8
37		ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8																																										1			1	0	0	1
38		アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	V																																													0	0	1	△
39		オナジマイマイ科	イトマンマイマイ	V-7																																										2			2	0	0	2
40		巻貝不明																																											1					0	1	2	1
合計					0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	10	13	11	1	7	4	3	4	2	0	0	3	6	0	6	0	0	2	47	180	22	118	116	83	223	334	158	557
個体数					△			△			1			1			1			△			△			23			8			7			△			6			△			227			234			557			

R　脊椎動物遺体

動物遺存体種名一覧

軟骨魚綱　Class　Chondrichthyes
　サメ目　Order　Lamniformes
　　メジロザメ科　Family　Carcharhinidae
　　属・種不明　Gen.et　sp.indet.
硬骨魚綱　Class　Osteichthyes
　スズキ目　Order　Perciformes
　　ブダイ科　Family　Scaridae
　　ナガブダイ　Scarus　rubroviolaceus
　　ナンヨウブダイ　Scarus　gibbus
　　属・種不明　Gen.et　sp.indet.
　フグ目　Order　Tetraodontiformes
　　ハリセンボン科　Family　Diodontidae
　　属・種不明　Gen.et　sp.indet.
爬虫綱　Class　Reptilia
　カメ目　Order　Chelania
　　ウミガメ科　Family　Chelonidac
　　属・種不明　Gen.et　sp.indet.
鳥綱　Class　Aves
　キジ目　Order　Galliformes
　　キジ科　Family　Phasianidae
　　ニワトリ　Gallus gallus var. domesticus
　スズメ目　Order　Passeriformes
　　カラス類　Corvus　sp.
哺乳綱　Class　Mammalia
　食肉目　Order　Carnivora
　　ネコ科　Family　Felidae
　　ネコ　Felis　catus
　寄蹄目　Order　Perissodactyla
　　ウマ科　Family　Equidae
　　ウマ　Equus　caballus
　偶蹄目　Order　Artiodactyla
　　イノシシ科　Family　Suidae
　　ブタ　Sus　scrofa　var.　domesticus
　　ウシ科　Family　Bovidae
　　ウシ　Bos　taurus
　　ヤギ　Capura　hirucus

第22表　魚骨出土一覧

種　目			部　位		個数	出　土　地
サメ目	メジロザメ科	種不明	脊椎骨		1	堀込石組2埋土
スズキ目	ブダイ科	ナガブダイ	下咽頭骨		1	B-10Ⅰ層
		ナンヨウブダイ	下咽頭骨		1	B-14Ⅰ層
					1	Pit26埋土
					1	石敷住居Ⅰ層
					1	表採
		種不明	左	前上顎骨	1	石敷住居Ⅱc層
			右	歯骨	1	B-14Ⅰ層
			左		2	A-9Ⅰ層
フグ目	ハリセンボン科	種不明	上顎骨		3	A-9Ⅰ層
					1	B-10Ⅰ層
					2	石敷住居Ⅰ層
					1	石敷住居Ⅱc層
					1	石敷住居土器集中
					1	表採
			歯骨		3	石敷住居Ⅰ層
					1	石敷住居Ⅱc層
					1	表採
			歯破片		1	A-11Ⅰ層
			棘		6	石敷住居Ⅱd層
					1	石敷住居Ⅱe層
					31	石敷住居Ⅱ(不明)層
科・種不明			脊椎骨		1	A-8Ⅰ層
					1	石敷住居Ⅱd層
					1	石敷住居Ⅱ(不明)層
					1	石敷住居住居炉跡
					4	Pit26埋土
					1	Pit195埋土

第23表　ウミガメ出土一覧

部位	個数	出土地
鳥口骨	3	石敷住居Ⅱf層
縁骨板	1	石敷住居Ⅱc層
破片	1	石敷住居Ⅰ層
	2	石敷住居Ⅱc層
	1	表採

第24表　ニワトリ出土一覧

部　位			右／左	個数	出土地
鳥口骨	遠位端		左	1	A-20Ⅱ層
肩甲骨	破片		右	1	石敷住居Ⅱd層
尺骨	骨体		右	1	A-20Ⅰ層
				1	石敷住居Ⅰ層
脛骨	完存		右	1	堀込石組1礫下
	骨体	切痕	左	1	石敷住居Ⅱe層
			右	1	石敷住居Ⅱc層
	遠位部		右	1	A-20Ⅱ層
				1	石敷住居Ⅱc層
	遠位端		右	1	A-20Ⅰ層
				1	Pit26埋土
	破片		右	1	石敷住居Ⅱd層
中足骨	遠位端♂		右	1	石敷住居土器集中

第25表　カラス出土一覧

部　位		右／左	個数	出土地
上腕骨	近位端(若)	左	1	石敷住居Ⅱ(不明)層

第26表　ネコ出土一覧

部位		右／左	個数	出土地
腰椎			1	土坑5埋土
尾椎			1	土坑5埋土
橈骨	骨体	右	1	土坑5埋土
尺骨	骨体	右	1	土坑5埋土
大腿骨	遠位骨端のみ	右	1	土坑5埋土
脛骨	骨体	左	1	土坑5埋土
	遠位端	右	1	土坑5埋土
中足骨Ⅱ	近位端	左	1	土坑5埋土

第27表　ウマ出土一覧

部位		右／左	個数	出土地
上顎骨	M1orM2	左	1	表採
下顎骨	P〈4〉	左	1	表採
	M1orM2	右	1	A-10Ⅰ層
歯	破片	不明	1	表採
橈骨	遠位部	不明	1	石敷住居Ⅰ層

凡例　〈 〉未萌出

第28表　ウシ・ウマ出土一覧

部位			個数	出土地
舌骨	破片		1	A-20Ⅰ層
下顎骨	破片		1	石敷住居Ⅰ層
肋骨	破片	軟骨	1	A-8Ⅰ層
			2	堀込石組1埋土
			1	石敷住居Ⅰ層
橈骨	近位部 破片（切痕）		1	表採

第29表　ヤギ出土一覧

部位		右／左	個数	出土地
橈骨	骨体（切痕）	左	1	表採

第30表　ブタ出土一覧

部位		右／左	個数	出土地
頭蓋骨	破片		1	土坑1埋土
	頭頂骨	右	1	石敷住居Ⅰ層
			1	石敷住居土器集中
	前頭骨	右	1	石敷住居土器集中
	側頭骨（切痕）	右	1	土坑1埋土
上顎骨	犬歯♂	右	1	A-11Ⅰ層
	M1	左	1	石敷住居Ⅱc層
	M2	左	1	A-11Ⅰ層
下顎骨	破片	左	1	石敷住居Ⅰ層
椎体	仙骨		1	土坑1埋土
	棘突起		1	A-8Ⅰ層
			1	石敷住居Ⅰ層
	破片		2	石敷住居Ⅰ層
肋骨	破片		1	土坑1埋土
			5	石敷住居Ⅱc層
			1	石敷住居Ⅱd層
上腕骨	近位骨端はずれ～遠位端（切痕）	右	1	石敷住居Ⅱc層
	近位骨端はずれ　破片	右	1	石敷住居Ⅱc層
		左	1	石敷住居礫直上
	近位部～遠位部	右	1	石敷住居土器集中
	骨体～遠位部	左	1	A-8Ⅰ層
			1	石敷住居礫直上
			1	石敷住居土器集中
	破片	右	1	A-15Ⅰ層
橈　骨	近位端～近位端はずれ	右	1	石敷住居Ⅱc層
尺　骨	骨体	右	1	A-8Ⅰ層
			1	石敷住居Ⅰ層
中手骨　Ⅲ	近位端～遠位部（切痕）	左	1	石敷住居土器集中
寛　骨	腸骨部	右	1	土坑1埋土
	臼部～坐骨（若）	右	1	土坑1埋土
	坐骨	左	1	A-11Ⅰ層
大腿骨	近位骨端はずれ	右	1	石敷住居礫直上
	近位端～遠位部	右	1	石敷住居炉跡
	破片	左	1	表採
脛　骨	両端はずれ	右	1	表採
	近位部～遠位部	右	1	石敷住居土器集中
	骨体	左	1	石敷住居土器集中
	骨体～遠位骨端はずれ（切痕）	右	1	石敷住居Ⅰ層
	遠位骨端はずれ	右	1	石敷住居Ⅰ層
			1	石敷住居礫直上
腓　骨	近位部	右	1	石敷住居Ⅱd層
	骨体	不明	1	石敷住居Ⅱa層
			1	石敷住居Ⅱd層
踵　骨	遠位端	右	1	石敷住居Ⅰ層
距　骨	完存	左	1	A-8Ⅰ層
中足骨　Ⅳ	近位端	右	1	石敷住居Ⅱc層
Ⅴ	近位端～遠位骨端はずれ	左	1	石敷住居Ⅱc層

凡例　〈 〉未萌出

第31表ａ　ウシ出土量

部位	出土地	A																	
		8			9			10			11			20					
		Ⅰ層			Ⅰ層			Ⅰ層			Ⅰ層			Ⅰ層			Ⅱ層		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭蓋骨	角突起																		
	前頭骨			(1)															
	耳石																		
上顎骨	鼻骨																		1
下顎骨	筋突起																		
	破片																		
椎体	環椎						(1)												
	軸椎																		
	頸椎																		
	胸椎																		
	腰椎																		
	仙骨						1												
	尾椎																		
	椎頭																		
	椎窩			1															
	棘突起																		
	破片																		
肋骨	近位	1																	
	破片			1			1						①			①			
肩甲骨	近位部～遠位端																		
	骨体																		
	遠位端				1														
	破片																		
上腕骨	近位骨端はずれ																		
	近位部																		
	遠位部																		
	遠位骨端はずれ								({1})										
	遠位端								(1)										
	破片								1										
橈骨	近位端																		
	近位部								1										
	遠位部																		
	遠位骨端のみ																		
	破片																		
橈骨・尺骨	破片																		
尺骨	近位部～遠位部																		
	骨体																		
	破片													1					
手根骨	2+3	1																	
	第4		1																
	橈側																		
	中間																		
中手骨	近位端													(1)					
	骨体																		
	遠位部															①			
	破片																		
寛骨	腸骨部																		
	臼部～坐骨																		
	恥骨																		
	破片								1										
大腿骨	近位部																		
	骨体				1														
	遠位部																		
	遠位端																		
	破片																		
膝蓋骨					①														
脛骨	近位端				(1)														
	近位部								(1)										
	骨体																		
	遠位部								1										
	破片																		
踵骨	近位骨端はずれ～遠位端																		
	骨体																		
	遠位端																		
	破片																		
距骨	完存																①	1	
	骨体																		
	破片																		
足根骨	2+3																		
	第4中心																		
中足骨	近位端												(1)						
	近位端～遠位部																		
	近位部																		
	骨体																		
	遠位部																		
	遠位端																		
	破片																		
中手・中足骨	遠位骨端のみ																		
基節骨	完存							①											
	近位骨端のみ																		
	近位骨端はずれ～遠位端																		
	骨体																		
	遠位端																		
	破片									1									
中節骨	完存																		
	破片																		
末節骨	完存		1																
種子骨																			
合計		2	2	3	4	0	3	1	7	1	0	0	2	2	0	2	1	1	1

部位	出土地	B												堀込石組1									堀込石組2								
		9			14			20																							
		Ⅰ層			Ⅰ層			Ⅰ層			Ⅱ層			埋土			礫直上			礫下			埋土			礫直上			礫下		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭蓋骨	角突起																														
	前頭骨																														
	耳石							1																							
上顎骨	鼻骨																														
下顎骨	筋突起																														
	破片																														
椎体	環椎																														
	軸椎																														
	頸椎																														
	胸椎																														
	腰椎																														
	仙骨																														
	尾椎																														
	椎頭																														
	椎窩																														
	棘突起																		①												
	破片																								1						
肋骨	近位											1																			
	破片																					1			1①						
肩甲骨	近位部～遠位端																														
	骨体																							1							
	遠位端																														
	破片																														
上腕骨	近位骨端はずれ																														
	近位部																										1				
	遠位部																														
	遠位骨端はずれ																														
	遠位端																														
	破片											1																			
橈骨	近位端																														
	近位部																														
	遠位部																														
	遠位骨端のみ																														
	破片																														
橈骨・尺骨	破片																														
尺骨	近位部～遠位部																														
	骨体																														
	破片																														
手根骨	2+3														1																
	第4	1										①																			
	橈側								1																						
	中間																														
中手骨	近位端																														
	骨体									1																					
	遠位部																														
	破片																														
寛骨	腸骨部																														
	臼部～坐骨																														
	恥骨																														
	破片							1																							
大腿骨	近位部					1																									
	骨体																														
	遠位部																														
	遠位端																														
	破片																														
膝蓋骨																															
脛骨	近位端																														
	近位部																														
	骨体																														
	遠位部																														
	破片	1			1																										
踵骨	近位骨端はずれ～遠位端																														
	骨体																														
	遠位端														①																
	破片										1																				
距骨	完存														①																
	骨体																														
	破片							①																							
足根骨	2+3																														
	第4中心																														
中足骨	近位端																														
	近位端～遠位部																														
	近位部																														
	骨体																														
	遠位部															①															
	遠位端																														
	破片																														
中手・中足骨	遠位骨端のみ																														
基節骨	完存					1																	1	2							
	近位骨端のみ																														
	近位骨端はずれ～遠位端																														
	骨体																														
	遠位端																														
	破片																														
中節骨	完存																												1		
	破片	1																													
末節骨	完存																														
種子骨																															
合計		3	0	0	1	2	0	3	1	1	1	3	0	0	3	1	0	0	1	0	0	1	1	3	3	0	1	0	1	0	0

部位	出土地	土坑																				
		1			2			3			5			6						8		
		埋土			埋土			埋土			埋土			埋土			礫直上			埋土		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭蓋骨	角突起																					
	前頭骨	1	1																			
	耳石																					
上顎骨	鼻骨																					
下顎骨	筋突起																					
	破片																					
椎体	環椎																					
	軸椎																					
	頸椎			1																		
	胸椎																					
	腰椎																					
	仙骨																					
	尾椎			3																		
	椎頭																					
	椎窩			1												1			1			
	棘突起																					
	破片																					
肋骨	近位													1			1					
	破片						3															
肩甲骨	近位部～遠位端																①					
	骨体																					
	遠位端													1								
	破片																					
上腕骨	近位骨端はずれ														1							
	近位部																					
	遠位部																				((①))	
	遠位骨端はずれ																					
	遠位端					①		1														
	破片																					
橈骨	近位端		①																			
	近位部																					
	遠位部																					
	遠位骨端のみ																					
	破片					①																
橈骨・尺骨	破片																					
尺骨	近位部～遠位部																					
	骨体																					
	破片																					
手根骨	2+3																					
	第4																					
	橈側																					
	中間											①										
中手骨	近位端																					
	骨体																					
	遠位部																					
	破片			1																		
寛骨	腸骨部				1																	
	臼部～坐骨					1																
	恥骨													1								
	破片													1								
大腿骨	近位部																					
	骨体																					
	遠位部																					
	遠位端																					
	破片																					
膝蓋骨																						
脛骨	近位端																					
	近位部																					
	骨体																					
	遠位部																					
	破片																					
踵骨	近位骨端はずれ～遠位端					1																
	骨体																					
	遠位端																					
	破片																					
距骨	完存		①																			
	骨体																					
	破片																					
足根骨	2+3				1																	
	第4中心		1																			
中足骨	近位端			①																		
	近位端～遠位部																					
	近位部																					
	骨体																					
	遠位部																					
	遠位端																					
	破片																					
中手・中足骨	遠位骨端のみ																					
基節骨	完存	1																				
	近位骨端のみ																					
	近位骨端はずれ～遠位端																					
	骨体																					
	遠位端																					
	破片		①																			
中節骨	完存																					
	破片				1																	
末節骨	完存	1	2		1	1																
種子骨																						
合計		3	7	7	4	5	3	1	0	0	0	1	0	4	1	1	2	0	1	0	1	0

凡例　{ }：幼、〈 〉：半欠、○：切痕、( )：破片

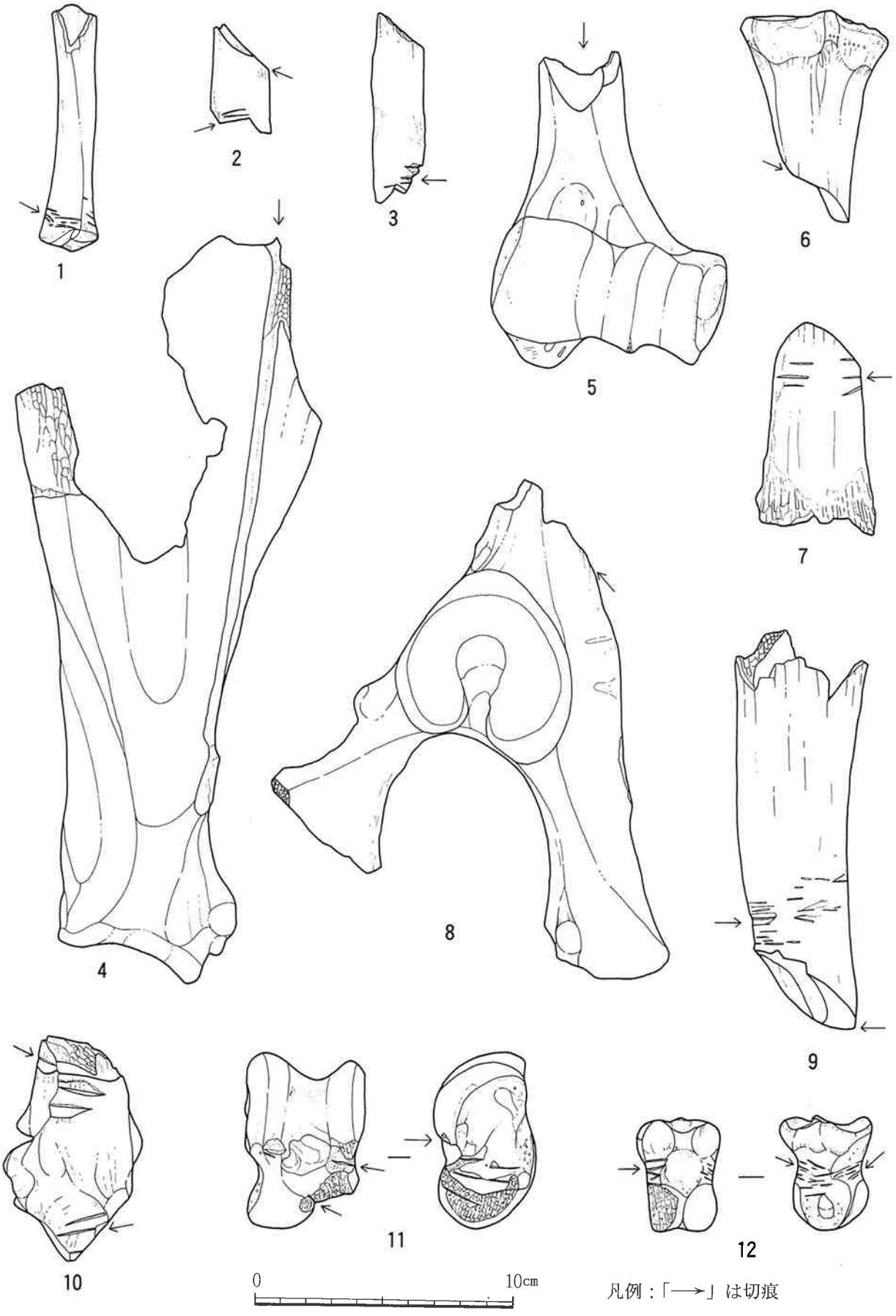
第31表ｂ　ウシ出土量

部位		Pit 26 埋土 右	Pit 26 埋土 左	Pit 26 埋土 不明	Pit 152 埋土 右	Pit 152 埋土 左	Pit 152 埋土 不明	Pit 194 埋土 右	Pit 194 埋土 左	Pit 194 埋土 不明	石敷住居 Ⅰ層 右	Ⅰ層 左	Ⅰ層 不明	礫直上 右	礫直上 左	礫直上 不明	Ⅱａ層 右	Ⅱａ層 左	Ⅱａ層 不明	Ⅱｂ層 右	Ⅱｂ層 左	Ⅱｂ層 不明	Ⅱｃ層 右	Ⅱｃ層 左	Ⅱｃ層 不明	Ⅱｄ層 右	Ⅱｄ層 左	Ⅱｄ層 不明	Ⅱｅ層 右	Ⅱｅ層 左	Ⅱｅ層 不明	Ⅱｆ層 右	Ⅱｆ層 左	Ⅱｆ層 不明	Ⅱ(不明)層 右	Ⅱ(不明)層 左	Ⅱ(不明)層 不明	土器集中 右	土器集中 左	土器集中 不明	炉跡 右	炉跡 左	炉跡 不明	表採 右	表採 左	表採 不明	合計 右	合計 左	合計 不明
頭蓋骨	角突起																			1																							0	0	1
	前頭骨																																											1	1	1
	耳石				1																																								2	0	0
上顎骨	鼻骨																																											0	0	1
下顎骨	筋突起																						1			1									1			1	1					1	3	1
	破片																						1			1		2	1													4	2	1	6
椎体	環椎																																											0	0	1
	軸椎			①																																								0	0	1
	頸椎																																									1		0	0	2
	胸椎																																									3		0	0	3
	腰椎																																									①		0	0	1
	仙骨																																											0	0	1
	尾椎																			1																								0	0	4
	椎頭																																								1			0	0	1
	椎窩			2								1																																0	0	7
	棘突起																							1																		2		0	0	5
	破片			①								1																	1														0	0	3
肋骨	近位																1		3	1		1②	1		5		4			6			1			7②		1	4			2	1			7	9	0
	破片											1																															①	0	0	45
肩甲骨	近位部～遠位端																																											1	1	0
	骨体																																			①									1	0	0
	遠位端																																											2	0	0
	破片																					①								1							1						2	0	2
上腕骨	近位骨端はずれ																												1														1	1	0
	近位部																																			1								0	2	0
	遠位部											1										(1)					(1)														(2)		3	2	0
	遠位骨端はずれ																																										{1}	({2})	0	5	0
	遠位端																																			1							(1)		2	3	0
	破片																					1								1						①								1	3	1
橈骨	近位端							1																																				0	2	0
	近位部										1	(1)																								1								0	4	0
	遠位部																						1							1														1	1	0
	遠位骨端のみ																																											1	0	0
	破片																											①														1	2	1	1
橈骨・尺骨	破片																					(1)																						0	1	0
尺骨	近位部～遠位部																			①																								0	1	0
	骨体																																			1			①						0	2	0
	破片											1																1																1	0	2
手根骨	2+3	1																																		1						1			4	1	0
	第4	1	①																																									2	3	0
	橈側																																			1									1	1	0
	中間																																											0	1	0
中手骨	近位端											1																		(1)					2		2							4	3	0
	骨体																																											0	0	1
	遠位部																		2						1①												1						0	0	1
	破片																																											0	0	6
寛骨	腸骨部																																											1	0	0
	臼部～坐骨																																											0	1	0
	恥骨																																											1	0	0
	破片																																											2	1	0
大腿骨	近位部																												2															0	1	0
	骨体																																											2	2	0
	遠位部															(①)						(①)														①						1			2	1	0
	遠位端											1					1																			1								0	1	0
	破片																																												2	1	1
膝蓋骨																				①																1									3	0	0
脛骨	近位端																												2								(2)						(1)		1	0	0
	近位部																																											0	4	0
	骨体																					①																						2	0	0
	遠位部											1		1								1								1							((①))								2	3	0
	破片													2																							1						1			4	1	1
踵骨	近位骨端はずれ～遠位端																																											0	1	0
	骨体																									①																		1	0	0
	遠位端										(1)																																	1	1	0
	破片															①																				1								3	0	0
距骨	完存																					①																						2	3	0
	骨体																																			1									0	1	0
	破片																																											1	0	0
足根骨	2+3		1								1	1																	1														2	2	0
	第4中心																																										1	0	3	0
中足骨	近位端																																										(1)	(1)	0	1	2
	近位端～遠位部															①																											0	1	0
	近位部																																									1			1	0	0
	骨体											(1)														①																		1	0	0
	遠位部															①																										①		1	2	1
	遠位端																																			1									0	1	0
	破片																						1																					0	0	2
中手・中足骨	遠位骨端のみ			((①))								(1)								1										1												1	(1)	0	1	5
基節骨	完存	1																																										5	4	0
	近位骨端のみ		1																																							①	1		0	1	0
	近位骨端はずれ～遠位端																					1																						1	0	0
	骨体																													1							1								0	1	0
	遠位端																																											1	1	0
	破片											1										1										1												2	0	2
中節骨	完存																									①										1			①						4	2	0
	破片																																			1									2	0	0
末節骨	完存	1	1																																									3	5	0
種子骨																																												0	0	1
合計		4	4	5	1	0	0	0	1	0	3	7	6	2	1	0	3	3	6	2	1	7	8	4	9	5	6	4	4	5	8	1	1	1	13	15	14	3	3	7	0	0	2	12	10	14	95	99	114

凡例　{ }：幼、〈 〉：半欠、○：切痕、( )：破片

第32表　ウシ歯出土一覧

部位			個数	出土地
上顎骨	右	P4	1	石敷住居Ⅱｃ層
		M1	1	表採
		M2	1	A-10Ⅰ層
			1	B-20Ⅰ層
			1	石敷住居Ⅱａ層
			1	石敷住居Ⅱｅ層
			3	表採
		M3	1	堀込石組1礫直上
			1	石敷住居Ⅱａ層
			1	石敷住居Ⅱｄ層
			1	表採
	左	dm4	1	A-20Ⅰ層
		M1	1	A-8Ⅰ層
			1	A-10Ⅰ層
			1	C-10Ⅰ層
		M2	1	A-10Ⅰ層
			1	堀込石組1礫直上
			1	堀込石組2埋土
			1	石敷住居Ⅱｃ層
			1	石敷住居Ⅱｄ層
			1	石敷住居Ⅱｅ層
			1	石敷住居Ⅱ（不明）層
			1	表採
		M3	1	石敷住居Ⅱｃ層
			1	表採
		破片	1	B-10Ⅰ層
			1	表採
	破片		1	表採
下顎骨	右	P3	1	A-20Ⅱ層
		P4	1	A-10Ⅰ層
			1	B-20Ⅰ層
			1	石敷住居Ⅱｃ層
		M1	1	B-10Ⅰ層
			1	堀込石組1礫下
			1	土坑6埋土
			1	石敷住居Ⅰ層
			1	石敷住居Ⅱ（不明）層
			1	表採
		M2	1	B-20Ⅰ層
			1	堀込石組1礫下
			1	石敷住居Ⅰ層
			1	石敷住居Ⅱａ層
			1	石敷住居Ⅱ（不明）層
		M3	1	B-20Ⅰ層
			1	土坑6埋土
			1	石敷住居Ⅱｃ層
		破片	1	A-8Ⅰ層
	左	切歯	1	A-8Ⅰ層
			1	A-9Ⅰ層
			1	A-11Ⅰ層
			1	B-14Ⅰ層
			1	堀込石組2礫下
			1	土坑1埋土
			1	石敷住居礫直上
		dm4	1	表採
		P2	1	石敷住居Ⅱｃ層
		P2, 3	1	Pit45埋土
		P4	1	石敷住居Ⅱ（不明）層
		M1	1	A-10Ⅰ層
			1	堀込石組2Ⅲ層
			1	石敷住居礫直上
			2	石敷住居Ⅱ（不明）層
		M2	1	B-20Ⅰ層
			1	石敷住居Ⅰ層
			1	石敷住居礫直上
			2	石敷住居Ⅱａ層
			1	石敷住居Ⅱｅ層
			2	表採
		M3	1	A-10Ⅰ層
			1	B-20Ⅰ層
			1	堀込石組2礫直上
			1	石敷住居Ⅱｄ層
			1	表採
		M1, 2, 3	1	C-9Ⅰ層
	不明	M2	1	B-20Ⅱ層
			1	石敷住居Ⅱ（不明）層
	破片		3	A-8Ⅰ層
			1	A-10Ⅰ層
			1	A-11Ⅰ層
			1	A-12-13Ⅰ層
			1	A-15Ⅰ層
			4	B-9Ⅰ層
			1	B-20Ⅱ層
			3	C-10Ⅰ層
			8	石敷住居Ⅰ層
			1	石敷住居Ⅱｃ層
			2	石敷住居Ⅱ（不明）層
			3	表採



第44図　切痕　**ブタ**　1. 右脛骨　**ウシ**　2. 3. 肋骨　4. 右肩甲骨　5. 左上腕骨　6. 左中手骨　7. 中手骨　8. 左寛骨　9. 右脛骨　10. 左踵骨　11. 右距骨　12. 左中節骨

第4節　まとめ

以上、新里元島上方台地遺跡の調査成果について述べてきた。ここて、今一度調査成果の概要をまとめてみたい。

今回の調査は県道保良上地線（友利～上地）道路新設改良事業に伴う緊急発掘調査である。

本遺跡は宮古島の南岸、海岸からやや離れた台地上に位置する。ここから南岸の広大な海が展望できる。石垣島フルスト原遺跡の立地条件と似ている。遺跡の台地下南側には新里東元島遺跡が、台地下南西方向には砂川元島遺跡が、北東側後背の丘陵には上比屋山遺跡が存在する。オープンサイトで広大な平地が広がる新里東・砂川元島遺跡と異なり、周囲は険しい岩盤が露胎する。岩盤と岩盤の間に形成された平場に本遺跡は営まれていた。

調査前、最も目を引いたのは調査区周辺至る所に石積みが築かれていたことである。石積みは一部岩盤を利用し、弧を描くように平場の周囲に築かれていた。この石積みが後背の上比屋山遺跡まで続いていることが確認できた。明確な屋敷囲いとは思えないが、少なくとも本遺跡を営んだ人々がナワバリのような意識をもって、構築したものと考えられる。

遺構は平場から南岸に向かって斜面地となるぎりぎりまで、検出された。一部では土留めを行い少ない平場を最大現に利用したのであろう。平場表土から遺構検出面までの深度は浅く、約20～30㎝程である。調査区は岩盤と石積みを境としてA地区とB地区にわけた。

A地区では、Pitは2種類確認され、楔石をもつものともたないものがる。プランが組めたものは2建。約4.6m×2.9mの小型なタイプと横約7.5mの大型のタイプである。両者とも建築方位は一定しており、東西に建てられる。Pitは楔石を伴い、一部では楔石が崩れず柱跡が残っているものもある。それによると柱の太さは16㎝程と細い。柱と柱の間隔は約1.4m～1.6mである。プランは確認できなかったが、Pitの並びには2建のプランと同じ方向に規則性が見いだせる。

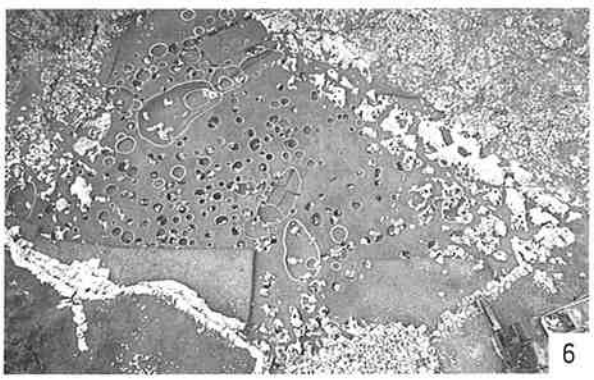
この他では、用途は判然としないが、掘込石組遺構が2基、小型（掘込石組遺構1）のものと大型（掘込石組遺構2）のものが検出された。方位は前者が南北、後者が東西である。土坑が11基確認され、プランは紡錘・円形・長方形・正方形に分類できる。この内、土坑6は牛骨埋納遺構と名付けた。3段階に分けて牛骨を埋納しており、2段階目に埋納した牛骨を囲むように円形に石を組み積んでいた。他の土坑1・2・3・5・8からも牛骨が出土したことも興味深い。炉跡は20基検出された。焼かれた土が赤茶色に硬質化した比学的大型のものが12基、硬質化がなく炭が充填した小型のものが8基ある。A地区で確認された石敷遺構はA地区平場の南側、斜面直前から中心に向かってA・B地区間に構築された石積添いで検出された。この遺構は砂川元島遺跡等宮古島の各遺跡で確認されている。形態から道としての役割ではないかと推測する。

B地区では石敷住居が1建検出された。斜面地に多量の盛土を行って土留めをした後、石灰岩礫を敷き詰めて構築されている。中心よりやや西よりに炉跡がある。楔石をもったPitが並んで検出された。

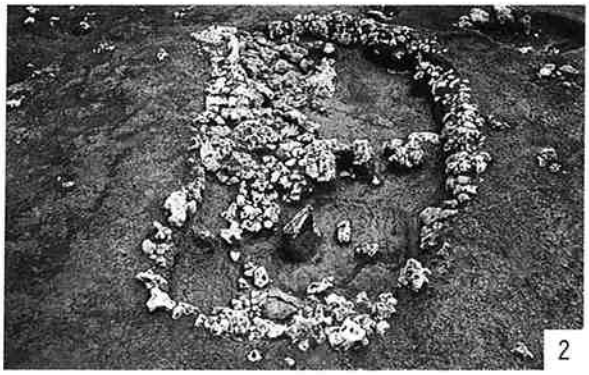
以上が本遺跡の主要な遺構である。ここで、この遺跡の年代を想定してみたい。遺跡の年代を知る手がかりとして遺物がある。本来ならば地元の遺物をもって想定したいが、現在土器で想定することが困難なため、外来品に頼らざるをえない。本遺跡出土遺物の中で古手のものは北宋の「政和通宝」（初鋳1111年）である。他に白磁の玉縁口縁碗があげられ12世紀～13世紀とされている。白磁は12世紀～14世紀を中心としたものが出土するが、遺物の全体量としては少ない。青磁は土器・褐釉陶器についで多く出土する。古いものは12世紀～13世紀で、大部分は14世紀後半～15世紀中葉である。15世紀～16世紀と考えられる染付けが石敷住居盛土・土坑1の埋土より出土している。

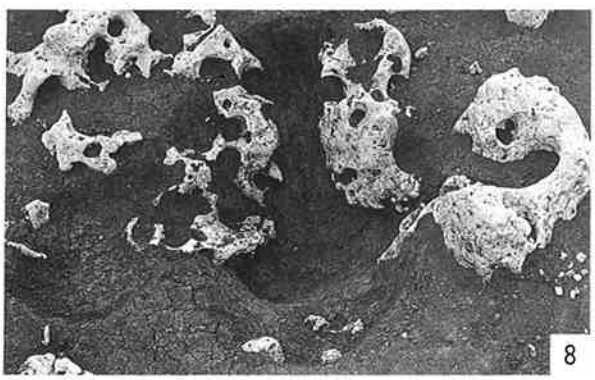
以上の点から、本遺跡が営まれたのは、14･15世紀に最盛期をむかえ、終末期は16世紀と考えられる。

図　　版



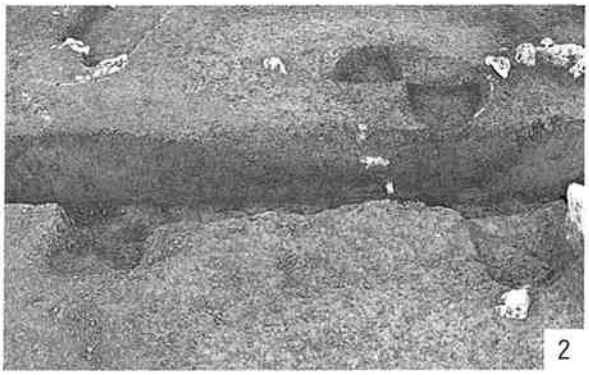
図版1　調査区の状況1　1. 遺跡周辺1　2. 遺跡周辺2　3. A地区伐開後　4. A地区層序　5. A地区全景1　6. A地区全景2　7. 堀込石組遺構1　8. 堀込石組遺構1断面

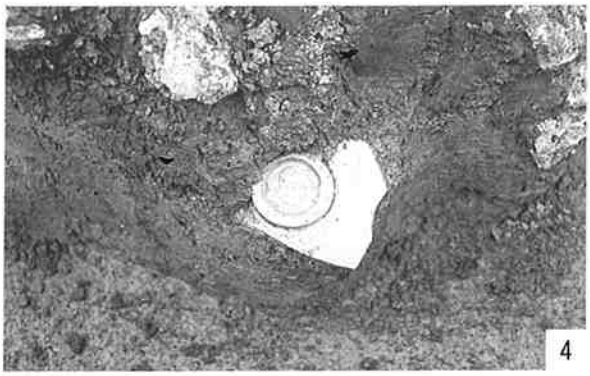


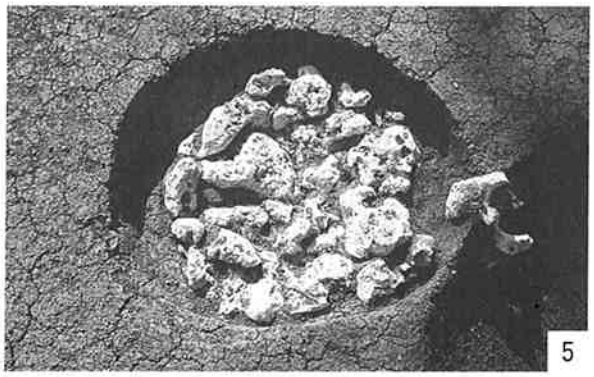


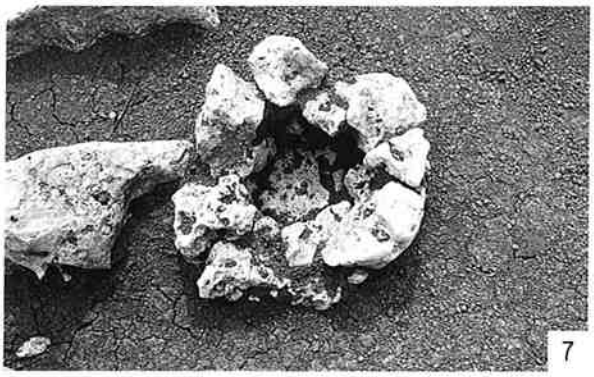
図版２　調査区の状況２

1. 堀込石組遺構２検出　2. 堀込石組遺構２　3. 堀込石組遺構２遺物出土位置
4. 堀込石組遺構２褐釉出土　5. 堀込石組遺構２石組外縁の牛骨
6. 牛骨埋納遺構（土坑６）　7. 土坑１土器出土　8. 土坑１

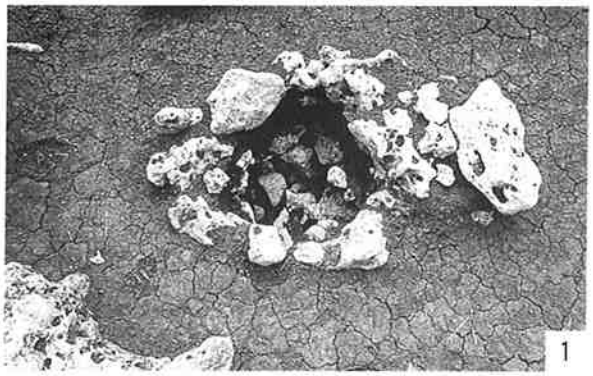


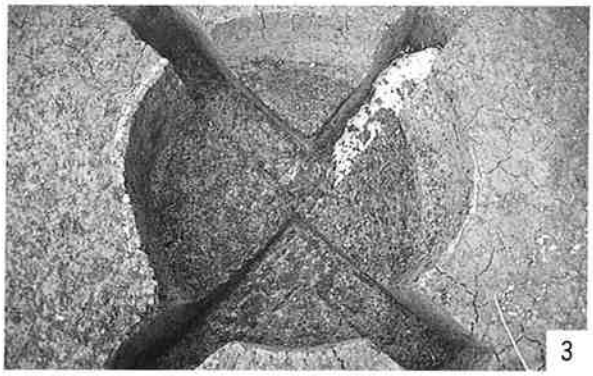


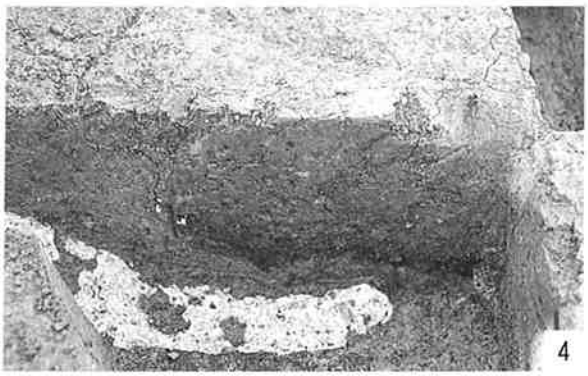


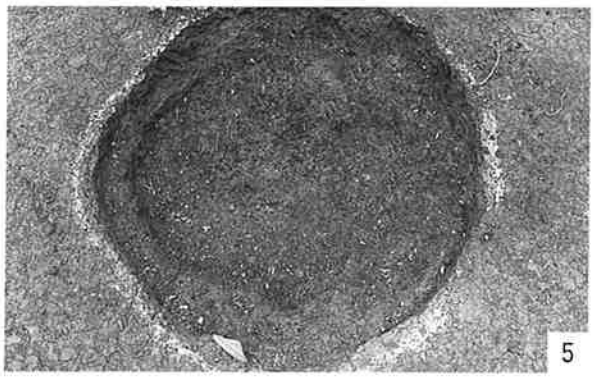


図版３　調査区の状況３　1. 土坑１断面　2. 土坑８・９断面　3. Pit288　4. Pit288埋土遺物出土
5. Pit278平面　6. Pit278断面　7. Pit203平面　8. Pit203断面

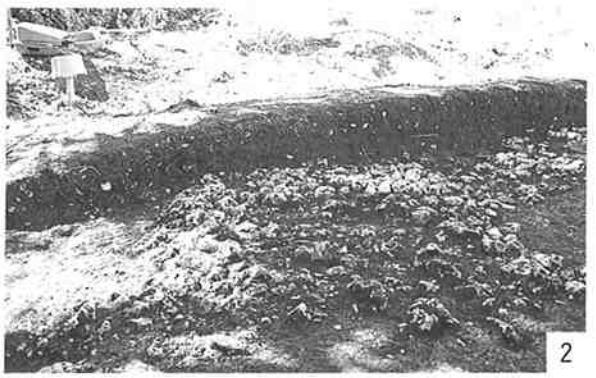


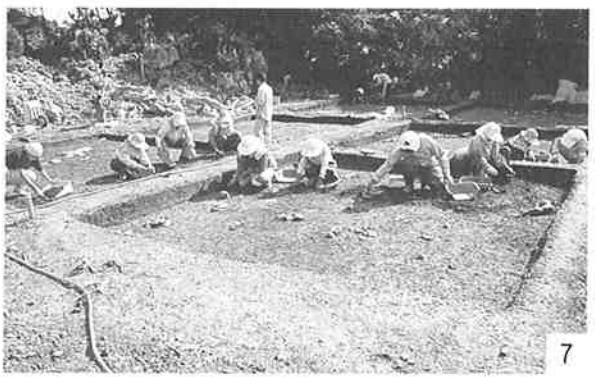






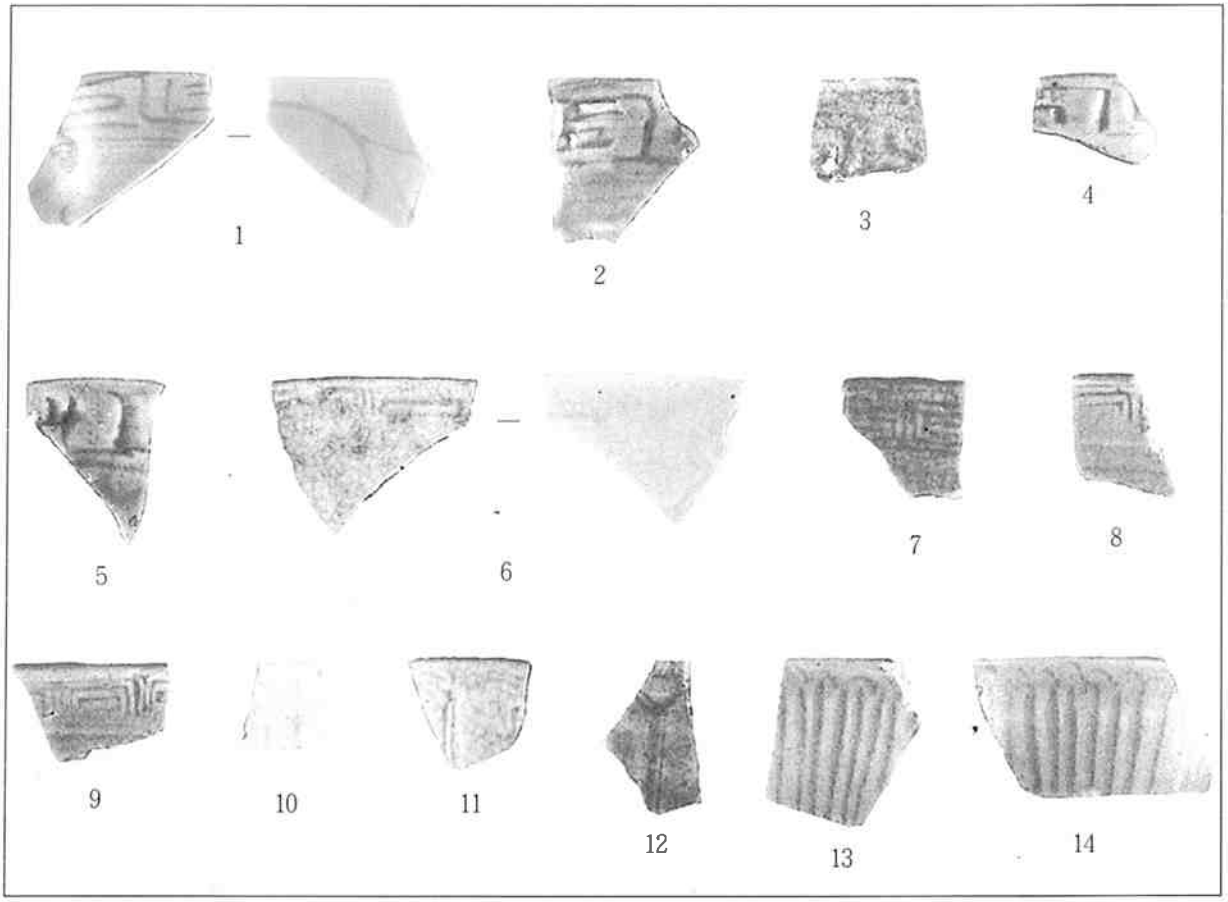
図版 4　調査区の状況 4　1. Pit225平面　2. Pit225断面　3. 炉跡17平面　4. 炉跡17断面
5. 炉跡 4 平面　6. 炉跡 4 断面　7. A・B地区間の石積　8. 石敷遺構 1

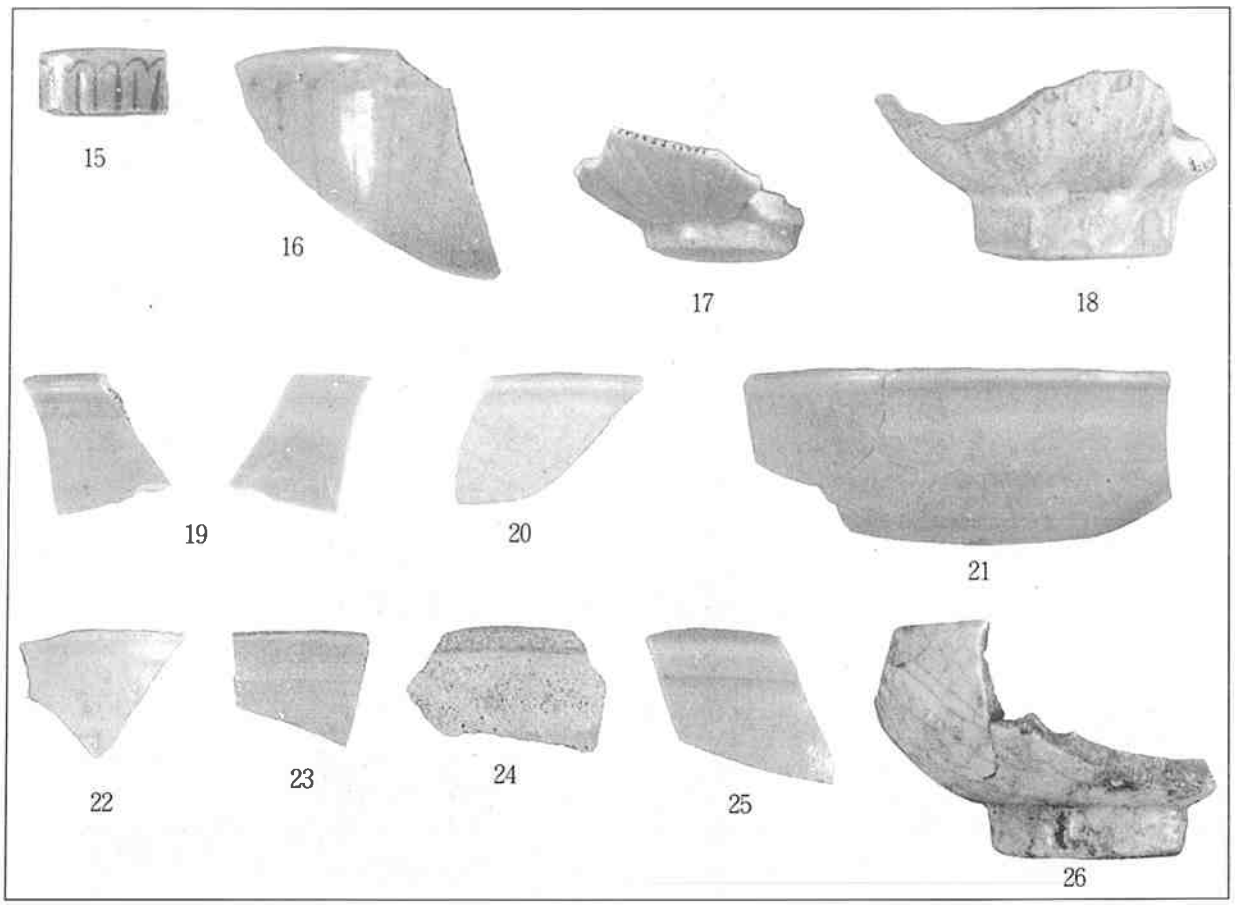




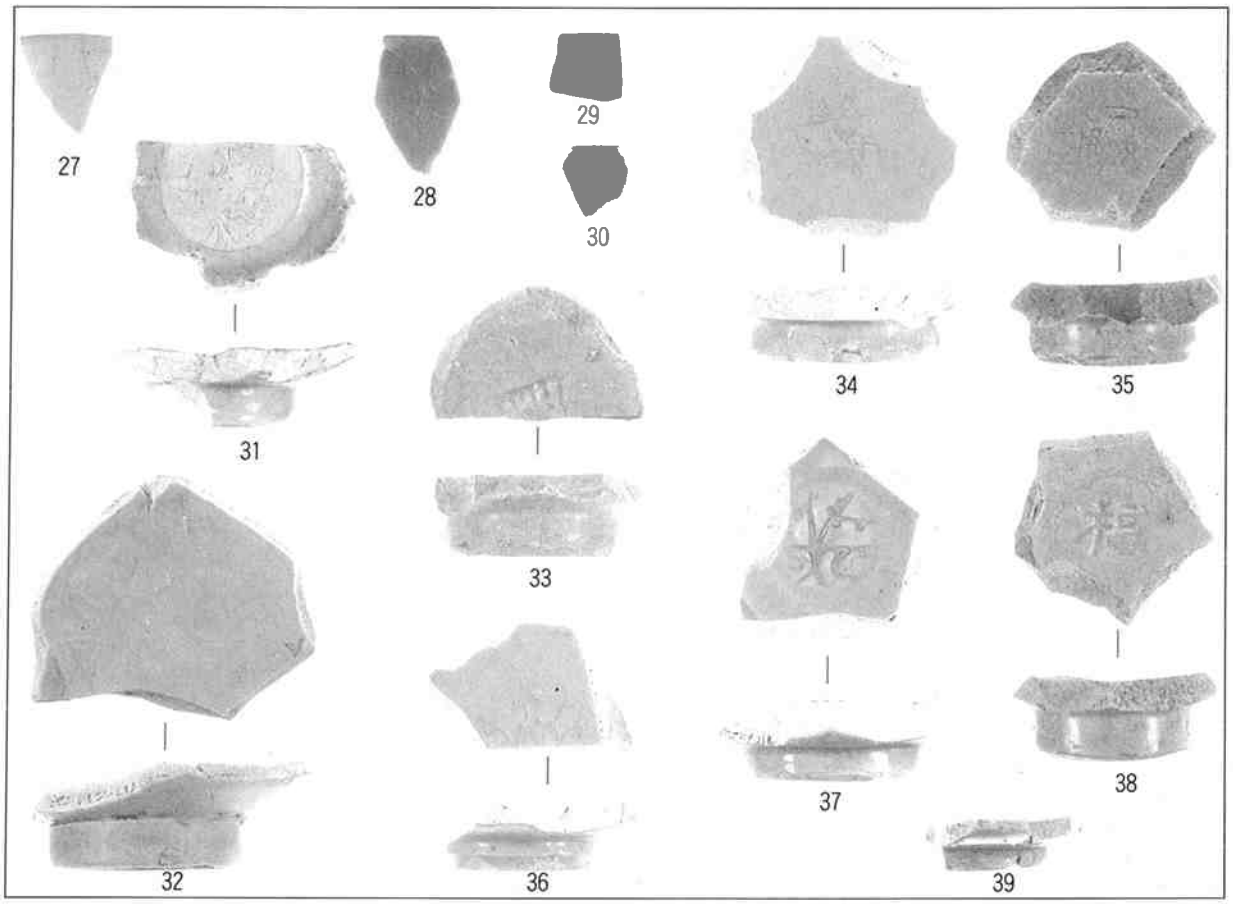
図版5　調査区の状況5

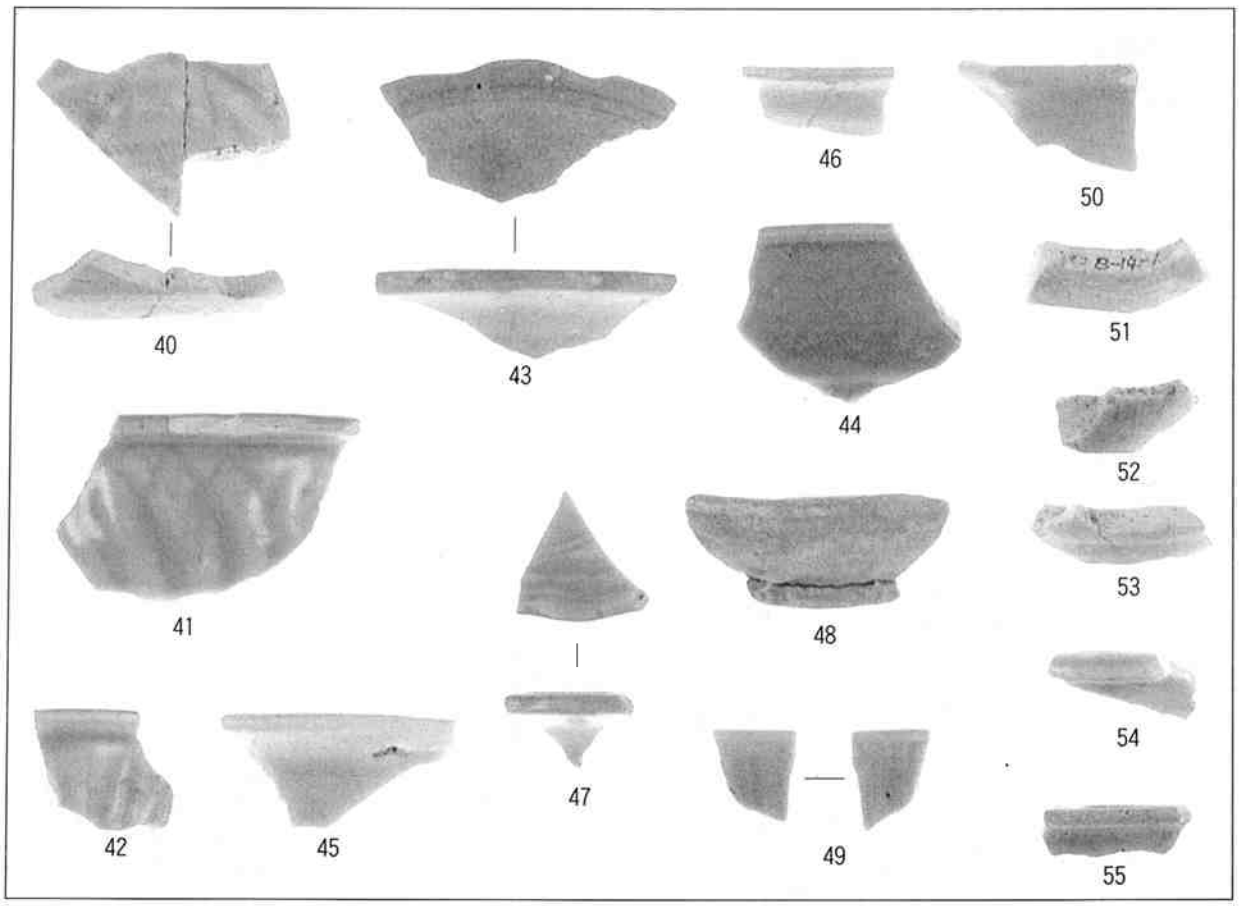
1. 石敷住居（石敷遺構2）　2. 石敷住居堆積土　3. 石敷住居造成状況
4. A地区層序　5. 石敷住居土留めの石積　6. 現場説明会
7. 遺構検出作業　8. 炉跡検出作業



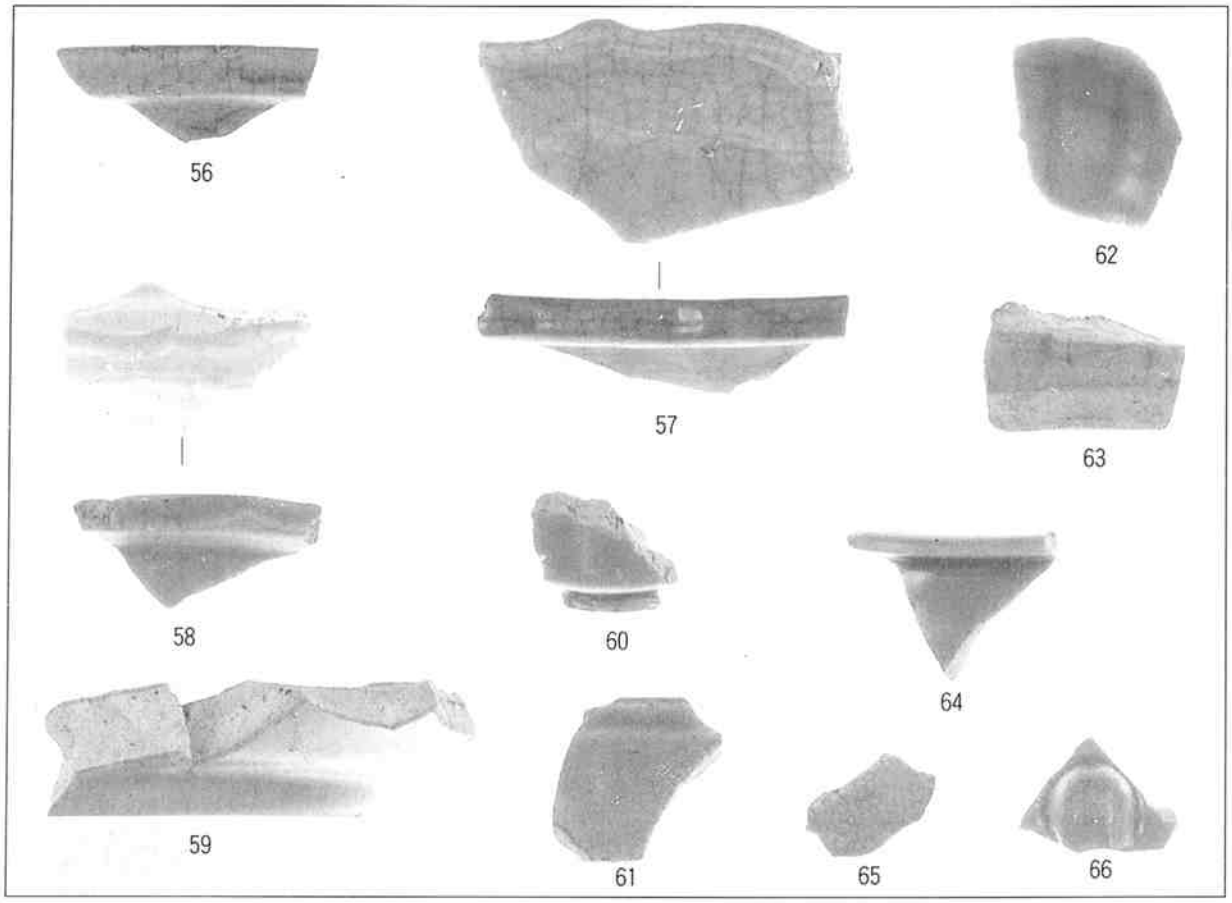


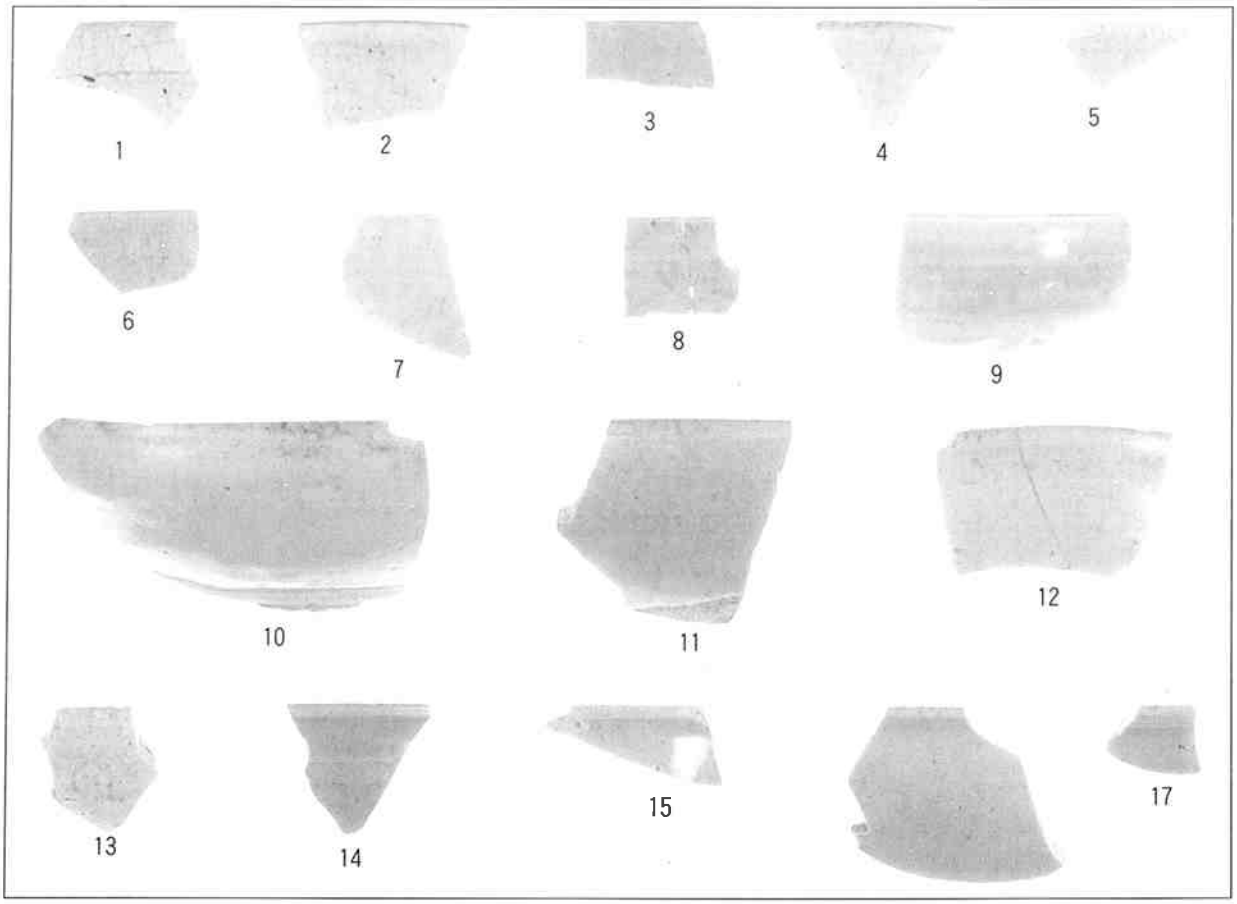
図版6　上：青磁　下：青磁2



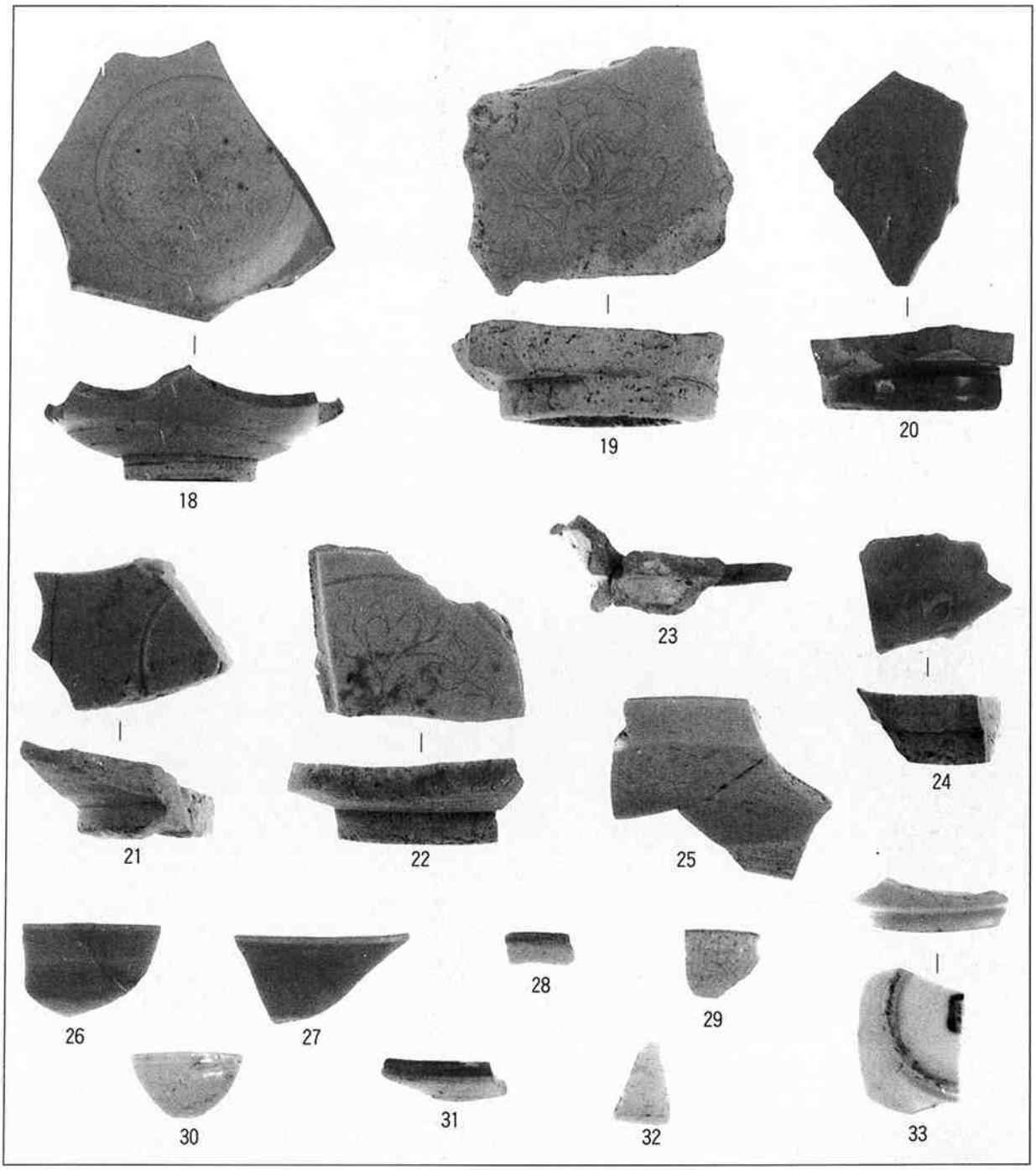


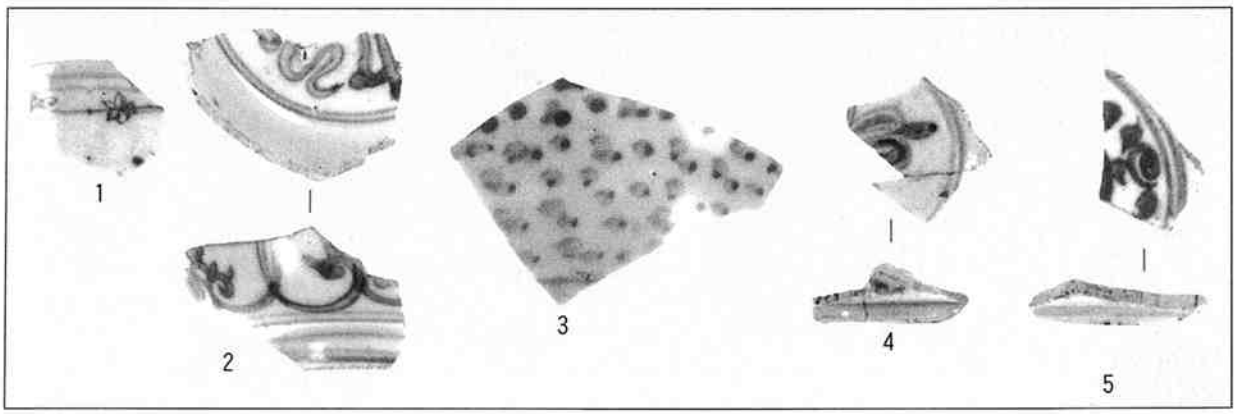
図版7　上：青磁3　下：青磁4



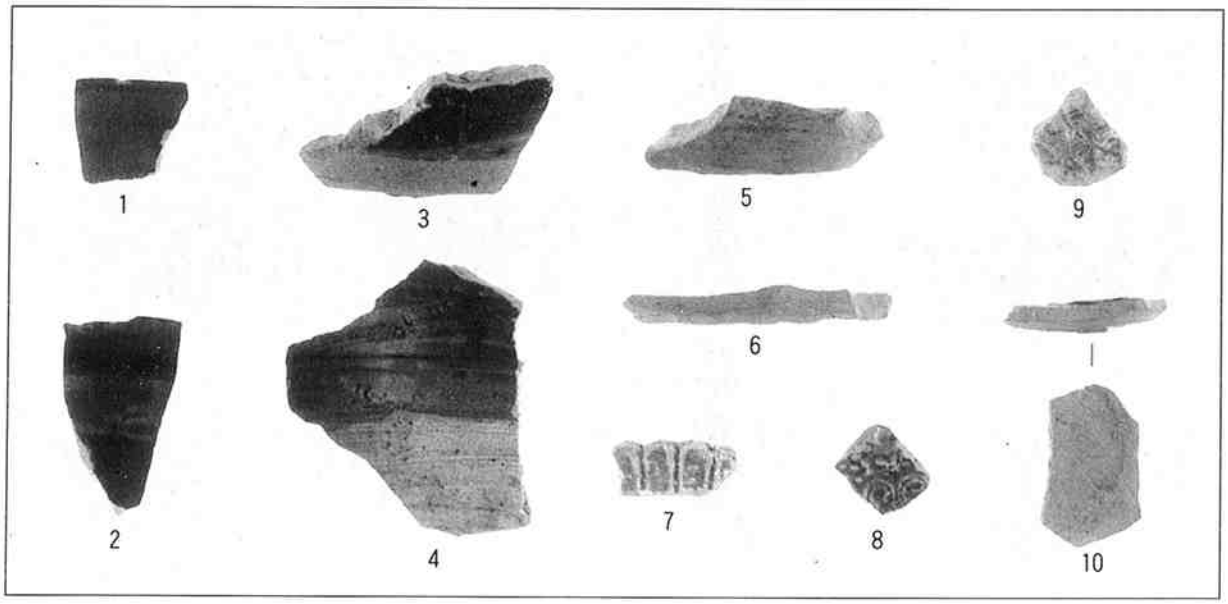


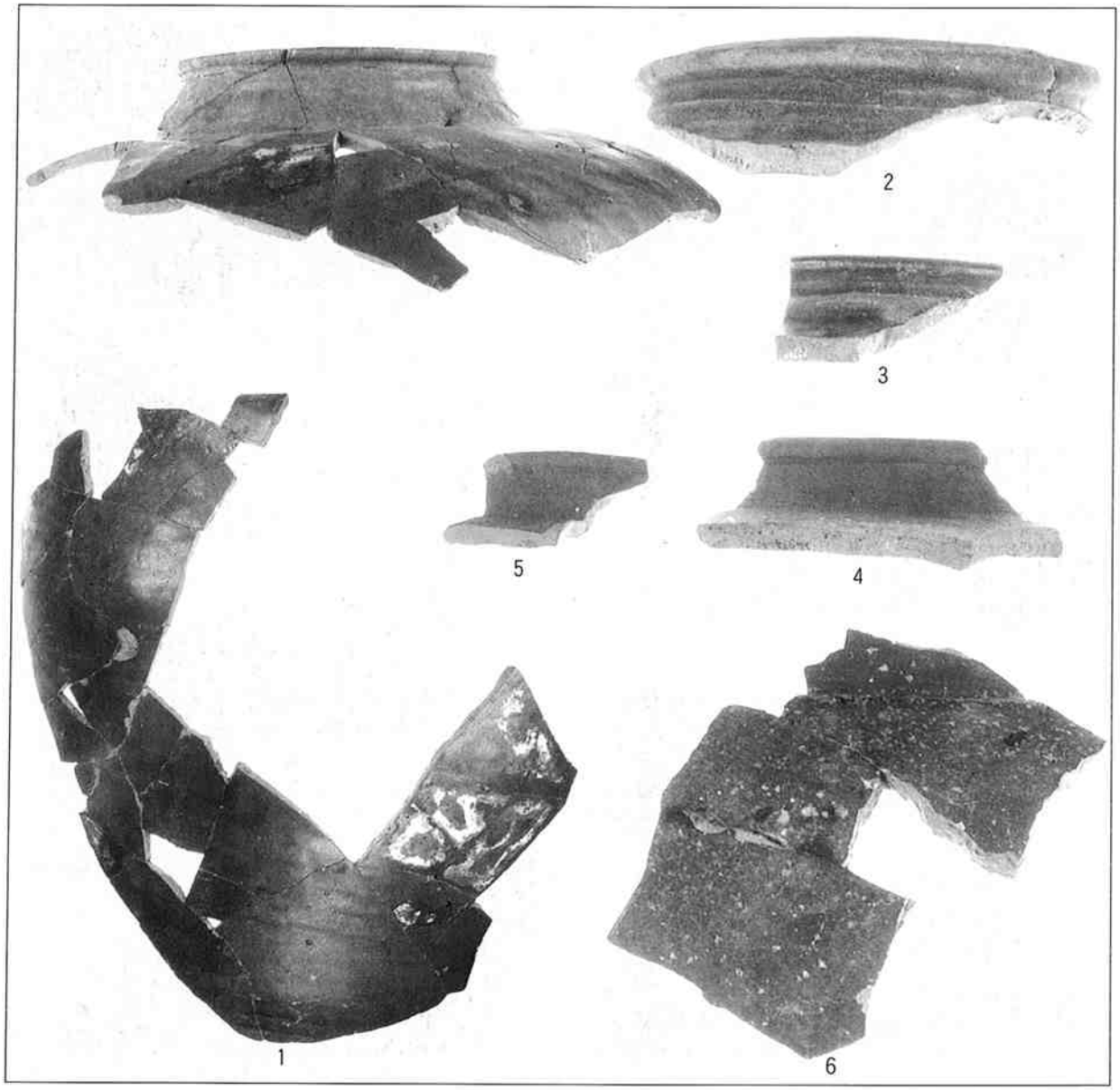
図版８　上：青磁５　下：白磁１



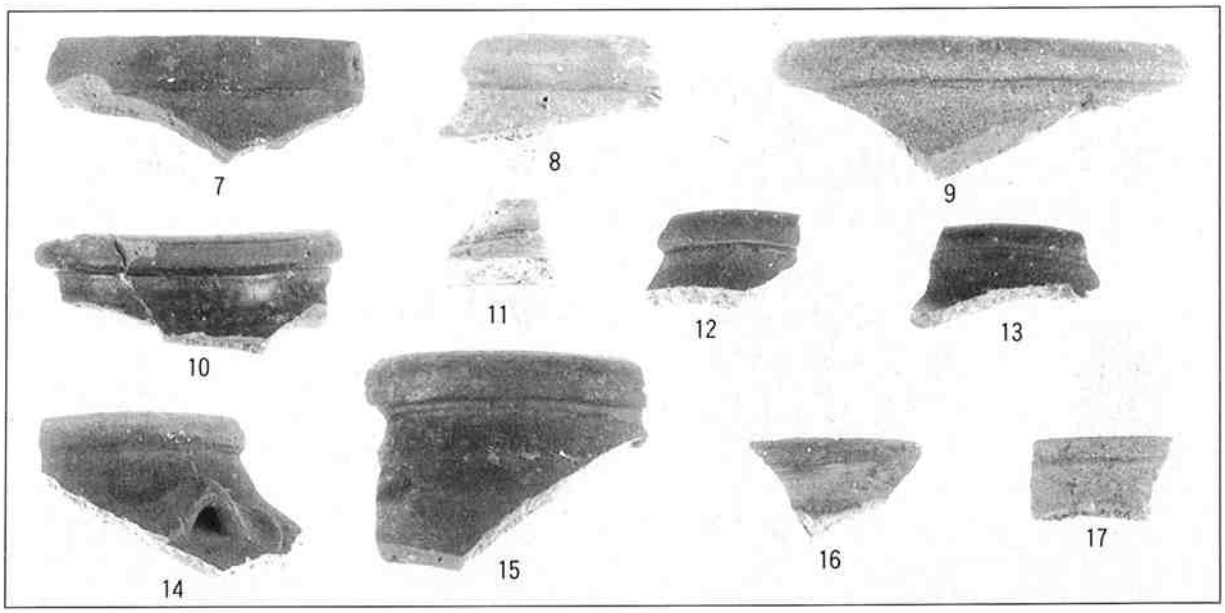


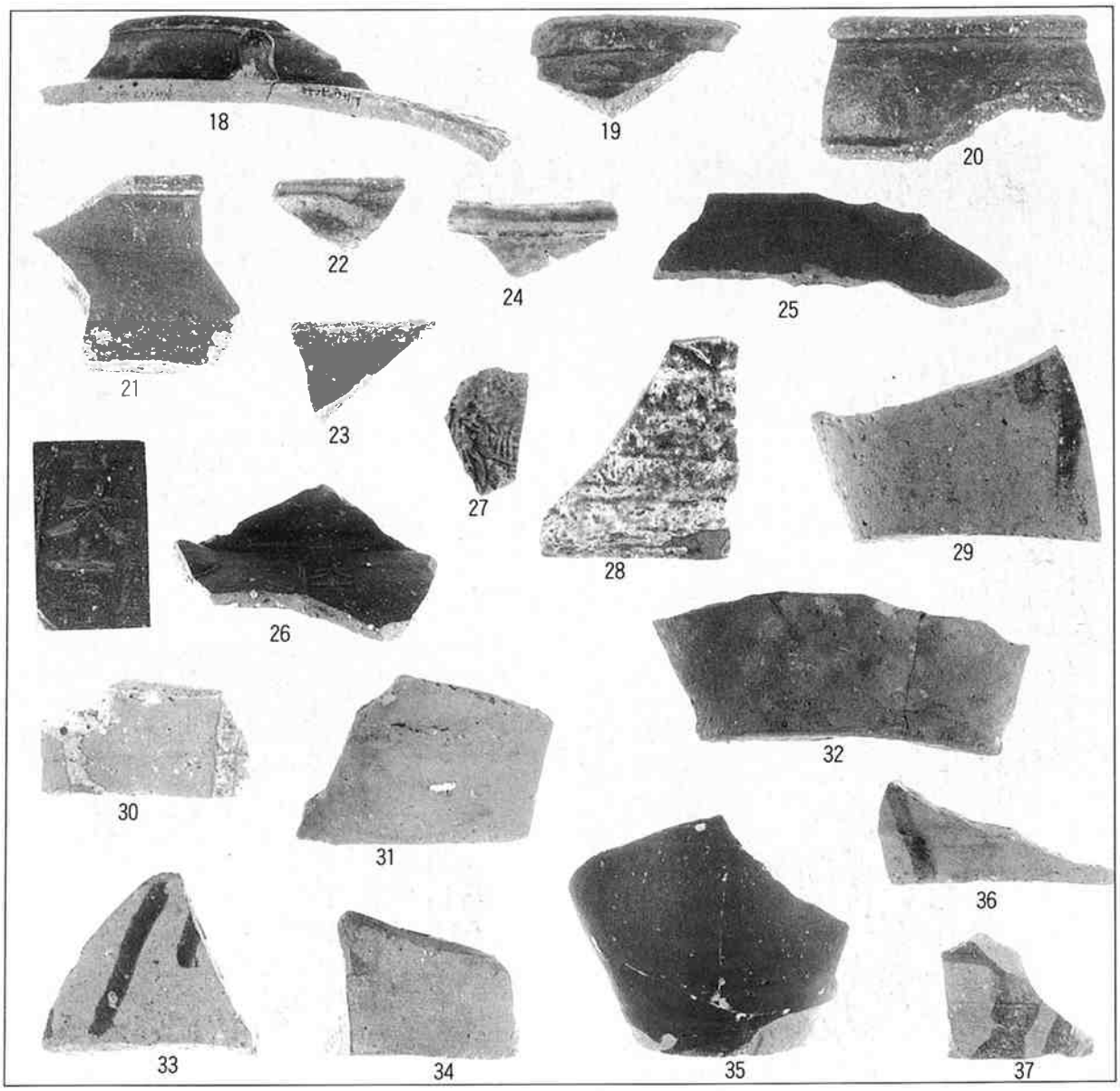
図版９　上：白磁２　下：染付



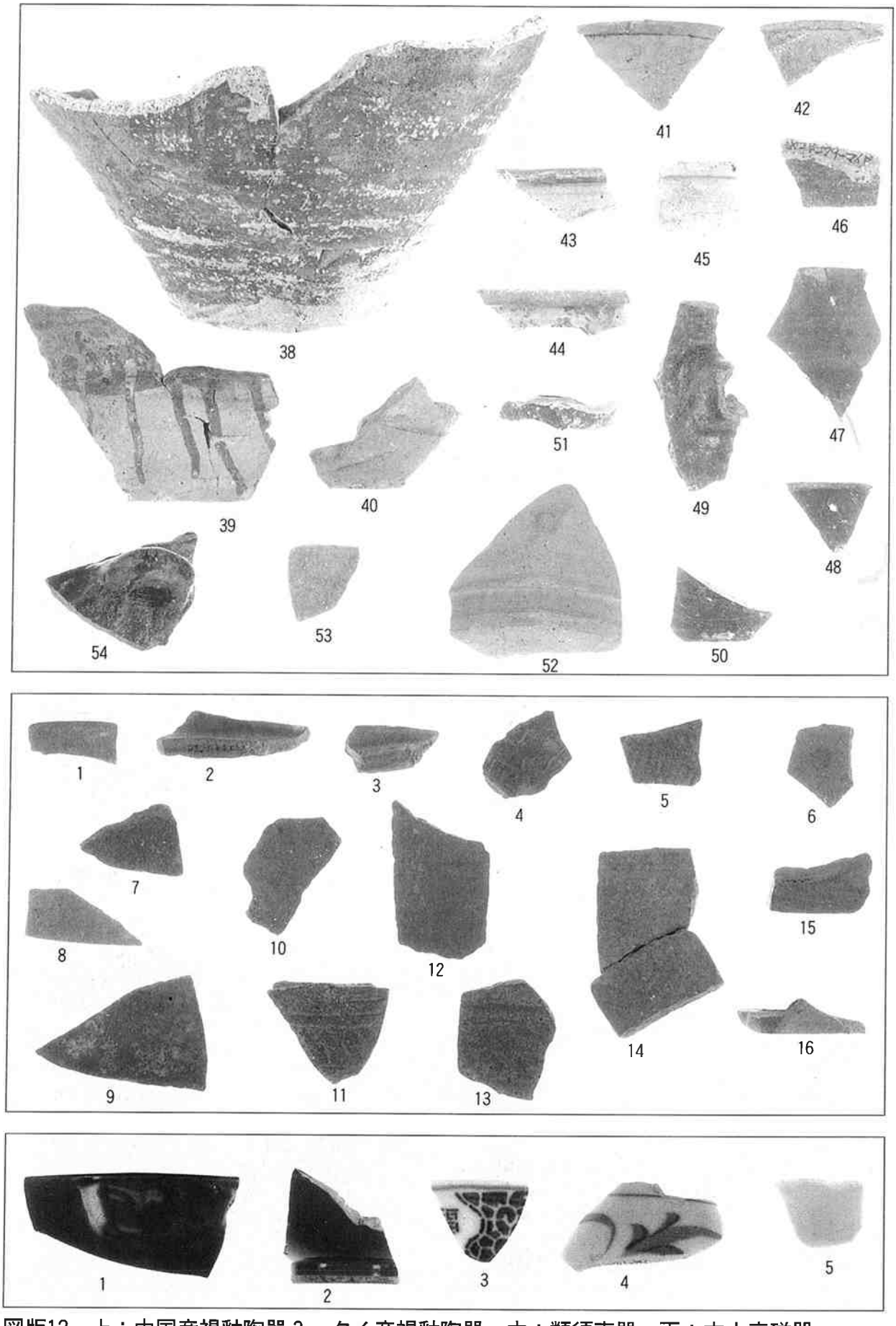


図版10　上：中国産陶器　下：中国産褐釉陶器１（１～６）

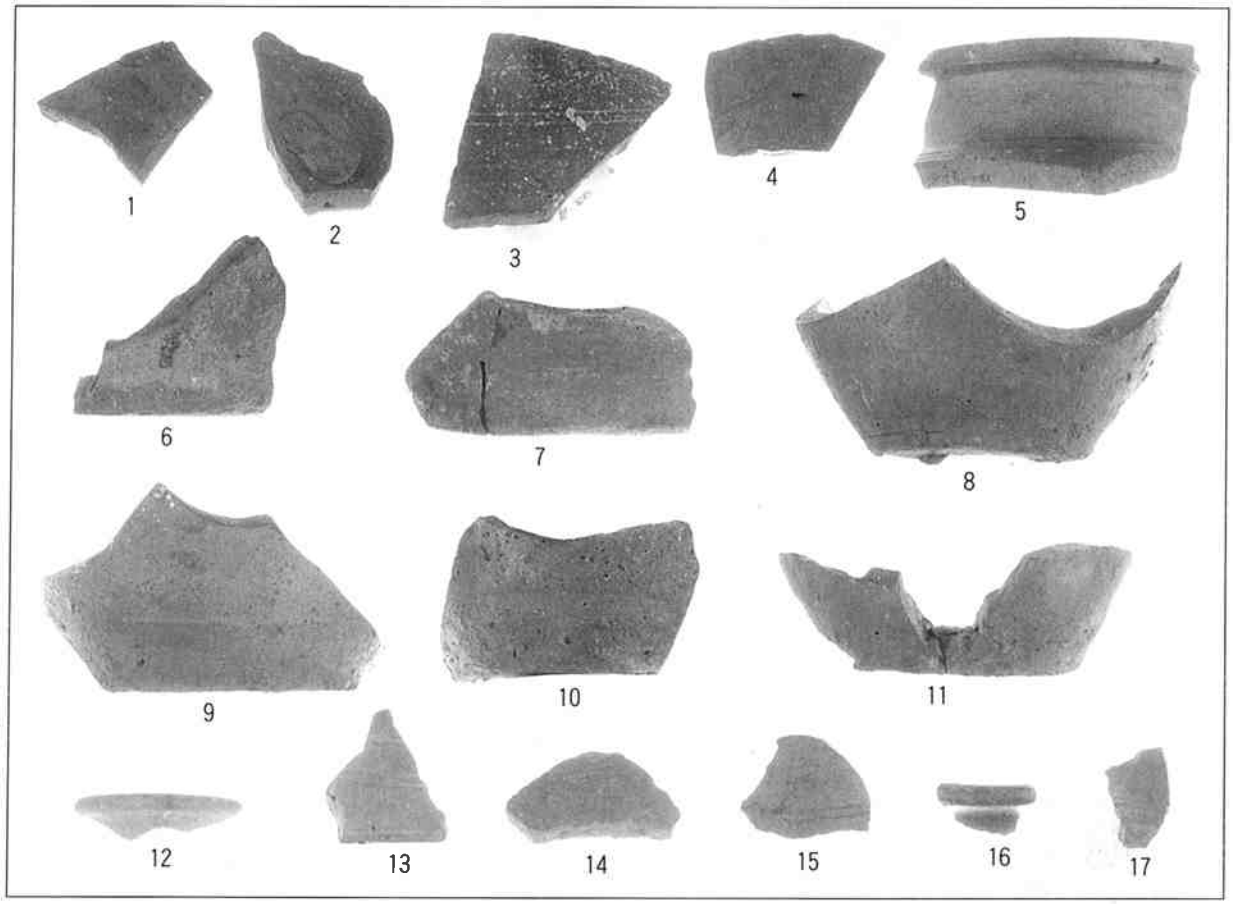


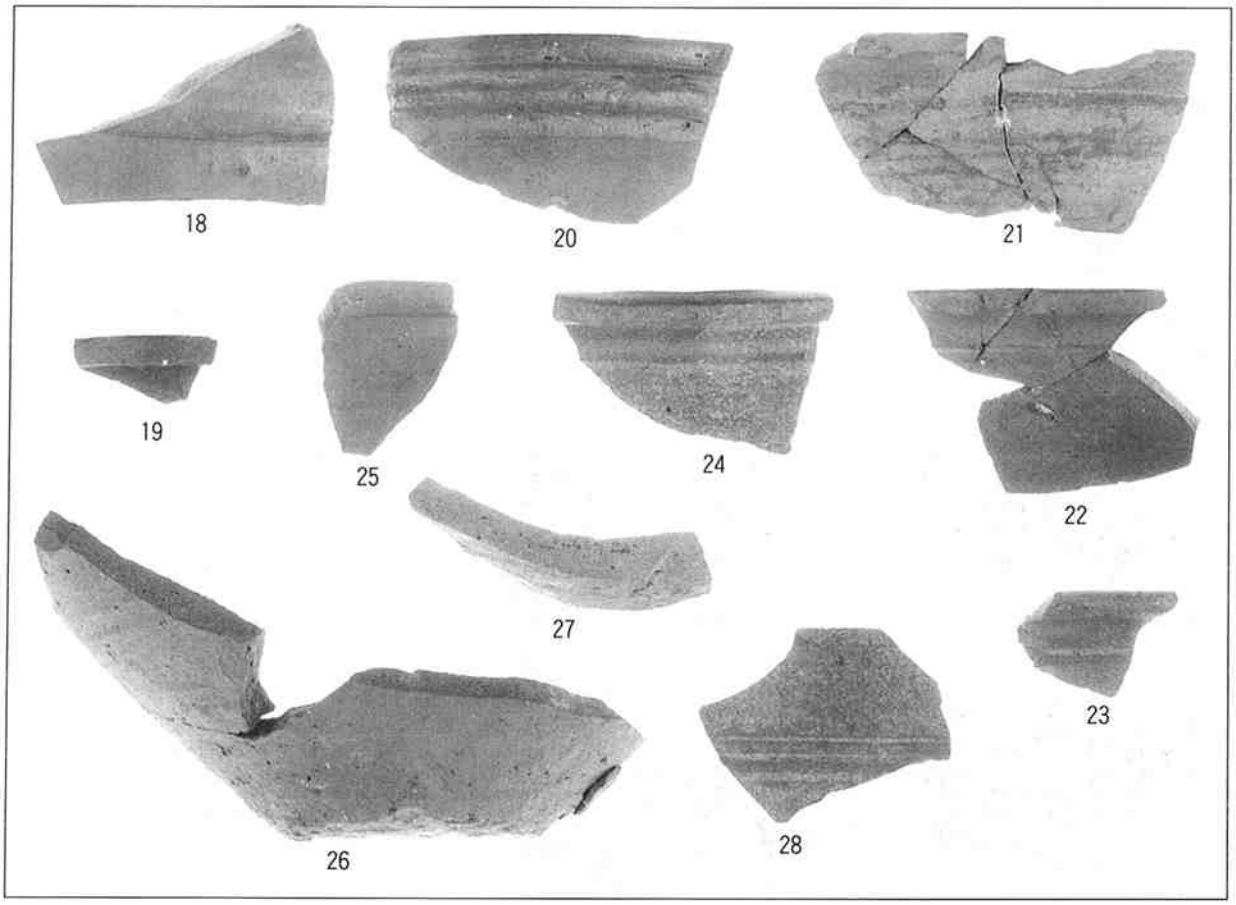


図版11　上：中国産褐釉陶器１（７～17）　下：中国産褐釉陶器２

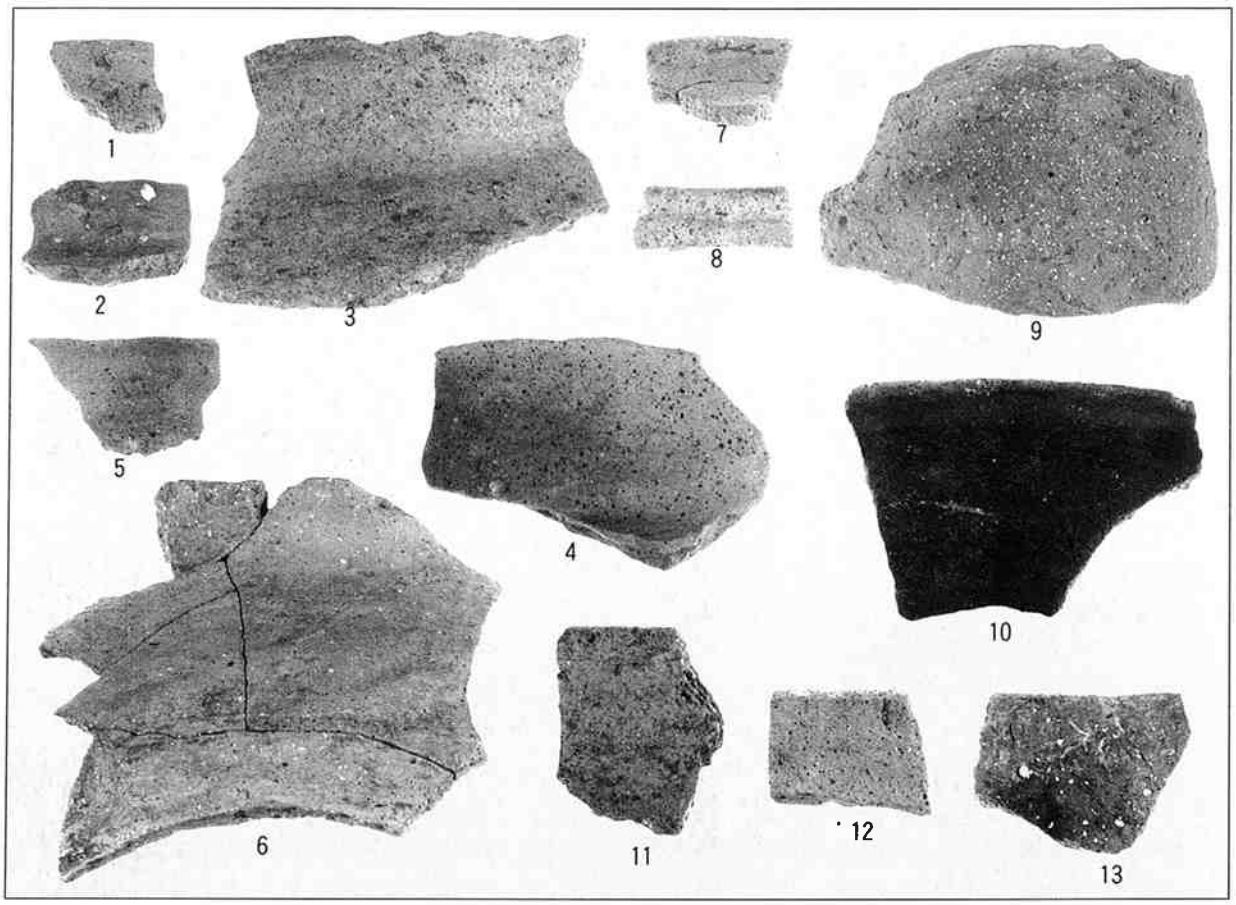


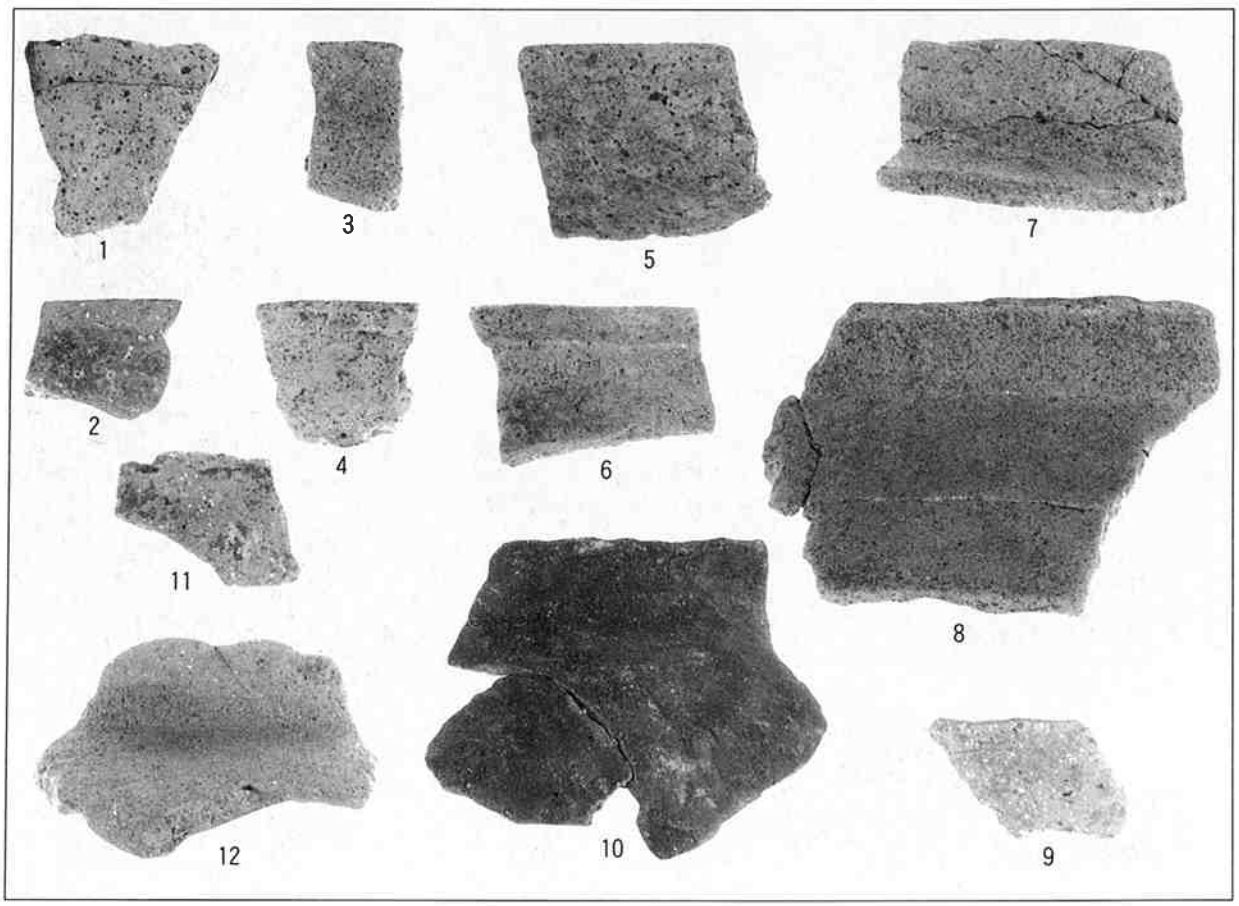
図版12　上：中国産褐釉陶器３・タイ産褐釉陶器　中：類須恵器　下：本土産磁器



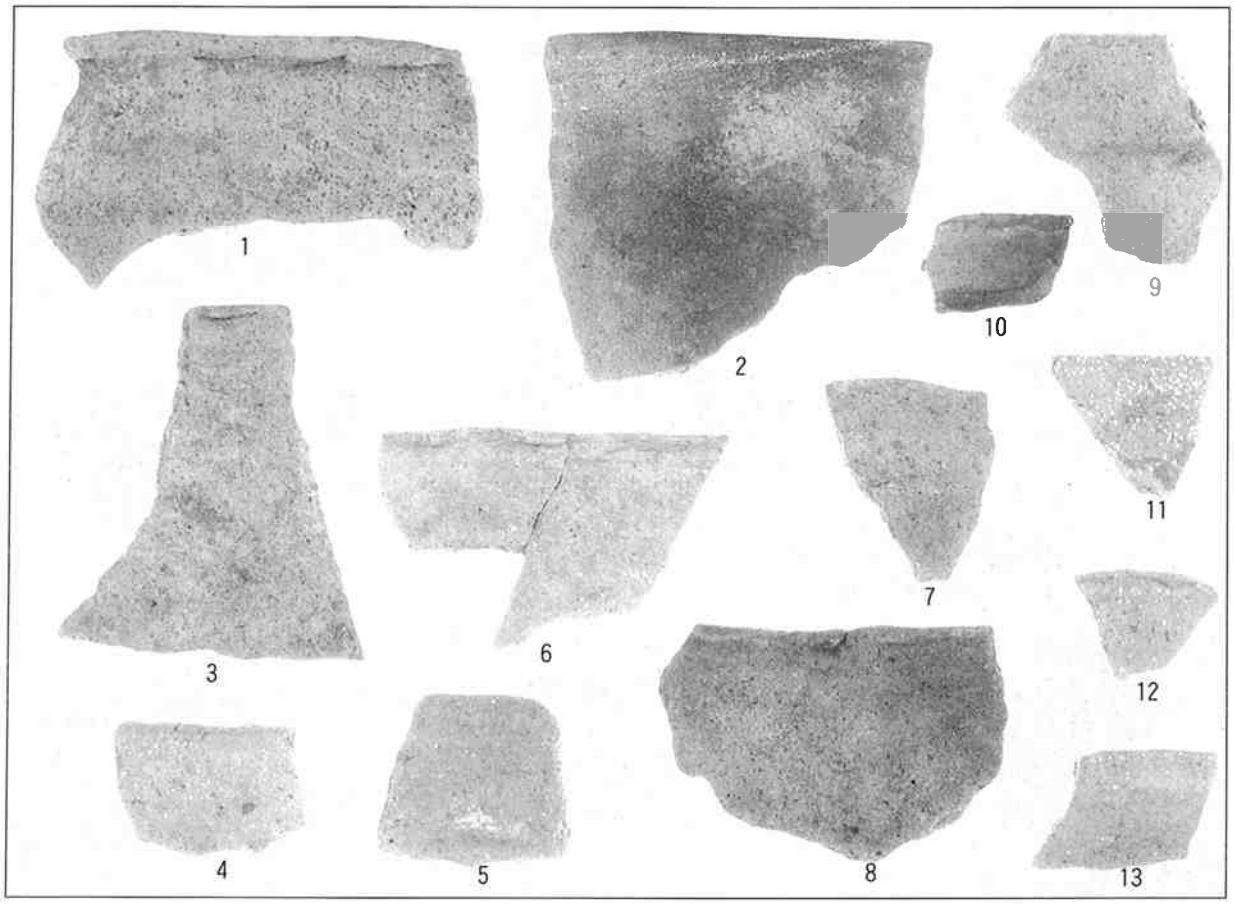


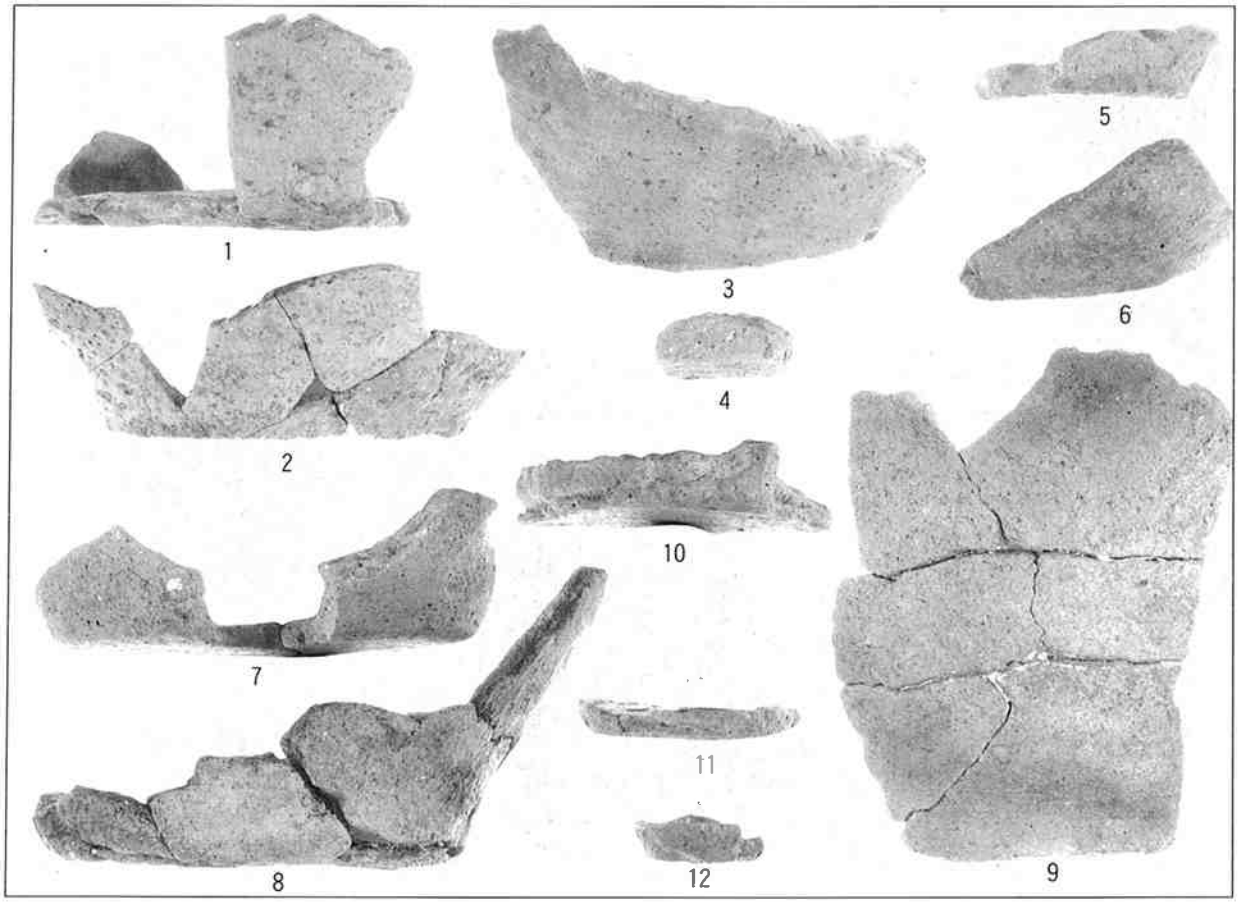
図版14　上：沖縄産無釉陶器 1　　下：沖縄産無釉陶器 2



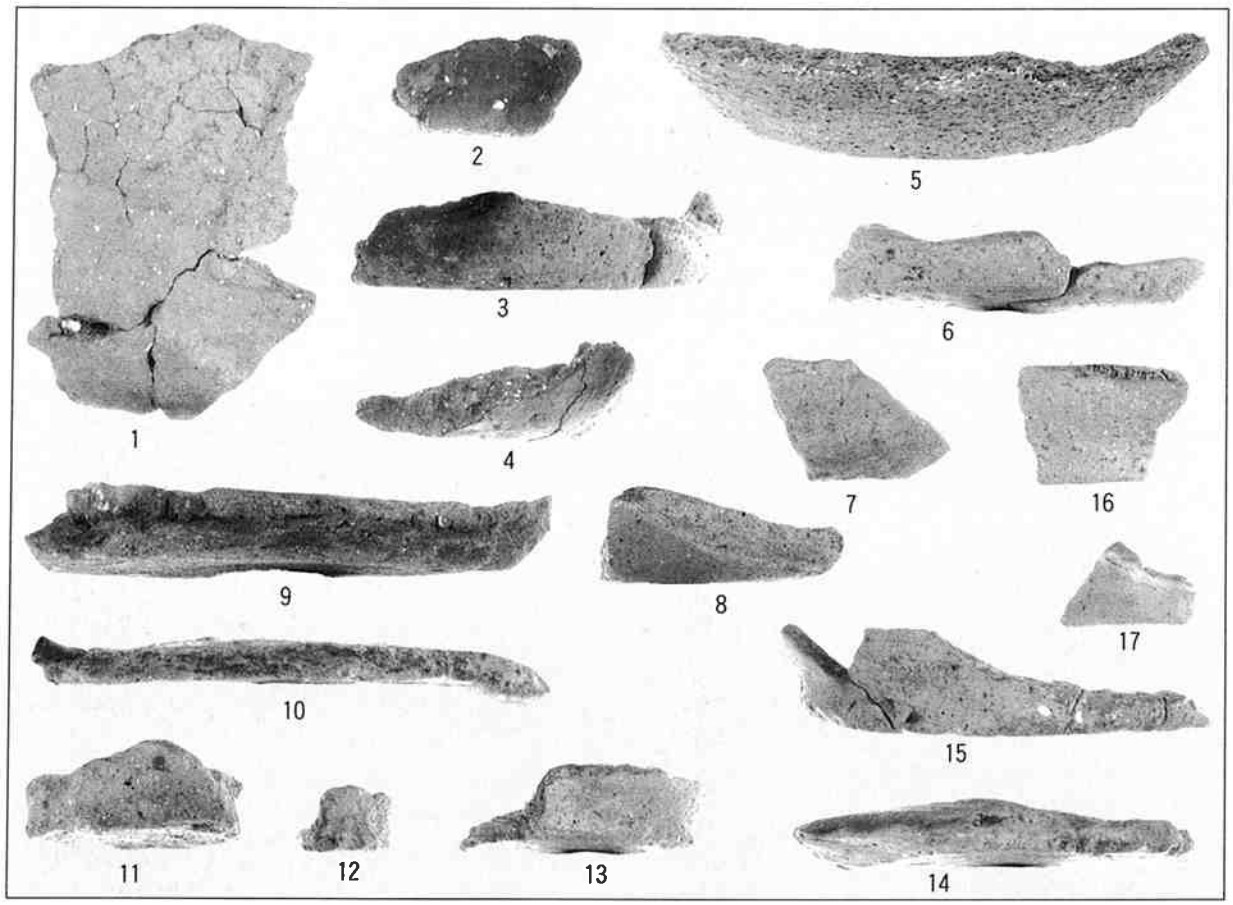


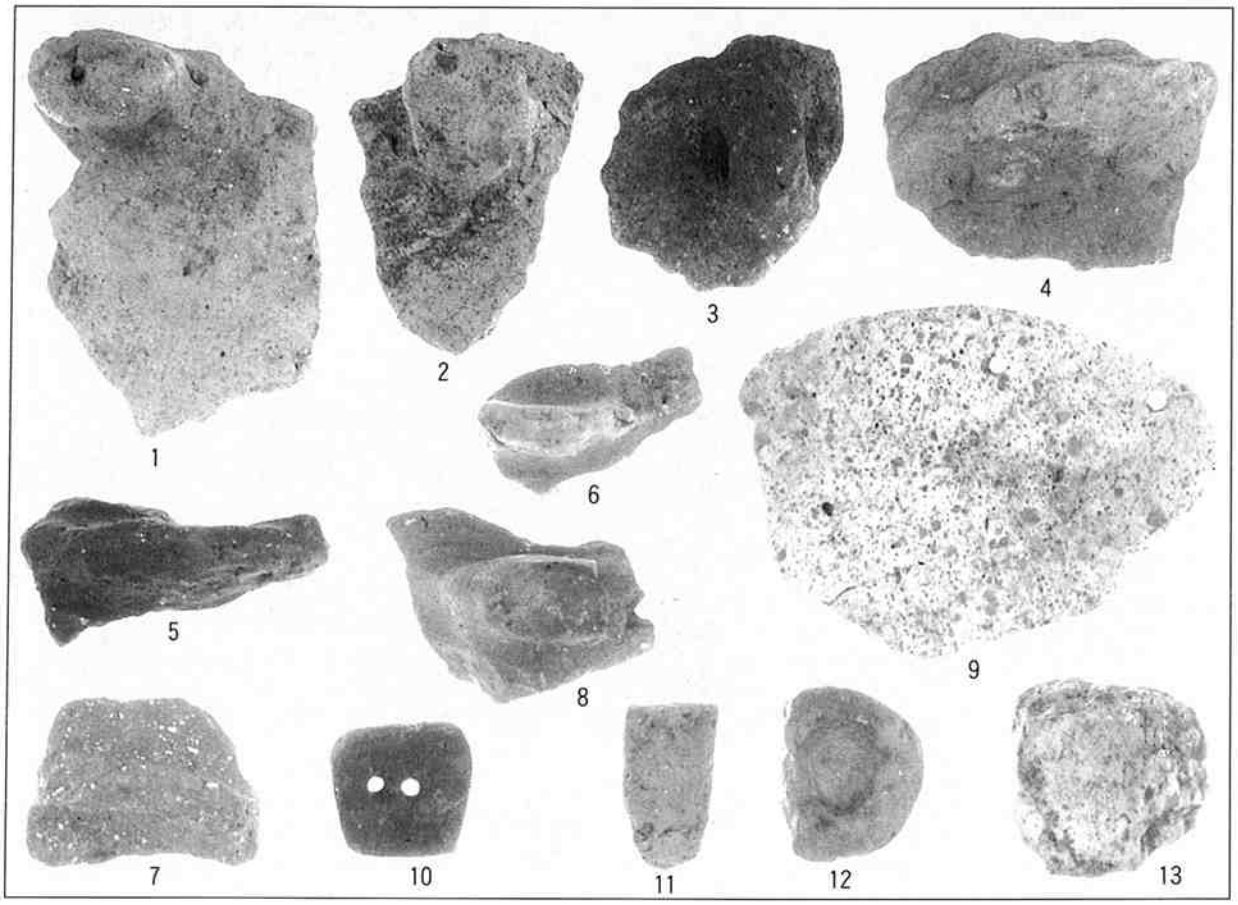
図版15　上：土器1　下：土器2



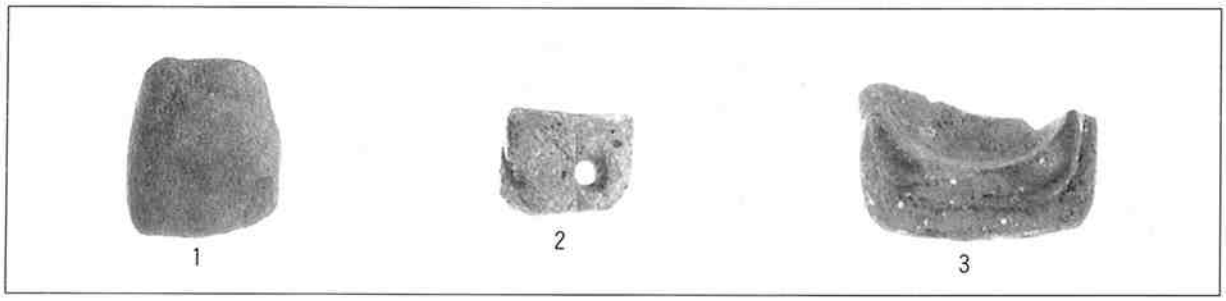


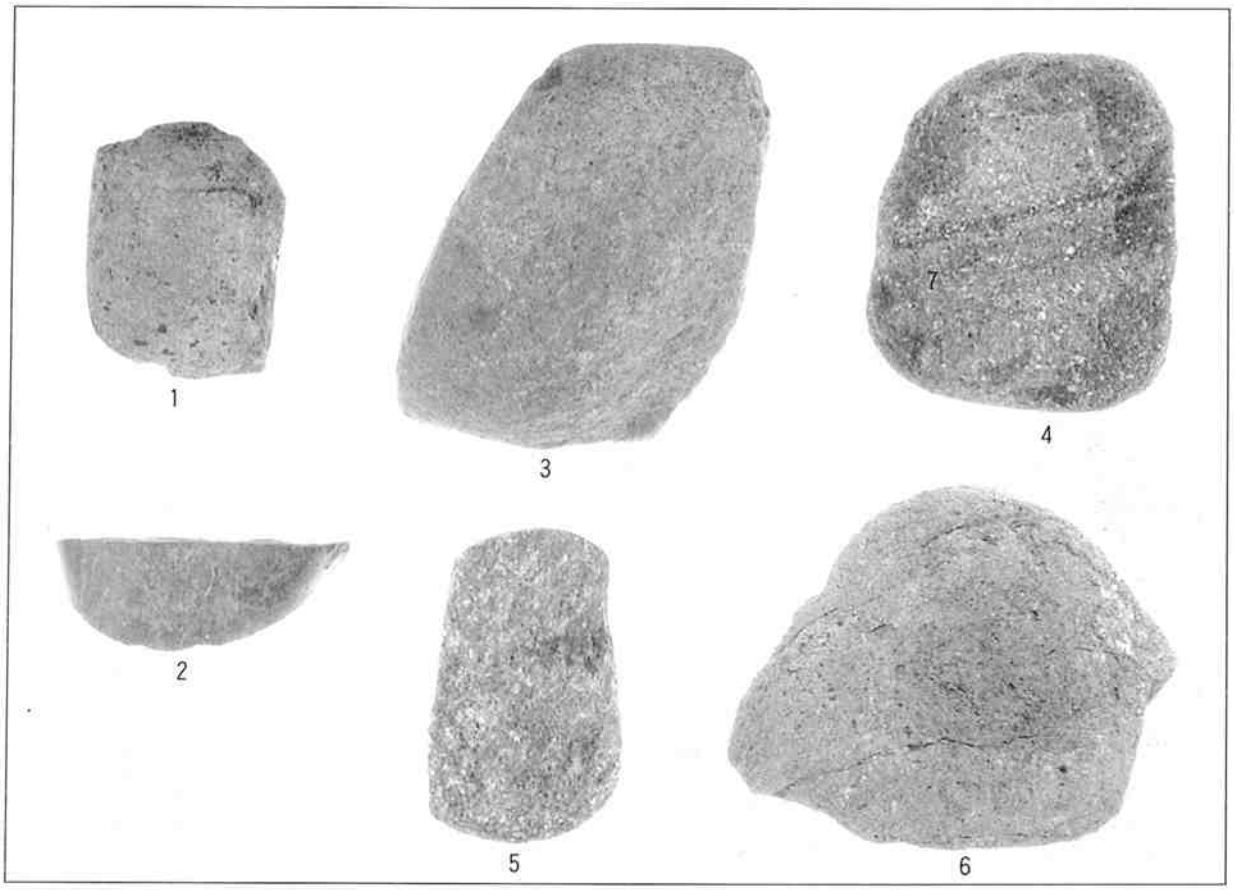
図版16　上：土器3　下：土器4

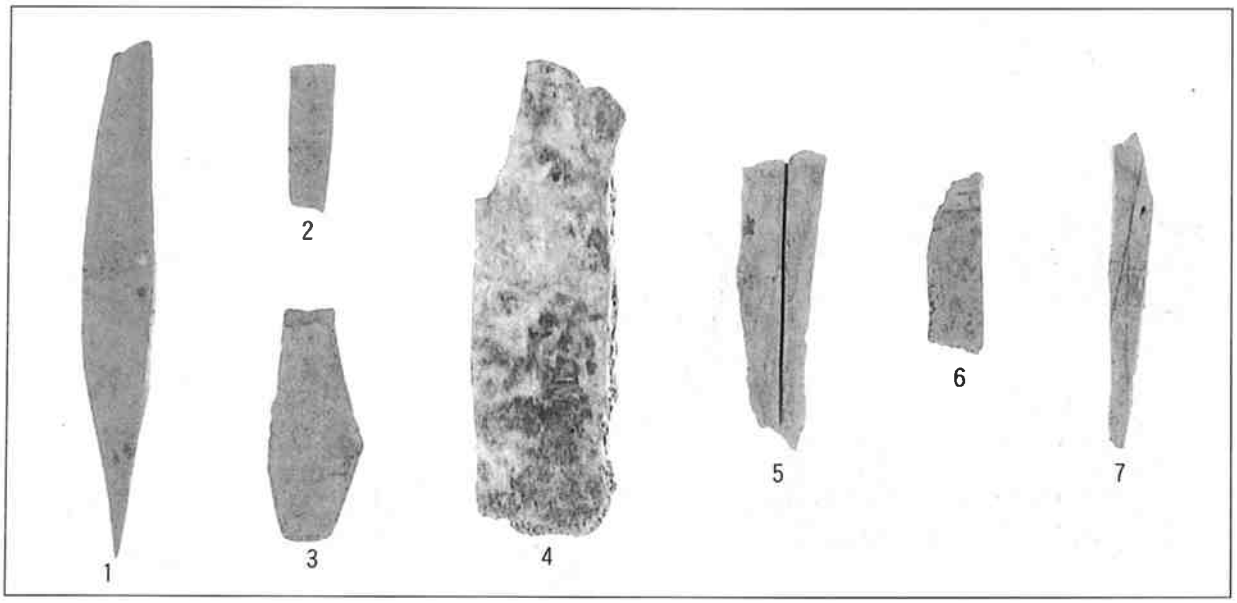




図版17　上：土器５　下：土器６・土製品

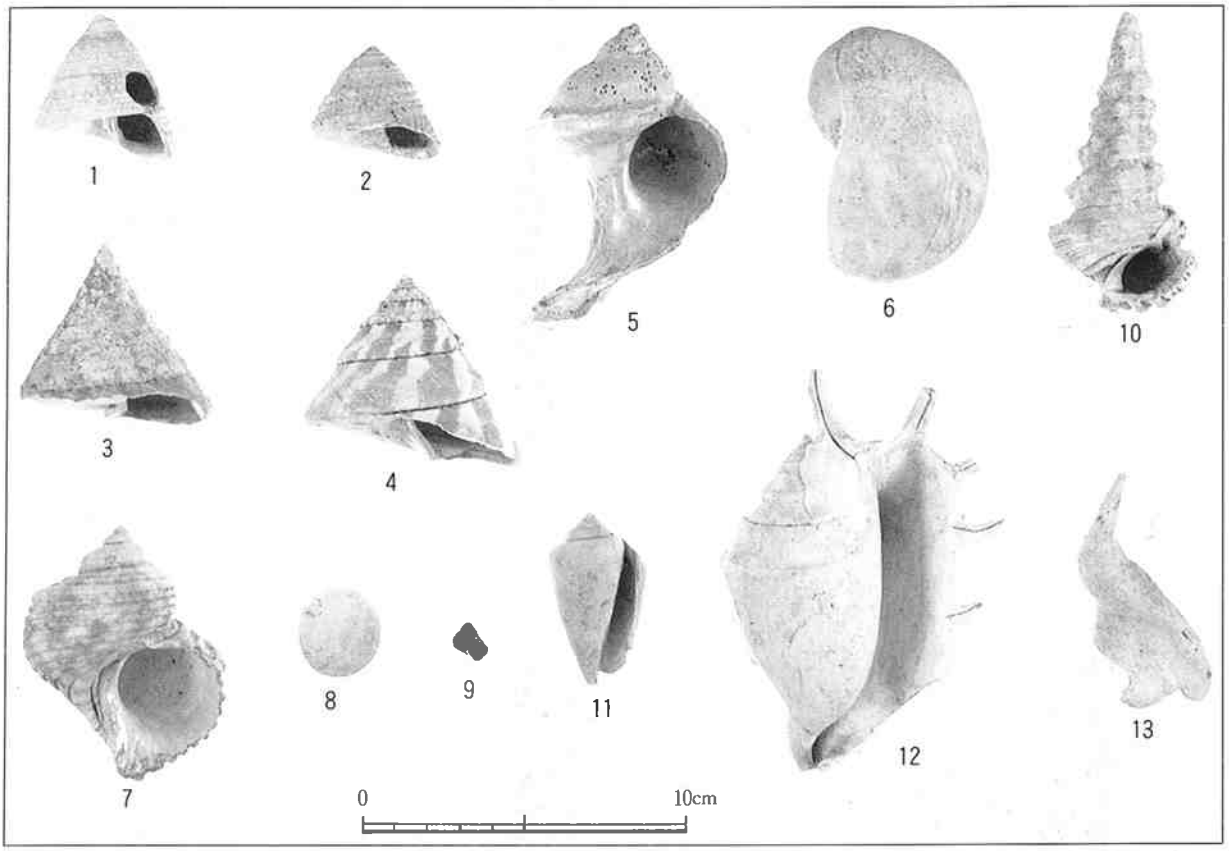


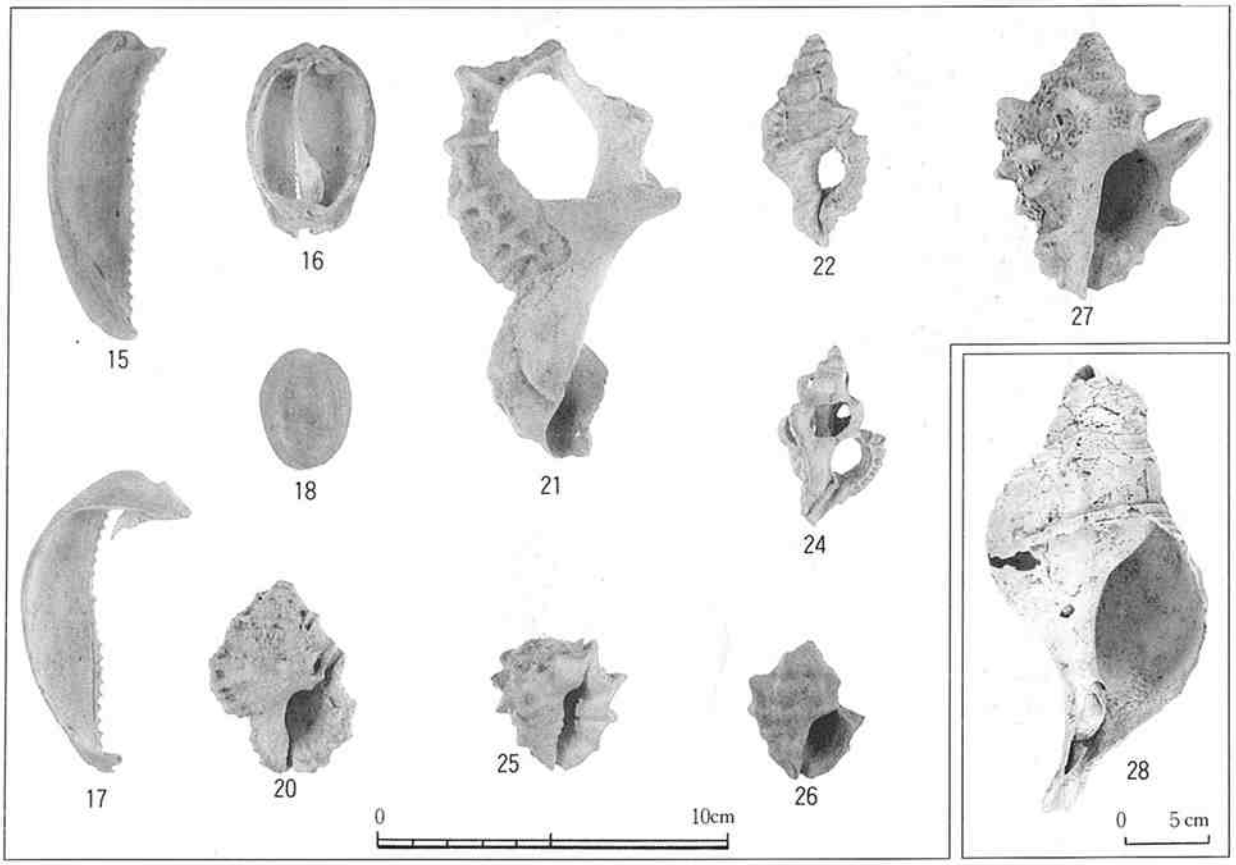




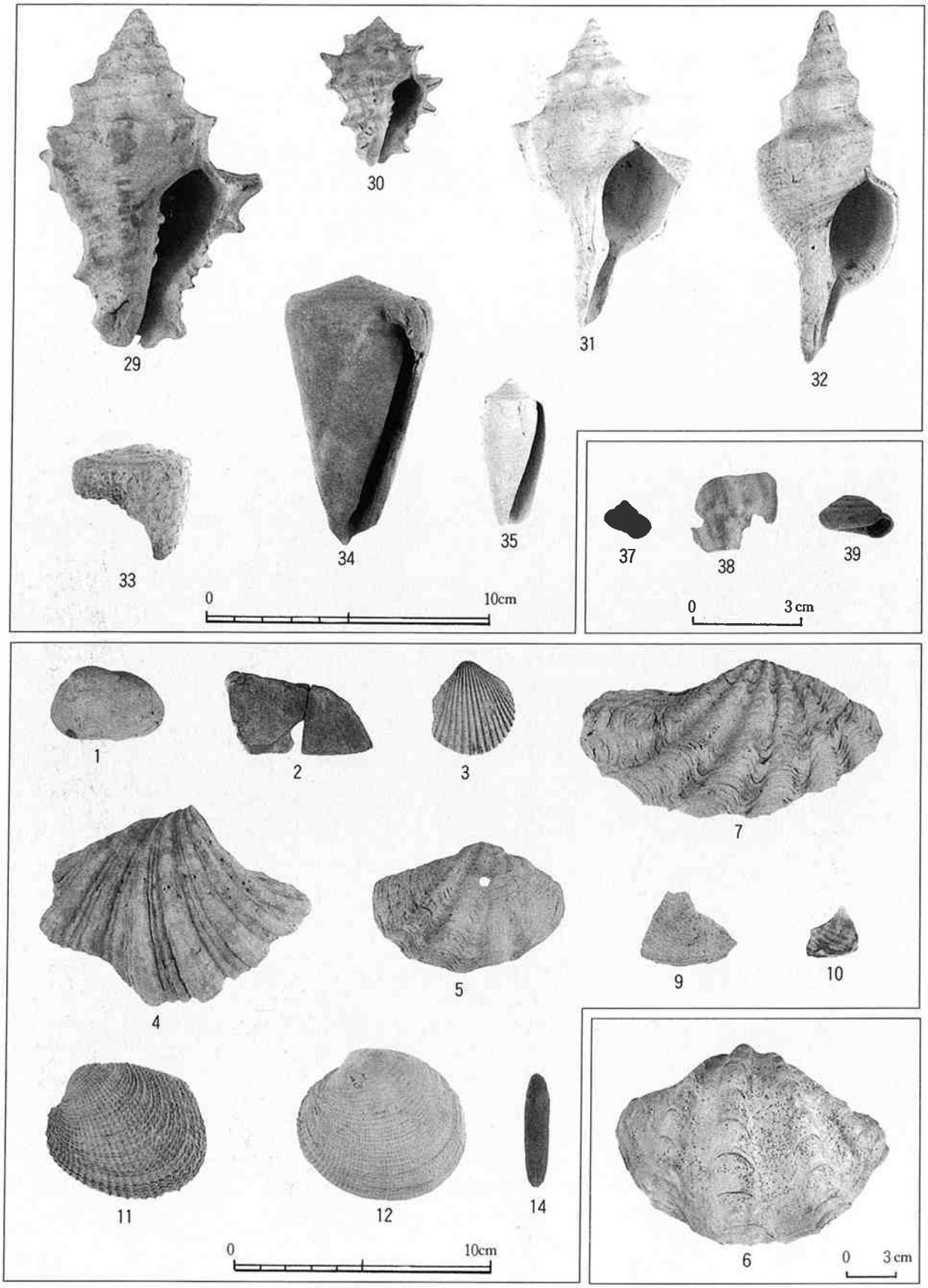
図版19　上：石器・石製品1　中：石器・石製品2　下：骨製品

図版20　切痕　ブタ　1. 右脛骨　ウシ　2. 3. 肋骨　4. 右肩甲骨　5. 左上腕骨　6. 左中手骨
7. 中手骨　8. 左寛骨　9. 右脛骨　10. 左踵骨　11. 右距骨　12. 左中節骨



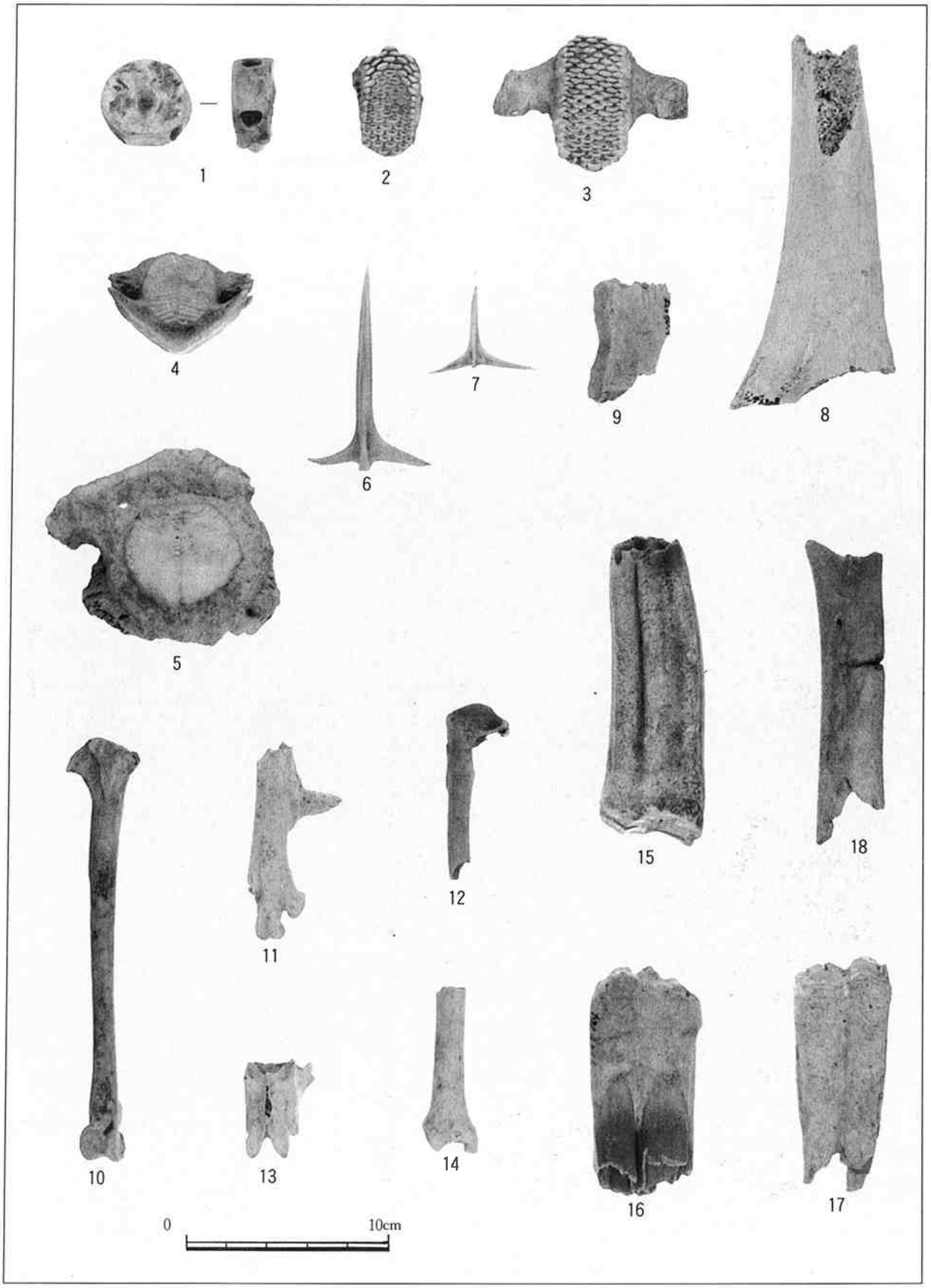


図版21　上：巻貝　1．ニシキウズ　2．ムラサキウズ　3．ギンタカハマ　4．サラサバティ　5．ヤコウガイ
6．ヤコウガイの蓋　7．チョウセンサザエ　8．チョウセンサザエの蓋　9．コシダカサザエ
10．オニノツノガイ　11．マガキガイ　12．クモガイ　13．スイジガイ
下：巻貝　15．ハチジョウダカラ　16．ヤクシマダカラ　17．ホシダカラ　18．ハナマルユキ　20．オキニシ
21．シロナルトボラ　22．ミツカドボラ　23．ホラガイ　24．ガンゼキボラ
25．ムラサキイガレイシ　26．ツノレイシガイ　27．シラクモガイ　（番号は表と一致）

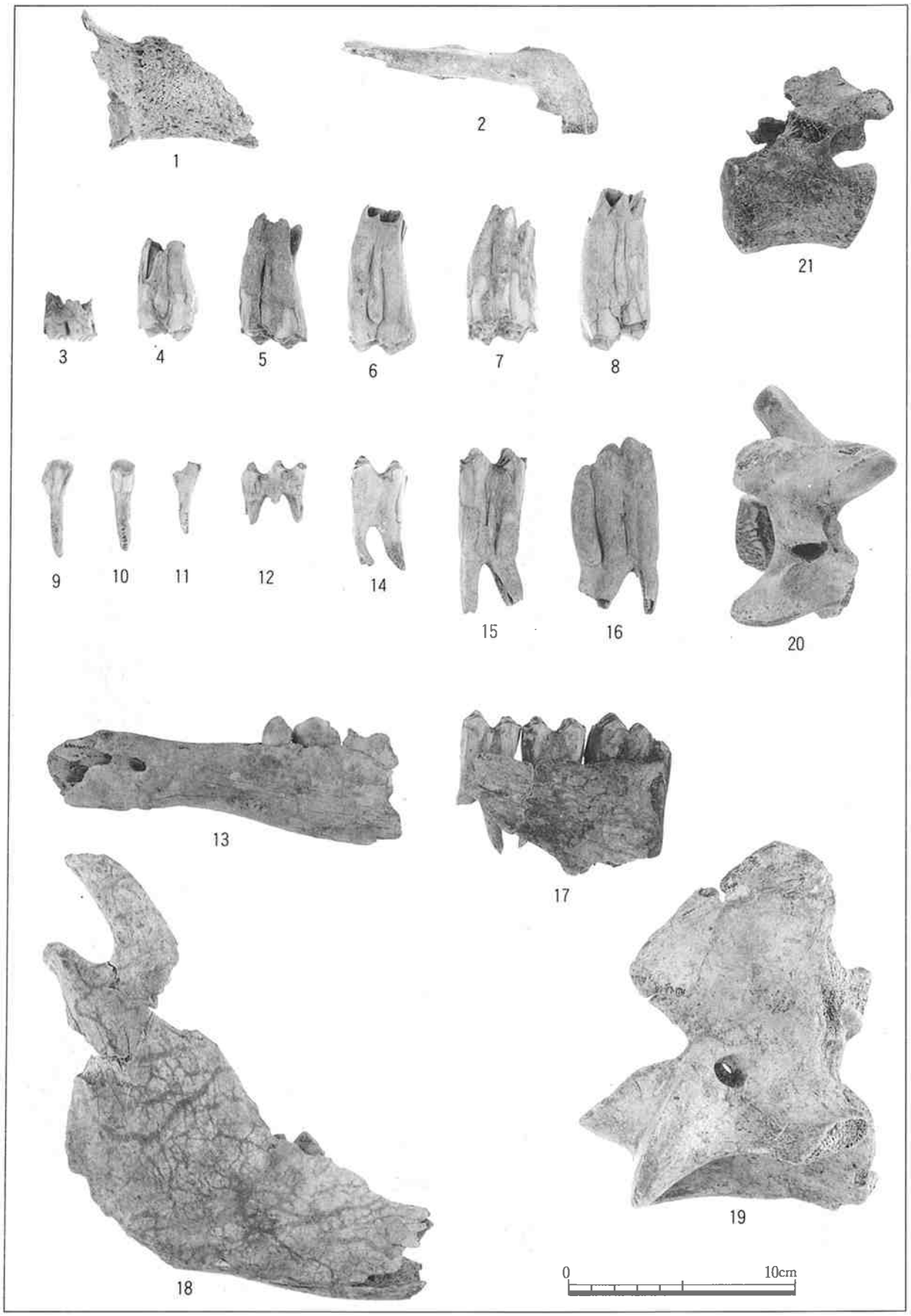


図版22　上：巻　貝　29. オニコブシ　30. コオニコブシ　31. イトマキボラ　32. ナガイトマキボラ
33. アンボンクロザメ　34. オトメイモ　35. ニシキミナシ　37. オキナワヤマタニシ
38. アフリカマイマイ　39. イトマンマイマイ

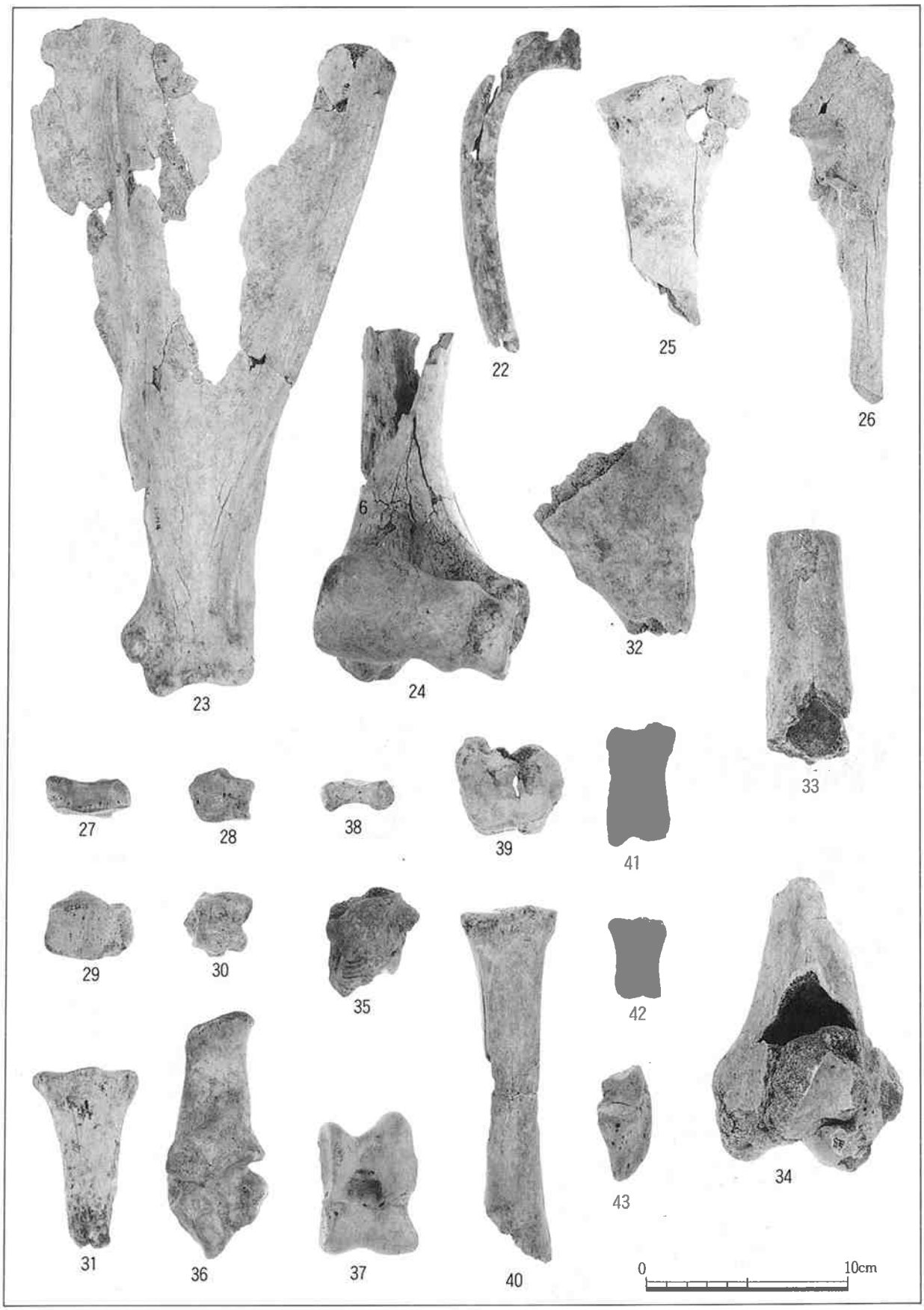
下：二枚貝　1. エガイ　2. クロチョウガイ　3. リュウキュウザルガイ　4. シャゴウ　5. ヒメシャコ
6. ヒレシャコ　7. シラナミ　9. サメザラ　10. リュウキュウマスオガイ
11. アラヌノメガイ　12. ヌノメガイ　14. パイプウニ　（番号は表と一致）



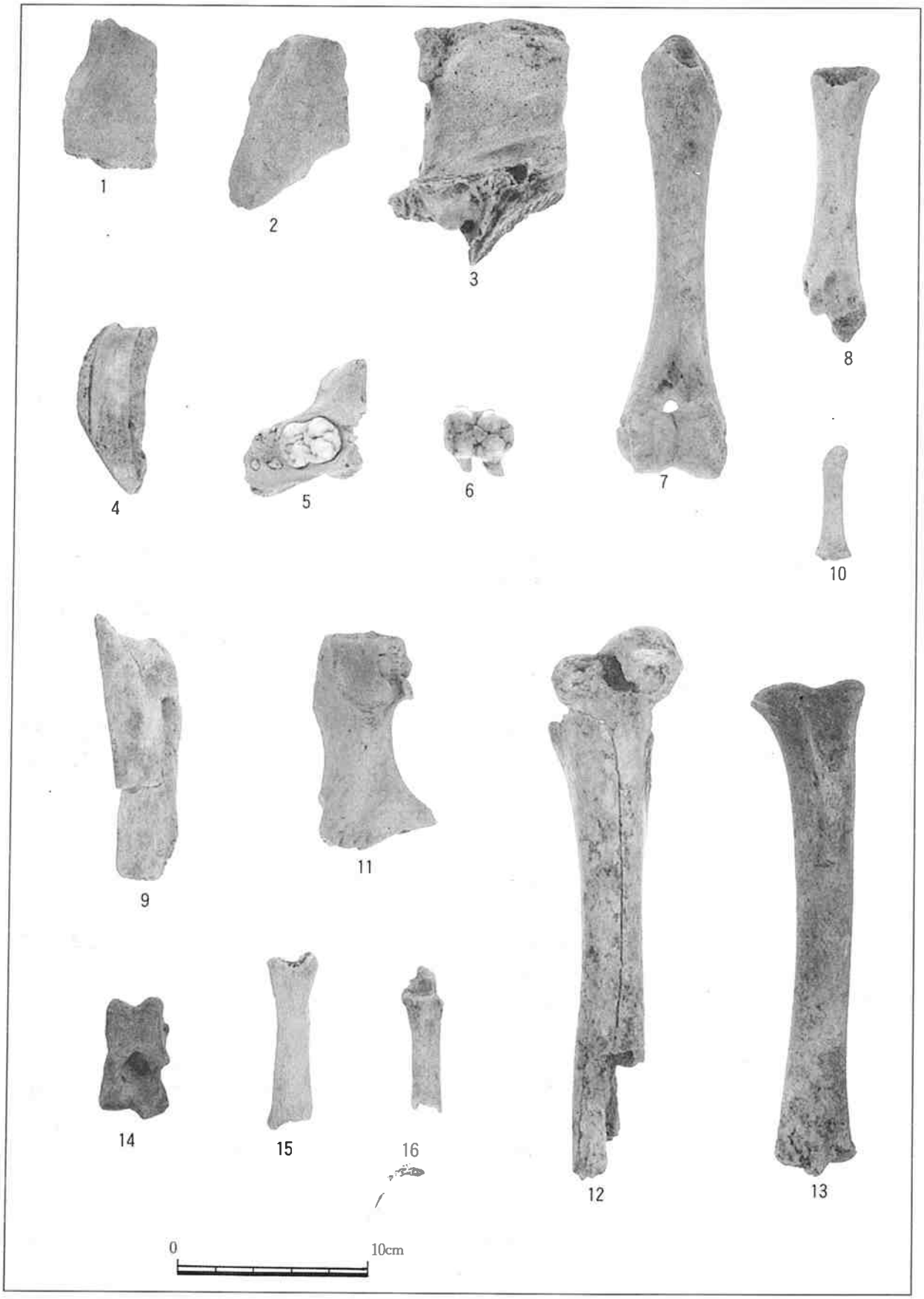
図版23　骨1　サカナ　メジロザメ科1. 脊椎骨　ブダイ科2. ナガブダイ　下咽頭骨　3. ナンヨウブダイ　下咽頭骨
ハリセンボン科4. 上顎骨　5. 歯骨　6.7. 棘　ウミガメ8. 鳥口骨　9. 縁骨板
ニワトリ10. 右脛骨　11. 右中足骨♂　カラス12. 左上腕骨　ネコ13. 腰椎　14. 右脛骨
ウマ15. 上顎骨M^1orM^2　16. 下顎骨$P_{(4)}$　17. 下顎骨M_1orM_2　ヤギ18. 左橈骨



図版24　骨2　ウシ（1）　1．角突起　2．左切歯骨　3．左上顎骨dm^4　4．右上顎骨M^1　5．右上顎骨M^2　6．右上顎骨M^2　7．8．右上顎骨M^3　9～11．左切歯骨　12．左下顎骨dm_4　13．左下顎骨$P_{2\cdot3}$　14．左下顎骨M_1　15．左下顎骨M_2　16．右下顎骨M_3　17．左下顎骨$M_{1\cdot2\cdot3}$　18．右下顎骨M_3　19．軸椎　20．頸椎　21．腰椎



図版25　骨３　ウシ（２）　22. 右肋骨　23. 左肩甲骨　24. 左上腕骨　25. 左橈骨　26. 左尺骨　27. 左２＋３手根骨　28. 左第４手根骨　29. 右橈側手根骨　30. 左中間手根骨　31. 左中手骨　32. 右寛骨　33. 右大腿骨　34. 左大腿骨　35. 右膝蓋骨　36. 左踵骨　37. 左距骨　38. 左２＋３足根骨　39. 左第４中心足根骨　40. 左中足骨　41. 左基節骨　42. 右中節骨　43. 末節骨



図版26　骨 4　ブタ　1．2. 右頭頂骨　3. 右側頭骨　4. 右上顎骨犬歯♂　5. 左上顎骨M^1
6．右上顎骨M^2　7. 8. 右上腕骨　9. 右尺骨　10. 左中手骨Ⅴ　11. 右寛骨
12. 右大腿骨　13. 右脛骨　14. 左距骨　15. 左中足骨Ⅲ　16. 右中足骨Ⅳ

第Ⅴ章　新里東元島遺跡

新里東元島遺跡はグスク時代の集落遺跡と岩盤添いに造られた近世古墓の複合遺跡である。今回の調査は近世古墓の調査を行った。全部で４基の古墓調査を行った。古墓及びその周辺は岩盤が露胎し、堆積層は腐葉土ぐらいであった。

なお、古墓のある岩盤添いは新里元島上方台地遺跡と隣接しているため、調査区の設定は両遺跡ともに同じである（第２図）。

第１節　遺構

古墓は全部で４基確認され、すべて岩盤添いに構築されている。古墓１・２はＡ地区の南側岩盤添いに、古墓３・４はＢ地区の東側岩盤添いに構築されている（第３図）。古墓１・２と３・４では構築方法が大きく異なる。古墓１・２は切石を用いて方形に積み上げる丁寧な構築方法であるのに対し、古墓３・４は石灰岩礫を利用したものである。

Ａ　古墓１（第45図）

古墓１は高さ1.34m、幅3.1m、奥行き3.12mを測る。正面形は横が長い方形の墓である。正面は南側を向く。石灰岩の岩盤を削り穴をあけ、面取りした切石を積み上げて構築されている。

古墓形態は最下部に約30～40㎝×15㎝前後の小さめの面取りした切石を８個配し、一段奥行きをつけて面取りした大型の切石を積み上げた、上下２段構造となっている。正面には窓が付いているが、ここから人が入ることはできない。大小の切石を組み合わせた左右対称構造で、非常に丁寧に構築された古墓である。

周辺には巨大なテーブルサンゴが散乱していた。上比屋山遺跡では現在も切石を積み上げた墓の屋根としてテーブルサンゴが使われた古墓が崩れずに残っている。したがって、古墓１も同様に当時は墓の屋根としてテーブルサンゴが利用されていたものと考えられる。

墓内及び前庭部は人骨が散乱していたがまとまっておらず、すでに移動が終わった墓であるものと考えられる。

前庭部は土がほとんど堆積しておらず、腐葉土と崩れた小型の石灰岩が散乱していた。

遺物は前庭部より沖縄産施釉・無釉陶器を主体として、土器、青磁、染付、煙管等が出土し、墓内からは器形が把握できる本土産陶器、沖縄産施釉・無釉陶器、土器が少量出土した。古墓１の西側から集骨遺構が確認された。岩盤と岩盤の隙間に集められており、多量の遺物と人骨そしてサラサバテイ・サザエといった貝が検出された。古墓１（場合によっては古墓２も）に新しい人物を埋葬するさいに、供養の終えた人骨を集めた遺構と考えられる。

遺物は沖縄産施釉・無釉陶器を中心として、染付、本土産磁器、土器、煙管が出土した。

人骨は、内部より成人男性１体、小児１体、乳児１体が検出された。前庭部より成人男性３体、成人女性２体、小児２体、乳児１体が検出された。集骨遺構より成人男性１体、成人男性３体、成年女性１体、熟年女性１体、成人女性１体、性別不明成人２体、小児１体、幼児１体が検出された。

Ｂ　古墓２（第46図）

古墓２は高さ1.94m、幅3.34m、奥行き3.17mを測る。正面形はやや横の長い方形の墓である。正面は南側を向く。古墓１と同様石灰岩の岩盤を削り穴をあけ、面取りした切石を積み上げて構築されている。

古墓形態は古墓１と同様上下２段構造になっているが、１段目は古墓１でみられたように、ほぼ同じ大きさの切石を丁寧に並べることはなく、切石も大きさを考えて統一し配置されたものとは思えない。

正面にはウガン時に利用すると思われる窓が付いているが、古墓１のように中心ではなく、西側によっており、穴もあいておらず、小型の石灰岩を充填して穴をふさいでいる。

古墓２は面取した石灰岩を多量に用いて構築しているが、明確な左右対称構造をとっておらず、古墓１に比して規模は約２倍であるが、構造は大きく異なる。

墓内及び周辺には巨大なテーブルサンゴが散乱していたため、前述した理由で古墓の屋根として利用されたものと考えられる。

墓内及び前庭部からは人骨が散乱していたがまとまっておらず、すでに移動のおえた古墓と考えられる。

前庭部は土がほとんど堆積しておらず、腐葉土と小型の石灰岩が散乱していた。

遺物は古墓１に比して非常に少なく、前庭部より本土産磁器が、墓内より沖縄産施釉・無釉陶器が出土したのみである。

人骨は、内部より成人男性２体、成人女性１体、小児１体が検出された。前庭部より、性別不明成人１体が検出された。

C　古墓３（第47・48図）

古墓３からは埋葬人骨が検出されたが、検出状況は極めて特異であった。

古墓３はＢ地区石敷住居の東側に位置する岩盤に造られていた。古墓の形態は崩れて残っておらず、周辺は石灰岩礫が集中して散乱していた。切石は確認されず、岩盤を削った跡も確認されなかったので、構造は古墓１・２とは違うものである。ただ、周辺には古墓１・２のようのにテーブルサンゴが散乱していた。

調査当初、古墓３の長靴状に窪んだ岩盤の間に石積みが確認され、岩盤と石積みに囲まれて円形に穴があった。この中から人骨が何点か発見された。第４図は古墓の調査前に、現状として記録した実測図である。石灰岩礫とテーブルサンゴが散乱し、長靴状に窪んだ岩盤の間に石積みが造られているのが確認できる。

当初、古墓１に隣接して確認された集骨遺構のようなものと考えていた。石積みを確認するためトレンチを設定して石積みを外すと、直下から人骨が確認された。石積みをすべて外すと南東向きに埋葬された老年男性と考えられる人骨が元位置で検出され、足下にはサラサバテイが置かれていた。石積みと人骨の間に腐葉土や堆積土はなかった。

石積みはちょうど腹部のあたりである。このような埋葬方法は特異な例と思われる。

また、人骨は一体でなく、散乱した状態で青年男性１体、成人男性１体、幼児１体、乳児２体が検出された。

遺物は周辺の前庭部より染付、褐釉陶器、沖縄産無釉陶器が出土した。人骨が埋葬されていたところから土器が出土した。

D　古墓４（第49図）

古墓４はＡ－15グリット付近（第３図）の岩盤添い、0.5mほど高くなった岩盤の上、１ｍ×1.25mほどの平場に造られていた。古墓３と同様埋葬人骨が検出された。

調査当初、石灰岩礫が集中して散乱し、テーブルサンゴが確認されたため古墓と判断した。古墓３と同様、崩れていたため、形態は不明である。

古墓４では多量の石灰岩礫と腐葉土が堆積しており、これを取り除くと東を向いた幼児の埋葬人骨が検出された。すぐ脇には巨大なテーブルサンゴと沖縄産無釉陶器が完形で検出された。

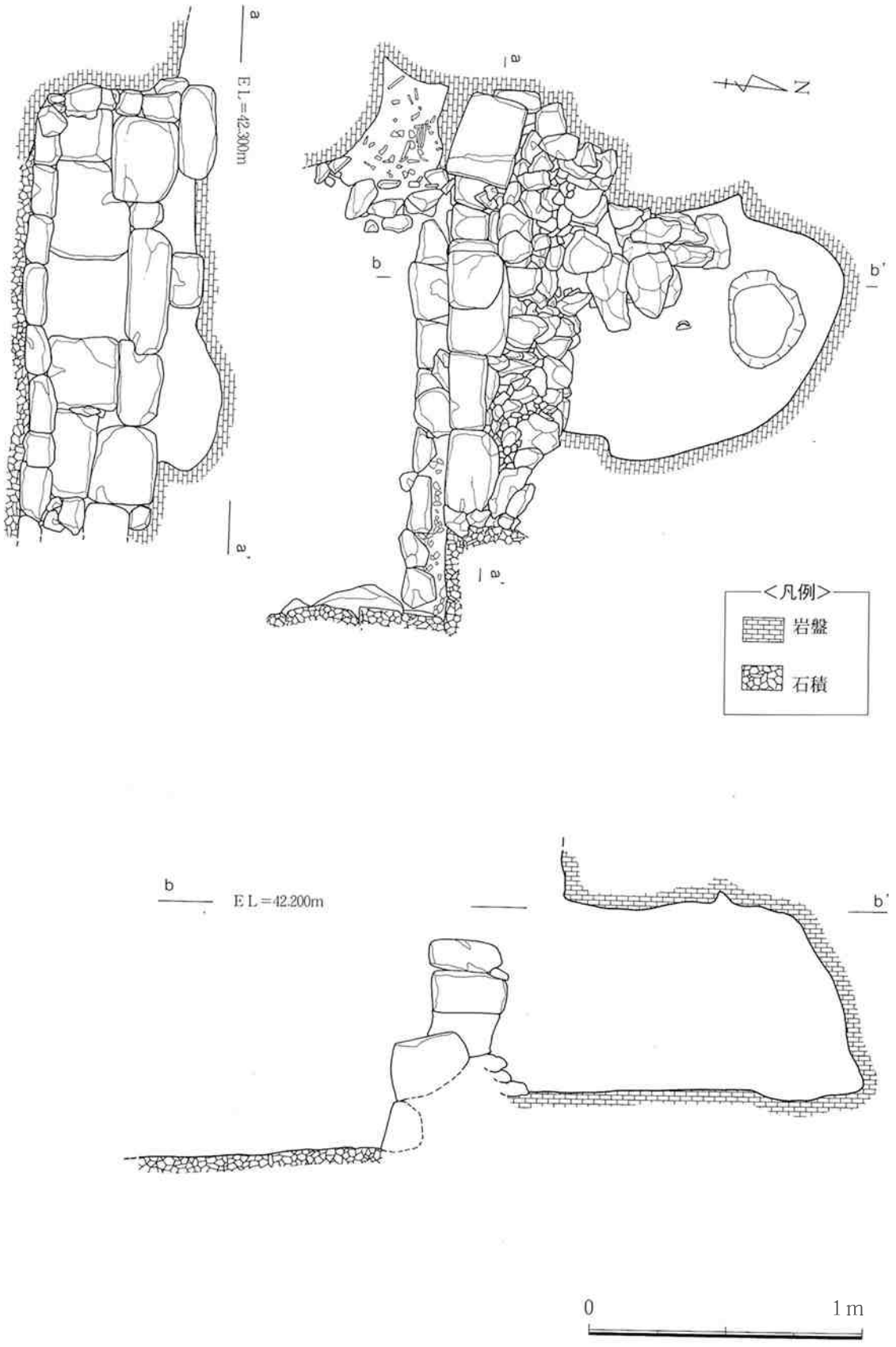
遺物は石灰岩を取り除く最中に出土したものと、１段高くなっている古墓４のすぐしたから出土したものに分かれる。前者から、青磁、褐釉陶器、沖縄産無釉陶器、土器が出土し、後者から青磁と本土産磁器等が出土した。

また、古墓４の周辺からは性別不明成人１体の頭骨が出土した。あるいは近辺に埋葬されたものかも

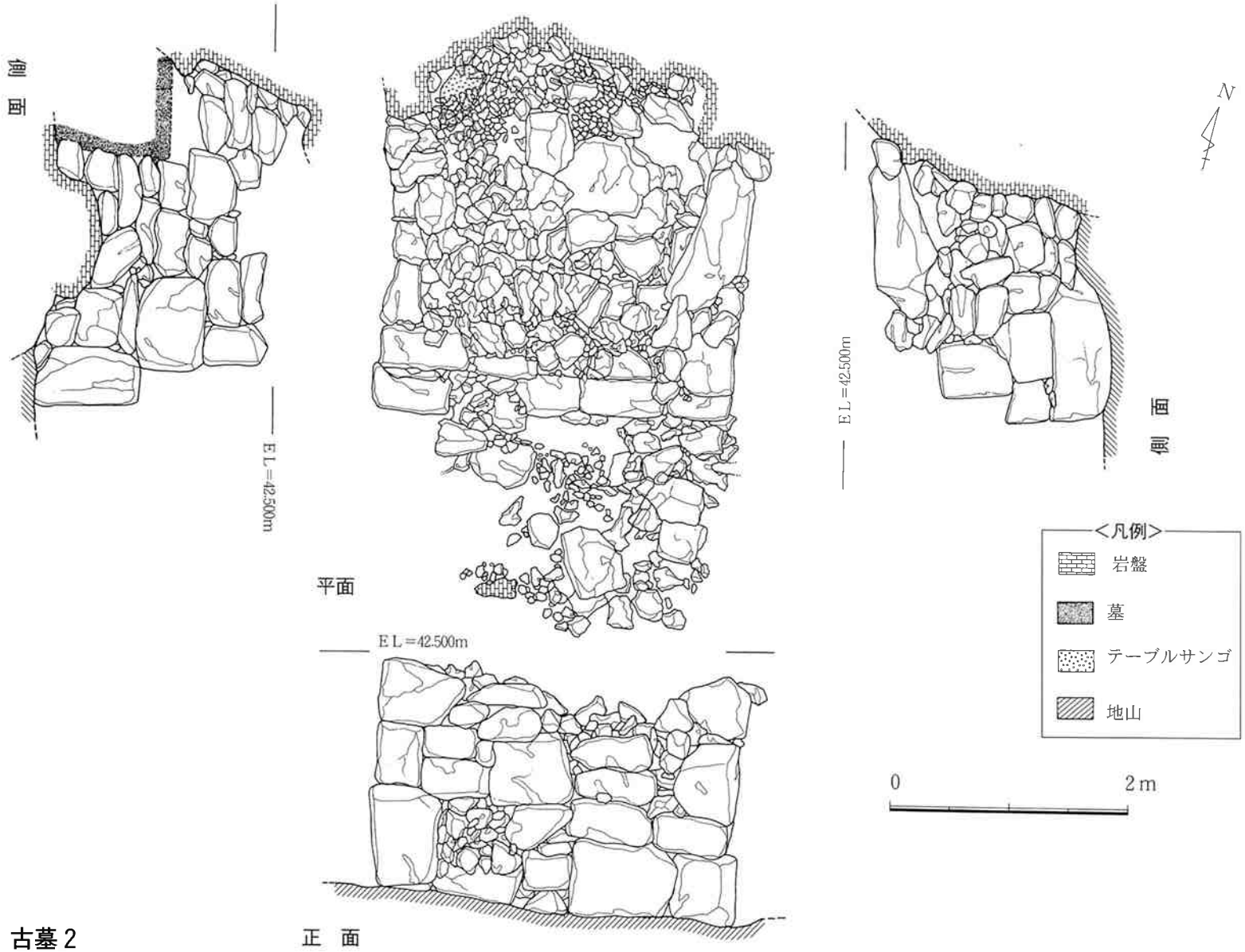
しれないが、検出できなかった。

古墓４の形態について若干の考察を行ってみたい。古墓４は埋葬人骨の上に、被さるように石灰岩礫がたまっていた。石灰岩礫の間には腐葉土がつまっていたことを考えれば、積み上げた礫が崩れた可能性が高い。また、巨大なテーブルサンゴが脇から発見されたことを考慮する。上比屋山遺跡で確認された古墓はテーブルサンゴを屋根としていた。

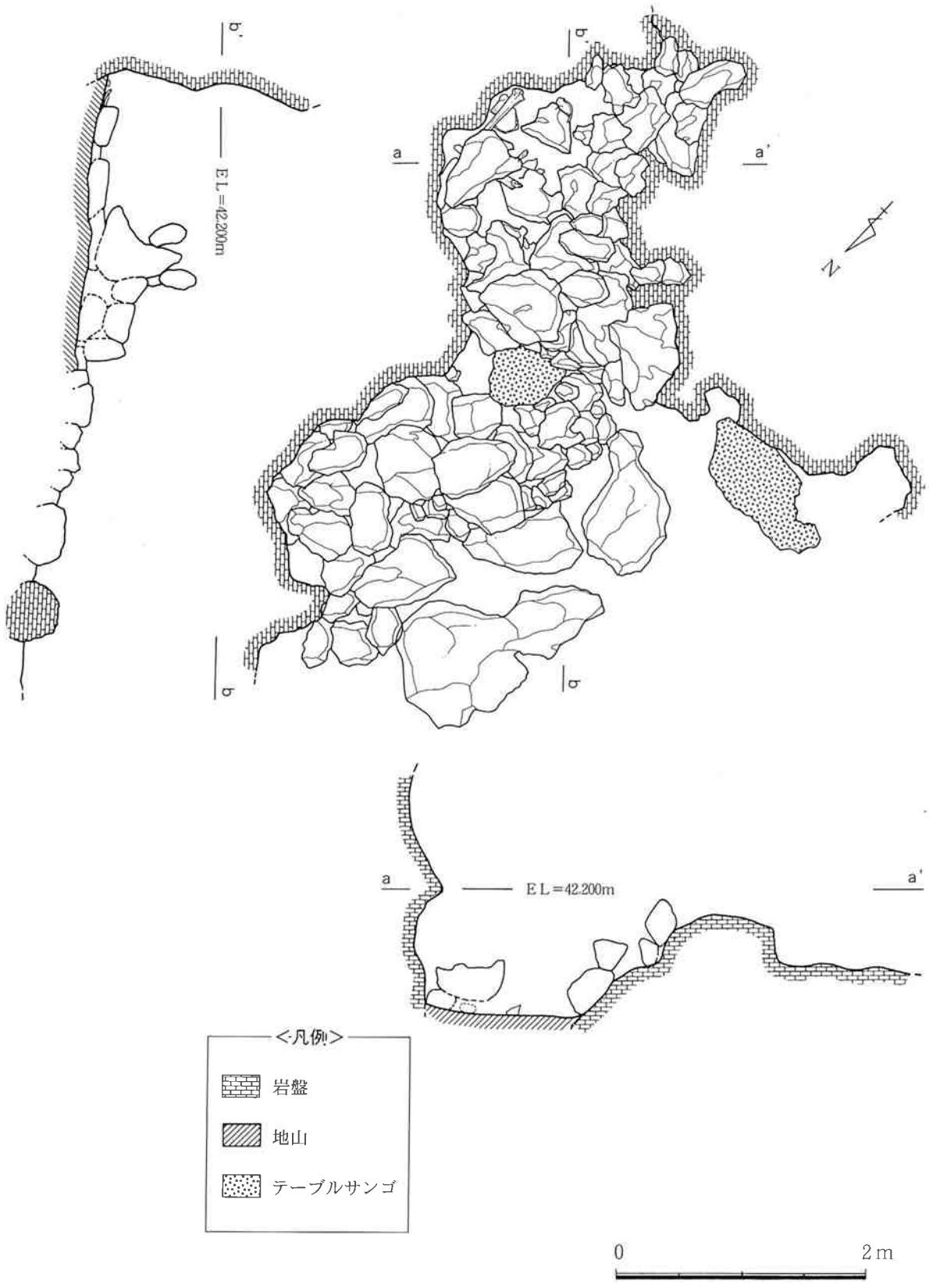
以上から、古墓４は平場に埋葬した遺体を、岩盤を利用して囲むように石灰岩礫を積み上げ、屋根としてテーブルサンゴを利用して被せた墓であった可能性が高い。



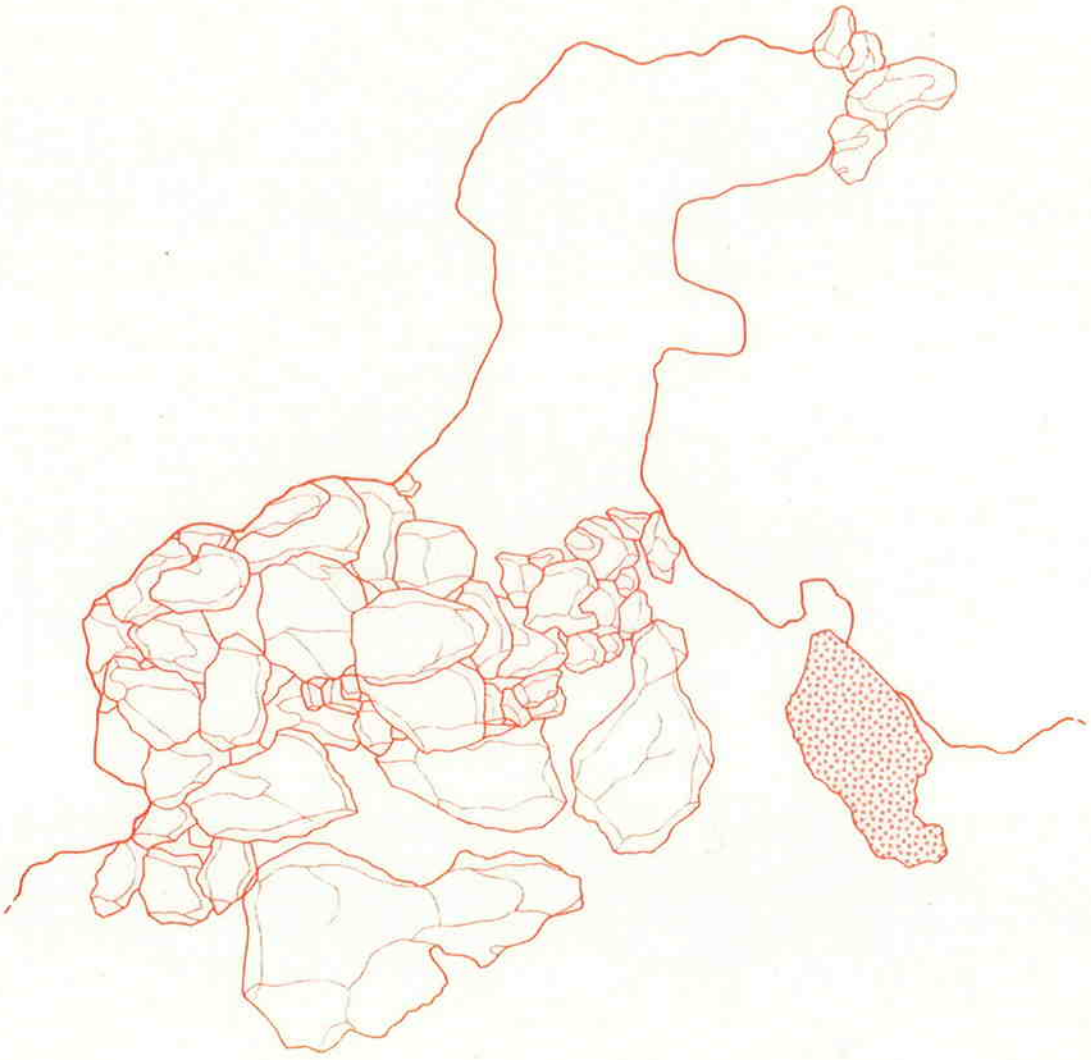
第45図　古墓１


側面
EL=42.500m
平面
EL=42.500m
正面
EL=42.500m
側面
N
<凡例>
岩盤
墓
テーブルサンゴ
地山
0
2m

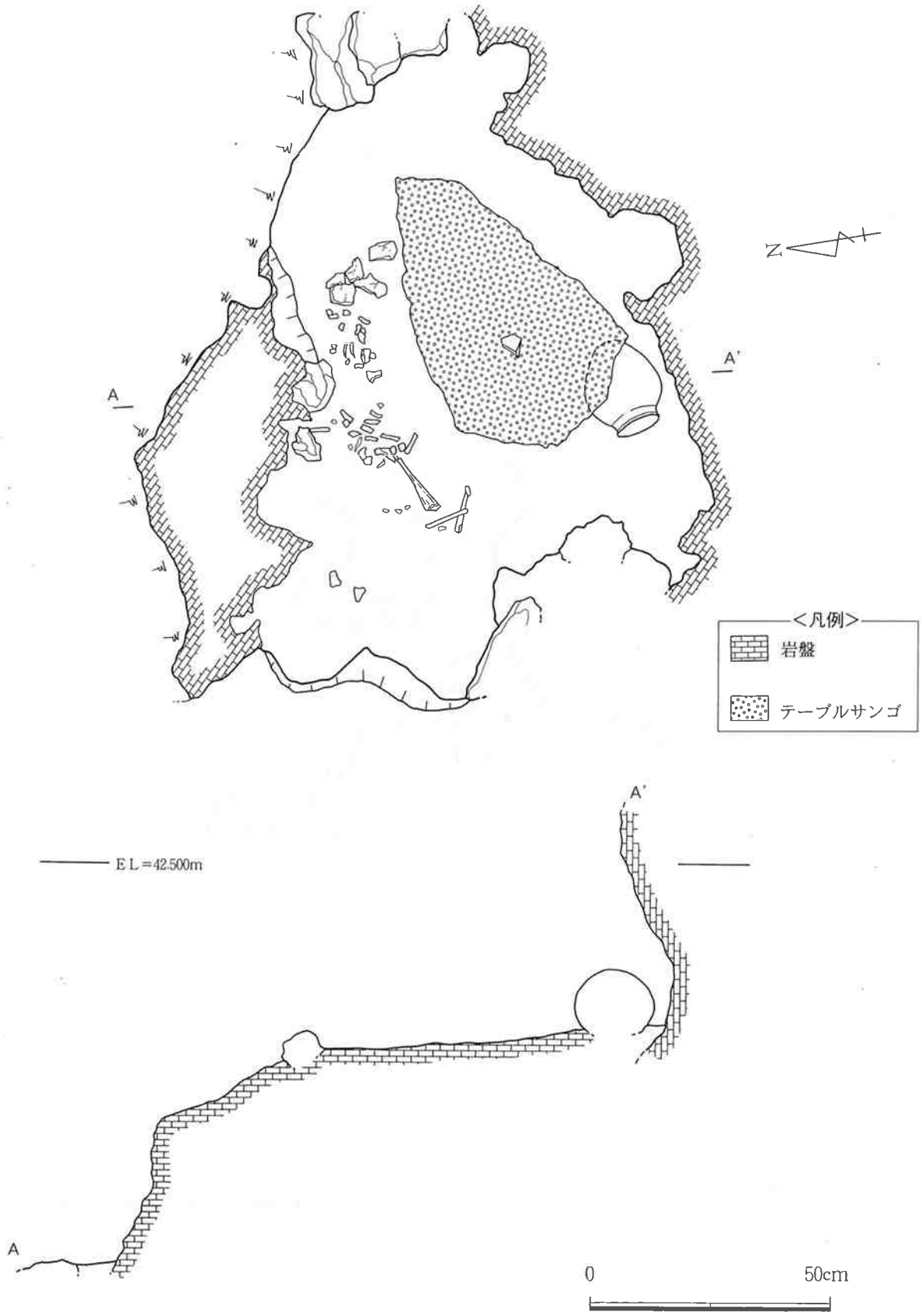
第46図　古墓2



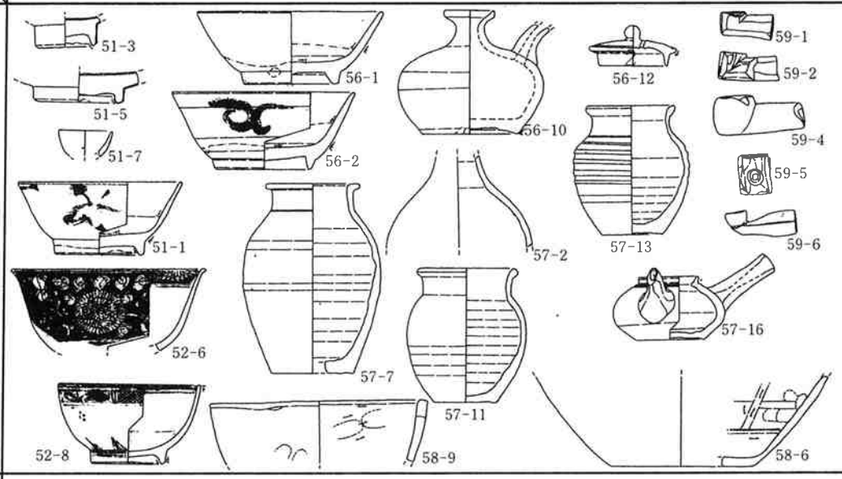
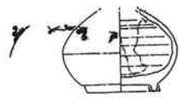
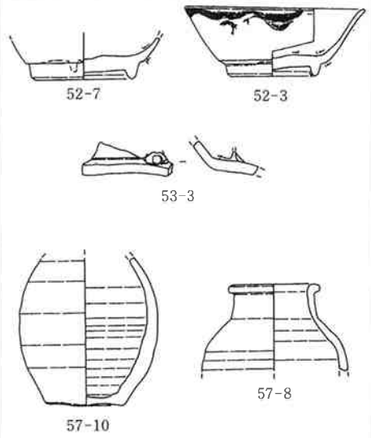
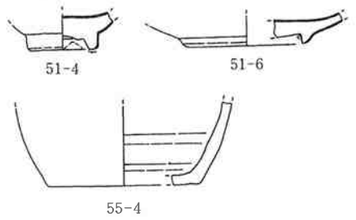
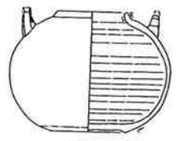
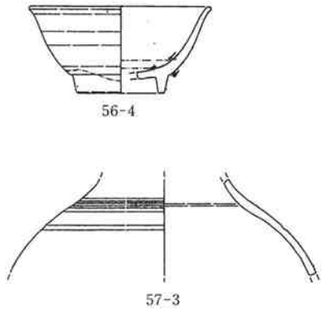
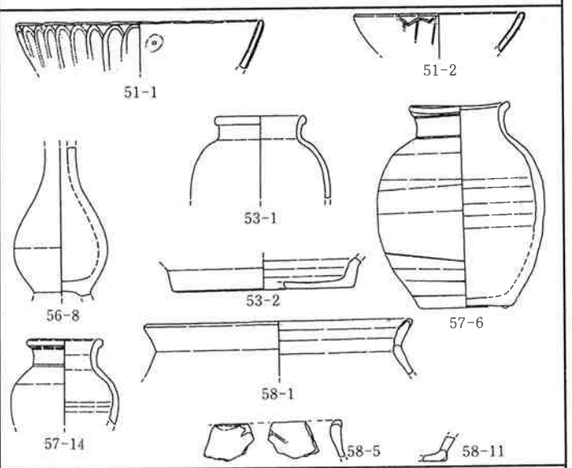
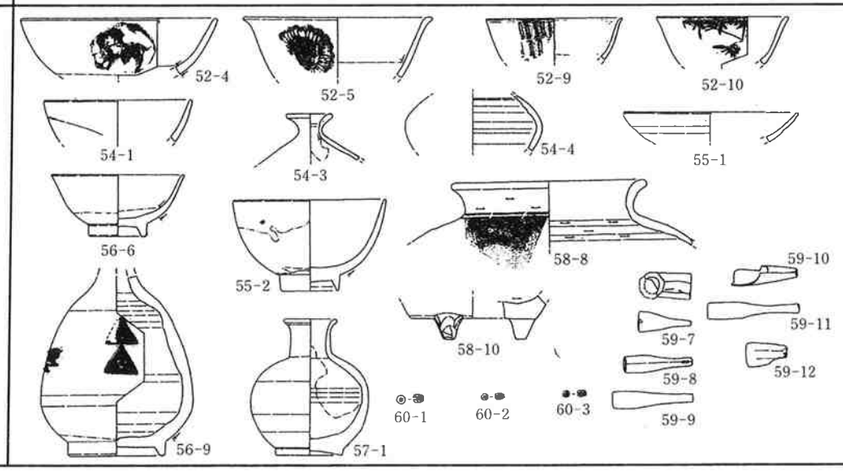
第47図　古墓３　調査前の状況



第48図　古墓３　埋葬人骨検出



第49図　古墓4　埋葬人骨検出

出土地	墓 1	墓 2	墓 3	墓 4
前庭部				
内部				
集骨				

第50図　新里東元島遺跡主要遺物

第２節　遺物

新里東元島遺跡は古墓の調査であった。出土遺物は近世を主体とする。古墓内や前庭部から青磁、白磁、染付、褐釉陶器、本土産陶器・磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、土器、煙管、玉、簪、貝類遺存体、脊椎動物遺存体、人骨などが出土した。量的には土器が最も多く出土し、以下、沖縄産施釉･無釉陶器、本土産磁器・陶器、中国青磁・白磁・染付、褐釉陶器がそれに続く。

A　青磁

青磁は６点得られている。第51図１、２は碗の直口口縁で、胴部に細蓮弁文を描く。両資料ともに黄緑灰色釉を施釉する。貫入が入る。素地は灰白色。１は口径18.2cmで年代は15世紀。２は口径12.6cmで年代は15世紀～16世紀前半。両資料とも墓４内部Ⅰ層より出土。

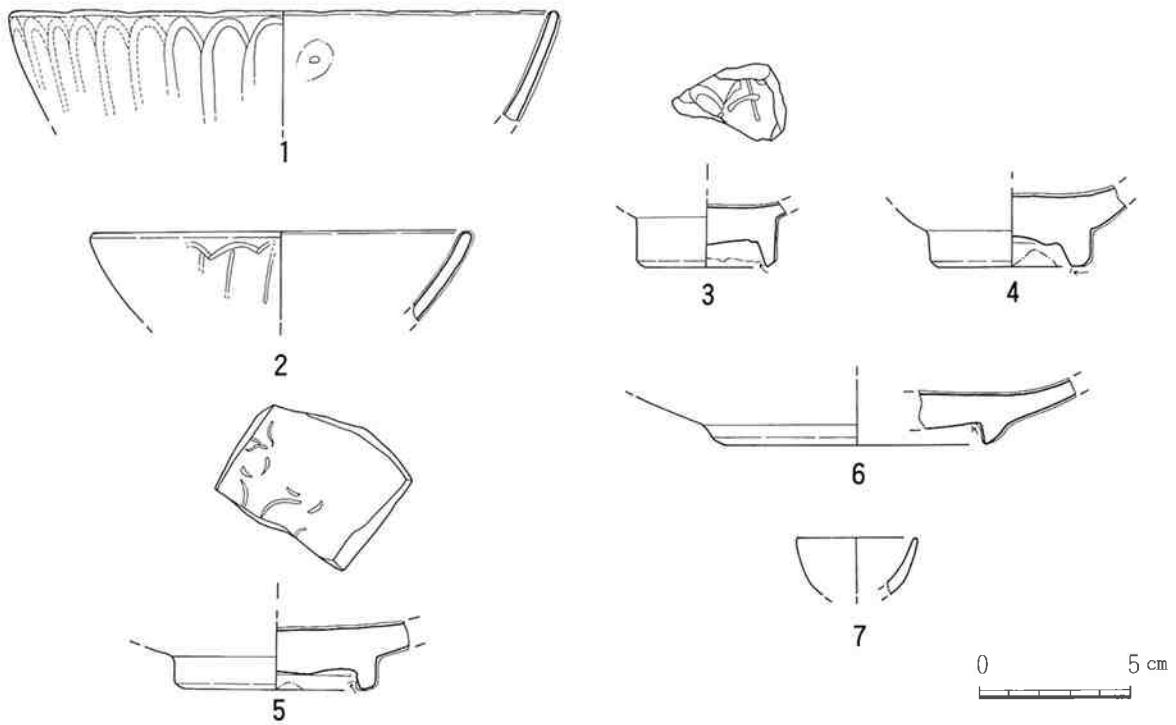
碗底部は３点あり、第51図３は見込に宝文？が施されている。浅黄色の釉を畳付まで施釉する。細かい貫入が入る。素地は淡黄色。底径4.0cm。年代は15世紀～16世紀前半。墓１前庭部Ⅰ層より出土。

第51図４は高台を面取している。黄緑灰色釉を高台外面まで施釉する。粗い貫入が入る。素地は灰色。底径4.8cm。年代は14世紀末～15世紀。墓４内部Ⅰ層より出土。第51図５は見込に花文？を施す。暗褐色釉を施釉する。素地はにぶい褐色。底径5.8cm。年代は14世紀後半～15世紀中葉。墓１前庭部散乱より出土。

第51図６は盤底部である。畳付は斜めに作られる。高台内面に白色鉱物が付着する。暗灰黄色釉を高台内面まで施釉。素地は淡黄色。底径8.4cm。年代は14世紀後半～15世紀中葉。墓４内部Ⅰ層より出土。

B　白磁

白磁は小杯が１点得られている（第51図７）。腰部で折れ、腰部から直線的に口縁部へと至る。口唇部は露胎。白色釉を施釉。素地は白色。口径4.0cm。年代は18世紀頃。徳化窯系。墓１前庭部Ⅰ層より出土。



第51図　青磁　碗（１～５）、盤（６）、**白磁**　小杯（７）

C　染付

染付は碗・小碗・杯が得られている。量的には碗が最も多い。年代は17世紀・18世紀のものを中心とする。

第52図１は高台から直線的に立ちあがるもので、文様は外面に草文？及び圏線を施す。呉須の発色は鈍い。灰白色釉を施釉するが、外面高台の中位から畳付は無釉で、見込は蛇の目状に釉剥ぎされている。施釉部分に細かい貫入あり。素地は淡黄色。口径12.1cm、器高5.3cm、底径6.3cm。17世紀～18世紀。福建系。墓１前庭部Ⅰ層より出土。

第52図２は口縁部で僅かに外反する器形を呈する。文様は外面に草文？を施す。呉須の発色は良い。透明釉を施釉する。細かい貫入あり。素地は淡黄色で黒色粒子を含む。口径15.4cm。16世紀～17世紀。墓１集骨Ⅰ層より出土。

第52図３は高台から緩やかに外反する。畳付は面取りされている。見込は僅かに窪む。外面に草文？を施す。呉須の発色はやや鈍い。灰白色釉を高台外面及び見込の蛇の目状に剥ぎ取った部分以外に施釉する。細かい貫入がある。素地は灰白色で黒色粒子を含む。口径13.6cm、器高5.1cm、底径6.2cm。17世紀～18世紀。福建系。墓３石積下より出土。

第52図４は胴部がやや直線的なものである。胴部に丸文とその中に獣文？を施す。呉須の発色はやや鈍い。明緑灰色釉を施釉する。釉の一部分に気泡が認められる。素地は白色。口径14.4cm。18世紀。墓１内部散乱より出土。

第52図５は胴部は直線的で口縁部が外反するものである。文様は胴部に印花を施す。呉須の発色はやや弱い。透明釉を施釉する。荒い貫入がある。素地は淡黄色で黒色粒子を含む。口径14.0cm。福建・広東系。墓１集骨Ⅰ層より出土。

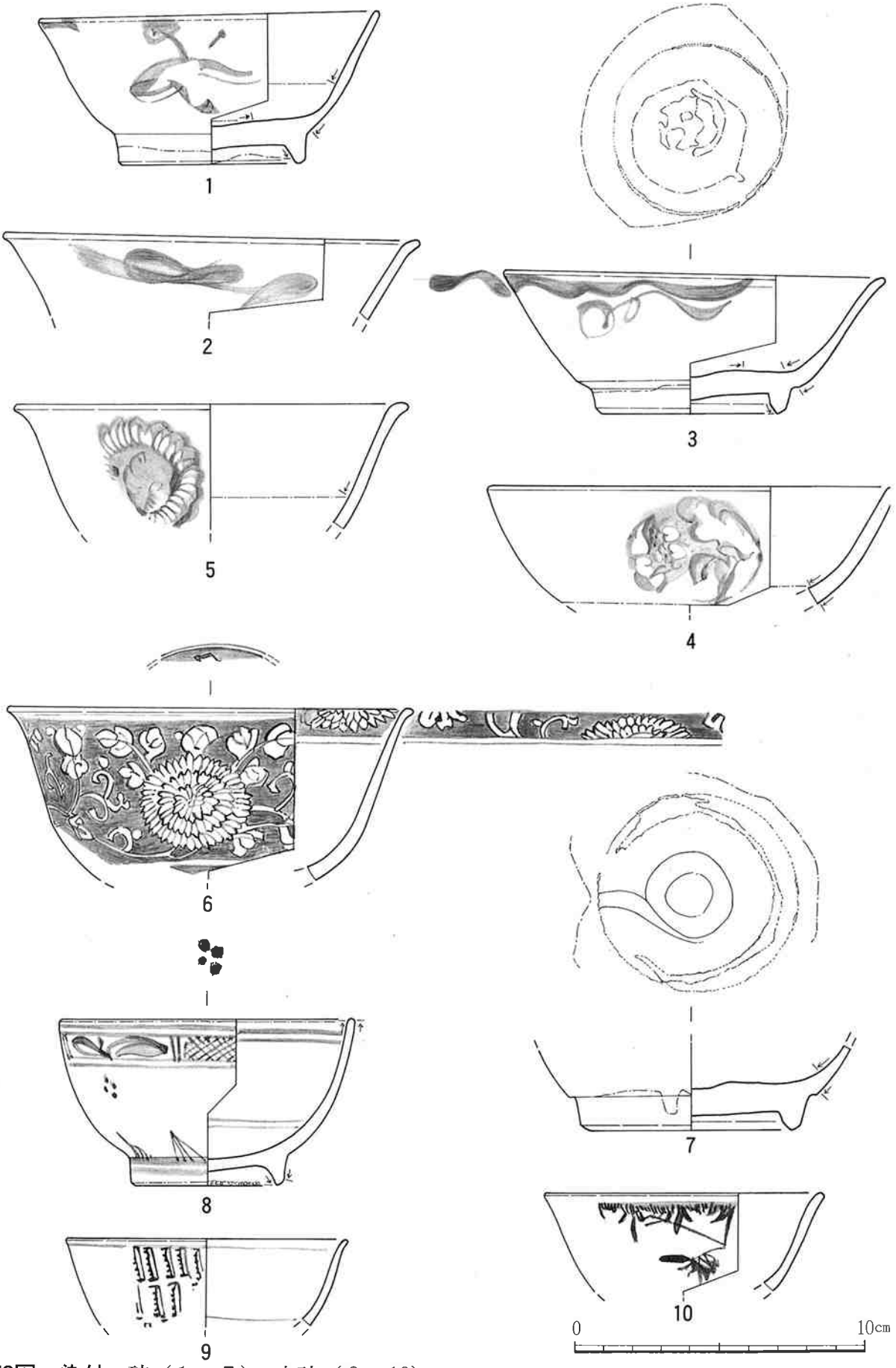
第52図６は胴部から外反する口縁へ緩やかに移行する。文様は外面胴部及び内面口縁部に白抜きの菊唐草文を施す。呉須の発色は良い。透明釉を施釉する。素地は白色。口径14.4cm。19世紀。景徳鎮窯系。墓１前庭部Ⅰ層より出土。

第52図７は碗の底部である。高台と胴部の境で削り出しによる段を残し、それから胴部へと立ちあがる。畳付は面取りされ、見込の中心は僅かに窪む。灰白色釉を外底及び見込以外に施釉する。素地は灰白色で黒色粒子を含む。底径7.0cm。17世紀？。墓３前庭部散乱より出土。

第52図８は小型の碗で、僅かに窪む高台から内湾気味に胴部を経て口縁部へと至る。文様は外面口縁部を区画して斜格子文及び草花文？を交互に配し、胴部には宝文及び芭蕉文、高台に圏線、内面口縁部及び胴部に圏線、見込に宝文を施す。呉須の発色は良い。灰白色釉を施釉するが、口唇及び畳付は釉を剥いでいる。素地は灰白色で黒色粒子を含む。口径10.5cm、器高5.9cm、底径5.2cm。18世紀。徳化窯系。墓１前庭部Ⅰ層より出土。

第52図９は小型の碗で、緩やかに口縁部が外反する。文様は外面胴部に梵字文、内面口縁部及び胴部に圏線を配する。呉須の発色は良い。透明釉を施釉する。素地は白色。口径10.0cm。18世紀代。景徳鎮窯系。墓１集骨Ⅰ層より出土。

第52図10は小型の碗で、緩やかに口縁部が外反する。文様は外面に竹文が配されている。呉須の発色は良い。透明釉を施釉する。素地は白色。口径9.8cm。18世紀頃。景徳鎮窯系。墓１集骨Ⅰ層より出土。



第52図　染付　碗（1～7）、小碗（8～10）

D　中国産褐釉陶器（第53図１～３）

新里東元島遺跡岩陰墓から出土した褐釉陶器は極めて少ない。出土数等の詳細は第33表に記したとおりである。分類は新里元島上方台地遺跡の褐釉陶器にもとづいておこなっている。１・２は幼児が埋葬されていた古墓４から、３は複数体が埋葬されていた墓３付近からの出土である。

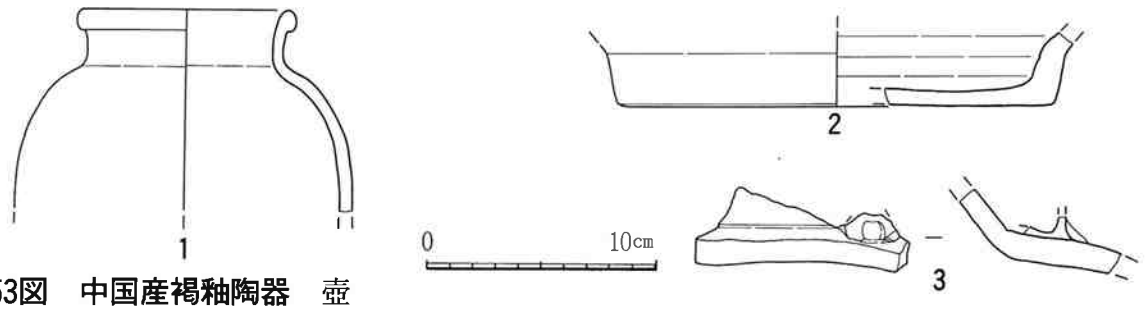
１は小型の壺で、肩は張らない。口径9.6cm を計る。口縁部の形態から皿類に分類される。釉薬が現状で内側全面にかけられている。胎土の色調は暗灰色で、焼成が悪いのか粒子は粗くポーラス状となっており、黒色粒子が含まれている。

２は壺型器形を呈すると思われる。底径19.0cm を計る。内面に薄く釉薬がかけられている。底面は上底を呈さず断面は直線的である。底部立ち上がりは直線的であるが、胴部にかけて屈曲する。胎土の色調は明灰色で、焼成が悪く器面が脆い。

３は耳付き壺の頸部である。内外面に釉薬がかけられている。胴部から頸部にかけて明確な調整痕がある。焼成は良く硬質である。胎土の色調は青灰色で、密な粒子の生地に大粒の白色石を多量に含む。この白色石は器面にも露胎している。

第33表　中国産褐釉陶器出土状況

出土地		器種	壺 口	壺 胴	壺 底	不明 胴	合計
墓１	前庭部	Ⅰ層	2	9		1	12
		Ⅱ層		1			1
	入口	Ⅰ層		1			1
	集骨	Ⅰ層		1			1
墓２	前庭部	Ⅰ層		2			2
墓３	前庭部	散乱		2			2
					1		1
	内部	Ⅰ層	1	6	1		8
墓４	内部	Ⅰ層	2	15			17
合　計			5	37	2	1	45



第53図　中国産褐釉陶器　壺

E　本土産磁器（第54図１～４）

本土産染付は、肥前が５点出土しており、そのうち４点が実測可能だった。個別に記述する。

１は碗で、外面にはおそらく何らかの草花文が描かれていたものと思われる。素地は灰白色微粒子。釉および呉須の発色はまあ良好である。口径は10.8cm。18世紀前半・中頃。墓１集骨Ⅰ層出土。

２～４は油壺である。

２は底部から胴部上半までが残存しており、外面胴部上半に梅樹文が描かれている。素地は灰白色微粒子。釉および呉須の発色は不良である。底径は5.0cm、胴径は8.4cm。18世紀中頃・後半。墓２前庭部Ⅱ層出土。

３は口縁部から胴部上半までが残存しており、外面胴部上半には草花文が描かれている。素地は灰白色微粒子。釉および呉須の発色はまあ良好である。釉は外面および内面口頸部にかけられており、一部内面胴部にも及んでいる。口径は3.5cm。

４は胴部中位が残存しており、外面には草花文が描かれている。胴径は10.2cm。

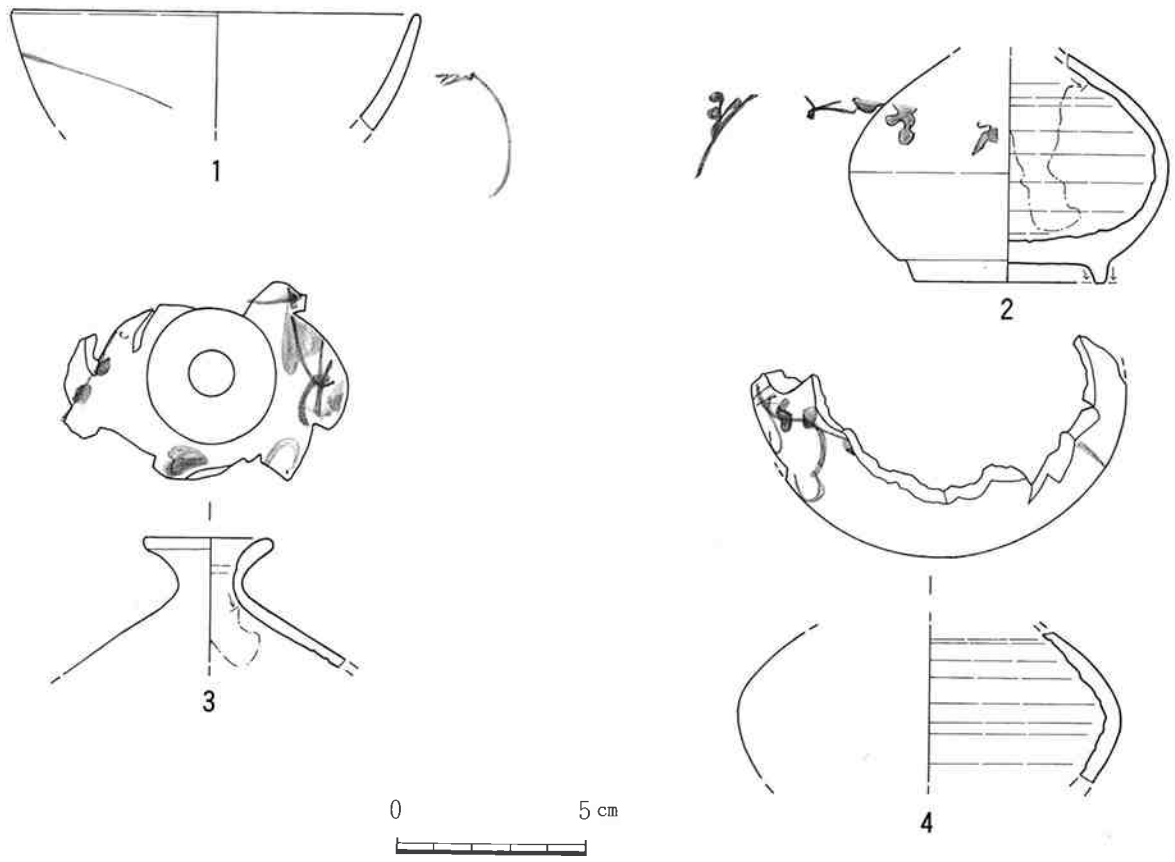
３と４は、接合する部分がなく断定は出来ないが、胎土・色調・器形から同一個体の可能性がある。18世紀前半。共に墓１集骨Ⅰ層出土。

他には、瓶の胴部が１点、墓１集骨Ⅰ層から出土している。

F　本土産陶器（第54図１～４）

本土産陶器は、肥前、瀬戸・美濃系が計４点出土している。個別に記述する。

１は肥前皿である。素地は黄灰色で、硬質である。釉は、外面が緑白色、内面が青灰色を呈する。口



第54図　本土産磁器　碗（1）、油壺（2～4）

径は12.6cm。17世紀後半～18世紀。墓1集骨Ⅰ層出土。

2は瀬戸・美濃系灰釉丸碗である。釉は高台を除き掛けられており、その色調は外面が一部コバルト色を呈する濃緑色で、内面が灰色である。素地は灰色で硬質である。口径は11.0cm、底径は4.2cm。17世紀。墓1集骨Ⅰ層出土。

3は胎土および焼成から瀬戸・美濃系と思われる灰釉土瓶である。残存していないが、おそらく注口をもつものだったと思われる。素地は灰白色で軟質である。釉は外面底部を除き掛けられている。口径は5.2cm、底径は5.4cm。18世紀後半～19世紀前半。墓1内部に散乱して出土。

4は薩摩壺もしくは瓶の底部である。素地は赤灰色で、1mm以下の長石等の砂礫をやや含む。底径は11.0cm。18～19世紀。墓3石積下出土。

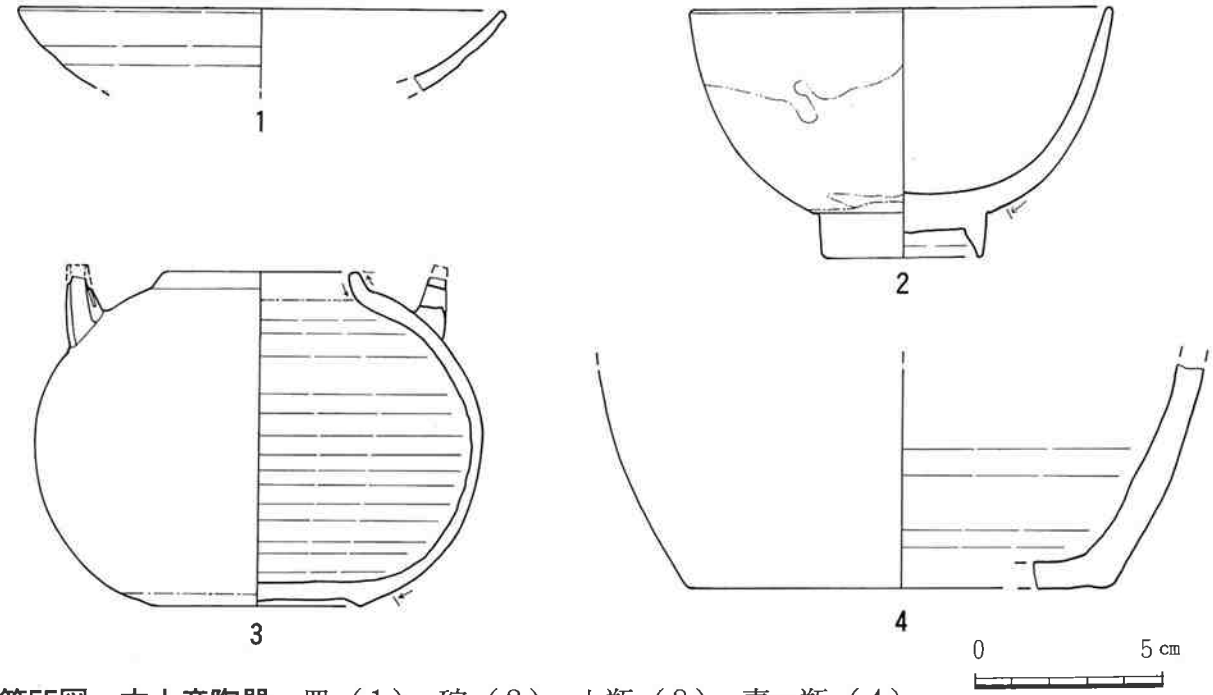
G　沖縄産施釉陶器

合計で55点検出された。器種としては碗、小碗、瓶、酒注、袋物、蓋が検出されたが、碗が大部分を占める（第34表沖縄産施釉陶器出土状況）。

以下に図示したものについての概略を述べ、詳細は第35表の沖縄産施釉陶器観察一覧にまとめた。

1. 碗（第56図1～5）

図示した5点は、見込み部分が露胎のもの（3、5）、見込み中央部分に円状の釉薬を塗るもの（1、2）、蛇ノ目釉剥ぎの施されるもの（4）、に分けられる。また、2のみ外面に鉄絵が施される。



第55図　本土産陶器　皿（1）、碗（2）、土瓶（3）、壺or瓶（4）

2. 小碗（第56図6～7）

6は口縁部の外反の度合いが弱く、施釉も浸し掛けの技法であるのに対し、7は口縁部の外反の度合いが強く、施釉も内面は振り掛け（フィガキー）の後、蛇ノ目釉剥ぎを行う点で異なる。また、重ね焼きの際に6は砂を利用するのに対し、7はアルミナを用いる。

3. 瓶（第56図8～9）

検出された3点のうち、器形の窺えるものは8、9の2点であった。

4. 酒注（第56図10～11）

検出された18点のうち、ここでは2点図示した。10、11ともに釉薬、胎土が同一である。

5. 蓋（第56図12）

12は急須の蓋と思われるが、急須は検出されていない。

＜参考文献＞

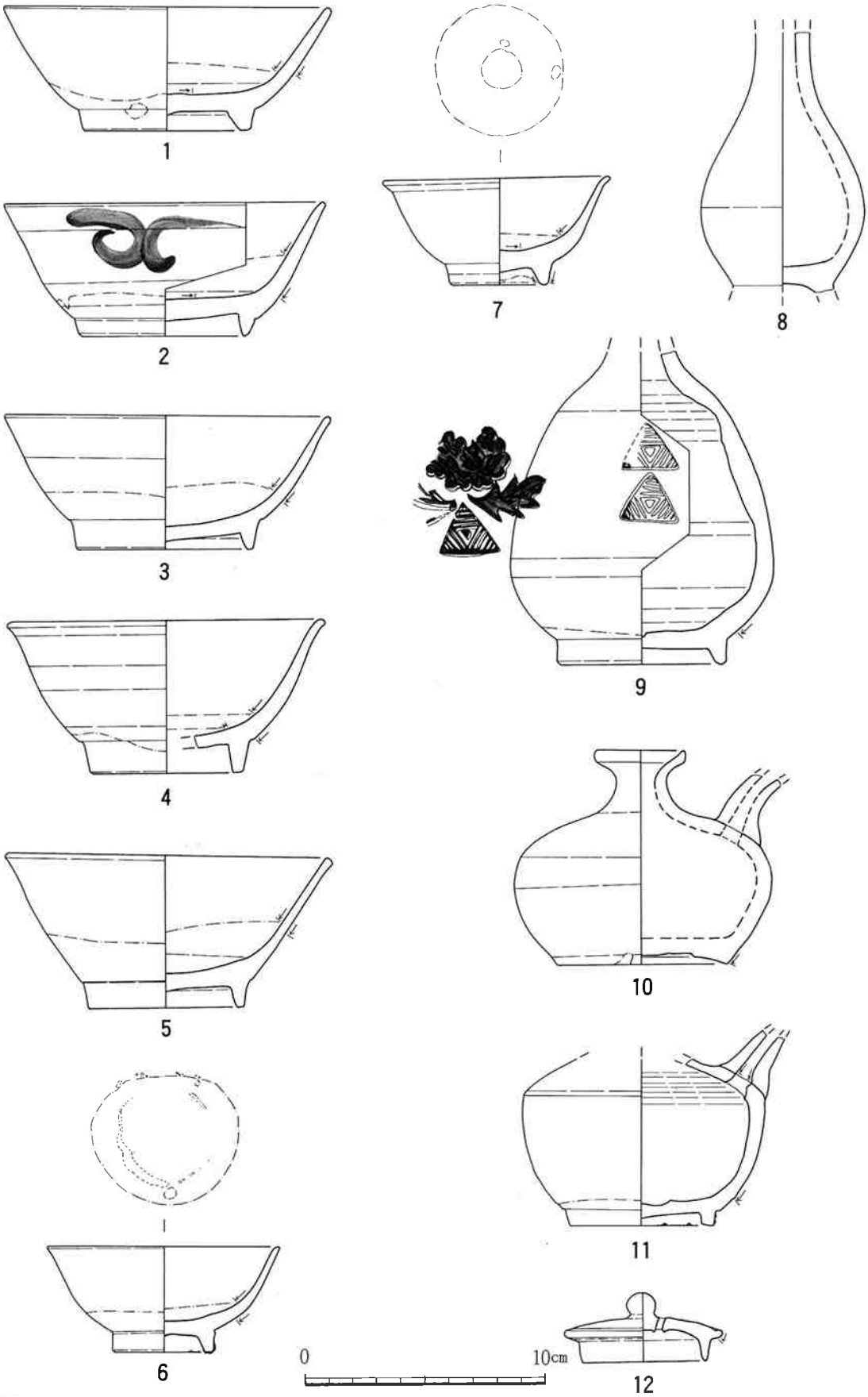
・『那覇市文化財調査報告書第23集　壺屋古窯群Ⅰ』　那覇市教育委員会　1992年
・『那覇市文化財調査報告書第27集　壺屋古窯群Ⅱ』　那覇市教育委員会　1995年
・『那覇市文化財調査報告書第38集　壺屋古窯群Ⅲ』　那覇市教育委員会　1997年
・『沖縄県文化財調査報告書第111集　湧田古窯跡（Ⅰ）』　沖縄県教育委員会　1993年
・『沖縄県文化財調査報告書第121集　湧田古窯跡（Ⅱ）』　沖縄県教育委員会　1995年
・『沖縄県文化財調査報告書第136集　湧田古窯跡（Ⅳ）』　沖縄県教育委員会　1999年
・『平成10年度企画展　沖縄のやきもの－南海からの香り－』　佐賀県立九州陶磁文化館　1998年
・照屋善義『沖縄の陶器　技術と科学』　2000年

第34表　沖縄産施釉陶器出土状況

出土地＼器種			碗			小碗	瓶		酒注				袋物	蓋	不明	合計
			口～底	口	胴	口～底	口	底	口～底	口	胴	底	胴		底	
墓1	前庭部	Ⅰ層	3	4			1		1		2		1	1		13
		散乱			1						1					2
	入口	Ⅰ層		1												1
		礫直上	1													1
	集骨	Ⅰ層		9	1	2		1		2	5	2	1		1	24
墓2	内部	散乱	2	5	1						5					13
墓4	内部	Ⅰ層						1								1
合　計			6	19	3	2	1	2	1	2	13	2	2	1	1	55

第35表　沖縄産施釉陶器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	釉　色	観　察　事　項	出土地
第56図 図版31	1	碗	13.8 5.2 7.1	外面…灰白色 内面…灰白色	外面、内面ともに灰釉。見込中央に直径2cm大の円状に釉薬が塗られ、その周囲にアルミナが付着。口縁部付近に貫入が見られる。高台際に付着している直径1cm未満の釉薬は、施釉の際指が接していた箇所と思われ、4cmの間隔で3つ確認できる。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	2		13.5 5.6 6.8	外面…灰白色 内面…灰白色	外面、内面とも灰釉。見込中央に直径2～3cm大の円状に釉薬が塗られ、その周囲に砂粒が付着。口縁部付近に貫入が見られる。外面は鉄絵（灰オリーブ色）が施される。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	3		13.7 5.7 7.4	外面…オリーブ灰色 内面…オリーブ灰色	外面、内面とも灰釉。見込部分は露胎。見込み部分、高台畳付にアルミナが付着。釉薬の透明度が高く、貫入が施釉範囲全体に入る。	墓1 入口 礫直上
	4		13.4 6.4 6.3	外面…黒褐色 内面…灰オリーブ色	外面は褐釉、内面は灰釉の掛け分け。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。	墓2 内部 散乱
	5		13.7 6.4 6.5	外面…オリーブ灰色 内面…オリーブ灰色	外面、内面とも灰釉。見込部分は露胎、砂粒が少量付着。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	6	小碗	9.7 4.5 4.1	外面…極暗赤褐色 内面…極暗赤褐色	外面、内面とも渇釉。見込部分は露胎。また、見込と高台畳付に砂粒が付着。	墓1 集骨 Ⅰ層
	7		9.6 4.5 3.9	外面…黒褐色 内面…灰白色	外面は褐釉、内面は灰釉の掛け分け。内面の灰釉には貫入が入る。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。見込にはアルミナが付着。高台畳付は研磨される。	墓1 集骨 Ⅰ層
	8	瓶	— — —	外面…灰白色 内面…なし	外面は灰釉、内面は露胎。外面全体に微細な貫入が入る。ビンシー。	墓4 内部 Ⅰ層
	9		— — 6.7	外面…オリーブ灰色 内面…なし	外面は褐釉、内面は露胎。印花技法を用いて施文する。内面は轆轤目が明瞭に残る。	墓1 集骨 Ⅰ層
	10	酒注	3.8 9.0 7.1	外面…黒褐色 内面…黒褐色	外面、内面とも褐釉。カラカラ。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	11		— — 6.0	外面…黒褐色 内面…なし	外面は褐釉、内面は露胎。高台畳付に砂粒が付着。カラカラ。	墓1 集骨 Ⅰ層
	12	蓋	— — —	外面…灰オリーブ色 内面…なし	外面は灰釉、内面は露胎。外面全体に微細な貫入が入る。焼成前に外側から内側に向けて直系3mm大の小孔を穿つ。	墓1 前庭部 Ⅰ層



第56図　沖縄産施釉陶器　碗(１～５)、小碗(６、７)、瓶(８、９)、酒注(10、11)、蓋(12)

H　沖縄産無釉陶器

沖縄の方言で「アラヤチ」と称されているものを沖縄産無釉陶器としたため、泥釉の施されているものも含む。瓶、壺、急須の他、擂鉢等61点の沖縄産無釉陶器が検出されたが、器形の窺える資料は少なかった。第36表の沖縄産無釉陶器出土状況にある、器種不明の胴部片のほとんどは壺に含まれると思われる。

以下に図示したものについての概略を述べ、詳細は第37表の沖縄産無釉陶器観察一覧にまとめた。

1. 瓶（第57図１～２）

１、２ともに泥釉が施される。泥釉が施されているものは、瓶だけであり、他の器種にはなかった。

2. 壺（第57図３～15）

今回検出された壺はおおまかに大型のもの（３～５）、中型のもの（６～10）、小型のもの（11～15）に分けられる。外面の調整は程度の差はあるが、胴部上半から口縁部にかけて轆轤目をなで消し、底部周辺は工具を当て、轆轤の回転を利用して削りを施すものがほとんどで、小型のものの方が丁寧な調整を施す傾向が窺える。また、小型のもののうち、13に関しては底部周辺の削りのみで、胴部上半のなで消しが省かれており、意図的に轆轤目を残していると思われる。

3. 急須（第57図16）

１点のみの検出であり、他の器種とくらべ内外面の調整は丁寧である。

＜参考文献＞

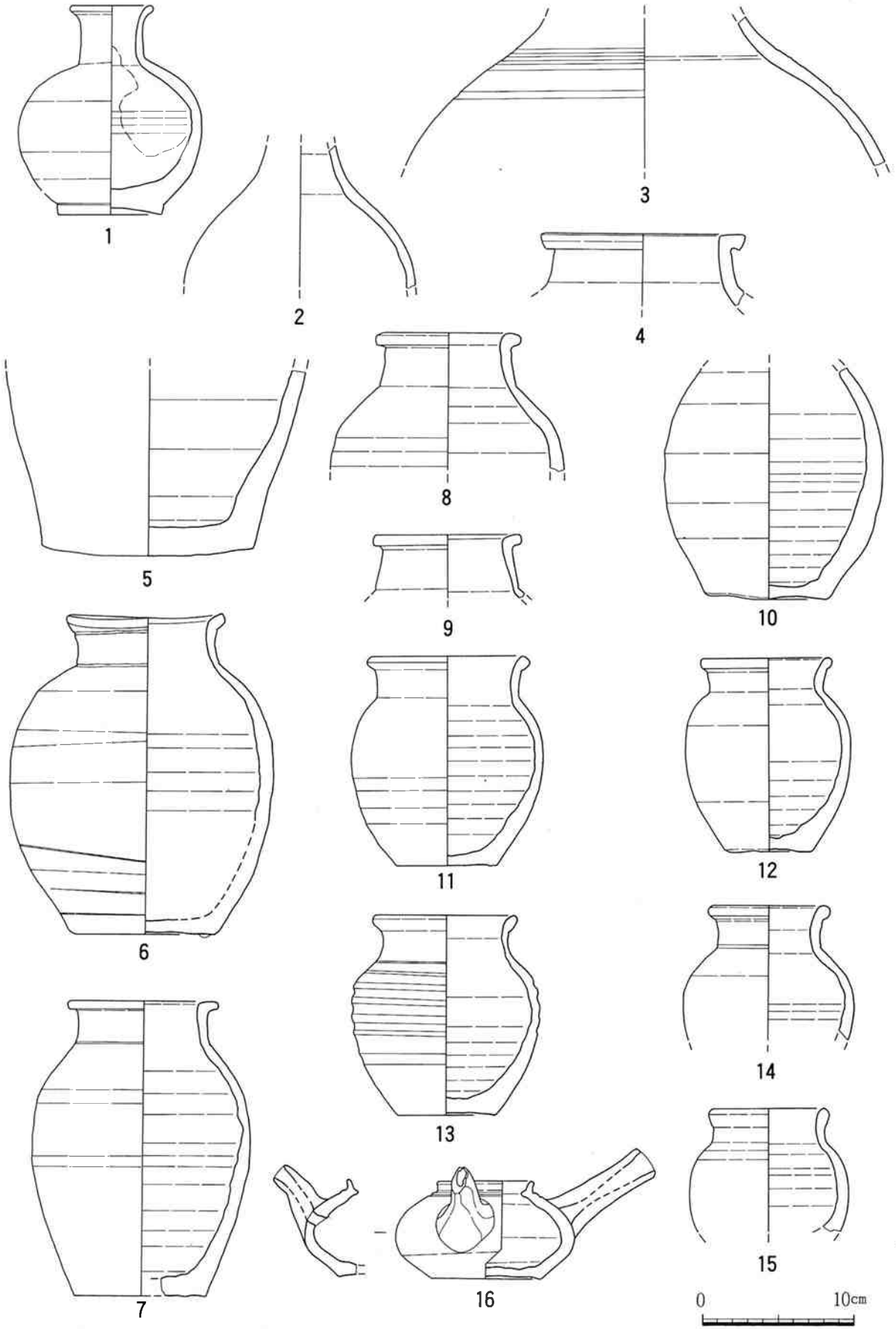
・『那覇市文化財調査報告書第23集　壺屋古窯群Ⅰ』　那覇市教育委員会　1992年
・『那覇市文化財調査報告書第27集　壺屋古窯群Ⅱ』　那覇市教育委員会　1995年
・『那覇市文化財調査報告書第38集　壺屋古窯群Ⅲ』　那覇市教育委員会　1997年
・『沖縄県文化財調査報告書第111集　湧田古窯跡（Ⅰ）』　沖縄県教育委員会　1993年
・『沖縄県文化財調査報告書第121集　湧田古窯跡（Ⅱ）』　沖縄県教育委員会　1995年
・『沖縄県文化財調査報告書第136集　湧田古窯跡（Ⅳ）』　沖縄県教育委員会　1999年
・『平成10年度企画展　沖縄のやきもの－南海からの香り－』　佐賀県立九州陶磁文化館　1998年
・照屋善義『沖縄の陶器　技術と科学』　2000年

第36表　沖縄産無施釉陶器出土状況

出土地＼器種			瓶			壺				急須	擂鉢	不明	合計
			口～底	口	胴	口～底	口	胴	底	口～底	底	胴	
墓１	前庭部	Ⅰ層			4	2	3	1	2	1		4	17
		散乱				1							1
	入口	Ⅰ層					1	1				1	3
	集骨	Ⅰ層	1	1	2	1	2	7	3			6	23
墓２	前庭部	Ⅰ層										1	1
	内部	散乱			1			3				2	6
墓３	前庭部	散乱										1	1
	内部	Ⅰ層						1				2	3
	石積上	表採							1				1
	石積下						1						1
墓４	内部	Ⅰ層					1	1			1		3
		テーブルサンゴ下				1							1
合　計			1	1	7	5	8	14	6	1	1	17	61

第37表　沖縄産無釉陶器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	観　察　事　項	出土地
第57図 図版31	1	瓶	5.6 14.0 6.8	外面に泥釉が施されており、黒褐色を呈す。泥釉は内面まで達しているが、意図的なものではないと思われる。内面には轆轤目が明瞭に残る。最大径12.2cm	墓1 集骨 Ⅰ層
	2		－ － －	1と異なり、内外面に泥釉が施される。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	3	壺	－ － －	大型の壺。頸部周辺に5条、肩部周辺に1条の凹線文を巡らす。肩部近くの凹線は一部指でなで消されている。	墓2 内部 散乱
	4		13.4 － －	口縁部形態は7～9ほぼ同じである。一部自然釉がかかる。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	5		－ － 13.9	外面は轆轤目を消しているが、内面は雑である。一部自然釉がかかり、底面にまで達する。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	6		10.6 21.5 9.5	完形品である。上部外面は轆轤目をなで消した跡がみられるが徹底しておらず、底部外面は工具をあて、削った痕跡が観察できる。最大径は17.5cm。	墓4内部 テーブル サンゴ下
	7		10.0 19.65 8.8	他の資料と比べ、外面調整がしっかりしており、内面にのみ轆轤目が残る。外面には自然釉がかかる。最大径は14.4cm。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	8		9.6 － －	外面は轆轤目を丁寧になで消しているが、若干残る。内部は轆轤目が明瞭に残る。	墓3 石積下
	9		9.8 － －	外面には直径1～2mm大の火脹れが目立つが、器面調整は丁寧である。	墓1 集骨 Ⅰ層
	10		－ － 7.8	作りは6と似ているが、窯の燃焼部に近かった為か、2～3cm大の火脹れが外面全体を覆う状況であり、仕上がりとしては悪い。最大径は14.3cm。	墓3 石積上 表採
	11		10.8 14.0 6.6	胴部の上半部から口縁部にかけてはなでによる丁寧な調整を施すが底部周辺の削りの部分までの間はなで消しが徹底されておらず、轆轤目が残る。最大径は12.7cm。	墓1 前庭部 Ⅰ層
	12		8.7 12.9 5.4	外面は全体的に丁寧な調整が施されているが、内面は轆轤目が明瞭に残る。最大径は10.9cm。	墓1 集骨 Ⅰ層
	13		9.5 13.4 6.4	内外面の轆轤目が明瞭に残る。最大径は12.4cm。	墓1 前庭部 散乱
	14		8.0 － －	外面の轆轤目は丁寧になで消されている。最大径は11.2cm。	墓4 内部 Ⅰ層
	15		8.0 － －	口縁部から肩部にかけてのラインが11、12と比べてゆるい。外面の轆轤目は丁寧になで消されている。最大径は10.4cm。	墓1 集骨 Ⅰ層
	16	急須	6.4 6.5 7.2	ほぼ完形品である。内外面とも丁寧ななでが施されており、轆轤目はほとんど確認できない。また、底部周辺の外面は工具を当て、削った跡が観察できる。最大径は11.7cm。	墓1 入口 Ⅰ層



第57図　沖縄産無釉陶器　瓶（1、2）、壺（3～15）、急須（16）

Ⅰ　土器

土器は総数で202点出土[1]したうち、半数近くが墓４内部Ⅰ層からの出土である。上方台地遺跡に比べて出土量は少ない。

Ⅰ類

同様に壺形が主体である。

Ⅱ類

Ⅱ類は壺形を主体に、鉢形が得られた。

壺形は第58図８である。１種は同図１で、３種は２、３である。４は口縁部の形成が弱い。全形をうかがうことのできる資料はなく、肩部に沈線による波状文を施す。

同図９は鉢形で、かなり堅経文である。

同図10、11は底部で、11はくびれ平底状のタイプである。10は脚を貼付するタイプで、３脚をなすと思われる。器種は香炉形であろうか。

Ⅲ類

本来は細分が必要であるが、Ⅰ・Ⅱ類に含まれないタイプを一括して扱った。

同図７は泥質の胎土で、混和材に細かな貝殻片を含む。器壁は１ ㎝ 前後と厚く前二者と異なる。

＜注＞

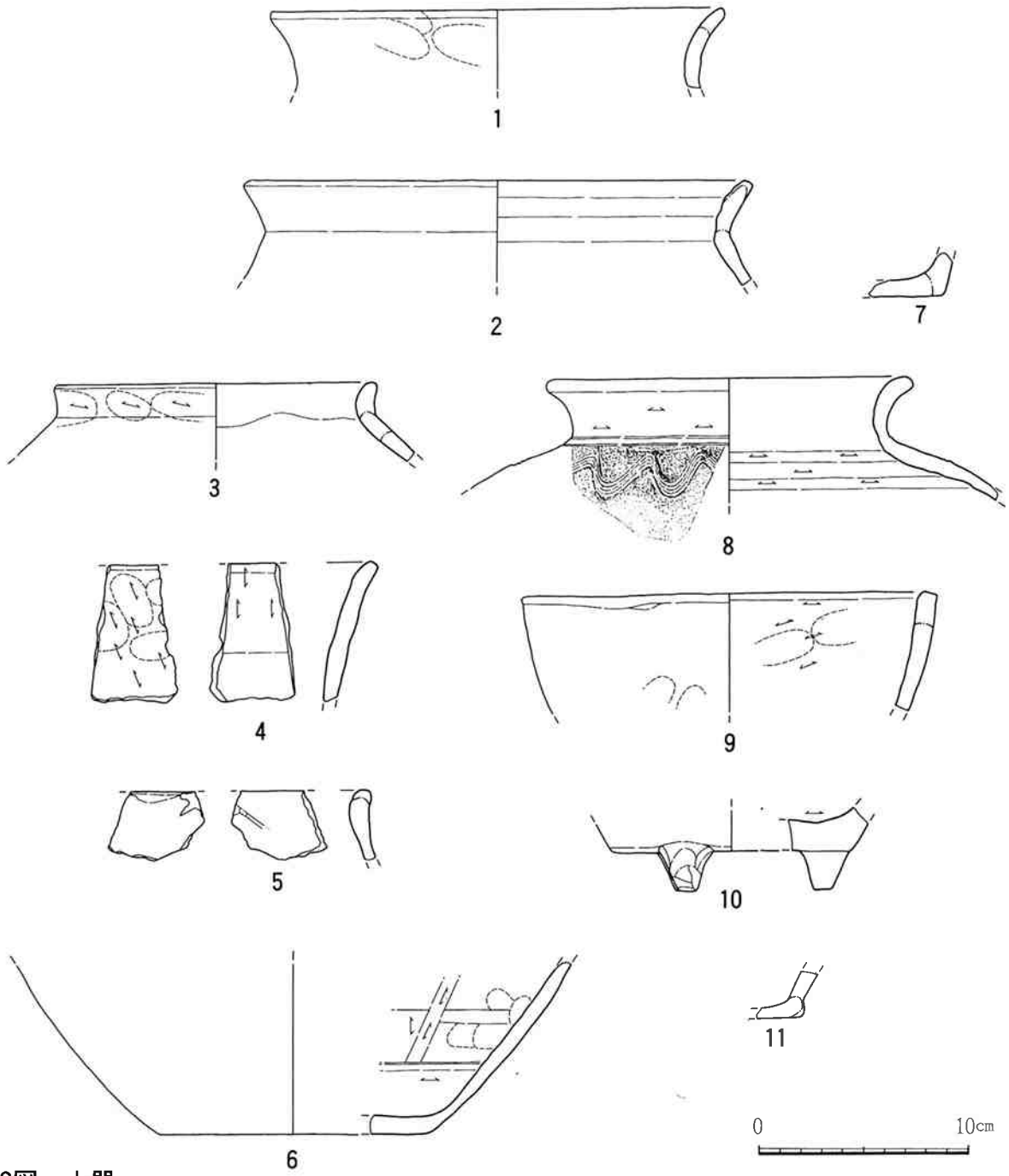
1）集計方法は前節と同様である。

第38表　土器出土状況

出土地＼器種			壺				鉢		不明			合計
			口	頸	胴	底	口	底	口	胴	底	
墓１	前庭部	Ⅰ層	9	1	1	4	1	1		31	1	49
		Ⅱ層			1					6	2	9
		散乱								7	1	8
	集骨	Ⅰ層	3	1	5	3	1		1	6	2	22
墓２	前庭部	Ⅰ層								3		3
		散乱								1		1
	内部	散乱								2		2
墓３	内部	Ⅰ層						1		12	1	14
	石積下										1	1
墓４	内部	Ⅰ層	4	3		5	1		2	69	9	93
合　計			16	5	7	12	3	2	3	137	17	202

第39表　土器観察一覧

挿図 図版	番号	器種	部位	分類		計測値	特　徴	出土地
第58図 図版32	1	壺	口	Ⅱ	1	口径：25.0㎝	口縁は大きく外反、口唇部は丸み。器面調整は外面は方向不明のナデ。混和材は粟粒状の白色粒。	墓4部 Ⅰ層
	2		口		1	口径：28.0㎝	口縁は直立、口唇部は丸み。器面調整は外面は方向不明のナデ。混和材に粗い褐色粒を含む。	墓4部 Ⅰ層
	3		口		2	口径：17.8㎝	頸部は短い。口縁は若干厚くつくる。口唇部は丸み。器面調整は外面に方向不明のナデ。	墓1集骨 Ⅰ層
	4	鉢	口		2	－	口縁がわずかに外反。器面調整は外面は指オサエ、内面は縦位のナデ。混和材にわずかに褐色粒を含む。	墓1集骨 Ⅰ層
	5		口		2	－	口縁は弱く内傾し、肥厚させる。器面調整は内外とも方向不明のナデ。混和材にわずかに褐色粒を含む。	墓4内部 Ⅰ層
	6		底部		2	底径：14.7㎝	底部から緩やかに立ち上がる器形。器面調整は内外とも横位のナデ。混和材にわずかに褐色粒を含む。	墓1前庭部 Ⅰ層
	7		底部	Ⅲ	1	－	底部から直に立ち上がる。器面調整は不明。混和材にわずかに白色粒を含む。	墓3内部 Ⅰ層
	8	壺	口～肩	Ⅰ	4	口径：20.2㎝	頸部を曲線的に形成し、口縁は強く外反する。器面調整は内外とも横位のナデ。肩部に波状文を施す。混和材に白色微粒を含むが目立たない。堅緻。	墓1集骨 Ⅰ層
	9	鉢	口			口径：22.8㎝	直口口縁をなし、口唇部は平坦。器面調整は外面は方向不明のナデ、内面は横位のナデ。混和材に白色微粒を含むが目立たない。かなり堅緻。	墓1前庭部 Ⅰ層
	10	不明	底部			底径：13.0㎝	脚付きの底部、脚の数は不明。器面調整は内外ともナデ。混和材に白色微粒を含むが目立たない。堅緻。	墓1集骨 Ⅰ層
	11		底部		4	－	弱くくびれる。器面調整は内外ともナデ。混和材にわずかに褐色粒を含む。	墓4内部 Ⅰ層



第58図　土器

J　煙管（第59図１～12）

煙管は、陶製５点、青銅製７点の計12点が出土している。個々の詳細は第40表にまとめ、特徴を記述する。

陶製は、組み合わせ式で、その部位は雁首のみである。これらは、胎土・色調が比較的精良で橙色のタイプ（１～３）と、粗く褐灰色のタイプ（４・５）に分けられ、さらに両者とも形態から細分できる。

前者は平面が多面形の火皿部と首が一体化したパイプ形である点は全て共通している。だが、首部は１・３が火皿部と同様に多面形であるが、２が円形と異なる。

後者は４が隅丸長方形の火皿部と楕円形の首部をもつパイプ形で、５はゆるい多面形の稜がつく火皿部に直接羅宇と接続する柱状形のものである。

青銅製は、組み合わせ式で、その部位は雁首（6）、吸口（7～12）がある。
雁首（6）は、鍛造により丸めた首部に別個で作られた火皿部を接合したことが、その痕跡から明瞭に分る資料である。

吸口は、完形のものでは法量的には全長が3.9～6.8cmと多少にばらつきがあるが、形態は中央部がややくびれてから開くという点で共通したものである。9は内部に紙を巻きつけた木製の羅宇の一部が残存している。10は全形が不明であるが、くびれがなくそのまま広がる形態の可能性がある。12はひしゃげており、本来は繋ぎ目が接合されていたかは不明であるが、現状では外れている。

第40表　煙管観察一覧

挿図図版	番号	部位	材質	全長(cm)	接合部径(cm)	重量(g)	特徴	出土地
第59図図版32	1	雁首	陶質	3.9	1.8	9.7	ほぼ完形。パイプ形。首部の裏面には3条の線刻あり。面取はシャープ。	墓1入口石列直上
	2			4.5	1.7	10.8	首・火皿部ともに欠けあり。パイプ形。器胎には気泡が目立つ。	墓1前庭部Ⅰ層
	3			(3.4)	1.9	8.0	火皿部大部分欠損。パイプ形。首部外面大半被熱のためか黒変。内面煤付着。	墓1集骨Ⅰ層
	4			6.6	1.7	47.7	ほぼ完形。パイプ形。全体の成形は滑らか。火皿は2.6×2.0cmの長方形。	墓1入口Ⅰ層
	5			2.2	1.2	16.3	ほぼ完形。柱状形。火皿部はすり鉢型。雁首高2.9cm。	墓1前庭部Ⅰ層
	6		青銅	5.1	1.7	18.7	完形。パイプ形。厚さ0.15cm。火皿部と首部の接合痕が明瞭。	墓1前庭部Ⅰ層
	7	吸口	青銅	3.8	1.5	6.1	完形。接合部側がひしゃげる。厚さ0.15cm。吸口径0.4cm。	墓1集骨Ⅰ層
	8			5.0	1.1	7.1	完形。吸口径0.5cm。厚さ0.1cm。吸口やや楕円形で、小孔あり。	墓1集骨Ⅰ層
	9			5.9	1.2	7.3	完形。吸口径0.5cm。厚さ0.15cm。内部には外部に紙を巻きつけた木製の羅宇の一部が残存。吸口側に小孔あり。	墓1集骨Ⅰ層
	10			(4.8)	—	3.4	接合部側大部分欠損。吸口径0.5cm。厚さ0.1cm。	墓1集骨Ⅰ層
	11			6.7	1.2	9.2	完形。吸口径0.5cm。厚さ0.15cm。他と比べるとくびれが明瞭。	墓1集骨Ⅰ層
	12			3.0	—	5.0	吸口側が欠損。厚さ0.15cm。	墓1集骨Ⅰ層

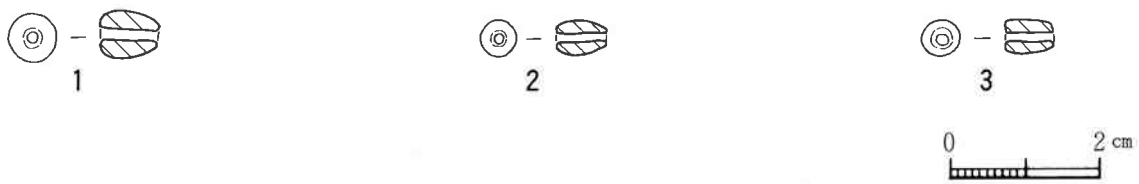
K　簪（第59図13）

簪は1点、墓1集骨Ⅰ層から出土している。13は頭部のみが残存しており、6つの花弁状を呈する。青銅製である。長軸2.0cm、短軸1.5cm、最大厚0.15cm、重量1.1ｇ。

L　玉（第60図1～3）

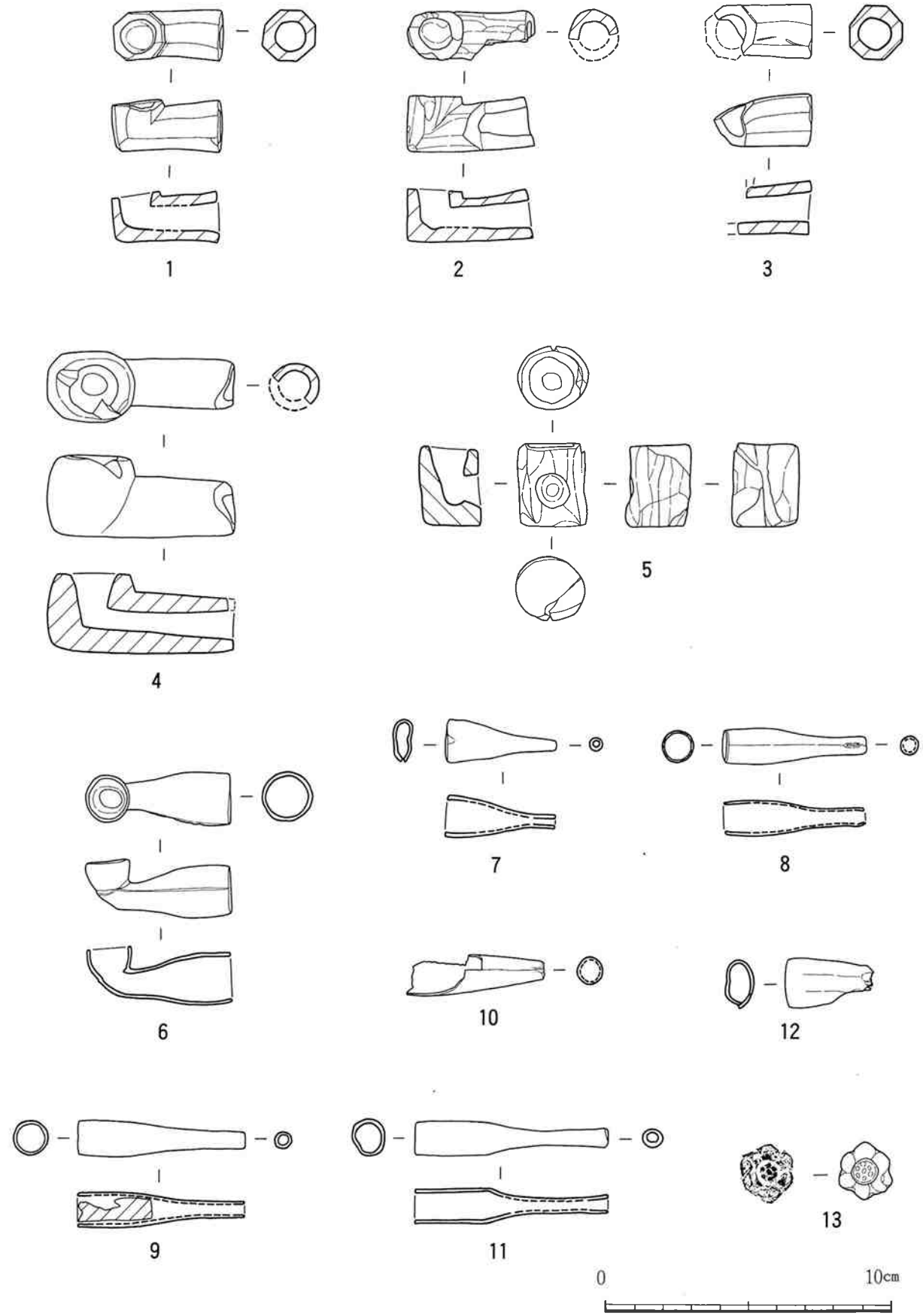
玉は3点、全て墓1集骨Ⅰ層から出土しており、ガラス製で淡青色を呈している。個別に記述する。

1は長径0.8cm、短径0.6cm、重量5ｇ。2は長径0.7cm、短径0.45cm、重量3ｇ。3は長径0.65cm、短径0.4cm、重量3ｇ。



第60図　玉

図版33　玉



第59図　煙管（1～12）、簪（13）

M　貝類遺存体

第41表　貝類出土状況（巻貝）

巻貝 ＼ 出土地					墓1前庭部 Ⅰ層			墓1入口 Ⅰ層			墓1集骨 Ⅰ層			墓2内部 散乱			墓3前庭部		
番号	網名	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
1	腹足網	ミミガイ科	ミミガイ	Ⅰ		1													
2		ニシキウズガイ科	ムラサキウズ	Ⅰ-3-a								1							
3			サラサバテイ	Ⅰ-4-a								1							
4		サザエ科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a															1
5			チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a		2	1												2
6			チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	1						4						1		
7		アマオブネガイ科	イシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a	1														
8		オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a	1														
9		タマキビ科	コンペイトウガイ	Ⅰ-0-a	5														
10		ソデボラ科	マガキガイ	Ⅰ-2-c		7			1										
11		タカラガイ科	ハチジョウダカラ	Ⅰ-1-a															
12			ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	1		1												
13			ハナマルユキ	Ⅰ-3-a		1						1							
14			タカラガイ科不明																
15		オキニシ科	オキニシ	Ⅰ-3-a															
16		フジツガイ科	ホラガイ	Ⅰ-4-a			1												
17		アッキガイ科	ムラサキイガレイシ	Ⅰ-3-a			1				1								
18			テツレイシ	Ⅰ-1-a	1														
19			アッキガイ科不明				1												
20		イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a		1													
21		イモガイ科	イモガイ科不明			1	1												
22		ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8															1
23		オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9														1	
合計					10	12	6	0	1	0	5	2	0	0	0	0	1	0	3
個体数					22			1			7			0			1		

巻貝 ＼ 出土地					墓3内部 Ⅰ層			墓4西側壁下 Ⅰ層			墓4内部 Ⅰ層			不明			合計			個体数
番号	網名	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	
1	腹足網	ミミガイ科	ミミガイ	Ⅰ													0	1	0	1
2		ニシキウズガイ科	ムラサキウズ	Ⅰ-3-a													0	1	0	1
3			サラサバテイ	Ⅰ-4-a													0	1	0	1
4		サザエ科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a		1				1			3				0	1	5	1
5			チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a							1			1			2	2	3	4
6			チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	1												7	0	0	7
7		アマオブネガイ科	イシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a													1	0	0	1
8		オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a													1	0	0	1
9		タマキビ科	コンペイトウガイ	Ⅰ-0-a													5	0	0	5
10		ソデボラ科	マガキガイ	Ⅰ-2-c													0	8	0	8
11		タカラガイ科	ハチジョウダカラ	Ⅰ-1-a									1				0	0	1	△
12			ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a													1	0	1	1
13			ハナマルユキ	Ⅰ-3-a			1						1				0	2	2	2
14			タカラガイ科不明										1				0	0	1	0
15		オキニシ科	オキニシ	Ⅰ-3-a					1								0	1	0	1
16		フジツガイ科	ホラガイ	Ⅰ-4-a													0	0	1	△
17		アッキガイ科	ムラサキイガレイシ	Ⅰ-3-a													1	0	1	1
18			テツレイシ	Ⅰ-1-a													1	0	0	1
19			アッキガイ科不明														0	0	1	△
20		イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a													0	1	0	1
21		イモガイ科	イモガイ科不明														0	1	1	1
22		ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8													0	0	1	△
23		オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9													0	1	0	1
合計					1	1	1	0	1	1	1	0	6	1	0	0	19	17	17	36
個体数					2			1			1			1			36			

第42表　貝類出土状況（二枚貝）

二枚貝 ＼ 出土地					墓1前庭部 Ⅰ層				墓4内部 Ⅰ層				合計				個体数
					完形		殻頂		完形		殻頂		完形		殻頂		破片
番号	網名	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	
1	二枚貝網	シャコガイ科	シャコウガイ	Ⅰ-2-c								1	0	0	0	0	△
2			シャコガイ科不明					1					0	0	0	0	△
合計					0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	△
個体数					△				△				△				

※二枚貝の合計と個体数は必ずしも一致しない。（完形と殻頂それぞれ多い方を合計し個体数とした。）

＜貝の生息地の分類＞

外洋～内湾	水深	底質
Ⅰ：外洋・サンゴ礁域	0：潮間帯上部（1ではノッチ、Ⅲではマングローブ）　3：干潮（にのみ適用）	a：岩盤
Ⅱ：内湾・転石地域	1：潮間帯中・下部　4：礁斜面およびその下部	b：転石
Ⅲ：河口干潟・マングローブ域	2：亜潮間帯上縁部（1ではイノー）	c：岩礫底、砂泥底、砂底
Ⅳ：淡水域	5：止水　6：流水	
Ⅴ：陸域	7：林内　8：林内・林縁部　9：林縁部	

N　脊椎動物遺体

動物遺存体種名一覧

硬骨魚綱　Class Osteichthyes
　フグ目　Order Tetraodontiformes
　　ハリセンボン科　Family Diodontidae
　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
両性綱　Class　Amphibia
　カエル目　Order Salientia
　　科・属不明　Fam.et gen.indet.
爬虫綱　Class　Reptilia
　有隣目(ヘビ亜目) Order Ophidia
　　科・属不明　Fam.et gen.indet.
哺乳綱　Class Mammalia
　齧歯目　Order Rodentia
　　ネズミ科　Family Muridae
　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
　偶蹄目　Order Artiodactyla
　　イノシシ科　Family Suidae
　　ブタ　Sus scrofa var. domesticus
　　ウシ科　Family Bovidae
　　ウシ　Bos taurus

第43表　魚骨(ハリセンボン科)出土一覧

部　位	個数	出土地
棘	1	墓1前庭部Ⅰ層

第44表　カエル類出土一覧

部　位		右／左	個数	出土地
上腕骨	骨体～遠位端	左	1	墓1前庭部Ⅰ層
橈・尺骨	破片		1	墓1前庭部Ⅰ層
脛・腓骨	破片		1	墓1前庭部Ⅰ層

第45表　ヘビ出土一覧

部　位	個数	出土地
脊椎骨	1	墓1前庭部Ⅰ層

第46表　ネズミ類出土一覧

部　位		右／左	個数	出土地
上腕骨	完存	左	1	墓1前庭部Ⅰ層

第47表　ブタ出土一覧

部　位		右／左	個数	出土地
下顎骨	Ⅰ＜1＞	左	1	墓1前庭部Ⅰ層
	i1	右	1	墓1前庭部Ⅰ層
椎体	椎窩		1	墓1前庭部Ⅰ層
肋骨	破片		1	墓1前庭部Ⅰ層
上腕骨	近位部～遠位部	右	1	墓2前庭部Ⅰ層

凡例　＜　＞：未萌出

第48表　ウシ出土一覧

部　位		個数	出土地
上顎骨	歯破片	1	墓1前庭部Ⅰ層
脛骨	破片	1	墓4内部Ⅰ層

第３節　まとめ

以上、新里東元島遺跡の発掘調査成果の詳細について述べた。今一度遺跡の概要を述べることでまとめとしたい。

今回の調査は県道保良上地線（友利～上地）道路新設改良事業に伴う緊急発掘調査であった。

新里東元島遺跡は宮古島上野村の南岸地域に所在する。以前からグスク時代の集落遺跡として認知されているが、今回の調査で近世の岩陰墓も確認された。新里元島上方台地遺跡の南端、石灰岩岩盤添いに点在している。

調査区は新里元島上方台地遺跡と同様の設定である。今回行った古墓の調査は４基である。古墓１・２はＡ地区で、古墓３・４はＢ地区で確認された。古墓の構造は古墓１・２と３・４で異なる。古墓１・２は石灰岩岩盤を削り、面取りした石灰岩の切石を方形に積み上げて構築されており、古墓３・４は石灰岩岩盤添いの平場に構築されている。石灰岩礫を用いているが、崩れているため構造の詳細は不明である。

古墓１は古墓２と比して小規模ながら丁寧に構築されており、左右対称構造を志向している。最下部には小型の石を配し、一段奥行きをつけて大型の石を積み上げた二段構造となっている。二段目中央には窓が設けられている。検出された人骨はいずれもまとまっておらず、散乱していた。古墓１の西側に隣接して集骨遺構が確認された。多量の人骨と遺物が厚く堆積して出土した。新たな埋葬を行うさいに、供養を終えた人骨を供献品とともに集めた遺構と考えられる。墓内・前庭部・集骨遺構から、少なくとも27体分の人骨が検出された。

古墓２は古墓１と比してやや大型である。古墓１と同様に上下二段に面取りした石灰岩の切石を用いて構築されているが、異なる点は明確な左右対称構造を志向しておらず、窓も左に寄っている。何らかの意図をもってこのような造りをしたのか不明である。検出された人骨はまとまっておらず、散乱していた。墓内・前庭部から少なくとも５体分の人骨が検出された。

古墓３は石灰岩岩盤添いで確認された。頭を南東方向に向けた埋葬人骨が検出された。古墓の形態は石灰岩礫が一部崩れて散乱しており、不明である。特異な検出状況で、埋葬人骨の腹部直上に石積みが築かれていた。人骨は少なくとも６体分検出された。

古墓４は石灰岩岩盤上の一段高くなった小さな平場で確認された。頭を東方向に向けた幼児の埋葬人骨が、崩れた石灰岩礫の直下から検出された。古墓の形態は石灰岩礫が崩れて散乱しており、不明である。

今回調査した４基の古墓の周辺にはいずれも巨大なテーブルサンゴが数点散乱していた。本遺跡後背の丘陵に位置する上比屋山遺跡で確認された近世岩陰墓は保存状態が良好で、面取りした切石を積んだ墓の上には屋根としてテーブルサンゴが利用されている。このことから、本遺跡の古墓にもこのように屋根としてテーブルサンゴを利用していた可能性が高い。

出土遺物は17世紀～19世紀頃のものである。器ものでは沖縄産施釉・無釉陶器を主体として、土器、中国産青磁・白磁・染付・褐釉陶器、本土産磁器が、その他、陶質や青銅の煙管、玉類、簪等が出土した。

出土遺物によって古墓の先後関係を知ることは困難である。Ａ地区とＢ地区で確認された古墓は構造と性格が異なるため、このような様相を明らかにしていくことが今後の課題となる。

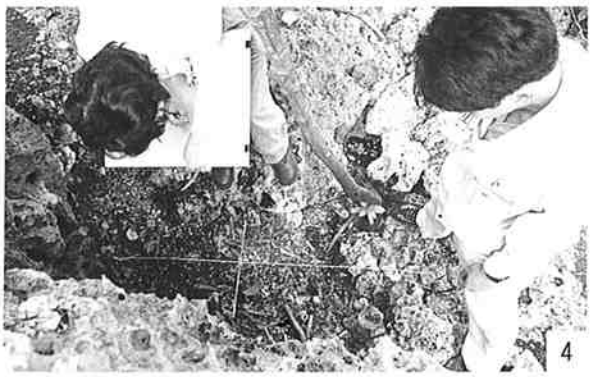
図　　版

図版27　調査区の状況 1　1. 古墓 1 実測　2. 古墓 1 正面　3. 古墓 1 前庭部遺物散乱　4. 古墓 1 石積組合せ　5. 古墓 1 内部岩盤　6. 古墓 1 前庭部清掃後　7. 集骨遺構正面　8. 集骨遺構平面

1

2

3


4

5

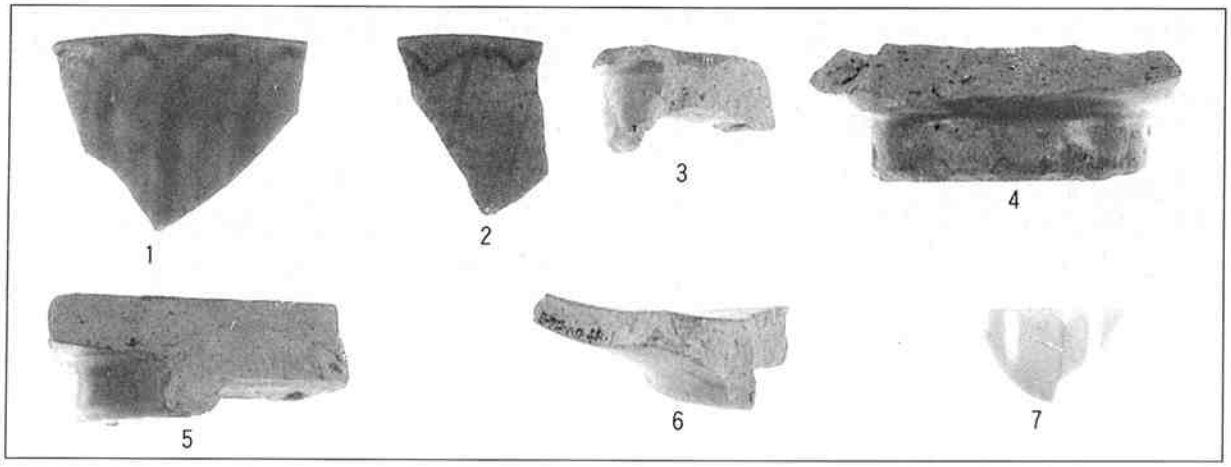
6

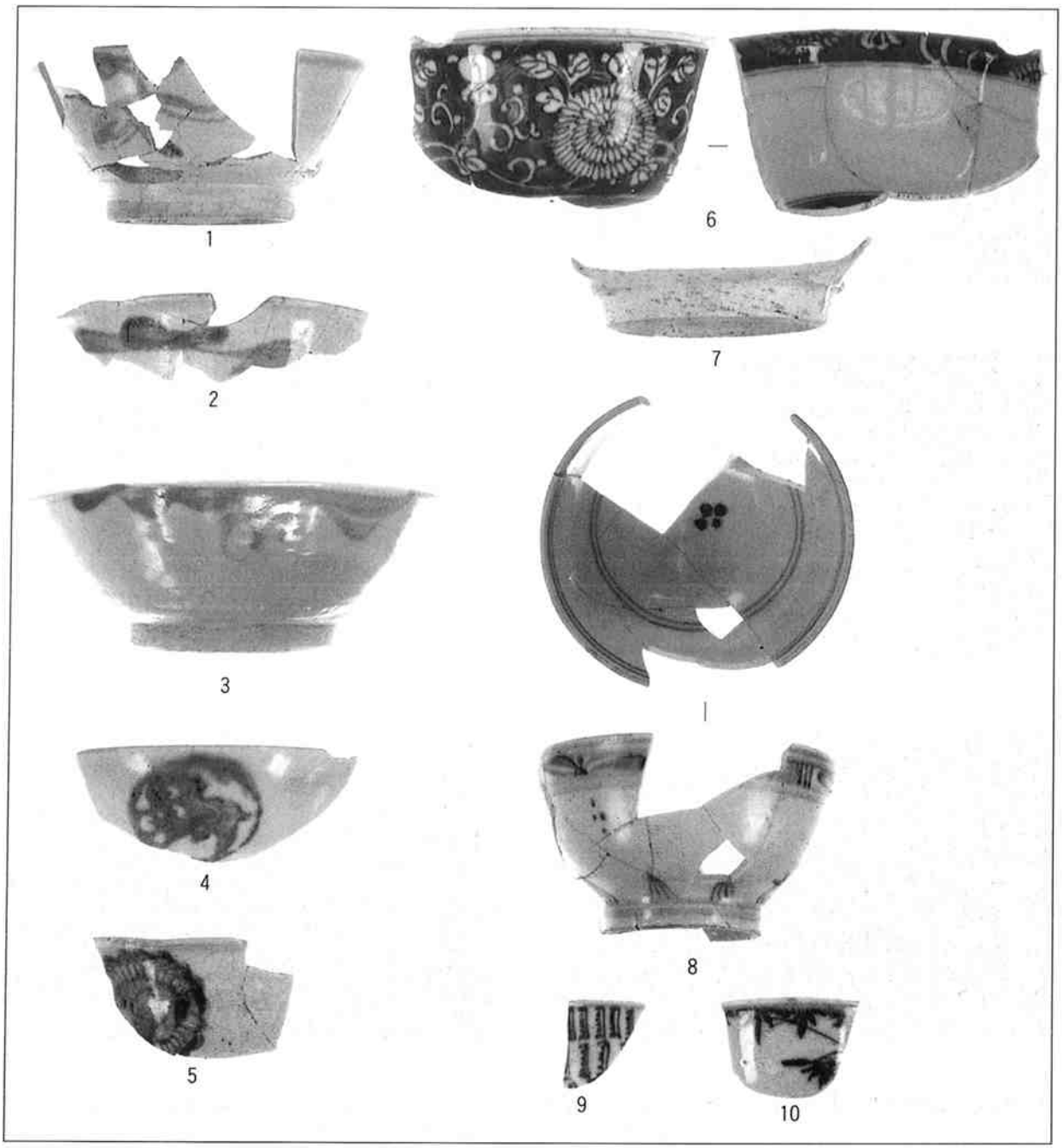
7

8

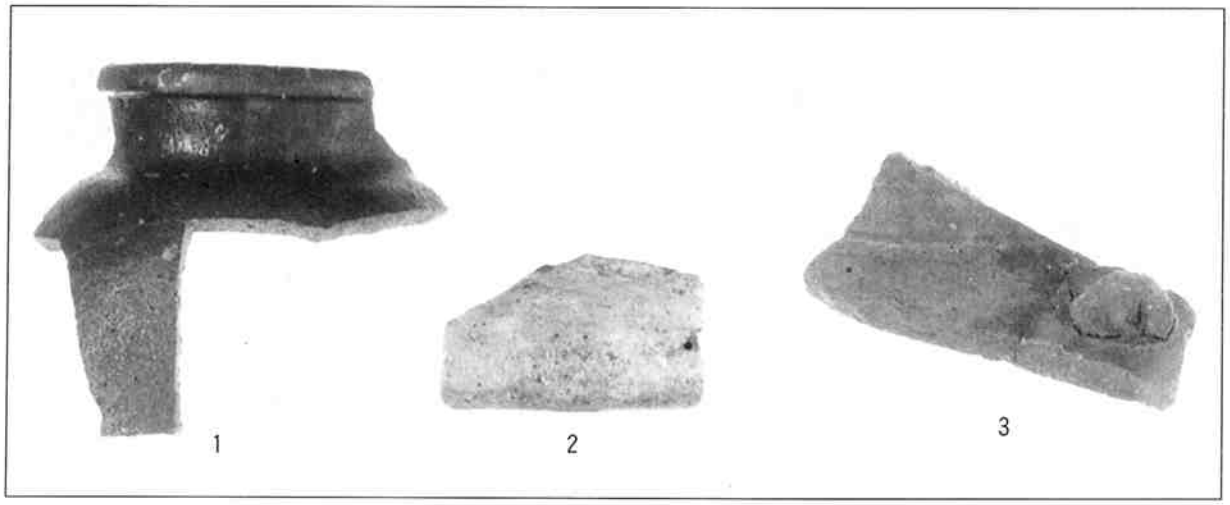
図版28　調査区の状況 2

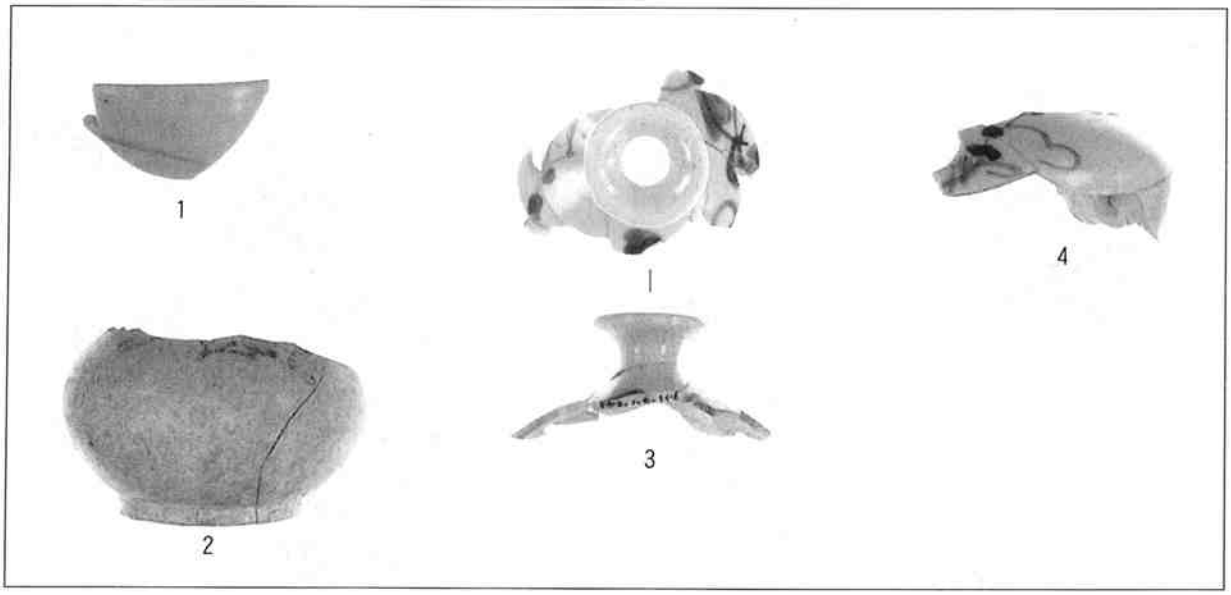
1. 古墓 3 正面　2. 古墓 3 平面　3. 古墓 3 埋葬人骨遠景　4. 古墓 3 埋葬人骨実測
5. 古墓 3 埋葬人骨近景　6. 古墓 4 遠景　7. 古墓 4 近景　8. 古墓 4 埋葬人骨

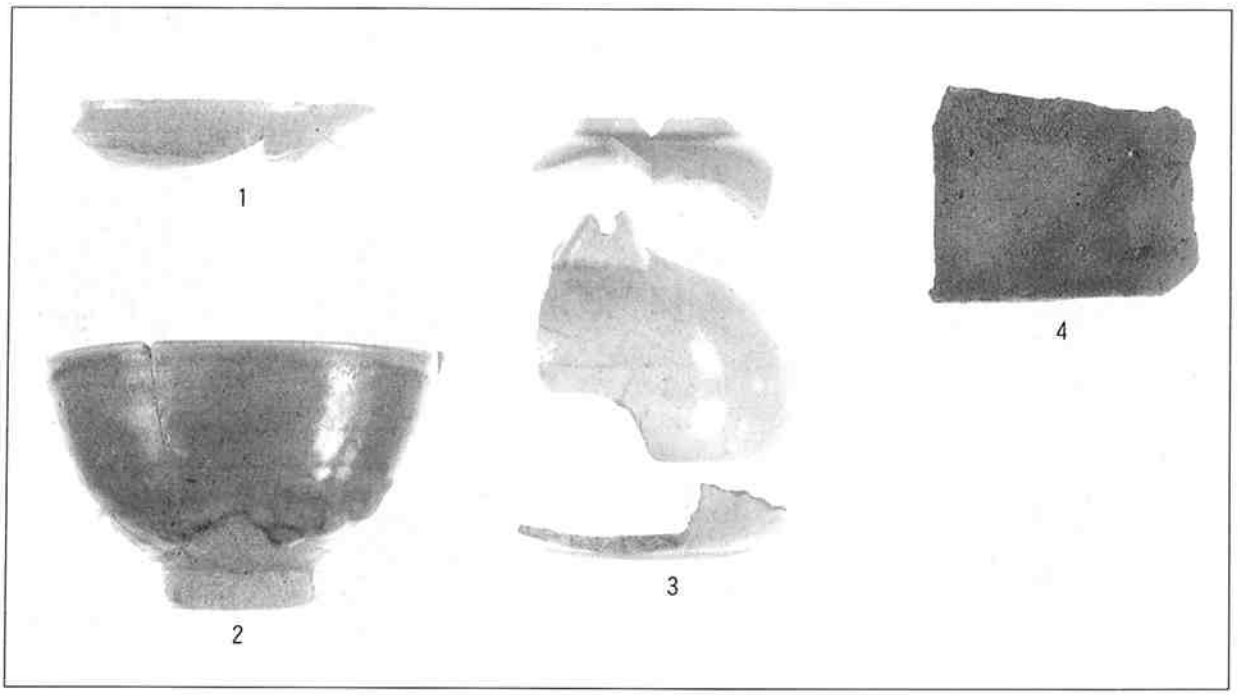




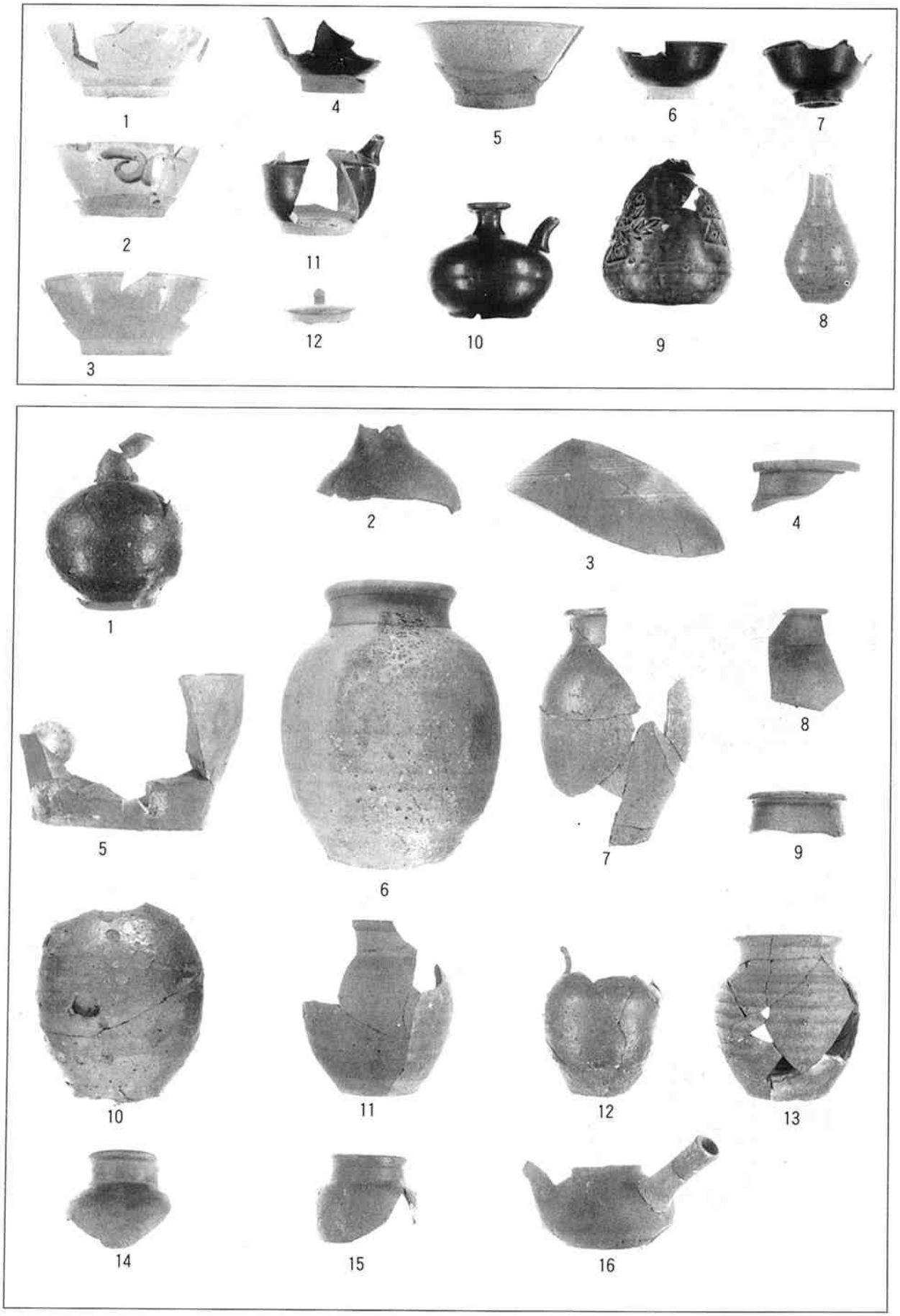
図版29　上：青磁・白磁　下：染付



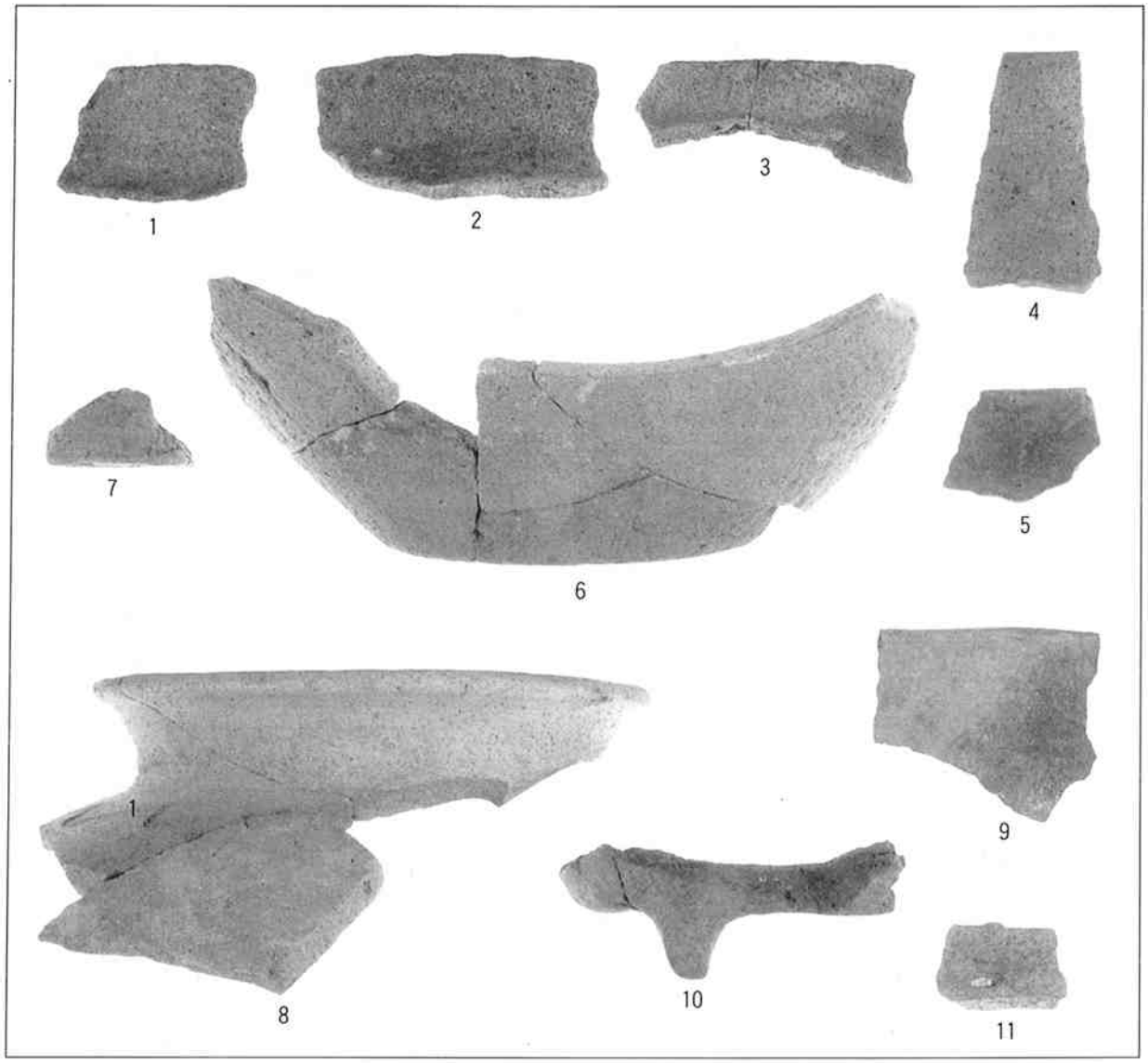


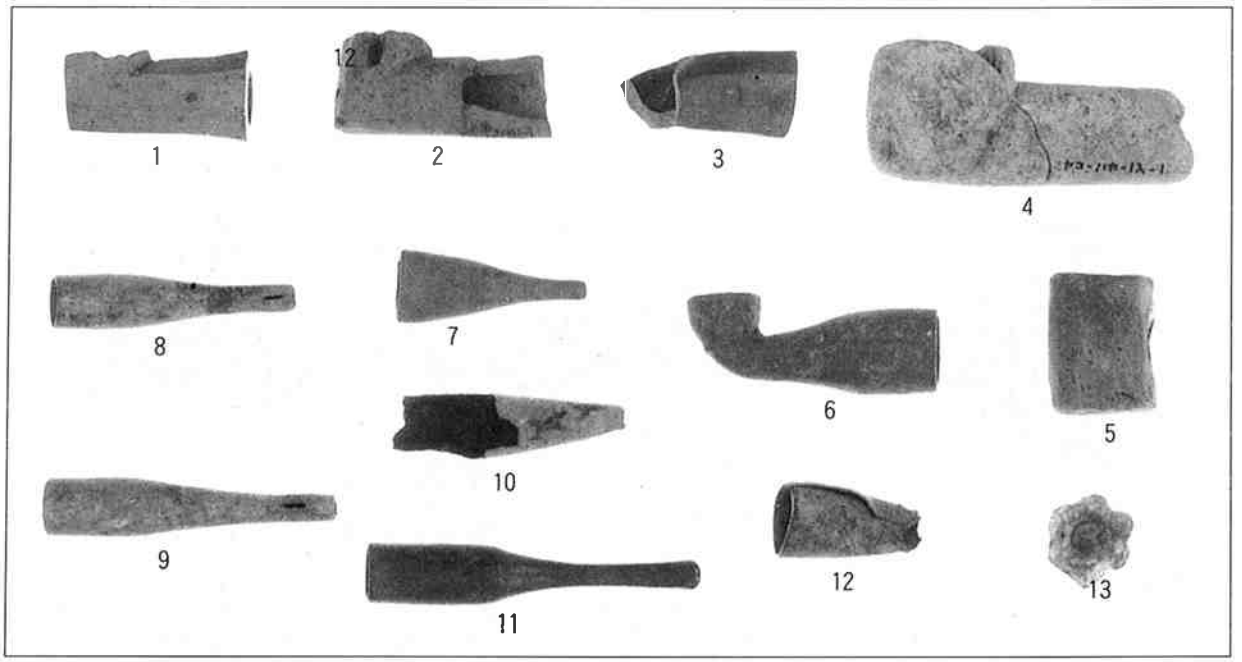


図版30　上：中国産褐釉陶器　中：本土産磁器　下：本土産陶器

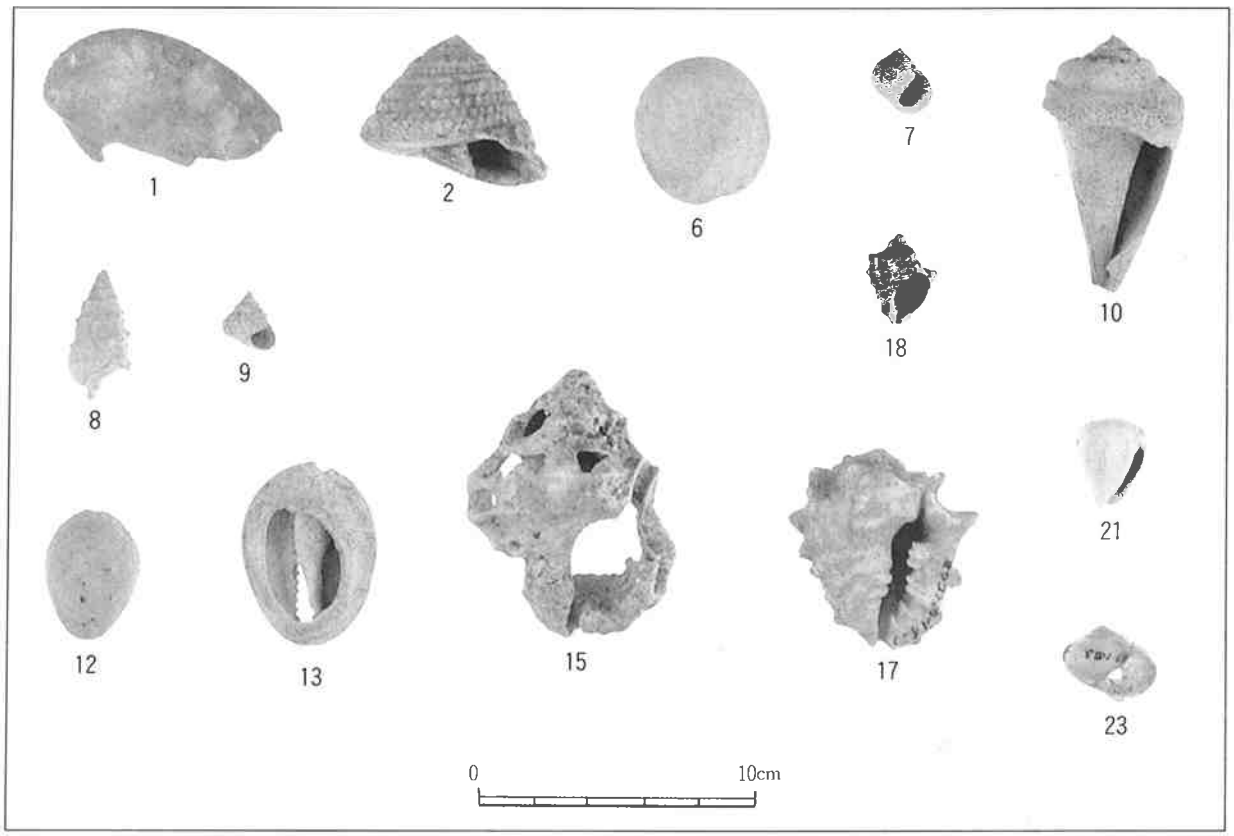


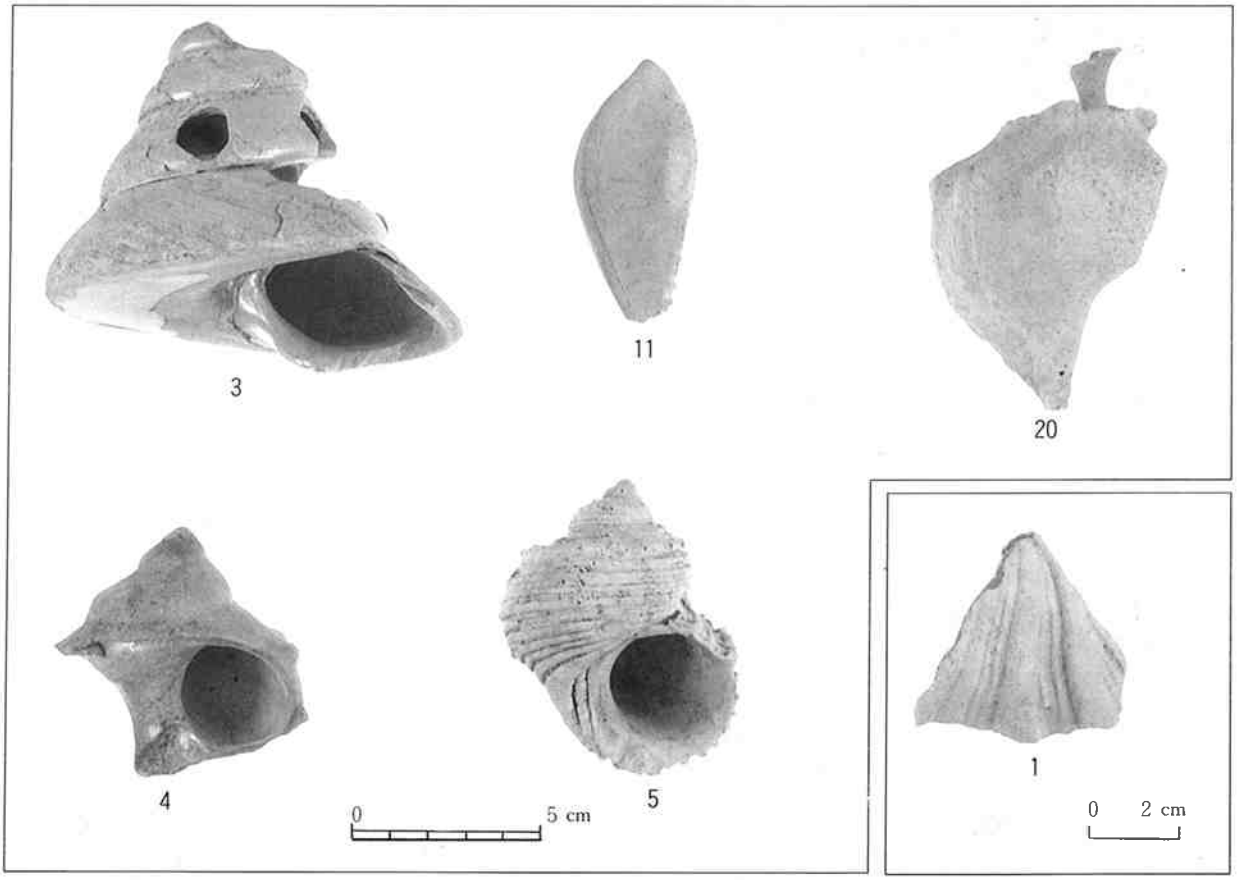
図版31　上：沖縄産施釉陶器　下：沖縄産無釉陶器





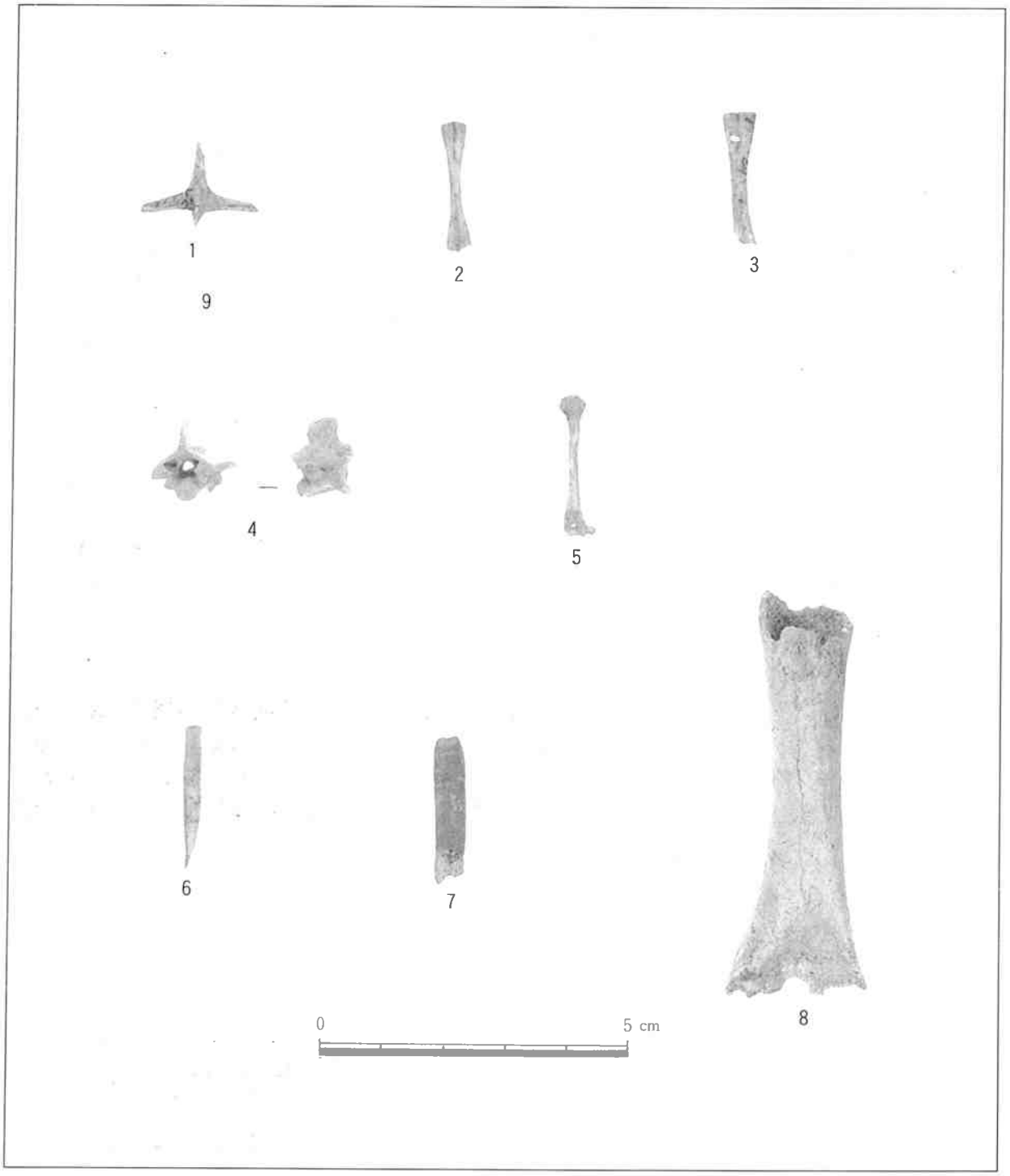
図版32　上：土器　下：煙管・簪





図版34　巻貝　1．ミミガイ　2．ムラサキウズ　3．サラサバティ　4．ヤコウガイ　5．チョウセンサザエ
6．チョウセンサザエの蓋　7．イシダタミアマオブネ　8．クワノミカニモリの蓋　9．コンペイトウガイ
10．マガキガイ　11．ハチジョウダカラ　12．ハナビラダカラ　13．ハナマルユキ　15．オキニシ
17．ムラサキイガレイシ　18．テツレイシ　20．イトマキボラ　21．イモガイ科不明
23．オキナワウスカワマイマイ

下右：二枚貝　1．シャゴウ　（番号は表と一致）



図版35　骨　・サカナ　ハリセンボン科　1. ミミガイ
カエル類　2. 橈・尺骨　3. 脛・腓骨
ヘビ　4. 脊椎骨
ネズミ　5. 右上腕骨
ブタ　6. 右下顎骨i_1　7. 左下顎骨$I_{(1)}$　8. 右上腕骨

第Ⅵ章　新里東元島遺跡近世古墓出土人骨の構成

琉球大学医学部解剖学第１講座
譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇

【はじめに】

新里元島上方台地遺跡および新里東元島遺跡は、沖縄県による県道保良上地線（友利～上地）道路新設改良事業に伴い、平成11年度は沖縄県教育委員会、平成12年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが記録保存のため緊急発掘調査を行った。本遺跡群は14～16世紀頃のグスク時代に属する集落遺跡であるが、新里東元島遺跡からは４基の近世古墓が伴って検出され、数十体の人骨が出土した。今回は、この４基の近世墓から出土した人骨について報告を行う。

古墓１・２は同じ石灰岩の岩盤上に隣接して作られた掘込墓で、方形に加工した石灰岩を積み上げて構築されていた。墓内と前庭部からは沖縄産施釉・無釉陶器を中心と遺物が出土した。古墓１では集骨遺構も発見され、上述した遺物や人骨が多量に堆積していたのを確認した。また、古墓１・２とも墓内に葬られていた人骨のほとんどは、既に移転された後であった。

古墓３・４は岩陰を利用して埋葬され、石灰岩を積み上げて構築されたと思われるが、石は崩落しており、その下から人骨が検出された。構造等の詳細は不明である。出土遺物は古墓１・２と同様であるが、出土量は非常に少なかった。

【人骨の構成】

確認された全体の最小個体数を第49表に、構成の割合を第61図に示す。年齢区分は第50表に従った。もっとも多く含まれていたのは成人男性で28%、次いで幼児が26%となった。また、新里・元島上方台地遺跡は、全体的に含まれる未成人の割合が44%と、沖縄の近世に属する久米島具志川村ヤッチのガマ（20%）や、那覇市ナーチュー毛古墓群（32%）、那覇市銘苅古墓群南（A・C・D）地区（29%）と比較して、高い結果となった。

【人骨所見】

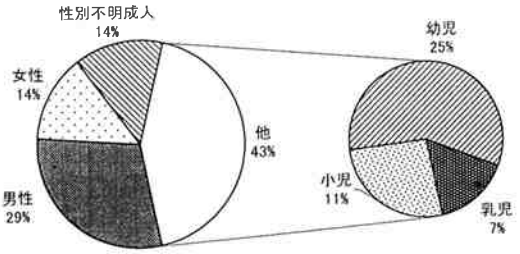
以下に人骨所見の概要を記す。

第49表　新里・元島上方台地出土人骨

出土地点		男性	女性	性別不明					合計
				成人	若年	小児	幼児	乳児	
古墓-1	前庭部	3	2	2		2	2	1	12
	集骨遺構	4	3	2		1	4		14
	内部	1				1	1		3
	表採						1		1
古墓-2	前庭部			1					1
	内部	2	1			1			4
古墓-3		3					2	2	7
古墓-4							1		1
	周辺部			1					1
合　計		13	6	6	0	5	11	3	44

第60表　年齢区別

年齢区分					
未成人	乳児	1ヶ月	～	1	才未満
	幼児	1	～	7	才未満
	小児	7	～	14	才未満
	若年	14	～	20	才未満
成人	成年	20	～	40	才未満
	熟年	40	～	60	才未満
	老年		～	60	才以上



第61図　出土人骨の構成

古墓１

前庭部（成人男性３、成人女性２、小児２、幼児２、乳児１）

成人骨

ほとんどは保存不良で、欠損部位も多く、性別や個体識別が困難なものが多かった。確認された部位を以下に記す。

頭蓋：頭蓋骨片、頬骨右２（男性２）、側頭骨片右１（男性）・左３（女性1，性別不明２）、上顎骨片２（男性1，性別不明１）、下顎骨片３（女性1，性別不明２）

上肢：上腕骨片右１（男性）・左３（男性2，性別不明１）、尺骨片右２（男性1，女性１）・左６（男性3，女性2，性別不明１）、橈骨片右３（男性2，女性１）・左１（男性）

下肢：大腿骨片右１（男性）・左３（男性1，女性1，性別不明１）、脛骨片右２（男性1，女性１）・左１（男性）、腓骨片右４（男性3，女性１）・左３（男性1，女性1，性別不明１）

その他に永久歯の右犬歯が７体分確認されたことから、骨の鑑定結果と併せて少なくとも成人男性３体、成人女性２体、性別不明成人２体が含まれていたと推定される。

また、成人女性の左大腿骨骨幹部片において、不整な骨増殖や小孔が存在し、破損した断面からはかなり肥厚しているのが確認された。しかし骨幹の一部しか残存しておらず、詳細は不明である。

未成人骨

未成人骨は、成人同様保存不良で、破損し残存部位が少なく、個体識別が困難であった。確認された部位を以下に記す。

頭蓋：少量の頭蓋骨片、頬骨右１（乳？幼児）、上顎骨片１（乳児）、下顎骨片１（幼児）

上肢：上腕骨片左１（幼児）、尺骨片左１（幼児）、橈骨片右１（幼児）、肩甲骨片右２（乳児？1，幼児１）・左１（幼児）

下肢：大腿骨片右１（幼児）・左１（幼児）、脛骨片右１（幼児）

残存していた乳歯や未萌出永久歯の発達程度と、骨の鑑定結果を併せると少なくとも乳児１体、幼児２体、小児２体が含まれている。

集骨遺構（成年男性１、成人男性３、成年女性１、熟年女性１、成人女性１、性別不明成人２、小児１、幼児４）

成人骨

ほとんどが破損していたが、前庭部表土と比較して残存部位がやや多く、一部年齢推定の可能な上下顎骨が含まれていた。確認された主要な部位は以下の通りである。

頭蓋：頭蓋骨片、頬骨右１（性別不明）、側頭骨片右２（男性1，女性１）・左４（男性1，性別不明３）、上顎骨片５（成人男性1，成年女性1，熟年女性1，性別不明２）、下顎骨片８（成年男性1，成人男性2，熟年女性２、性別不明３）、前頭骨片２（男性1，性別不明１）

上肢：上顎骨片右７（男性4，女性2，性別不明２）・左３（男性2，性別不明１）、尺骨片右６（男性3，女性2，性別不明１）・左５（男性3，女性1，性別不明１）、橈骨片右５（男性4，女性１）・左６（男性4，女性1，性別不明１）

下肢：大腿骨片右６（男性１、女性３、性別不明２）・左６（男性2, 女性1, 性別不明３）、脛骨片右６（男性４、性別不明２）・左５（男性2, 女性1, 性別不明２）、腓骨片右６（男性3, 女性1, 性別不明２）・左５（男性2, 女性1, 性別不明２）、寛骨片右１（性別不明）・左２（男性2）、距骨片右５（男性3, 女性２）・左４（男性3, 女性１）

鑑定結果から成人骨から、少なくとも成年男性１体、成人男性３体、成年女性１体、熟年女性２体、性別不明成人２体が葬られていたと推定される。また、右脛骨片２（男性と性別不明）の骨幹部では肥厚した骨膜炎を確認したが、個体識別が困難なため詳細は不明である。

未成人骨

成人骨同様保存不良で残存部位が少なかった。

頭蓋：少量の頭蓋骨片、上顎骨片３（幼児2, 小児１）、下顎骨片１（幼児）

上肢：尺骨片右１（幼児？）、左１（幼児）、橈骨片左２（幼児1, 小児１）、鎖骨左１（幼児）

下肢：大腿骨片左１（小児）、脛骨近位骨端２（幼児1, 小児１）、坐骨左１（幼児）、膝蓋骨左１（幼児）

その他に、幼児と思われる乳歯が４体分残存していた結果を併せると、少なくとも小児１体、幼児４体が含まれていると推定される。

内部（成人男性１、小児１、幼児１）

成人骨

少量の骨細片のみである。確認された部位は、頭蓋骨片、大腿骨片、脛骨片、腓骨片、膝蓋骨片等である。残存する膝蓋骨片の全体的なサイズが大きいことから、少なくとも成人男性１体が葬られていると推定される。

未成人骨

頭蓋骨片、錐体片、肋骨片等の少量の骨細片である。残存する乳歯は、右上顎乳側切歯（幼児）、左上顎第１乳臼歯（小児）、左下顎第１乳臼歯（幼児）が確認された。このことから、小児１体、幼児１体が含まれる。

表採（幼児１）

幼児のものと思われる椎体が１個確認された。詳細は不明。

古墓２

前庭部（性別不明成人１）

頭蓋骨片を含む少量の成人骨細片と、右第５中手骨のみである。詳細は不明。

内部（成人男性２、成人女性１、小児１）

成人骨

全体的に残存している量が少なく、また破損しているものがほとんどであった。確認された部位を以下に記す。

頭蓋：頭蓋骨片、前頭骨片（男性？）、側頭骨片右２（男性２）・左１（男性）、下顎骨片２（女性1, 性別不明１）、

上肢：上腕骨片右１（性別不明）、尺骨片右２（男性？1, 女性？１）・左３（男性2, 女性？１）、橈骨片右１（性別不明）・左２（男性２）、鎖骨片、肩甲骨片

下肢：大腿骨片左２（性別不明２）、脛骨片右１（男性）・左１（性別不明）、腓骨片右２（男性1, 性別不明１）・左２（男性？２）、寛骨片右１（女性）・左１（性別不明）、距骨片左２（性

別不明２）、膝蓋骨片右１（性別不明）

人骨の鑑定結果から、少なくとも成人男性２体、成人女性１体が葬られていると推定される。その他に、椎骨片において上下が癒着した頸椎や、圧迫骨折をおこしている椎体（胸椎か？）、骨棘が発達した腰椎などの変形性脊椎症が認められた。

未成人骨

頭蓋：頭蓋骨片、上腕骨片（小児）

上肢：尺骨片右１（小児）・左１（小児）、橈骨片右（小児？）

下肢：大腿骨片左１（小児）、脛骨片右遠位端（小児）・左１（小児）、踵骨右１（小児？）、寛骨片

このことから、少なくとも小児１体が含まれていると推定される。

古墓３（老年男性１、成年男性１、成人男性１、幼児１、乳児２）

成人骨

同遺跡の中で比較的保存状態が良く、１体だけではあるがほぼ完全な頭蓋骨も残存していた。以下に確認された部位を記す。

頭蓋：老年男性１
成年男性１（前頭骨片、上腕骨片、左頬骨片、下顎骨片）
成人男性１（頭頂骨片、後頭骨片、左側頭骨片）

上肢：上腕骨片右２（成年男性，成人男性１）・左２（男性２）、尺骨片右２（男性２）・左２（男性２）、橈骨片右１（男性）・左２（男性２）、鎖骨片右１（男性）・左２（男性？１，性別不明１）、肩甲骨片右３（男性2，性別不明１）・左２（男性1，性別不明１）、胸骨片１

下肢：大腿骨片右３（成年男性1，成人男性２）・左２（男性）、脛骨片右２（男性２）・左２（男性1，性別不明１）、腓骨片右２（男性２）・左２（男性２）、寛骨片右２（男性２）・左２（男性1，性別不明１）、距骨片右２（男性２）、踵骨片右１（男性）・左１（男性）、膝蓋骨片右１（男性）

以上の結果から、少なくとも老年男性１体、成年男性１体、成人男性１が葬られていたと推定される。ほぼ完全に残存していた男性頭蓋骨は、上顎の永久歯が生前に脱落していることから老年に達していたと思われ、また顔面部が残存していた男性頭蓋骨片は、上下顎骨の第３大臼歯の歯根が不完全であったため成年と推定した。その他に、成人男性（どの個体かは不明）の脛骨片左骨幹部に骨膜炎と思われる骨増殖と小孔が確認され、全体的にやや肥厚していた。

未成人骨

残存部位が少なく、乳歯も確認できなかったことから、人骨の全体的な大きさより年齢を推定した。以下に確認された部位を記す。

頭蓋：頭蓋骨片、錐体右１（乳児）・左２（乳児２）、下顎骨片１（乳児）

上肢：上腕骨片右１（幼児）・左１（乳児）、橈骨片左？（乳児）、鎖骨片右１（乳児）、肩甲骨片右２（乳児２）・左１（乳児）

下肢：大腿骨片左２（幼児1，乳児１）、脛骨片右２（幼児1，乳児１）・左１（幼児）、坐骨片右１（幼児）、距骨右１（幼児）・左１（幼児）

このことから、少なくとも幼児１体、乳児２体が含まれていると推定される。

古墓４（幼児１）

やや保存不良で、欠損部位もあるが、ほぼ１個体分の未成人骨が確認された。確認された主要部位を以下に記す。

頭蓋：前頭骨片、左右頬骨片、上顎骨片、下顎骨片、右側頭骨片、左右頭頂骨片、後頭骨片
上肢：右上腕骨片、左右尺骨片、右橈骨片
下肢：左右大腿骨片、左右脛骨片、右腓骨片、左腸骨片
乳歯や未萌出の永久歯の発達状況から、4？5才の幼児と推定される。左右脛骨骨幹部において、骨膜炎と思われるわずかな肥厚が認められた。

古墓4　周辺（性別不明成人1）
成人の頭頂骨片のみである。緻密質がやや厚い。詳細は不明。

【観察と計測】
出土した人骨は、保存不良で欠損部が多く、十分な標本数が得られなかった。そのため概観ではあるが、新里・元島古墓群出土人骨の特徴を考察するために、第51表に示す日本列島集団と比較しながら分析を行った。
一般の計測法はKnussmann（1988）に従った。顔面の平坦度計測はYamaguchi（1973）の方法に従った。

第51表　比較集団

資　料	
畿内	宮本（1924、1925）、平井・田端（1928）
関東	森田（1950）、Yamaguchi（1973）、Dodo（1986）
西南日本	鋳鍋（1955）、平田（1957）、専頭（1957）、溝口（1957）
福岡	Doi and Tanaka（1987）
佐賀	Doi and Tanaka（1987）
天福寺	中橋（1987）、九州大学解剖学講座編（1988）
奄美	Dodo et al.　(2000)
与論島	大山（1957）、平田（1958）、広沢（1959）
ヤッチのガマ	譜久嶺・土肥・石田・瑞慶覧・泉水・佐宗・比嘉（2001）
沖縄本島	Dodo et al.　(2000)
先島	Dodo et al.　(2000)
宮古島	池田（1974）

頭蓋骨
計測結果を第58・59表に、主要計測値を比較群とともに第52表に示す。
ほとんどが破損しており、計測が行えたのは3号墓出土の老年男性1体（図版36）のみであった。眉弓の隆起は弱いが、外後頭隆起や上項線などの筋付着部の発達は比較的良く、特に乳様突起は非常に発達している。頭蓋最大長は172mmと非常に小さく、それに対して最大幅は149mmと大きい。そのため長幅示数は86.6と過短頭に分類される。この老年男性の頭蓋の形態はかなり特徴的で、縦軸に最大幅、横軸に最大長をとった第62図では、比較群からかなり離れて位置しているのがわかる。しかし、1例のみの結果のため、これが新里・元島の出土人骨の特徴を表しているとはいえない。参考に、筆者らが報告したヤッチのガマでは3.8%（2／41例）の割合で過短頭が含まれていた。関東を基準とした偏差折線（第66図）では、この過短頭のために新里・元島の偏差折線が大きく左右に振れているのがみられる。顔面頭蓋では、眼窩が幅（43）・高さ（35）ともにやや大きく（第63図）、中眼窩の傾向がみられた。鼻幅（23）と鼻高（49）は、比較群中でもっとも小さく、狭鼻に分類された（第64図）。

顔面平坦度は、右上顎骨の一部が破損していたため、頬上顎平坦度が計測できなかった。比較群とともに第53表に計測結果を示す。

前頭骨平坦度示数は16.6と関東に次いで大きく、沖縄本島や先島といった南西諸島集団や、佐賀、福岡よりも立体的な形態をしていた。鼻骨平坦度示数は32.9と沖縄本島やヤッチのガマより大きく、先島（33.8）や佐賀（33.3）、福岡（33.7）と近い（第65図）。偏差折線（第67図）では、比較群が近似した折線であるのに対して、新里・元島はやや異なった傾き方をしているのがわかる。また、図では記載していないが、顔面のみ一部残存していた3号墓出土の成年男性の鼻骨平坦度示数は29.2と小さく、沖縄本島（29.3）や奄美（28.8）に近い値をとっている。

第52表　頭蓋計測値の比較（男性）

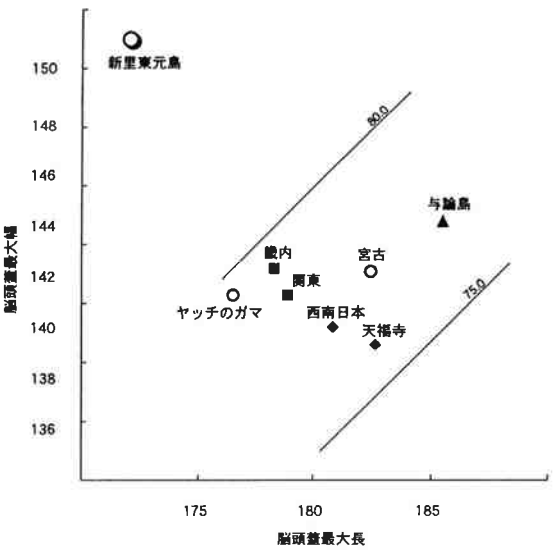
	新里東元島		ヤッチのガマ		宮古		与論島		天福寺		西南日本人		関東現代人		畿内現代人	
脳頭蓋主要計測項目	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
1 脳頭蓋最大長	1	172	27	176.5	70	182.4	37	185.4	38	182.6	87	180.8	143	178.9	30	178.3
8 脳頭蓋最大幅	1	149	27	140.3	68	141.1	38	142.8	38	138.6	87	139.2	143	140.3	30	141.2
8/1 頭蓋長幅示数	1	86.6	26	79.5	65	77.4	37	77.3	37	76.0	87	77.0	143	78.5	30	79.7
26 正中前頭弧長	1	123	26	124.0	74	127.1	38	128.2	37	128.5	87	128.3	143	127.4	30	127.0
27 正中頭頂弧長	1	119	29	131.0	76	131.5	38	134.9	35	128.5	87	128.4	143	125.1	30	127.2
27/26 矢状前頭頭頂示数	1	96.7	26	105.9	70	103.6	38	105.3	34	100.1	87	100.1	143	98.6	30	100.3
51l 眼窩幅(l)	1	43	26	41.3	69	43.2	37	42.6	24	42.6	87	42.8	142	42.7	30	43.0
52l 眼窩高(l)	1	35	26	32.7	69	34.0	37	34.0	24	34.1	87	34.3	144	34.3	30	34.4
52/51 眼窩示数(l)	1	81.4	26	79.2	68	78.7	37	79.8	23	80.9	87	80.4	142	80.4	30	79.6
54 鼻幅	1	23	28	25.8	70	26.9	37	27.3	24	26.5	87	26.3	144	25.0	30	26.4
55 鼻高	1	49	26	49.7	69	52.1	37	51.4	24	52.9	87	52.2	143	52.0	30	52.4
54/55 鼻示数	1	46.9	26	51.7	66	51.3	37	53.2	24	50.1	87	50.3	143	48.4	30	50.3

（mm）

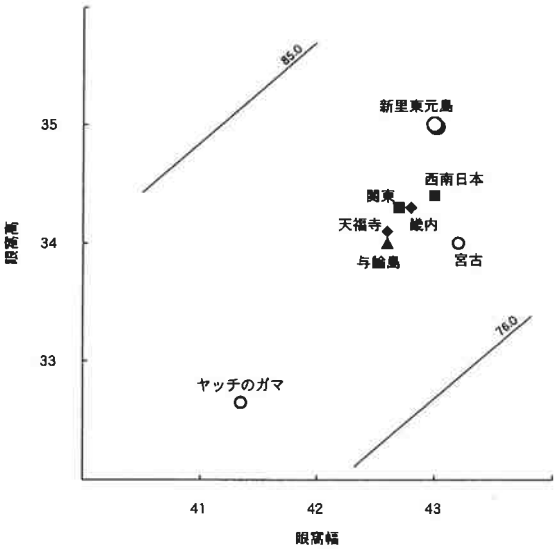
第53図　顔面平坦度の比較（男性）

	新里東元島		ヤッチのガマ		沖縄本島		先島		奄美		福岡		佐賀		関東現代人	
計測項目			n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
43(1) 前頭弦	1	92.7	25	96.8	53	96.0	61	97.5	41	97.8	46	96.1	17	96.4	86	97.8
43c 垂線高	1	15.4	25	14.6	53	13.8	61	14.6	41	14.4	46	14.7	17	14.6	86	16.3
43c:43(1) 平坦度示数	1	16.6	25	15.0	53	14.3	61	14.9	41	14.7	46	15.3	17	15.1	86	16.7
57 鼻骨弦	1	7.0	27	8.5	52	8.3	61	7.8	42	8.2	45	7.1	16	7.6	86	7.2
57a 垂線高	1	2.3	27	2.3	52	2.4	61	2.6	42	2.4	45	2.5	16	2.5	86	2.7
57a:57 平坦度示数	1	32.9	27	26.6	52	29.3	61	33.8	42	28.8	45	33.7	16	33.3	86	38.7

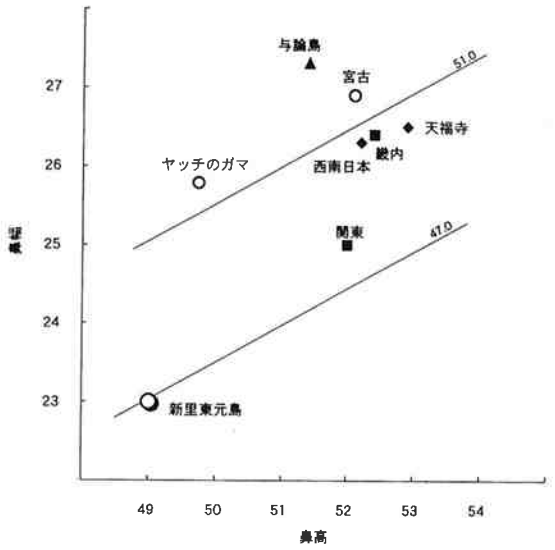
（mm）



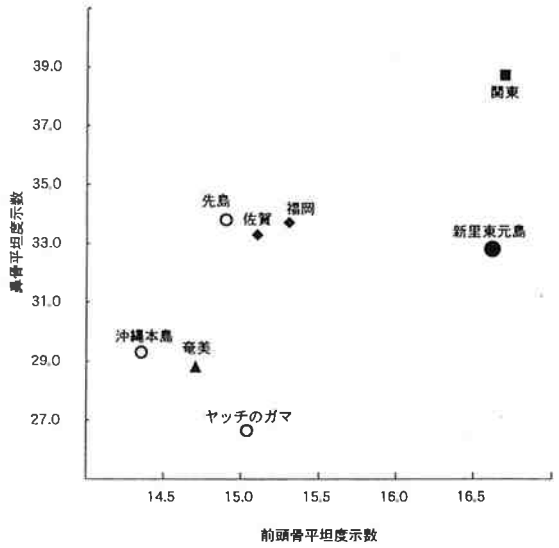
第62図　頭蓋最大幅／頭蓋最大長（男性）



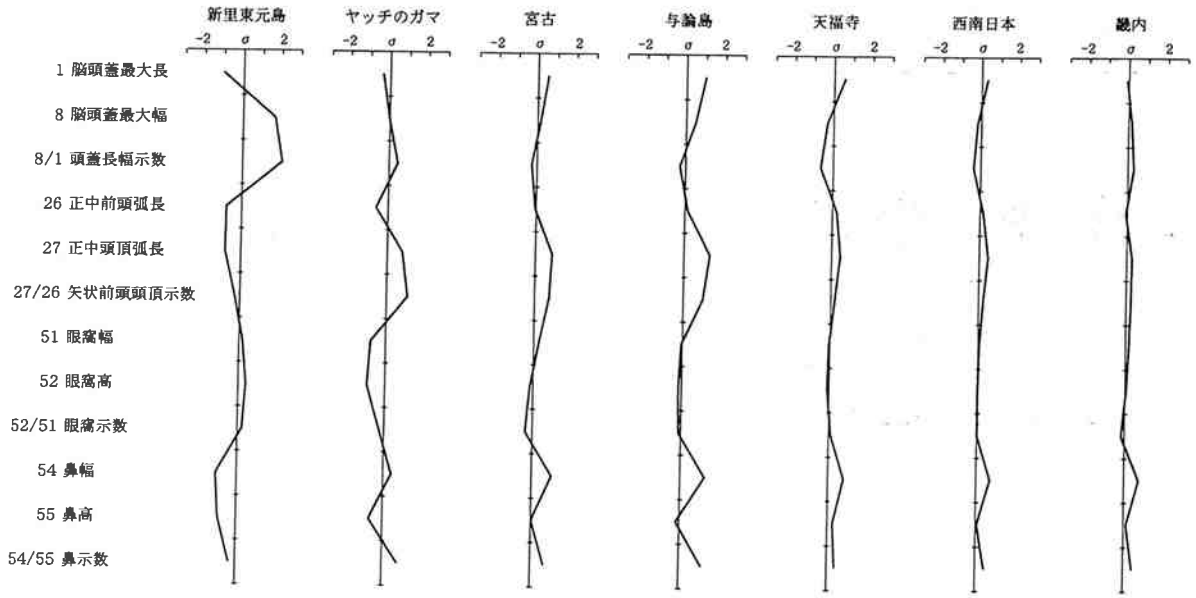
第63図　眼窩幅／眼窩高（男性）



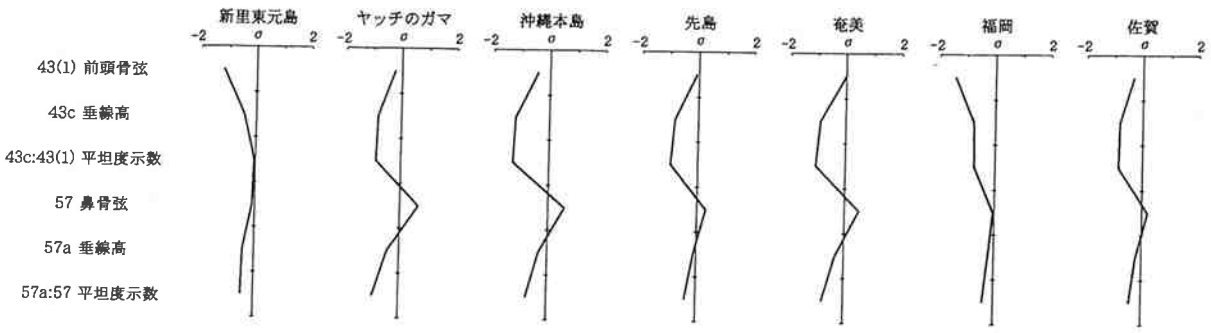
第64図　鼻幅／鼻高（男性）



第65図　鼻骨平坦度指数／前頭骨平坦度指数（男性）



第66図　関東現代人を基準とした偏差折線（頭蓋・男性）



第67図　関東現代人を基準とした偏差折線（顔面平坦度・男性）

四肢骨

四肢骨も頭蓋骨同様保存不良で、ほとんどが破損していた。特に骨端の欠損が多く、そのため最大長が計測できたのは、成人男性の腓骨のみであり、十分な標本数が得られなかった。四肢骨計測結果を第60～64表に示す。

1）上肢骨

主要計測結果を比較群とともに第54・55表に示す。

男性の上腕骨の中央最大径は23.0と与論島（23.5）や天福寺（23.2）に近い値をとり、最小径は18.0と比較群内でもっとも大きく、天福寺（17.9）に近い。骨体横断示数は78.4と骨体最小周（65.5）は、比較群内でもっとも大きな値をとっている。尺骨は、上腕骨と比較して筋付着部が発達しており、骨体矢状径（15.0）と横径（19.0）は、比較群中もっとも大きい値をとるが、対して橈骨の骨体横径は16.0と与論島と同じ結果になった。骨体矢状径は11.8と比較群内で大きな差は見られなかった。

女性の場合は、男性よりも保存不良が多く、橈骨に関しては計測が行えなかった。上腕骨中央最大径は19.5、最小径は14.0と比較群で大きな差はみられなかったが、しかし、これは2体分の計測結果で、しかも内1体の最小径は16㎜大きいのに対して、もう1体の最小径は逆に12㎜と非常に小さい。またこの個体は骨体最小周も45㎜と非常に小さい結果になった。尺骨は1体のみの計測結果で、骨体矢状径が10㎜、横径が13㎜とやや小さい値をとる。

関東現代人を基準とした偏差折線（第68図）をみると、男性では各集団とも上腕骨と橈骨の部分は±1の範囲内で折線が振れているが、尺骨では新里・元島が大きくプラスに振れており、特に骨体横径がかなりプラスに傾いている。女性では、新里・元島の折線が全体的にマイナスへ傾いていて、特に骨体最小周がマイナスへ傾いているのがわかる。

第54表　上肢骨の比較（男性）

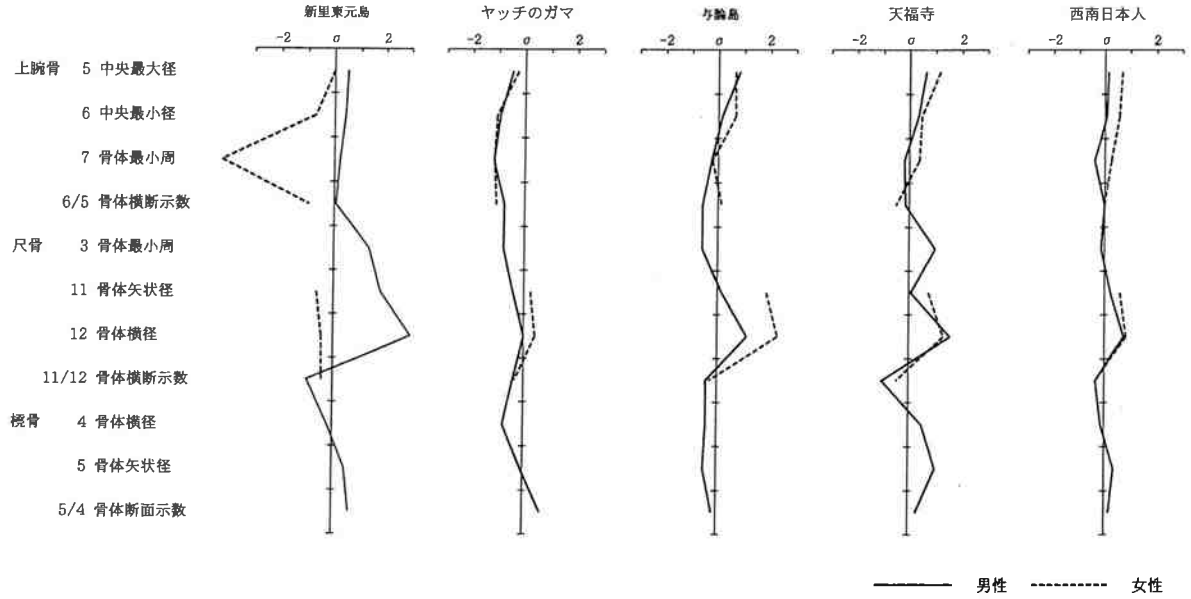
			新里東元島		ヤッチのガマ		与論島		天福寺		西南日本人		畿内現代人	
計測項目			n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
上腕骨	5 中央最大径	r	4	23.0	54	21.6	15	23.5	24	23.2	106	22.5	30	22.3
	6 中央最小径	r	4	18.0	54	16.0	15	17.6	24	17.9	106	17.5	30	17.4
	7 骨体最小周	r	6	65.5	55	59.6	15	63.5	22	63.8	106	62.9	30	64.6
	6/5 骨体横断示数	r	4	78.4	54	74.2	15	75.1	24	77.4	106	78.1	30	78.1
尺骨	3 骨体最小周	r	1	40.0	41	34.9	10	35.4	14	39.2	63	36.5	30	36.8
	11 骨体矢状径	r	4	15.0	55	12.3	10	13.0	18	12.9	63	13.1	30	12.8
	12 骨体横径	r	3	19.0	55	15.6	10	16.9	18	17.4	62	16.5	30	15.6
	11/12 骨体横断示数	r	3	75.2	55	79.1	10	79.0	18	75.0	61	79.5	30	81.8
橈骨	4 骨体横径	r	4	16.3	52	15.5	13	16.0	26	17.3	65	16.4	30	16.6
	5 骨体矢状径	r	4	12.0	52	11.5	13	11.2	26	12.5	65	11.9	30	11.6
	5/4 骨体断面示数	r	4	74.2	52	74.5	13	69.2	26	72.2	60	71.5	30	70.3

（mm）

第55表　上肢骨の比較（女性）

			新里東元島		ヤッチのガマ		与論島		天福寺		西南日本人		畿内現代人	
計測項目			n	Mean	n	m	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
上腕骨	5 中央最大径	r	2	19.5	44	19.3	17	20.1	24	20.5	35	20.1	20	19.5
	6 中央最小径	r	2	14.0	44	13.7	17	15.2	24	15.0	35	15.1	20	14.6
	7 骨体最小周	r	1	45.0	45	52.2	17	54.4	22	55.8	35	55.5	20	54.9
	6/5 骨体横断示数	r	2	71.5	44	71.0	17	75.9	24	73.3	35	75.3	20	75.3
尺骨	11 骨体矢状径	r	1	10.0	46	10.7	10	12.0	22	11.1	13	11.0	20	10.5
	12 骨体横径	r	1	13.0	46	13.8	10	15.5	22	14.6	13	14.2	20	13.4
	11/12 骨体横断示数	r	1	76.9	46	77.5	10	77.8	22	76.6	13	77.4	20	79.5

（mm）



第68図　関東現代人を基準とした偏差折線（上肢）

2）下肢骨

主要計測値を比較群とともに第56・57表に示す。

確認できた男性の大腿骨は骨幹部が頑丈で粗線がよく発達しており、中央矢状径（28.3）と中央周（86.3）は比較群中もっとも大きいが、横径は25.3㎜とやや小さい。そのため骨体断面示数は111.8と、比較群中もっとも大きい値であった。骨体上横径は31.0㎜でやや大きく、上矢状径は24.5㎜となり、骨体上断面示数が79.0と比較群中もっとも小さい値をとる。脛骨は残存する骨幹部が全体的に大きく、非常に頑丈であった。計測できた標本数は少ないが、栄養孔位最大径（34.3）、横径（26.3）、栄養孔位周（97.5）、骨体最小周（76.0）すべて比較群内でもっとも大きな値をとっている。

女性の大腿骨も、男性同様に、骨幹部が良く発達していた。骨体矢状径は23.7㎜と与論島（24.0）に次いで大きく、西日本（23.6）と近い。横径は24.0㎜で、比較群中もっとも大きい値をとるが、その差はわずかであった。中央断面示数は65.6となり、比較群中もっとも小さい。骨体中央周は75.3㎜で与論島（76.0）に次いで大きかった。脛骨は計測できなかった。

関東現代人を基準とした偏差折線（第69図）では、男性の折線は各集団とも大きな振れは見られないが、脛骨では新里・元島が比較的大きくプラスへ傾いているのがわかる。女性はほとんどの計測値が±1の範囲で振れているのに対し、新里・元島の骨体上横径が大きくプラスへ、骨体上矢状径がマイナスへ傾いていて、そのため骨体上断面示数がマイナスへ傾く特徴がみられた。

第56表　下肢骨の比較（男性）

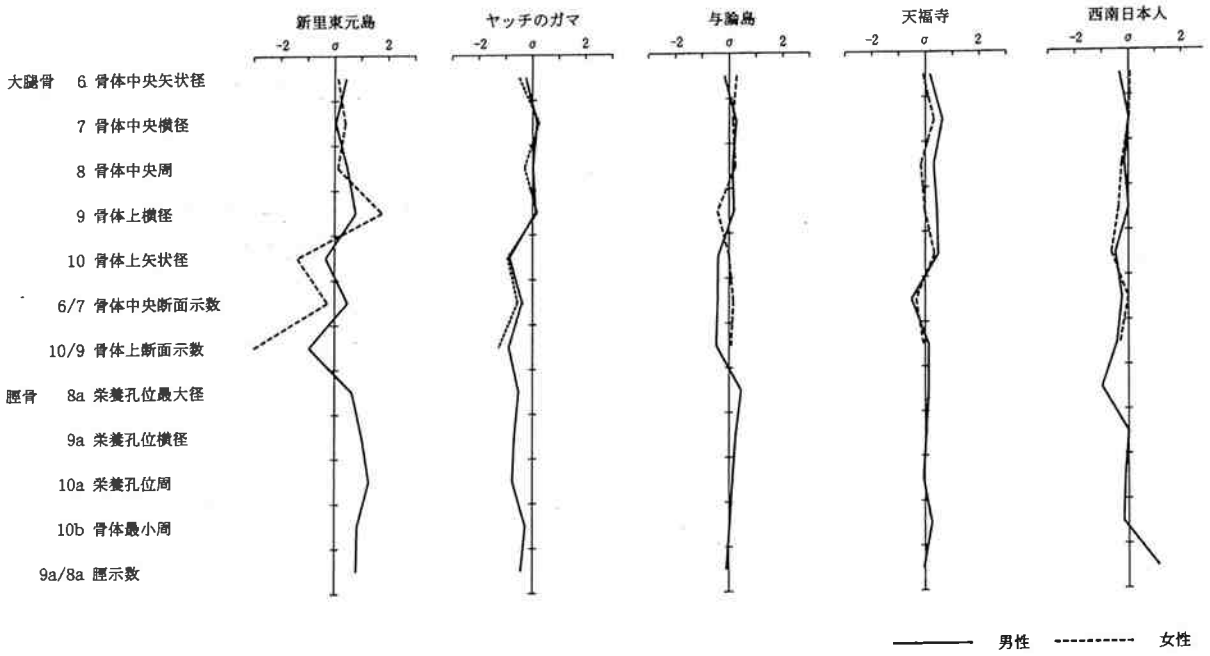
計測項目			新里東元島		ヤッチのガマ		与論島		天福寺		西南日本人		畿内現代人	
			n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
大腿骨	6 骨体中央矢状径	r	3	28.3	49	26.7	23	26.9	18	27.7	62	26.5	30	27.3
	7 骨体中央横径	r	3	25.3	50	25.6	23	25.8	18	26.7	62	25.2	30	25.2
	8 骨体中央周	r	3	86.3	48	83.2	23	84.0	17	85.2	61	82.1	30	83.1
	9 骨体上横径	r	2	31.0	49	29.5	23	29.6	17	30.2	62	29.2	30	29.2
	10 骨体上矢状径	r	2	24.5	49	23.4	23	24.4	17	26.2	62	24.2	30	25.2
	6/7 骨体中央断面示数	r	3	111.8	49	104.5	23	104.2	17	103.4	61	105.8	30	107.8
	10/9 骨体上断面示数	r	2	79.0	49	79.4	23	82.7	17	87.3	61	83.0	30	86.3
脛骨	8a 栄養孔最大径	r	3	34.3	48	31.6	24	33.8	17	33.1	60	30.5	30	32.8
	9a 栄養孔位横径	r	3	26.3	48	22.1	24	24.4	17	23.9	61	23.8	30	23.8
	10a 栄養孔位周	r	2	97.5	48	84.4	24	90.1	16	88.9	61	88.5	30	89.3
	10b 骨体最小周	r	2	76.0	45	70.6	24	72.1	15	73.1	61	71.0	30	71.9
	9a/8a 脛示数	r	3	76.6	48	70.3	24	72.0	17	72.3	60	78.3	30	72.5

(mm)

第56表　下肢骨の比較（女性）

計測項目			新里東元島		ヤッチのガマ		与論島		天福寺		西南日本人		畿内現代人	
			n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
大腿骨	6 骨体中央矢状径	r	3	23.7	39	22.6	12	24.0	16	23.4	13	23.6	20	23.5
	7 骨体中央横径	r	3	24.0	39	23.7	12	23.5	16	23.9	13	23.2	20	23.2
	8 骨体中央周	r	3	75.3	39	73.3	12	76.0	17	74.0	13	73.4	20	74.7
	9 骨体上横径	r	2	30.5	40	27.6	12	26.6	16	27.3	13	26.6	20	27.3
	10 骨体上矢状径	r	2	20.0	39	20.7	12	22.3	16	22.9	13	21.2	20	22.3
	6/7 骨体中央断面示数	r	3	98.6	39	95.6	12	103.2	16	98.1	13	101.1	20	101.4
	10/9 骨体上断面示数	r	2	65.6	39	75.1	12	82.6	16	81.8	13	80.3	20	82.0

(mm)



第69図　関東現代人を基準とした偏差折線（下肢）

【病変】

今回確認された病変は、骨膜炎が５例ともっとも多かった。骨膜炎はほとんどが脛骨骨幹部に存在し、その骨皮質の外表面には長軸に沿ったわずかな線状の隆起や小孔がみられた。また、皮質骨がかなり増殖・肥厚した女性の大腿骨片が確認されたが、残存部位が少なく、詳細は不明である。その他に、関節面が癒着した頚椎や圧迫骨折した椎体片などの変形性脊椎症もみられた。

【４号墓出土人骨】

４号墓では出土状況から推定して、おそらく幼児１個体（図版37）が埋葬されていたと考えられる。他の古墓は未成人も含めて複数体が出土していることから、この４号墓は他と区別されていた可能性がある。残存する右眼窩孔にはCribra　Olbitalia　（主に幼少期の鉄欠乏性貧血が原因の珊瑚様の外観をした病変）や、未放出の永久歯の中切歯にはわずかながら線状のエナメル質減形成（歯冠形成中に栄養障害などの疾患によりエナメル質が周波条に沿って欠損すること）がみられた。また左右脛骨骨幹部において、発達程度の弱い骨膜炎もみられたことから、なんらかの疫病に感染していた可能性も考えられる。

【その他】

新里東元島遺跡に隣接した新里元島上方台地遺跡からも、少数ではあるが、人骨が出土している。以下に人骨所見を記す。

Ｂ地区　13グリッド一層（成人男性１、性別不明成人１、乳児１）

成人骨

確認された残存部位は、上腕骨片右１（性別不明１）・左１（成人男性１）、橈骨片右１（成人男性１）のみであった。

未成人骨

右脛骨片が１個残存しており、その大きさから乳児と思われる。

Ｂ地区14グリッド一層（性別不明成人１、幼児１）

成人骨は四肢骨片と推定される骨細片のみであった。詳細は不明。

未成人骨は下顎骨片、右上腕骨片、右橈骨片が確認された。乳歯や未萌出の永久歯の発達状況から幼児と推定される。また、獣骨が３個含まれていた。

Ｂ地区13グリッド一層から出土した左右の上腕骨片は、骨体最小径が右15mm、左16mmと近似しているが、骨体最大径が右16mm、左21mmと右がかなり小さく、また骨体最小周も右55mm、左58mmで右が小さい値をとっていた。しかし、残存する骨幹から上腕骨最大長を推測すると、左右とも同程度の大きさと思われる。そのため、同一個体の可能性も考えられるが、残存部位が少なく詳細は不明である。

謝辞

新里・元島上方台地出土人骨の調査の機会を与えてくださった沖縄県教育委員会のみなさまに心からの謝意を表します。

引用文献

阿部英世．現代九州人大腿骨の人類学的研究．人類学研究 1955:2.

Dodo Y. A Study of the facial flatness in several cranial series from East Asia andNorth America . Journal of Anthropological Society of Nippon 1986;94(1):81－93.

Dodo Y, Doi N, Kondo O. Flatness of facial skeletons of Ryukyuans. Anthropological Science 2000;108:183－98.

Doi N, Tanaka Y. A Geographical Cline in Metrical Characteristics of Kofun Skull fromWestern Japan. Journal of Anthropological Society of Nippon 1987;95(3):325－43.

平井隆，田幡丈夫．現代日本人の人類学的研究，第４部 下肢骨の研究．人類学雑誌 1928:43(4附,5附).

平田和生．鹿児島県大島郡与論島島民の下肢骨の研究．人類学研究 1958; 5 (1 － 4):263－315.

平田直行．頭蓋骨の性差に関する研究．人類学研究 1957; 4 (1 － 4):142－79.

広沢正彦．奄美郡島与論島住民上肢骨の人類学的研究．人類学研究 1959; 6 (2):71－107.

池田次郎．沖縄・宮古島現代人頭骨の計測．人類学雑誌 1974;82(2):150－60.

鋳鍋勝登．現代九州日本人下肢骨の人類学的研究．人類学研究 1955; 2 (1): 1 －41.

KNUSSMANN R. MALTIN ／ KNUSSMANN － Anthropoligie, Handbuch der Vergleichenden Biologiedes Menschen Bd. I. Suttgart: Gustav Fischer Verlag, 1988.

菊池順正．奄美郡島与論島住民頭骨の人類学的研究．人類学研究 1959; 6 (2):196－228.

九州大学解剖学第２講座，編．日本民族・文化の生成2, 九州大学解剖学第２講座所蔵古人骨資料集成．福岡： 六興出版， 1988.

土肥直美，譜久嶺忠彦．那覇市銘苅古墓群南（A・C・D）地区出土の人骨．「銘苅古墓群 (II)」那覇市文化財調査報告書．那覇：沖縄県那覇市教育委員会， 1999;40:175－88.

福島一彦．南西日本弥生人の骨病変について．福岡医誌 1988;79(2):227－48.

譜久嶺忠彦，土肥直美，石田肇．那覇市ナーチュー毛古墓群出土の人骨．「ナーチュー毛古墓群」那覇市文化財調査報告書．那覇：沖縄県那覇市教育委員会， 2000;44;182－204.

譜久嶺忠彦，土肥直美，石田肇，瑞慶覧朝盛，泉水奏，佐宗亜衣子，比嘉貴子．ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨．ヤッチのガマ・カンジン原古墓群，沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書．西原：沖縄県立埋蔵文化財センター， 2001; 6 :345－85.

溝口静男．現代九州人前腕骨の人類学的研究．人類学研究 1957; 4 (1 － 4):237－72.

宮本博人．現代日本人人骨の人類学的研究，第２部 上肢骨の研究．人類学雑誌 1925:40(6,7,8).

宮本博人．現代日本人人骨の人類学的研究，第１部 頭蓋骨の研究．人類学雑誌 1924:39(10－12).

森田茂．関東地方人頭蓋骨の人類学的研究．慈恵医科大解剖学業績集1950; 3 : 1 －59.

中橋孝博．福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨．人類誌 1987;95(1):89－106.

大山秀高．鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究．人類学研究1956; 3 (3 － 4):92－130.

専頭時義．現代九州人上腕骨の人類学的研究．人類学研究．1957; 4 (1 － 4):273－301.

Yamaguchi B. Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Tokyo:Bull Natn Sci Mus, 1973;16:161－71.

山本美代子．日本古人骨永久歯のエナメル質減形成．J Anthrop Soc Nippon 1988;96(4):417－33.

第58表　頭蓋主要計測値（男性）

計測項目	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-3	古墓-3	N	Mean	S.D.
1 脳頭蓋最大長				172		1	172.0	
8 脳頭蓋最大幅				149		1	149.0	
9 最小前頭幅				90		1	90.0	
8/1 頭蓋長幅示数				86.6		1	86.6	
9/8 横前頭頭頂示数				60.4		1	60.4	
11 両耳幅				134		1	134.0	
12 最大後頭幅				112		1	112.0	
12/8 横頭頂後頭示数				75.2		1	75.2	
24 横弦長				311		1	311.0	
26 正中前頭弧長				123		1	123.0	
27 正中頭頂弧長				119		1	119.0	
29 正中前頭弦長				109		1	109.0	
30 正中頭頂弦長				104		1	104.0	
27/26 矢状前頭頭頂示数				96.7		1	96.7	
29/26 矢状前頭彎曲示数				88.6		1	88.6	
30/27 矢状頭頂彎曲示数				87.4		1	87.4	
43 上顔幅				99		1	99.0	
44 両眼窩幅				95		1	95.0	
51l 眼窩幅(l)				43		1	43.0	
52l 眼窩高(l)				35		1	35.0	
52/51 眼窩示数(l)				81.4		1	81.4	
54 鼻幅				23		1	23.0	
55 鼻高				49		1	49.0	
54/55 鼻示数				46.9		1	46.9	
69(3)r 下顎体厚(r)	15	13	16			3	14.7	1.53
69(3)l 下顎体厚(l)					14	1	14.0	

(mm)

第59表　顔面平坦度計測値（男性）

計測項目	古墓-3	古墓-3	N	Mean
43(1) 前頭弦	92.7		1	92.7
43c 垂線高	15.4		1	15.4
43c:43(1) 平坦度示数	16.6		1	16.6
57 鼻骨弦	7.0	6.3	2	6.7
57a 垂線高	2.3	1.8	2	2.1
57a:57 平坦度示数	32.9	29.2	2	31.1

(mm)

第60表　上腕骨計測値（男性）

(mm)

計測項目		古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 前庭部	古墓-3	古墓-3	古墓-3	N	Mean	S.D.
5 中央最大径	r	23	25					22	22		4	23.0	1.41
	l					22	23	22		22	4	22.3	0.50
6 中央最小径	r	17	19					19	17		4	18.0	1.15
	l					16	18	18		17	4	17.3	0.96
7 骨体最小周	r	63	66	75	61			64	64		6	65.5	4.93
	l					59	65	63		63	4	62.5	2.52
7a 中央周	r	67	71					67	67		4	68.0	2.00
	l					67	67	66		66	4	66.5	0.58
10 頭高径	r								47		1	47.0	
6/5 体断面示数	r	73.9	76					86.4	77.3		4	78.4	5.51
	l					72.7	78.3	81.8		77.3	4	77.5	3.75

第61表　上腕骨計測値（女性）

計測項目		古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	N	Mean
5 中央最大径	r	21	18	2	19.5
6 中央最小径	r	16	12	2	14.0
7 骨体最小周	r		45	1	45.0
7a 中央周	r	60	50	2	55.0
6/5 体断面指数	r	76.2	66.7	2	71.5

(mm)

第62表　尺骨計測値（男性）

計測項目		古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 前庭部	古墓-1 前庭部	古墓-1 前庭部	古墓-3	古墓-3	N	Mean	S.D.
3 最小周	r						40		1	40.0	
6 肘頭幅	r							25	1	25.0	
7 肘頭深	r							24	1	24.0	
8 肘頭高	r							18	1	18.0	
11 骨体矢状径	r	17		17			14	12	4	15.0	2.45
	l		18		15	14	14	11	5	14.4	2.51
12 骨体横径	r	22					18	17	3	19.0	2.65
	l		20		19	18	18	17	5	18.4	1.14
11/12 骨体横断示数	r	77.3					77.8	70.6	3	75.2	4.02
	l		90.0		78.9	77.8	77.8	64.7	5	77.8	8.97

(mm)

第63表　尺骨計測値（女性）

計測項目		古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-2 内部	N	Mean	S.D.
11 骨体矢状径	r	10				1	10.0	
	l		9	12	11	3	10.7	1.53
12 骨体横径	r	13				1	13.0	
	l		13	15	14	3	14.0	1.00
11/12 骨体横断示数	r	76.9				1	76.9	
	l		69.2	80.0	78.6	2	73.9	6.65

(mm)

第64表　橈骨計測値（男性）

計測項目		古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 前庭部	古墓-1 前庭部	古墓-1 前庭部	古墓-2 内部	古墓-2 内部	古墓-3	古墓-3	N	Mean	S.D.
4 骨体横径	r	16	16	15		15			18		5	16.0	1.22
	l				15			17			2	16.0	
4(2) 頸横径	r								16		1	16.0	
	l						10			14	2	12.0	
5 骨体矢状径	r	12	12	12		12			12		5	12.0	0.45
	l				13			12			2	12.5	
5(2) 頸矢状径	r								17		1	17.0	
	l						14			17	2	15.5	
5/4 骨体断面示数	r	75.0	75.0	80.0					66.7		4	74.2	5.51
	l				86.7			70.6			2	78.7	

(mm)

第65表　大腿骨計測値（男性）

計測項目		古墓-3	古墓-3	古墓-3	古墓-3	N	Mean	S.D.
6 骨体中央矢状径	r	30	30	25		3	28.3	2.89
	l			25		1	25.0	
7 骨体中央横径	r	26	25	25		3	25.3	0.58
	l			26		1	26.0	
8 骨体中央周	r	90	88	81		3	86.3	4.73
	l			81		1	81.0	
9 骨体上横径	r	31	31			2	31.0	
	l			31		1	31.0	
10 骨体上矢状径	r	24	25			2	24.5	
	l			23		1	23.0	
15 頸垂直径	r			32		1	32.0	
	l				29	1	29.0	
16 頸矢状径	r			26		1	26.0	
	l				26	1	26.0	
17 頸周	r			92		1	92.0	
	l				91	1	91.0	
18 頭垂直径	l				48	1	48.0	
6/7 骨体中央断面示数	r	115.4	120.0	100.0		3	111.8	10.47
	l			96.2		1	96.2	
10/9 骨体上断面示数	r	77.4	80.6			2	79.0	
	l			74.2		1	74.2	
16/15 頸断面示数	r			81.3		1	81.3	
	l				89.7	1	89.7	

(mm)

第66表　大腿骨計測値（女性）

計測項目		古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	N	Mean	S.D.
6 骨体中央矢状径	r	24	22	25		3	23.7	1.53
	l				19	1	19.0	
7 骨体中央横径	r	24	24	24		3	24.0	0.00
	l				24	1	24.0	
8 骨体中央周	r	77	72	77		3	75.3	2.89
	l				67	1	67.0	
9 骨体上横径	r	31	30			2	30.5	
	l				30	1	30.0	
10 骨体上矢状径	r	20	20			2	20.0	
	l				17	1	17.0	
6/7 骨体中央断面示数	r	100.0	91.7	104.2		3	98.6	6.36
	l				79.2	1	79.2	
10/9 骨体上断面示数	r	64.5	66.7			2	65.6	
	l				56.7	1	56.7	

(mm)

第67表　脛骨計測値（男性）

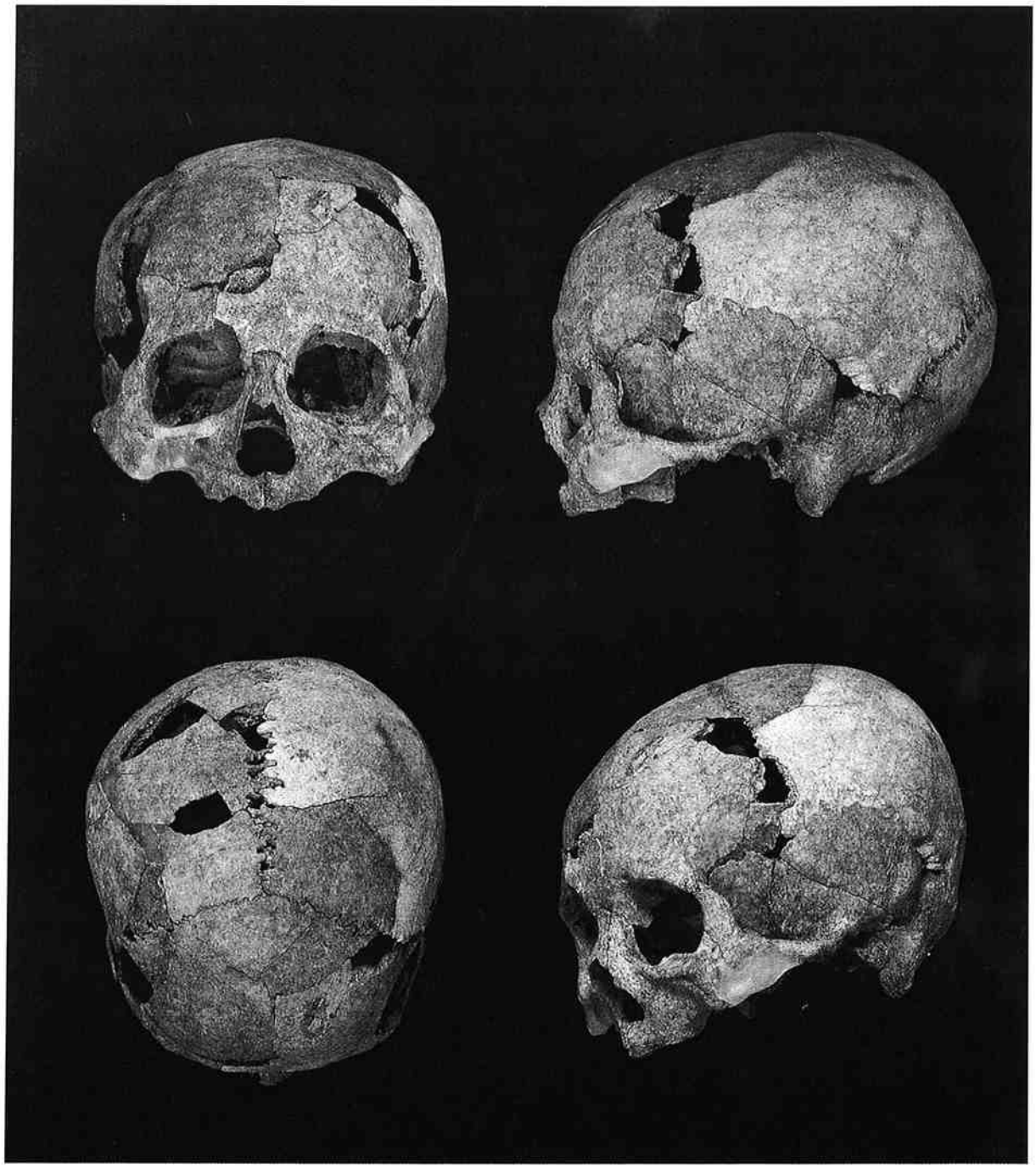
計測項目		古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-3	古墓-3	N	Mean	S.D.
6 最大下端幅	r		49			1	49.0	
	l				46	1	46.0	
7 下端矢状径	r		37			1	37.0	
8a 栄養孔最大径	r	36	33	34		3	34.3	1.53
9a 栄養孔位横径	r	29	24	26		3	26.3	2.52
10a 栄養孔位周	r	101		94		2	97.5	4.95
10b 骨体最小周	r		72	80		2	76.0	5.66
9a/8a 脛示数	r	80.6	72.7	76.5		3	76.6	3.95

(mm)

第68表　腓骨計測値（男性）

計測項目		古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 集骨遺構	古墓-1 前庭部	古墓-2 内部	古墓-2 内部	古墓-2 内部	古墓-3	古墓-3	N	Mean	S.D.
1 最大長	l			320							1	320.0	
2 中央最大径	l			14							1	14.0	
3 中央最小径	l			10							1	10.0	
4 中央周	l			41							1	41.0	
4a 最小周	r				38	38	36				3	37.3	1.15
	l			33							1	33.0	
4(1) 上端幅	r				26		24				2	25.0	
	l			23							1	23.0	
4(1a) 上端矢状径	r				22		22				2	22.0	
	l			23							1	23.0	
4(2) 下端幅	r							19	19		2	19.0	
	l			19							1	19.0	
4(2a) 下端矢状径	r	24						23	23		3	23.3	0.58
	l			25							1	25.0	
4a' 下端最小周	r	36	34			43		33	39		5	37.0	4.06
	l			36						43	2	39.5	
3/2 中央断面示数	l			71.4							1	71.4	
4a/1 長厚示数	l			10.3							1	10.3	

(mm)



図版36　古墓－３　出土人骨（老年・♂）

図版37　人骨 2　古墓－４　出土人骨（幼児）

沖縄県立埋蔵文化財センター報告書　第７集

新里元島上方台地遺跡
新里東元島遺跡

―― 県道保良上地線（友利～上地）道路新設改良事業に伴う
緊急発掘調査報告書 ――

2002年（平成14年）３月29日

発行・編集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の５
☎098-835-8752

印　　刷　あけぼの印刷株式会社
〒903-1117　沖縄県島尻郡南風原町字津嘉山1688番地
☎098-888-2980